

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25

平成 20年度発掘調査報告

(第1分冊)

若宮大路周辺遺跡群

弁ヶ谷遺跡

弁ヶ谷遺跡

若宮大路周辺遺跡群

大倉幕府北遺跡

大倉幕府北遺跡

佐助ヶ谷遺跡

佐助ヶ谷遺跡

平成21年3月

鎌倉市教育委員会



若宮大路周辺遺跡群 (地点①)



井ヶ谷遺跡 (地点③)

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成15、16及び17年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として15ヶ所の調査成果を掲載しています。特に国指定史跡瑞泉寺境内に近い瑞泉寺周辺遺跡（地点㊸）では、建物跡の床下から礎石や大量の生活遺物が発見され、谷戸内における活発な土地利用の状況を確認することができ、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成21年3月31日
鎌倉市教育委員会

総目次

ごあいさつ	I
平成20年度調査の概観	III
本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧	VII
平成20年度発掘調査地点一覧	VIII
1 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 小町二丁目48番10外	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	8
第3章 検出遺構と出土遺物	11
第4章 まとめ	65
2 井ヶ谷遺跡 (No. 249) 材木座六丁目643番5	
3 井ヶ谷遺跡 (No. 249) 材木座六丁目643番4	
第1章 遺跡と調査地点の概観	89
第2章 調査の概要	101
第3章 調査の成果	103
第4章 調査のまとめ	138
4 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 御成町123番3	
第1章 遺跡の立地と環境	158
第2章 調査の経過と層序	158
第3章 検出した遺構と遺物	161
第4章 まとめ	163
5 大倉幕府北遺跡 (No. 193) 西御門二丁目756番10地点	
6 大倉幕府北遺跡 (No. 193) 西御門二丁目756番6地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的背景	180
第2章 調査の概要	183
第3章 検出遺構と出土遺物	187
第4章 まとめ	219
7 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) 佐助一丁目450番5外	
8 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) 佐助一丁目450番29外	
第1章 遺跡の位置と歴史的背景	236
第2章 調査の概要	239
第3章 検出遺構と出土遺物	244
第4章 まとめ	265

平成20年度調査の概観

平成20年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査2件を含む25件であり、調査面積は977.72㎡であった。これを前年度の21件、995.05㎡と比較してみると件数は4件の増加となったが、調査面積はわずかではあるが17.33㎡の減少となった。調査面積は平均で1件あたり39.10㎡（前年度は47.38㎡）であり、1件あたりの調査面積もわずかではあるが、前年度より減少している。

調査原因は個人専用住宅の建設が22件、店舗併用住宅の建設が3件である。これら25件の工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が9件（36.0%）、地盤改良工事が11件（27.5%）、地下室の建設が2件、その他が3件となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因（20件；80.0%）になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成20年度調査地点一覧」を参照。）

1 大倉幕府跡（No, 253）

市内中心部の東側となる雪ノ下三丁目に所在し、県道金沢鎌倉線の岐れ道交差点の北東側約100mに位置している。大倉幕府跡の推定地のなかでは南東角の部分にあたる場所である。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡の柱穴、土壌等が発見されている。幕府跡推定地における発掘調査の成果として、今後は過去に実施された南側隣接地の調査成果とともに総合的に検討することが必要となる。

2 大倉幕府周辺遺跡群（No, 49）

市内中心部の東側にあたる二階堂字荏柄に位置し、荏柄天神社参道の西側に面した場所に所在している。過去に同一敷地内で発掘調査が実施されているが、鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築計画変更にともない、昨年に引き続いて発掘調査を実施したものである。

調査の結果、調査区の東側からは荏柄天神社の旧参道と推定される道路状の遺構等が発見されている。

3 玉縄城跡（No, 63）

市内北部の植木字植谷戸に所在し、JR大船駅の北西約400mに位置している。玉縄城域のなかでも基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査地の西方の七曲坂から東に向かって開く谷戸を遮断するように掘られた南北方向の堀跡の一部を発見した。堀跡はかなり大規模なものと考えられ、今回の調査では堀跡の東側の立ち上がり部分だけの確認にとどまったが、堀跡の幅は3m以上になることが予想される。

4 長谷小路周辺遺跡（No, 236）

市内中心部の西側となる由比ガ浜三丁目に所在し、県道鎌倉葉山線の南側に位置している。基礎工事に際して地盤の表層改良工事を実施する自己用店舗併用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、砂丘上に作られた方形竪穴建築址等の遺構が発見された。

5 天神山城（No, 384）

市内西北部となる山崎字宮廻に所在し、地元で天神山と呼ばれる独立丘陵の北東側中腹に位置している。地下室の築造を含む個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、部分的な確認も含め合計4軒の弥生時代に属する竪穴住居跡が発見された。

6 横小路周辺遺跡 (No, 259)

市内中心部の二階堂字向荏柄に所在し、荏柄天神社の南東側約200mに位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡や掘立柱建物跡等が発見された。これらの遺構は当該調査地点の東側に隣接する市立第二小学校の敷地において、体育館建設にともなう発掘調査（昭和57年）の際に発見された武家屋敷と推定される掘立柱建物跡等の遺構と密接な関係を有するものと考えられる。

7 下馬周辺遺跡 (No, 200)

市内中心部の南側となる由比ガ浜二丁目に所在し、県道鎌倉葉山線の六地蔵交差点の東側約90mに位置する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

面的には小規模な発掘調査であったが、調査の結果、柱穴、土塙、溝等の遺構が発見された。

8 北条時房・顕時邸跡 (No, 278)

市内中心部の雪ノ下一丁目に所在し、商店街として賑わいをみせる小町通りの西側に位置している。鶴岡八幡宮境内の南西隅からは約130mの場所にあたる。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石列や囲炉裏、多数の柱穴等の遺構を発見することができた。

9 材木座町屋遺跡 (No, 261)

市内中心部の南東側となる材木座一丁目に所在し、史跡鶴岡八幡宮の指定地に含まれる元八幡（由比若宮）の東側に隣接する場所に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、方形竪穴建築址や土塙等の遺構が発見されたが、由比若宮と直接的に関連するような遺構の発見までには至っていない。

10 由比ガ浜南遺跡 (No, 315)

市内中心部のやや西側となる長谷二丁目に所在し、長谷小路と呼ばれる県道鎌倉・葉山線の南側約160mに位置している。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査は激しい湧水に悩まされ、困難な状況のなかで実施する状況となったが、鎌倉の海浜部の遺跡に特徴的な方形竪穴建築址や溝状土塙等が発見された。

11 材木座町屋遺跡 (No, 261)

市内中心部の南東側となる材木座一丁目に所在し、前述の調査地点9の南側約10mに位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、狭小な面積にもかかわらず柱穴等の遺構を発見することができた。

12 若宮大路周辺遺跡群 (No, 242)

市内中心部の小町二丁目に所在し、商店街として賑わいをみせる小町通りの西側に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する店舗併用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡や泥岩塊を版築した遺構等が発見され、遺構密度も極めて高い遺跡であると評価することができる。

13 坂ノ下遺跡 (No, 217)

市内南西部の坂ノ下に所在し、海岸線から江ノ島電鉄の線路敷きを北側に越え内陸に入った場所に位置している。基礎工事に際して地盤の表層改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、多数の柱穴等の遺構が発見された。

14 新善光寺跡 (No, 284)

市内中心部から南東方向となる材木座四丁目に所在し、弁ヶ谷と呼ばれている谷戸の入り口からやや奥まった場所に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区に西端部では池跡と推定される落ち込みの遺構が発見された。

15 若宮大路周辺遺跡群 (No, 242)

市内中心部の小町二丁目に所在し、史跡若宮大路の二ノ鳥居の東側にあたり、小町口の北東角地に所在する。基礎工事に際して表層地盤の改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、若宮大路の東側側溝とみられる溝跡を調査範囲の西側部分でわずかに発見することができた。この溝跡はさらに調査地点の西側、現在の若宮大路の歩道の下まで続いていることが判明した。

16 田楽辻子周辺遺跡 (No, 33)

市内中心部の東側となる浄明寺一丁目に所在し、田楽辻子とよばれる街路が釈迦堂口切通し方面に向かって南に曲がる場所の西側50m程に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、非常に良好な地形（ぢぎょう）によって築かれた遺構面が多数存在、礎石建物等の遺構が発見された。

17 山之内上杉邸跡 (No, 170)

市内北部の山ノ内字東管領屋敷に所在し、JR横須賀線の明月院踏切の東側約70mに位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡、池跡、道路もしくは築地の基底部と見られる区画性のある遺構等、多数の遺構が発見された。

18 今小路西遺跡 (No, 201)

市内中心部のやや南側となる由比ガ浜一丁目に所在し、今小路と県道鎌倉葉山線が交わる六地藏交差点の北側約90mに位置している。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘り込みの浅い溝跡や土壁等の遺構が発見された。

19 米町遺跡 (No, 245)

市内中心部にあたる大町二丁目に所在し、県道鎌倉・葉山線の南側約15mに位置している。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、狭小な調査範囲にもかかわらず、砂丘上につくられた方形竪穴建築址等の遺構を発見した。

20 徳泉寺跡 (No, 173)

市内北部の山ノ内字東管領屋敷に所在し、前述の調査地点17の南東側約90mに位置している。基礎工事に際して表層地盤の改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、敷地の西側に現在も暗渠として存在する水路の中世から近世にかけての流路の護岸(東側部分)と考えられる遺構が発見された。

21 釈迦堂遺跡 (No, 257)

市内中心部の東側にあたる浄明寺一丁目に位置し、トンネル状の切通として著名な釈迦堂切通の南側約300mに所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴、土壇等の遺構が発見され、調査地の東側に存在する山裾部の樹に展開する土地の様相解明に資する成果が得られた。

22 釈迦堂遺跡 (No, 257)

前述の調査地点21の東側にほぼ隣接する場所に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、地点21と同様な遺構が発見されており、両調査地点の調査成果を総合的に考察することにより、釈迦堂ヶ谷一体における土地利用の様相解明が可能になるものと考えられる。

23 西瓜ヶ谷遺跡 (No, 213)

市内中心部の東側にあたる山ノ内字瓜ヶ谷に位置し、調査地点の西側には丘陵が所在している。地下室の築造を工事内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世後期に山裾の岩盤を人為的に造成した状況を明らかにすることができた。

24 上杉定正邸跡 (No, 188)

市内中心部の北側にあたる扇ガ谷二丁目に位置し、史跡寿福寺境内の東側に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区内に幅1.5m程度の東西方向の道路状遺構が発見された。当該地の東側山裾にはやぐらが存在しており、やぐら前面の土地利用を考えるうえで重要な発見となった。また出土遺物のなかには板に梵字を記した資料や拵などの貴重な資料も認められている。

25 弁ヶ谷遺跡 (No, 249)

市内中心部の南東側にあたる材木座四丁目に位置し、地元で弁ヶ谷と呼ばれる谷戸のうち、西側に展開する支谷の奥まった場所に所在している。当該地は谷戸の入り口部分に比べ、10メートル程高い場所である。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、現況の敷地は近現代の造成によって大きく嵩上げされたものの、谷戸の中腹部にも中世には礎石を用いた建物が作られていたことが明らかになった。

本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
① ★	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町二丁目48番10外	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都 市	81.66㎡	平成15年8月21日 ～平成15年10月23日
② ★	弁ヶ谷遺跡 (NO,249)	材木座六丁目643番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	25.80㎡	平成15年10月21日 ～平成15年11月17日
③ ★	弁ヶ谷遺跡 (NO,249)	材木座六丁目643番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	25.00㎡	平成15年10月21日 ～平成15年11月17日
④ ◎	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	御成町123番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	12.00㎡	平成16年9月29日 ～平成16年10月26日
⑤ ◎	大倉幕府北遺跡 (NO,193)	西御門二丁目756番10	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	13.50㎡	平成16年6月17日 ～平成16年7月2日
⑥ ◎	大倉幕府北遺跡 (NO,193)	西御門二丁目756番6	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	35.00㎡	平成16年10月7日 ～平成16年11月17日
⑦ ◎	佐助ヶ谷遺跡 (NO,203)	佐助一丁目450番5外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	52.00㎡	平成16年6月29日 ～平成16年7月30日
⑧ ◎	佐助ヶ谷遺跡 (NO,203)	佐助一丁目450番29外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	47.30㎡	平成16年7月9日 ～平成16年8月6日

第2分冊

	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
⑨ ★	瑞泉寺周辺遺跡 (NO,338)	二階堂字紅葉ヶ谷647番6外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	50.00㎡	平成15年9月12日 ～平成15年10月25日
⑩ ◎	佐助ヶ谷遺跡 (NO,203)	佐助一丁目496番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	56.00㎡	平成17年3月7日 ～平成17年5月28日
⑪ ◎	弁ヶ谷遺跡 (NO,249)	材木座六丁目643番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	44.50㎡	平成16年9月25日 ～平成16年11月11日
⑫ ▲	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	由比が浜一丁目126番1の一部	個人専用住宅 (車庫の築造)	都 市	39.00㎡	平成17年4月4日 ～平成17年4月29日
⑬ ▲	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	由比が浜一丁目126番11	個人専用住宅 (車庫の築造)	都 市	36.00㎡	平成17年5月9日 ～平成17年5月20日
⑭ ▲	最明寺北亭跡 (NO,137)	山ノ内字明月谷295番4外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城 館	15.00㎡	平成17年9月13日 ～平成17年9月22日
⑮ ▲	天神山城 (NO,384)	山崎字宮廻689番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	集 落	34.40㎡	平成17年6月1日 ～平成17年6月17日

★印は平成15年度実施の発掘調査

◎印は平成16年度実施の発掘調査

▲印は平成17年度実施の発掘調査

平成 20 年度発掘調査地点一覧

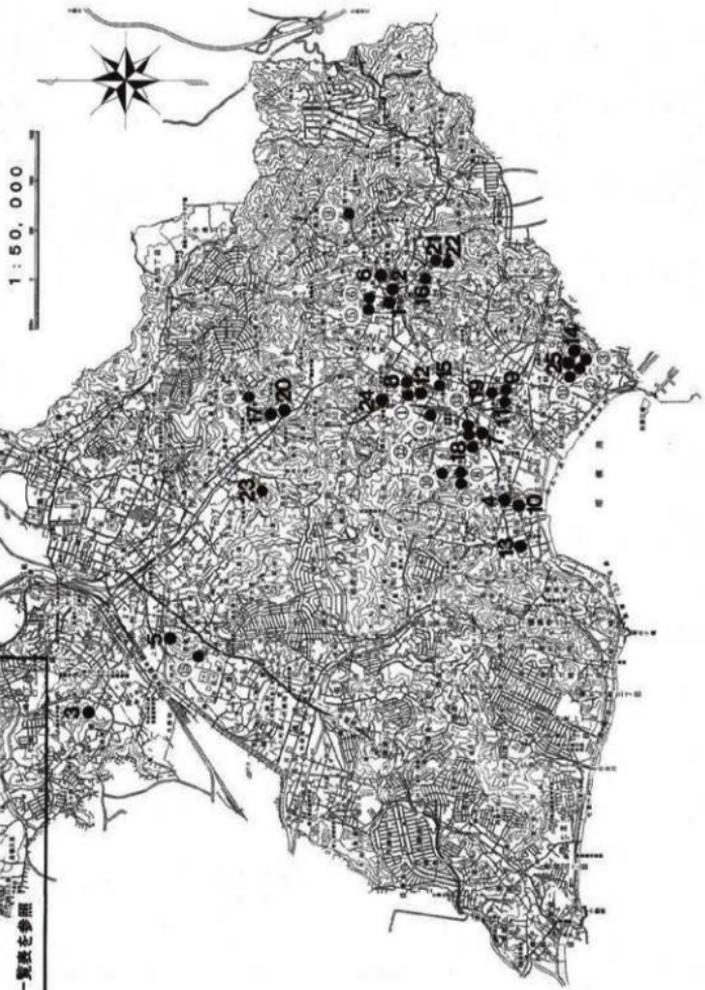
	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
1 ★	大倉幕府跡 (N0,253)	雪ノ下三丁目637番6外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	官 衙	25.00㎡	平成20年2月28日 ～平成20年4月11日
2 ★	大倉幕府周辺遺跡群 (N0,49)	二階堂字荏柄3番6外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都 市	54.00㎡	平成20年2月28日 ～平成20年4月23日
3	玉 繩 城 跡 (N0,63)	植木字植谷戸192番4外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城 館	97.50㎡	平成20年4月15日 ～平成20年5月22日
4	長谷小路周辺遺跡 (N0,236)	由比ガ浜三丁目206番6外	自己用店舗併用住宅	都 市	99.00㎡	平成20年5月8日 ～平成20年7月22日
5	天 神 山 城 (N0,384)	山崎字宮廻656番19	個人専用住宅 (地 下 室)	城 館	49.07㎡	平成20年5月26日 ～平成20年6月17日
6	横小路周辺遺跡 (N0,259)	二階堂字向荏柄875番4	個人専用住宅	都 市	48.00㎡	平成20年5月29日 ～平成20年8月1日
7	下馬周辺遺跡 (N0,200)	由比ガ浜二丁目54番15	個人専用住宅	都 市	18.00㎡	平成20年6月10日 ～平成20年7月7日
8	北条時房・顕時邸跡 (N0,278)	雪ノ下一丁目234番2外	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	城 館	12.00㎡	平成20年6月13日 ～平成20年7月11日
9	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目919番19	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	都 市	27.50㎡	平成20年6月27日 ～平成20年7月16日
10	由比ガ浜南遺跡 (N0,315)	長谷二丁目176番8	個人専用住宅	都 市	55.00㎡	平成20年7月23日 ～平成20年8月15日
11	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目893番9	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	12.50㎡	平成20年7月24日 ～平成20年8月1日
12	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町二丁目43番2	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	36.00㎡	平成20年7月29日 ～平成20年9月22日
13	坂ノ下遺跡 (N0,217)	坂ノ下50番3外	個人専用住宅 (地盤の表層改良)	都 市	48.00㎡	平成20年8月13日 ～平成20年9月19日

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
14	新 善 光 寺 跡 (N0,284)	材木座四丁目579番8	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	24.00㎡	平成20年8月25日 ～平成20年9月11日
15	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町二丁目349番1の一部	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都 市	14.00㎡	平成20年8月26日 ～平成20年9月12日
16	田楽辻子周辺遺跡 (N0, 33)	浄明寺一丁目652番8	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	都 市	66.95㎡	平成20年10月10日 ～平成21年1月29日
17	山之内上杉邸跡 (N0,170)	山ノ内字東官領屋敷17 9番39	個人専用住宅	都 市	33.00㎡	平成20年10月15日 ～平成20年11月28日
18	今小路西遺跡 (N0,201)	由比ガ浜一丁目134番4	個人専用住宅	都 市	48.00㎡	平成20年10月20日 ～平成20年11月10日
19	米 町 遺 跡 (N0,245)	大町二丁目993番1外	個人専用住宅	都 市	16.50㎡	平成20年10月23日 ～平成20年11月10日
20	徳 泉 寺 跡 (N0,173)	山ノ内字東官領屋敷168番4	個人専用住宅	社 寺	20.00㎡	平成20年12月2日 ～平成20年12月15日
21	釈迦堂遺跡 (N0,257)	浄明寺一丁目598番21	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	社 寺	16.50㎡	平成21年1月9日 ～平成21年2月6日
22	釈迦堂遺跡 (N0,257)	浄明寺一丁目598番35	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	社 寺	20.00㎡	平成21年2月10日 ～平成21年3月16日
23	西瓜ヶ谷遺跡 (N0,213)	山ノ内字瓜ヶ谷980番3外	個人専用住宅 (地 下 室)	都 市	53.45㎡	平成21年2月16日 ～平成21年3月16日
24	上杉定正邸跡 (N0,188)	扇ガ谷二丁目195番2	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城 館	25.00㎡	平成21年2月16日 ～平成21年3月27日
25	弁ヶ谷遺跡 (N0,249)	材木座四丁目599番8	個人専用住宅 (鋼 管 杭)	都 市	58.75㎡	平成21年2月17日 ～平成20年3月31日
				面積合計	977.72㎡	

★印は平成19年度からの継続調査を示す。

鎌倉市全図

平成20年度の緊急発煙調査地点(1~26)
 本書掲載の平成15・16・17年度発煙調査地点(①~⑧)
 ※通称名は一覧表を参照



わかみやおお じしゅうへんい せきぐん
若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町二丁目48番10外

例 言

1. 本報は、若宮大路周辺遺跡群内の鎌倉市小町二丁目48番10外地点における自己用店舗併用住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、平成15年8月21日から同年10月23日まで、調査面積81.65㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査団体は以下のとおりである。
調査担当者：原 廣志
調査員：須佐直子・太田美智子・石元道子・須佐仁和・久保田裕美・梅岡ケイト
調査補助員：長友純子・宇都洋平・山口正紀・野崎美帆・小野夏菜
協力機関：鎌倉考古学研究所・鶴斎藤建設
4. 本報の執筆は、第1～3章を原が執筆し、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。また、挿図・写真図版作成には須佐(直)・太田・梅岡・山口・野崎・小野が実施した。
5. 本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原、須佐(仁)があたり、出土遺物は須佐(直)が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
7. 本報の凡例は、以下のとおりである。
 - ・図版縮尺 全測図：1/80 遺構図：1/40 遺物図：1/3
 - ・遺構図 遺構図のレベルは海抜標高の数値を示している。
 - ・遺物図 —・—・— は軸策範囲を示す。黒塗は主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱塗文様を表現している。遺物観察表における手摺ねかわらけの底形計測値は外底指頭痕と口縁部との境、即ち稜部の数値を表している。
 - ・使用名称 本報中の「土丹」は三漕・葉山岩層の泥岩のことである。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。
秋山哲雄・池谷初恵・宇都洋平・伊丹まどか・大三輪龍彦・岡 龍一郎・小野正敏・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・古田土俊一・五味文彦・佐藤仁彦・汐見一夫・玉林美男・宗彥秀明・宗彥富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・手塚弘太・手塚直樹・韓盛旭・福田 誠・松尾宜方・馬淵和雄・宮田 真

本 文 目 次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	5
	1. 遺跡の位置	5
	2. 歴史的環境	5
第2章	調査の概要	8
	1. 調査の経過	8
	2. 測量軸の設定	8
	3. 層序と生活面	9
第3章	検出遺構と出土遺物	11
	1. 第1面の遺構・遺物	11
	2. 第2面の遺構・遺物	17
	3. 第3面の遺構・遺物	32
	4. 第4面の遺構・遺物	45
第4章	まとめ	65

図 目 次

図1 調査地点と周辺遺跡	7	図21 第1面下～第2面上出土遺物(1)	29
図2 国土座標上の位置図・グリッド配置図	8	図22 第1面下～第2面上出土遺物(2)	30
図3 土層堆積図	10	図23 第3面全測図	32
図4 第1面全測図	11	図24 第3面土壌・ピット(1)	33
図5 第1面土壌・ピット	12	図25 第3面土壌・ピット(2)	34
図6 第1面ピット	13	図26 第3面土壌	36
図7 第1面各土壌出土遺物	14	図27 第3面各土壌出土遺物(1)	37
図8 第1面各ピット出土遺物	15	図28 第3面各土壌出土遺物(2)	38
図9 表土層出土遺物	15	図29 第3面各土壌出土遺物(3)	39
図10 第1面上出土遺物	16	図30 第3面各土壌出土遺物(4)	40
図11 第2面全測図	18	図31 第3面各土壌出土遺物(5)	41
図12 第2面溝・ピット	19	図32 第3面各ピット出土遺物	42
図13 第2面土壌・ピット(1)	20	図33 第2面下～第3面上出土遺物	43
図14 第2面土壌ピット(2)	21	図34 第4面全測図	44
図15 第2面各土壌出土遺物	22	図35 第4面土壌・ピット	45
図16 第2面土壌6出土遺物(1)	23	図36 第4面土壌・井戸・ピット	46
図17 第2面土壌6出土遺物(2)	24	図37 第4面土壌出土遺物	48
図18 第2面各溝出土遺物	26	図38 第4面土壌・井戸・ピット出土遺物(1)	49
図19 第2面溝1出土陶枕模式図	27	図39 第3面下～第4面上出土遺物(1)	50
図20 第2面各ピット出土遺物	28	図40 第3面下～第4面上出土遺物(2)	51

表 目 次

表1 遺物観察表(1).....53	表7 遺物観察表(7).....59
表2 遺物観察表(2).....54	表8 遺物観察表(8).....60
表3 遺物観察表(3).....55	表9 遺物観察表(9).....61
表4 遺物観察表(4).....56	表10 遺物観察表(10).....62
表5 遺物観察表(5).....57	表11 遺物観察表(11).....63
表6 遺物観察表(6).....58	表12 遺物観察表(12).....64

図 版 目 次

図版1 a. 第1面Ⅰ・Ⅱ区全景(南から).....66	
図版2 a. かわらけ出土状況(南から) b. 瀬戸御皿出土状況(南から) c. 土壌7(東から) d. P17・18・27(北から) e. P13(西から) f. P15(北から) g. P16(西から).....67	
図版3 a. 第2面Ⅰ・Ⅱ区全景(南から).....68	
図版4 a. 土壌6(南から) b. 溝1(北から) c. 溝1土層堆積(南から) d. 扇骨出土状況(西から) e. 陶枕出土状況(西から).....69	
図版5 a. P8(西から) b. P2(西から) c. P33(東から) d. P39(東から).....70	
図版6 a. 第3・4面Ⅰ・Ⅱ区全景(南から).....71	
図版7 a. 調査区北東綱代塀(北東・西から) b. 調査区南西杭列(南・西から).....72	
図版8 a. 土壌1覆土土層堆積(西から) b. 土壌2～4(南から) c. 土壌10(北から) d. P12(北から) e. P5(南から).....73	
図版9 a. P33井戸1(北から) b. P34(北から) c. 調査区西壁廊柱穴及び土壌(西から) d. 井戸2(北から).....74	
図版10 a. 第1面各土壌ピット b. 表土層・第1面.....75	
図版11 a. 第2面土壌6.....76	
図版12 a. 第2面各土壌 b. 第2面溝1.....77	
図版13 a. 第2面各ピット b. 第1面下～第2面上.....78	
図版14 a. 第3面各土壌.....79	
図版15 a. 第3面各土壌.....80	
図版16 a. 第3面各ピット b. 第2面下～第3面上.....81	
図版17 a. 第4面各土壌 b. 第4面各井戸・ピット.....82	
図版18 a. 第4面井戸2出土犬骨 b. 第3面下～第4面上 c. かわらけ小皿.....83	

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

若宮大路周辺遺跡群（県遺跡台帳No.242）は、鎌倉市中央低地の北西部を占めており、鶴岡八幡宮から比ガ浜に至る都市鎌倉の幹線道路の若宮大路を中軸として、その東西両側を含んだ範囲を指した遺跡名称である。遺跡地の範囲は、若宮大路の東側で若宮大路御所を包括する「北条小町邸跡（県遺跡No.282）」と「宇津宮辻子幕府跡（県遺跡No.282）」を除く地域、若宮大路の西側では「北条時房・顕時邸跡（県遺跡No.278）」を除く、北は鶴岡八幡宮社頭（横大路）より西は今小路、東は滑川・小町大路一部、南は大町大路（下馬四角で交差する東西路）に囲まれた南北約500m～700mの広範囲に及んでいる。

調査地点は、若宮大路の西側に位置し、二ノ鳥居から北に約120m、西に約100mの地点である。JR鎌倉駅から北へ延びる現存の小町通りに面しており、鎌倉を訪れる観光客が最も多く立ち寄る繁華な一画の鎌倉市小町二丁目48番10外に所在している。ところで通称「小町通り」の界限に関わる文献史料は見当たらないので中世に遡るような道ではないが、これまでにこの一帯の発掘調査で発見された遺構・遺物から概観すると、鎌倉時代を中心とした武家屋敷の地域ではないかと推定される。

2. 歴史的環境

遺跡が立地する旧鎌倉市街地の地勢を見ると、相模湾に面した南側を除き三方を標高100m前後の丘陵に囲まれた沖積平野で約600万年新生代第三紀に形成された凝灰質砂岩と泥岩と浸食作用によって形成された谷間に砂や泥が堆積したものである。今から5～6000年前の縄文時代前期の海進期には、海面が現在より、10m前後も上昇して鶴岡八幡宮付近まで海水が入り込み鎌倉湾の海岸線を形成していたと推測される。縄文時代後期に始まる海退期でしだいに平野部分の陸地化が進み、その後弥生時代にはさらに海退に伴う乾燥がすすみ堆積した砂によって砂丘が発生したようで古墳時代頃には現代に近い地形が形成されたと考えられている。

中世の遺跡付近をみると、東辺を流れる滑川右岸では段丘が発達し、若宮大路の東城一帯からJR鎌倉駅付近にかけて海拔7～9m前後の微高地を形成している。若宮大路の西側では北西谷奥からの扇ヶ谷流域で海拔7～8mを計るが、鎌倉時代初期の段階では海拔5m前後の低湿地であったことが確認されており、扇ヶ谷川も今小路沿いに南下してJR線と若宮大路が交差する下馬四角辺りで滑川と合流しており、この付近は滑川河口の海岸線から深く入り込んだ潟湖となっていたようである。さらに遺跡南辺を限る国道134号線以南（下馬四角）では砂丘が拡がり、若宮大路浜ノ鳥居辺りで海拔10m前後頂部が長谷方面へと続いているが、砂丘の一部が御成小学校の発掘調査でも確認されており、遺跡地の南西部にまで及んでいたことが判明している。

ところで本遺跡は、鶴岡八幡宮の社頭より若宮大路を中軸に東辺の小町大路、西辺の今小路（武蔵大路）南辺の大町大路を含む広い範囲の地域で若宮大路を挟んで東側には嘉禄元（1225）年に大倉御所から移転した「宇津宮辻子御所（宇津宮辻子幕府跡）」、その後嘉禄二（1226）年再移転した「若宮大路御所（北条小町邸跡）」が置かれた場所にあたり、西側には「北条時房・顕時邸跡」と呼称される区域が位置している。また今小路を挟んだ地域において北西に源義朝居跡と推定される場所でのちに鎌倉五山の三位寿福寺が所在しており、さらに南西では現在の御成小学校敷地にあたる今小路西遺跡から

は鎌倉時代後期の二区画の大規模な武家屋敷を中心として周辺の様相が明らかになった注目すべき遺跡であり、屋敷の広さや建物・庭などの規模と配置からみて北条氏などの最有力御家人の屋敷であったと思われる。従って、調査地点も含めた遺跡地及びその周辺には宇津宮辻子・若宮大路幕府や鎌倉幕府を支えた最有力御家人の屋敷が点在した要所であり、都市鎌倉の中核域であったことは容易に推測できよう。

《参考文献》

- 秋山 哲雄 2004 『都市鎌倉の形成と北条氏』五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
- 上本 進二 1989 『鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成』『神奈川逗子市枝敷戸遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告書 第26集
- 大三輪龍彦 1989 『鎌倉の都市計画—政治都市・軍事都市として—』『よみがえる中世3 武士の都鎌倉』平凡社
- 岡 陽一郎 1999 『泰時以前の鎌倉—都市の点景—』『鎌倉』88鎌倉文化研究会
- 河野誠知郎 1995 『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社
- 河野誠知郎 2004 『政權都市「鎌倉」—考古学的研究のこの十年—』中世都市研究会編『中世都市研究9 政權都市』新人物往来社
- 宗熹秀明ほか 1997 『北条時房・顯時邸跡雪ノ下一丁目272』番地点北条時房・顯時邸跡発掘調査団
- 斉藤 直子 1999 『13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容』『国立歴史民族博物館研究報告』第81集 国立歴史民族博物館
- 高橋慎一郎 2005 『日本史リブレット21 武家の古都鎌倉』山川出版社
- 立川 明子 2004 『中世鎌倉の道と屋敷区画—若宮大路周辺の様相—』『鶴見考古』第4号鶴見大学文学部文化財学科・河野ゼミ
- 松島 義幸 2005 『貝化石が語る鎌倉市街地の縄文の海』『第回鎌倉市道跡調査・研究発表会講演要旨』鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
- 馬淵 和雄 『武士の都鎌倉—その成立と構想をめぐって—』網野善彦・石井進編『中世の風景を読む—2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
- 松古 大樹 2002 『鎌倉・北条小町跡（泰時・時頼邸）雪ノ下一丁目377番7 地点出土の人名木簡についての考察』『鶴見考古』第2号 鶴見大学文学部文化財学科・河野ゼミ



図1 調査地点と周辺遺跡

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群(No.242)の北西域に位置しており、観光客で賑わう通称「小町通り」中程で東面している。本地点の調査は自己用店舗併用住宅の建設に先立つ発掘調査であり、鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、鎌倉市教育委員会による確認調査が実施された。その結果、鎌倉時代の遺構・遺物を確認したので発掘調査の運びとなった。現地調査は平成15年8月21日から約2ヶ月の予定で調査面積81.65㎡を対象として開始した。

調査地点は、狭い敷地範囲であるため発掘調査で発生する排土処理の問題から調査区を東西二区に分割して残土置場を確保することにした。調査方法はまず東半部のⅠ区を調査した後、埋め戻して残り西半部にあたるⅡ区の調査を実施した。発掘調査は8月21日に機材搬入し、8月22日に確認調査の結果を受けて重機による表土掘削を実施した。その後、人力により掘り下げを行ない9月26日からⅡ区の調査に移行したが調査期間中は多量の湧水と台風接近に伴う大雨などに悩まされながらの調査であった。その結果、12世紀末～14世紀前半にかけて鎌倉時代を中心とした4時期以上の生活面と、それに伴う遺構・遺物が多数発見された。同年10月23日までに必要な記録保存を行ない調査機材の撤収を含め、現地調査を終了した。

2. 測量軸の設定

測量軸のグリットは、若宮大路を意識しながら調査地範囲の南北軸方位に併せて設定した。国土座標は、小町通りの路面上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点(第Ⅰ座標系)のうち、S



図2 国土座標上の位置図・グリット配置図

173 (X=-75,620,991 Y=-25,321,709)とS175 (X=-75,594,212 Y=-25,304,679)を採用している。また水準原点に関しては、若宮大路段葛の二ノ鳥居脇に設置されている国土地理院水準点No.15673=6.1684mを基準にしている。さらにS173・S175の両基準点の国土座標から敷地内に測量基準原点1 (B-1杭: X=-75,618,824 Y=-25,264,758 Z=8.450m)、原点2 (B-3杭: X=-75,620,445 Y=-25,261,110 Z=8.530m)を設定したものである。調査時に使用した水準点はB-1杭=8.450mである。

調査区グリットは、図2に示すようにB-1杭～B-3杭を原点として、東西軸と南北軸をそれぞれ2m方眼を組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸を西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。グリット方眼の南北軸線は、過去の調査による検出遺構の軸方位や測量の際の利便性を最優先したために、国土座標とは一致していない。なお図中の方位はすべて真北を採用しており、南北軸線は真北よりN-23°58'00"-Eである。

3. 層序と生活面

調査地点の現地地表は、海拔標高が8.8m前後で平坦な土地となっているが、周辺の標高をみると鶴岡八幡宮方面(北側)へ向かって緩やかに高くなる地形を呈している。調査で確認した土層は図3に示したようにI区とII区の境で概ね8層に区分できる堆積状況が観察され、現地地表下175cm前後の深さで中世地山層上面(黒褐色粘質土の中世基盤層)となり、その間に少なくとも4時期の生活面を検出した。表土は現地地表から60cm前後の近現代の整地層が堆積しているが、調査区内からは焦土や瓦礫を多量に含んだ大小様々な攪乱層が展開しており、これは関東大震災の後片づけに埋められたゴミ穴と考えられるもので七カ所ほどみられた。

1層は茶褐色粘質土の厚さ20~30cmの中世遺物包含層でこれを除去すると、ある一定の厚みと拡がりを見せる炭化物層を挟んで標高7.7m前後で第1面が表出した。この面の構築土の2層は茶褐色粘質土の大小泥岩塊を混入したやや粗い地業層で土壌や柱穴などの遺構を確認している。また調査区北東域の部分的な範囲だけに泥岩を突き固めて版築した様子が確認できた。

第2面は厚さ20~30cmの第1面構築土の下から間層を挟まずに認められた。第2面を構成する土層のうち、3層の暗黄褐色粘質土は小型泥岩の版築層で調査区東半部を中心に確認されたが厚みは場所によりかなり異なるもので、西側では包含層のような脆弱な堆積土(4層:暗茶褐色粘質土)へと変化していた。この土層の少し下、標高7.3m前後にもう一枚の泥岩地業面(5層:暗黄褐色粘質土)が認められた。これは上層の版築層とは場所によって一枚の生活面に集約されるので、時間的な差があまりなく下層地業上に張増した版築層と捉え、一括で第2面として調査した。

6層にあたる薄い暗茶褐色弱粘質土の包含層を除去すると、標高7.0m前後で第3面を検出した。第3面はその下層に堆積する8層有機物腐食土の脆弱な地盤を改良して補強するために、何度かに分け貝砂を撒いてから泥岩版築を繰り返して固められている場合が多く、地業層の厚みは場所によってかなり異なった状況が観察された生活面で起伏をもつのが特徴である。

第4面は基盤層のよく締まった茶褐色粘質土上である。遺構検出は調査区全域に堆積していた厚さ15~20cmの有機物腐蝕土を取り除いた中世地山の上面で行なった。また土壌を主体とした遺構覆土の多くも8層と類似した馬糞のような繊維質の目立つものであった。この面は標高6.7~6.8m辺りに位置している。

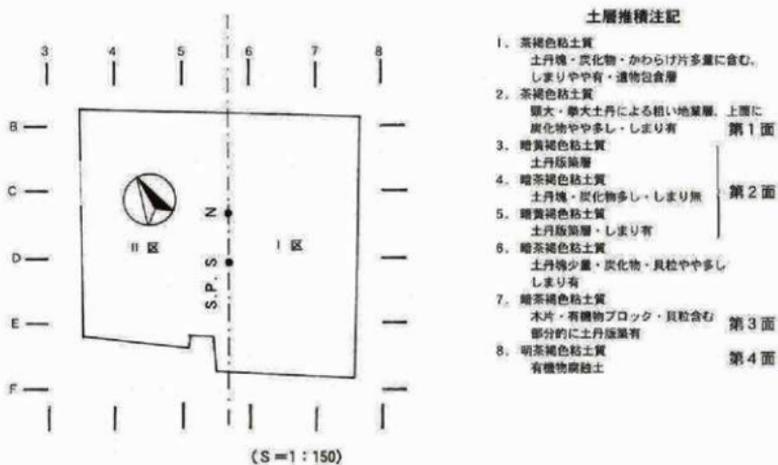
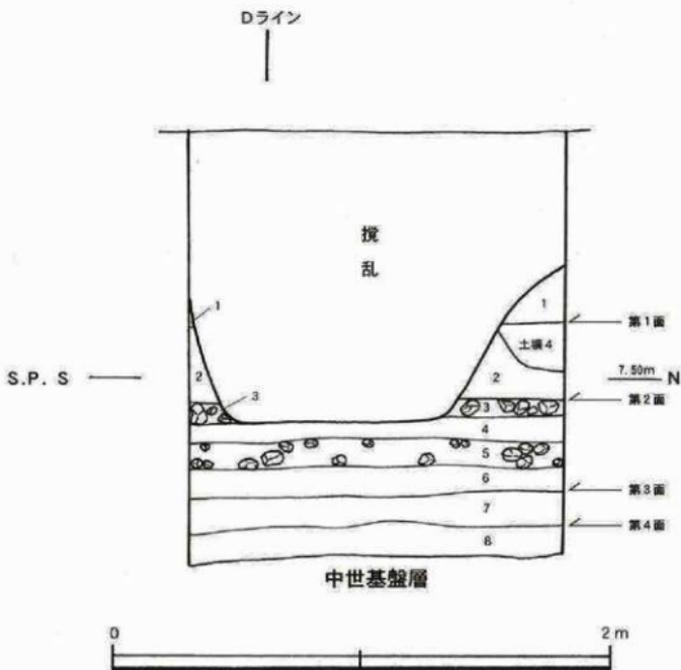


図3 土層堆積図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

第1面は、調査区西端で現地表から約60cmの深度に検出したが、表土は東に向かって厚くなり、検出した生活面は調査区東壁沿いでは攪乱による影響もあり、地表から70cm程度の深度となっていた。さらに調査区全域で関東大震災後の復旧作業に伴う攪乱が深くまで及んでおり、また近代の建物基礎下には沈下を防止する目的で松丸太の杭が数本づつ打ち込まれていた。この面の地業は大小土丹塊が場所によって疎密の差が見られ縮まりの弱い整地層であるが、面上を覆う炭化物層から生活面として認識した。

検出遺構は、土塋10基、溝1条、柱穴32口などが確認され、出土遺物は多量のかわけを始め、船載陶磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、瓦、金属製品、石製品などである。

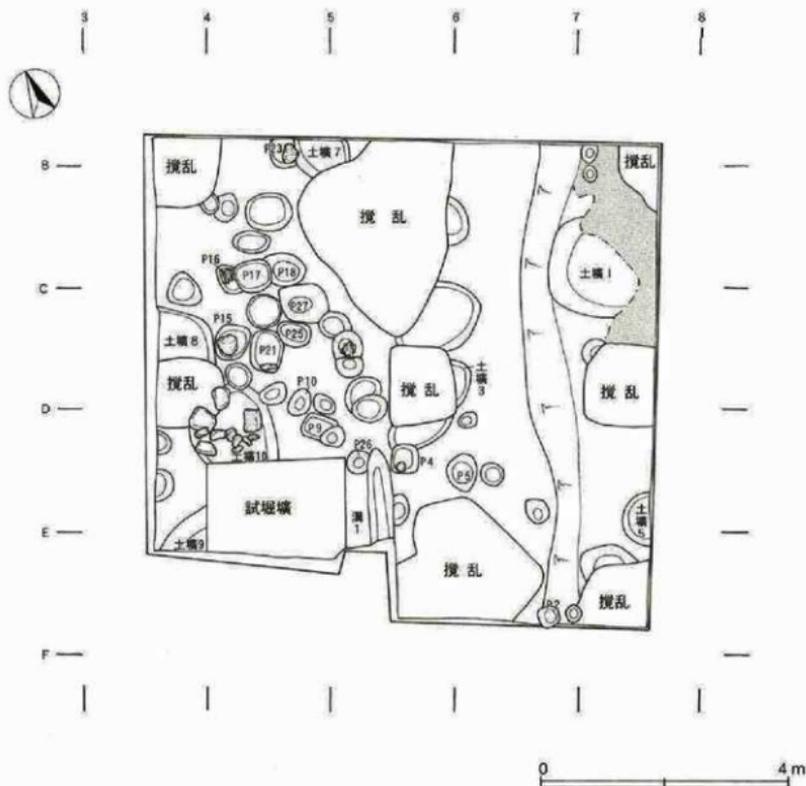


図4 第1面全測図

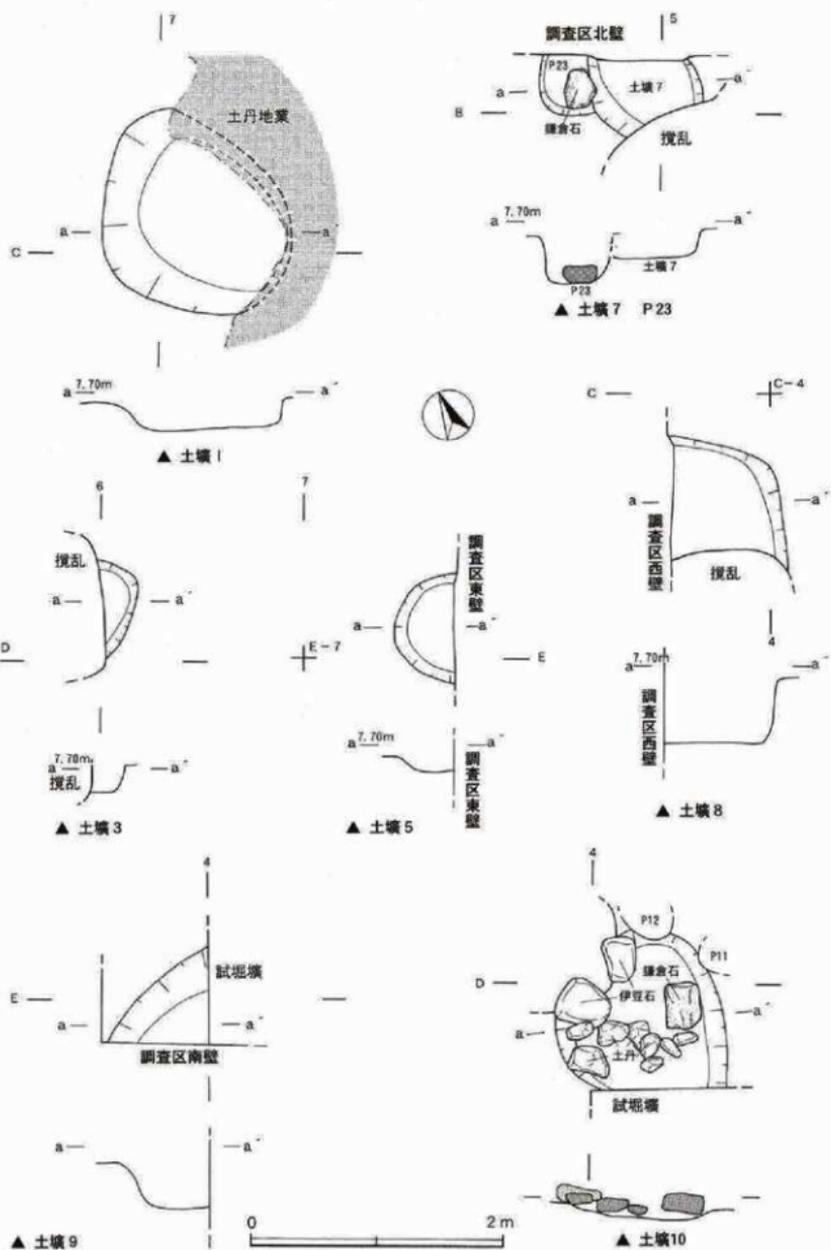


図5 第1面土坑・ピット

a. 土壌 (図5・7、図版2・10)

土壌1：調査区北東隅、C-7杭の位置で検出された大型の土壌である。土壌全体に薄い土丹版築による地葉層が覆っていた。形状は隅丸方形形状を呈するもので、規模は東西172cm、南北155cm、確認面からの深さ35cmを測る。掘り方の断面は浅い皿状の底面が平らなもので、覆土は中程の炭化物とかわらけ粒を多く含む層を挟んで上下2層に分けられた。上層は薄い土丹版築の下に茶褐色弱粘質土がみられ、下層には締まりのない繊維質を多く含んだ有機物腐蝕土が堆積する。出土遺物は、図7-1~4が常滑窯の広口壺・甕と捏鉢I・II類、5が滑石製の石鍋があり、この他に図示しなかったがロクロ成形かわらけ小片がある。

土壌3：D-6杭に近接した位置にあり、攪乱層の掘削により西半分が壊されている。確認した規模は南北軸85cm・東西軸55cm以上、深さ22cmの浅い掘り方をもち、形状は楕円形と推定される。覆土は小土丹塊や炭化物をやや多く含む締まりのない暗茶褐色砂質土である。出土遺物は、図7-6で常滑窯甕の底部片である。

土壌5：E-7杭西側に位置し、東側は調査区外に拡がっている。確認された規模は南北軸90cm、東西軸50cm以上、深さ20cmで底面が平らな掘り方である。覆土はかわらけ小片と炭化物を多く含む締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物のうち、図示できたのは図7-7の龍泉窯系青磁劃花文碗片だけである。

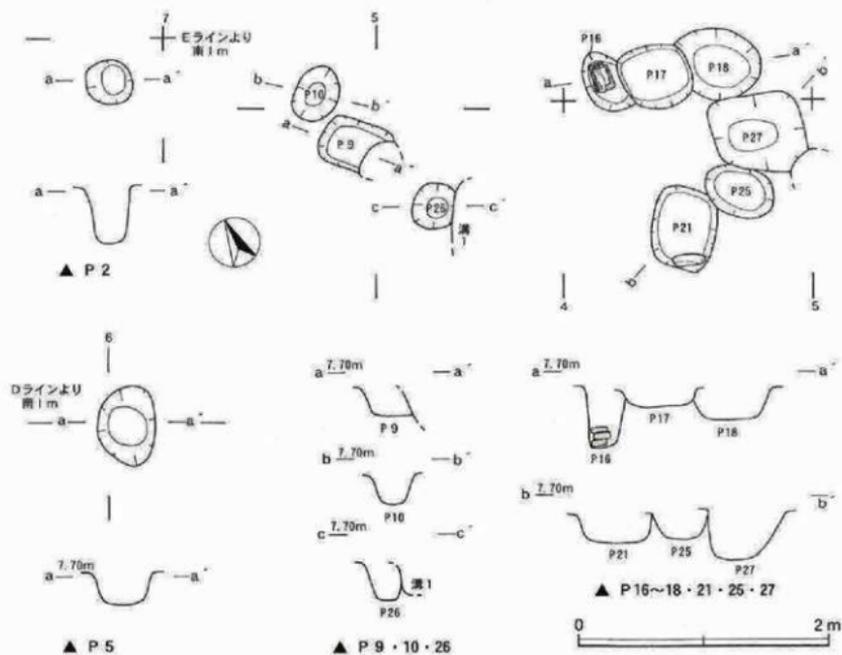


図6 第1面ビット

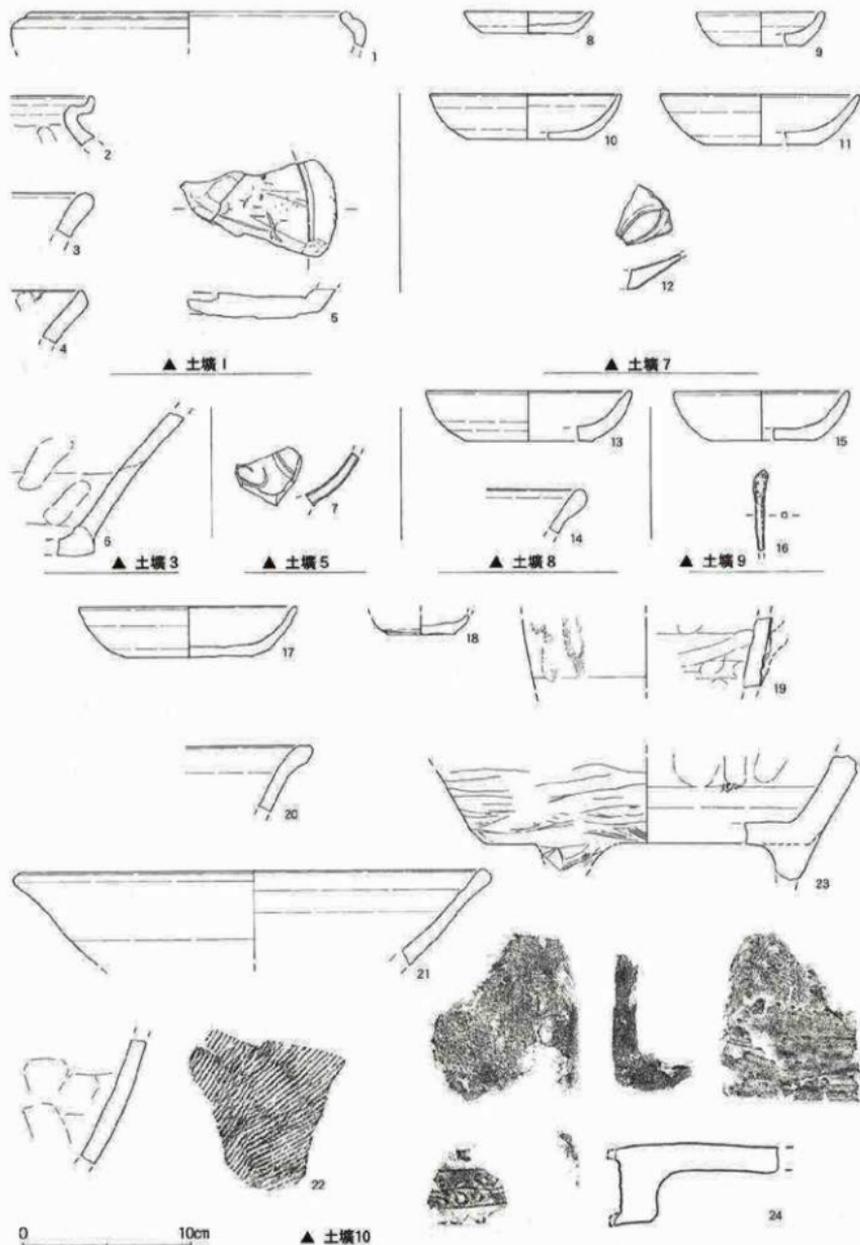


圖 7 第 1 面各土壌出土遺物

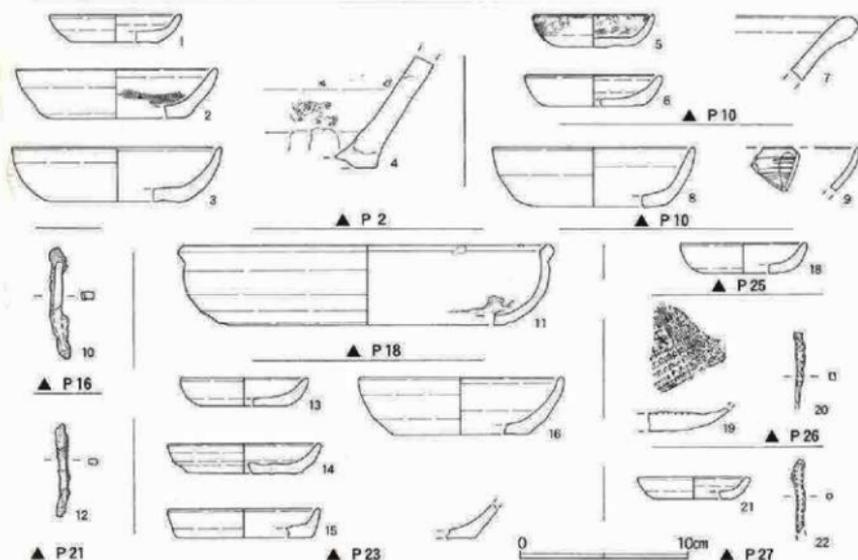


図8 第1面ピット出土遺物

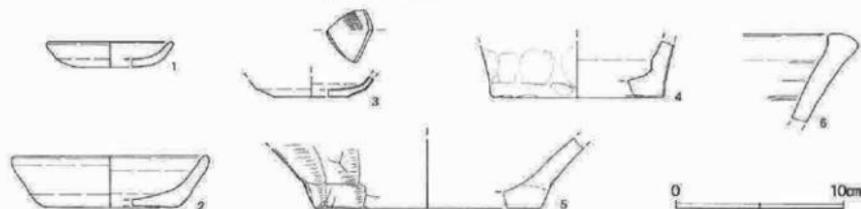


図9 表土層出土遺物

土壌7：B-5杭の位置で近代の攪乱とP23の削平を受けて検出され、北側は調査区外に拡がっている。確認規模は東西軸85cm、南北軸50cm以上、深さ20cmで底面が平らな掘り方である。覆土はかわらけ小片と土丹粒を含む締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図7-8～11がロクロ成形のかわらけ大小皿、12が龍泉窯系青磁劃花文皿である。

土壌8：C-3グリットの位置で攪乱削平を受けて検出され、西側は調査区外に拡がる。確認規模は東西・南北軸ともに90cm以上、深さ53cmを測り、覆土の主体は茶褐色の有機物腐植土である。出土遺物は図7-13がロクロ成形のかわらけ大皿、14が常滑窯捏鉢Ⅰ類である。

土壌9：調査区南西隅の位置で、主体は調査区外に拡がる。確認規模は東西・南北軸40cm以上、深さ35cm、覆土は茶褐色の有機物腐植土である。出土遺物は図7-15がかわらけ中皿、16が鉄釘である。

土壌10：D-4杭に近接した位置で近代攪乱の削平を受けており、確認した規模は南北軸140cm以上、東西軸132cm、深さ15cmと浅いものであるが、底面に大小土丹塊や鎌倉石、扁平な伊豆石2個が認められた。覆土は炭化物・粗砂を多く含む茶褐色砂質土である。出土遺物は図7-17がロクロ成形のかわら

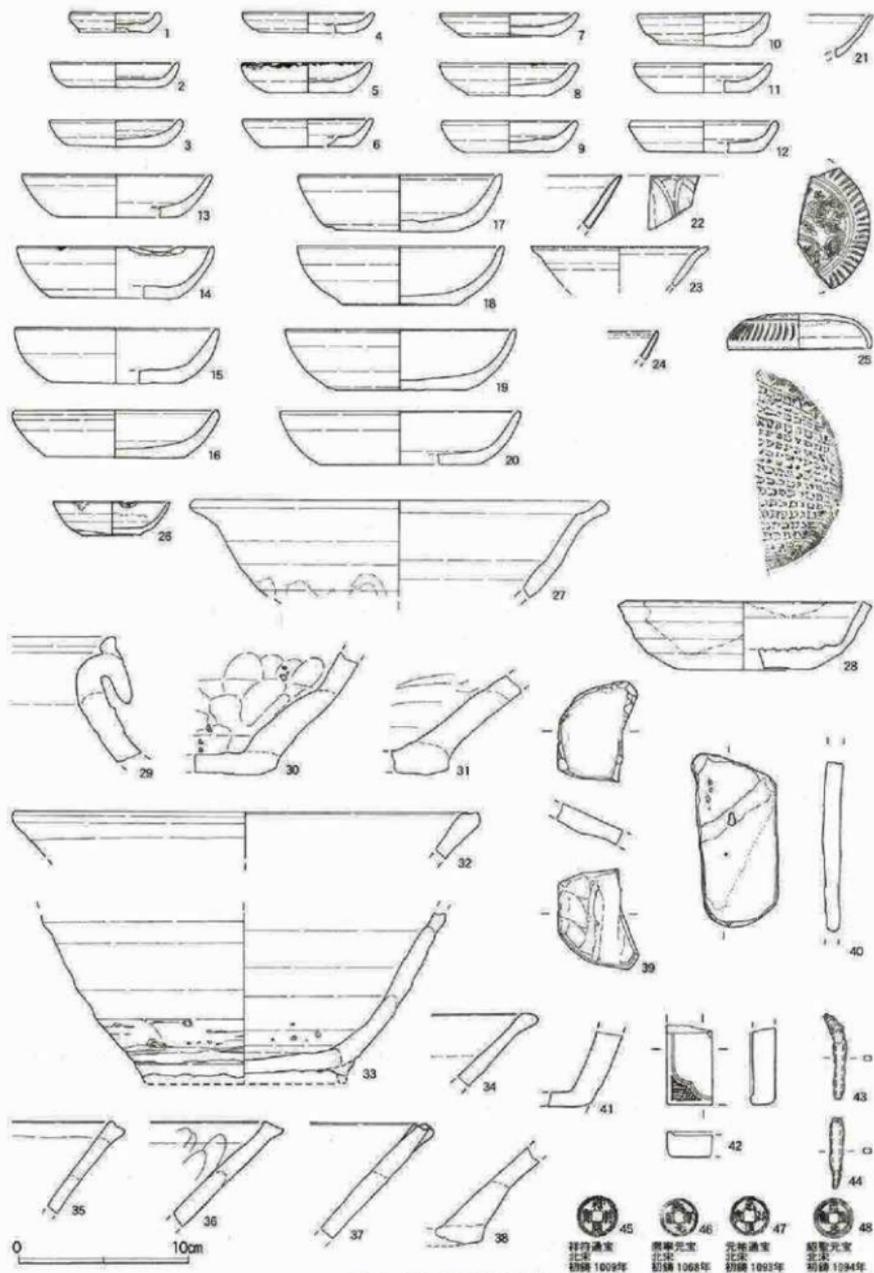


图 10 第 1 面上出土遺物

け大皿、18・19が瀬戸窯入子・水注、20・21が常滑窯捏鉢Ⅰ類、22が岡山県瀬戸内の所産となる亀山窯製の胴部片、23が瓦質火鉢である。24は偏行唐草文字瓦（軒平瓦）で鎌倉時代後期と考えられ、頼朝法華堂跡から中心に三巴文を置いた唐草文字瓦の同范例が出土している。

b. 柱穴（図6・8、図版1・2・10）

この面で柱穴（ピット）32口を検出したが掘立柱建物跡を構成するような配置は認められなかった。各柱穴掘り方は、平面形状が円形もしくは楕円形を呈し、規模が径30～70cm、深さ20～50cmほどであり、底面には礎板（P13・16）や土丹塊（P4・15・21・23）が柱受けとして据えられていた。以下、図8に示した各柱穴の出土遺物について簡単に触れる。

P2は1～3のロクロ成形かわらけ大小皿と4の常滑窯捏鉢Ⅱ類、P5は5・6がかわらけ小皿と7の常滑窯捏鉢類である。P10は8のかわらけ大皿と9の瓦器碗、P16は10の鉄釘、P18は11の泉州窯系黄釉盤、P21は12の鉄釘である。P23は13～16がロクロ成形のかわらけ大小皿と17の常滑窯捏鉢Ⅰ類、P25は18のかわらけ小皿、P26は19の瀬戸窯鉀皿と20の鉄釘、P27は21のかわらけ小皿と22の鉄釘などの遺物が出土している。

c. 表土層出土遺物（図9、図版10-b）

図9に示した表土層出土の遺物には、第1面上に堆積する遺物包含層からの資料も含まれている。1・2はロクロ成形のかわらけ大小皿、3は同安窯系青磁柳菴文皿、4は黒褐釉壺、5は常滑窯捏鉢類、6は瓦質火鉢である。

d. 第1面上出土遺物（図10、図版10-b）

図10の遺物は、第1面検出時の遺構確認に伴う精査作業において出土した資料が主体を占めている。1はロクロ成形による内折れかわらけである。2～20はロクロ成形のかわらけである。2～12の小皿は口径7.4～8.5cm、底径4.9～6.9cm、器高2cm以下であり、大皿は13～18が口径11.2～12.0cm、底径7.0～8.1cm、器高2.6～3.6cmを計るが、それに比べて19・20は口径13.5cm以上と一回り大きな資料である。21は白かわらけ口縁片である。

22は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、23・24は白磁口兀皿、25は白磁牡丹文合子蓋、26～28は瀬戸窯入子・折縁深皿・鉀皿である。29～40は常滑窯製品であり、29～31が甕、32～38が捏鉢Ⅰ・Ⅱ類、39・40が胴部破片を転用したもので割口面に摩滅痕がある。41は瓦質火鉢、42は長方硯で縁内側に四葉状に作り、縁隅に波状文を線刻した京都鳴滝産系のもと思われる。43・44は鉄釘、45～48が北宋銭の「祥符通宝」・「熙寧元寶」・「元祐通宝」・「紹聖通宝」である。

2. 第2面の遺構・遺物

第2面は調査区中央を中心に土丹版築の地業面の拡がり確認され、主に遺構はこの面から掘り込まれていた。遺構面は海拔標高7.35m前後である。検出した遺構は、土壇16基、溝3条、柱穴65口などが認められた。遺物には多量のロクロ成形によるかわらけ他に貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、漆・木製品などがあげられる。特に磁州窯系緑釉陶枕は全国的にみても調査出土の事例が極めて少なく貴重なものとなろう。

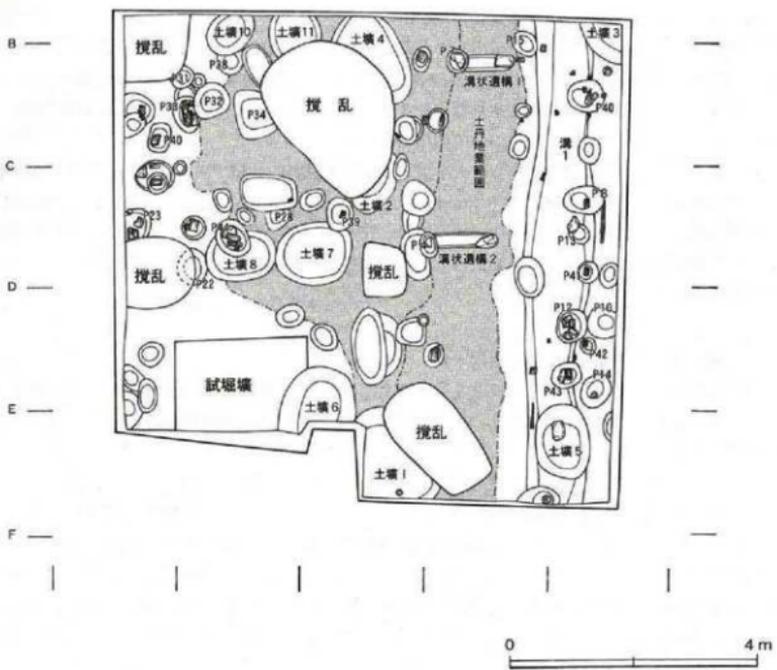


図11 第2面全測図

a. 土壌 (図11・13~17、図版3~5・11・12)

土壌1：E-5・6グリットの位置で攪乱削平を受けて検出され、南側は調査区外に広がる大型の土壌である。確認した規模は南北径180cm、東西径120cm以上、深さ30cmを測り、断面が皿状を呈する。覆土は炭化物や土丹粒を多めに含んだ茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図15-1がかわらけ大皿、2が常滑窯甕である。

土壌2：C-5グリットの位置で検出したが、北側半分が近代擾乱による削平を受けていた。確認した規模は東西径110cm、南北径40cm以上、深さ58cmを測り、断面は摺鉢状を呈した楕円形の平面形の土壌と推定される。覆土は大別して2層からなり、上層が炭化物や小土丹塊を多めに含んだ茶褐色弱粘質土、下層が薄茶色の繊維質を含んだ有機物腐蝕土である。出土遺物は図15-3がかわらけ大皿、4が青白磁の袋物(水注か)、5・6が常滑窯摺鉢Ⅱ類・甕、7が黒塗装の無文漆器皿、8が金剛草履の板芯である。

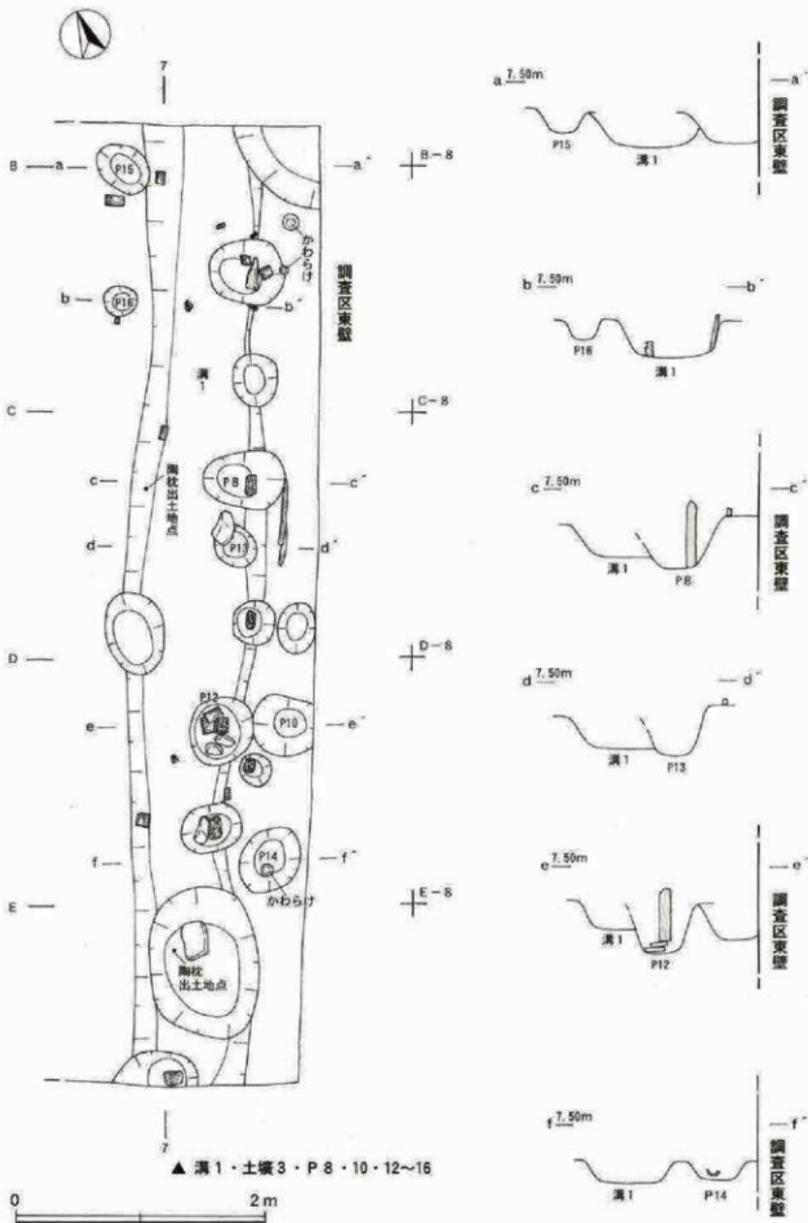


図12 第2面溝・ピット

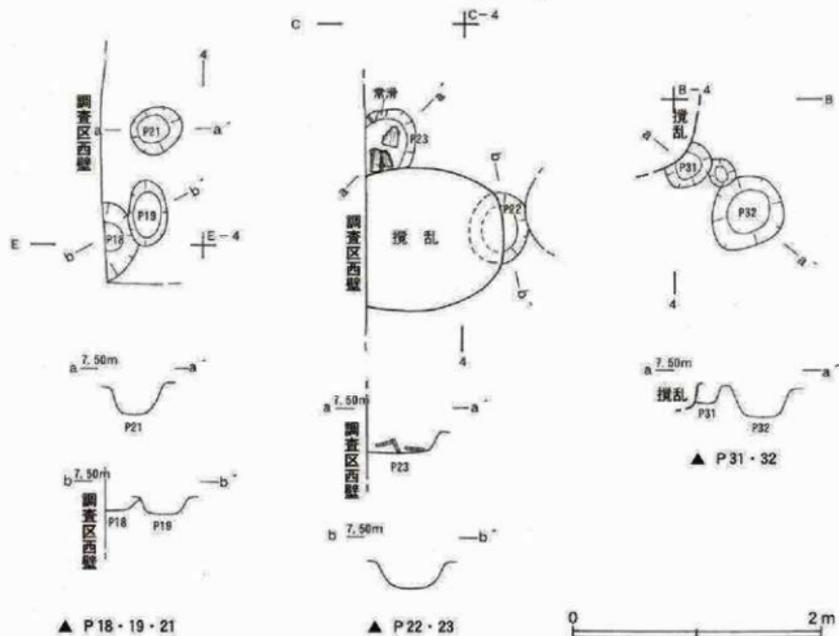
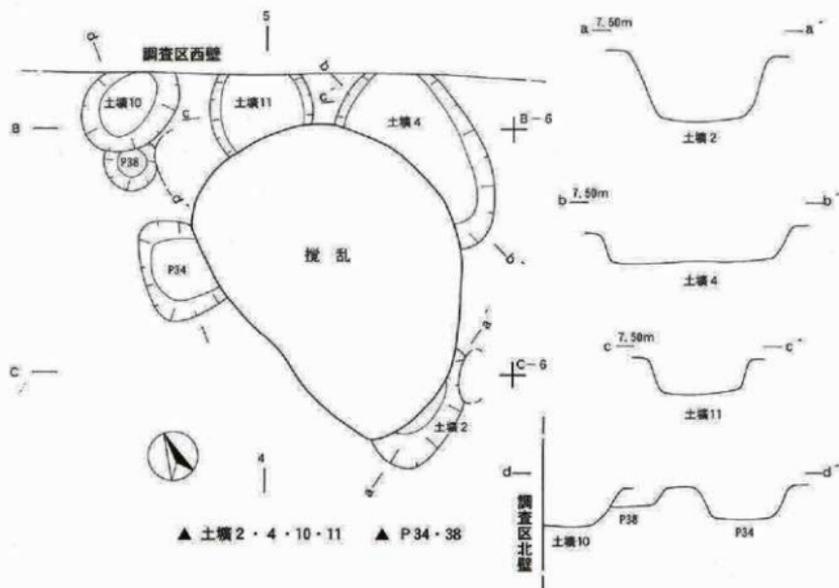
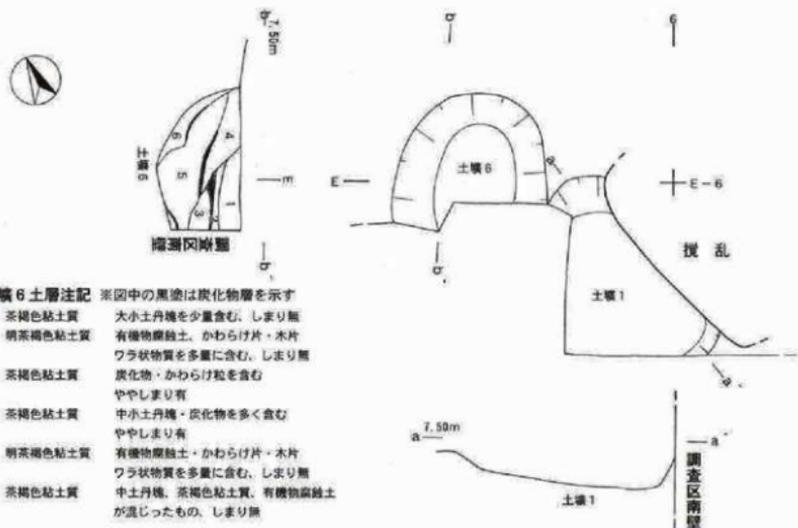


図13 第2面土壌・ピット(1)

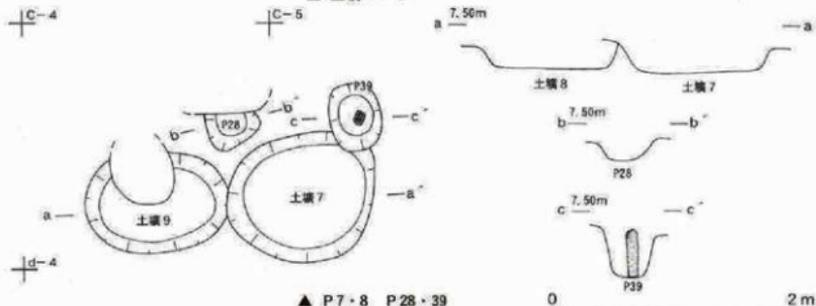


土層6土層注記

※図中の黒塗は炭化物層を示す

1. 茶褐色粘土質 大小土丹塊を少量含む、しまり無
有機物腐蝕土、かわらけ片・木片
ワラ状物質を多量に含む、しまり無
2. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、かわらけ片・木片
ワラ状物質を多量に含む、しまり無
炭化物・かわらけ粒を含む
3. 茶褐色粘土質 ややしまり有
4. 茶褐色粘土質 中小土丹塊・炭化物を多く含む
ややしまり有
5. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土・かわらけ片・木片
ワラ状物質を多量に含む、しまり無
6. 茶褐色粘土質 中土丹塊、茶褐色粘土質、有機物腐蝕土
が混じったもの、しまり無

▲ 土層1・6



▲ P7・8 P28・39

図14 第2面土壌・ピット(2)

土層4：A・B-5グリットの位置で攪乱削平を受けて検出され、北側一部は調査区外に拡がる。確認した規模は南北径163cm、東西径85cm以上、深さ30cmを測り、断面が皿状を呈した不整形円形と思われる大型土壌である。覆土は炭化物や土丹粒を多く含む茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図15-9がかわらけ小皿、10が尾張型の山皿である。

土層6：E-6杭付近の位置で検出された。土層1と重複関係にあるが本土壌が古く、南側は調査区外に拡がり全体規模は不明である。確認した規模は南北径110cm以上、東西径130cm、深さ65cmを測り、断面形は底面中央が窪んだ楕円状を呈するものである。覆土は土層堆積の観察から二時期に分けて埋まった様子が窺えた。まず下層堆積にあたる5・6層は炭化物層を挟んで糞状繊維質を多く含んだ有機物腐蝕土、上層覆土の時期は2層の薄い有機物腐蝕土と炭化物層から構成された土丹塊を含む茶褐色粘質土である。図16・17-1～60で示したように出土遺物は木製品を中心として多量に出土している。

1～5はかわらけ大小皿で1が口縁部に煤が付着した灯明皿である。6は男瓦(丸瓦)で永福寺創建

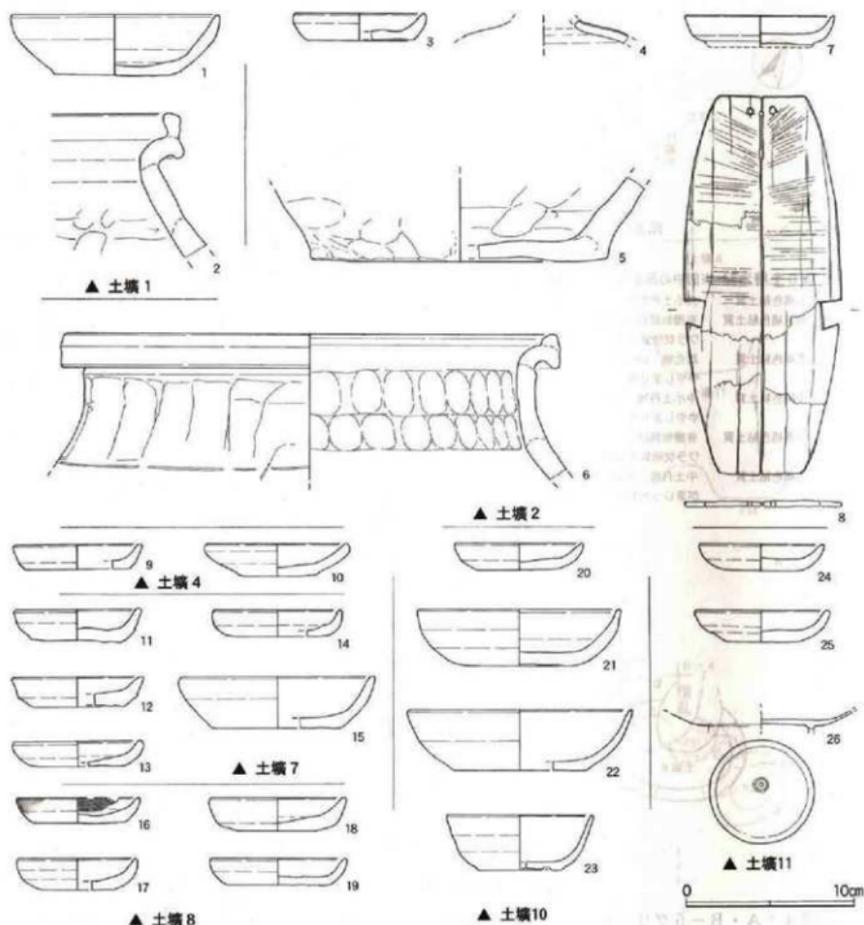


図 15 第 2 面各土坑出土遺物

期瓦と同類、7は鉢形をした瓦質火鉢、8は刀子の茎部、9は黒漆塗の椀、10～60は木製品である。10～25は食器や食物を置く「折敷」の破片で、厚さ1mm程の経木のように薄い板で一辺約19～20cm、四隅を弱く角取りしている。折敷は普通、側縁に2mm角ほどの棒状(椽)の縁を付けて角盆のような形にするもので、この椽を留めるには薄板の各辺の中央際に空けた穴に桜皮を通して結びつけたようで13・15の小穿孔がそれにあたろう。12・22には墨書と思しき痕跡を認めたが文字は判読不明である。26～46は両端を削り尖らした箸である。使用材は杉と思われ、太さが5～8mm、長さ22～24.5cmを計り、木目方向に数回の鋭い面取り削りを加えて仕上げている。47も箸と考えられるが一回り大きく、片端だけを尖らした菜箸のようなものか。48～51は柄杓か何かの柄または籬木(ちゅうぎ)のようなものであり、52は細い板材の先端を鋭く加工した筥様のもの。53～58は所謂「金剛草履」と呼ばれる草履の芯にあたる板であ

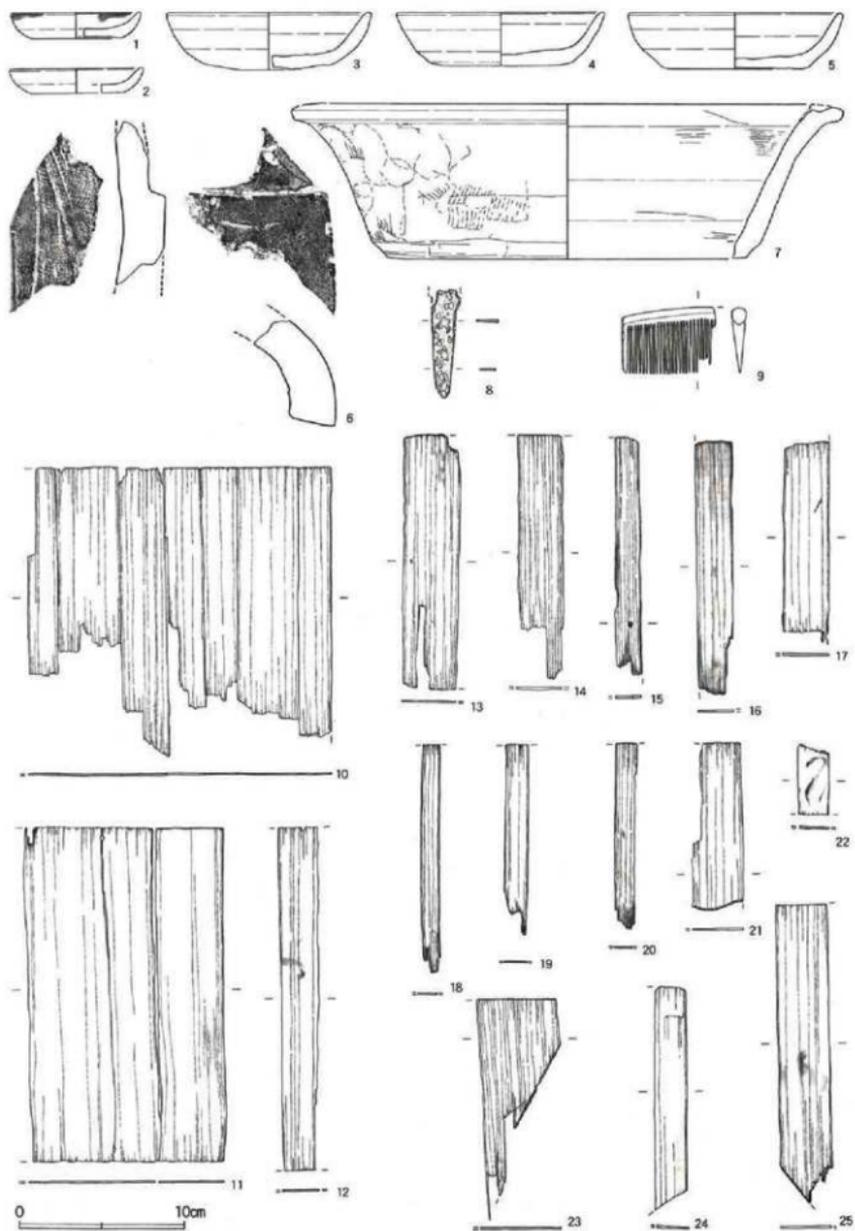


图 16 第 2 面土壤 6 出土遺物 (1)

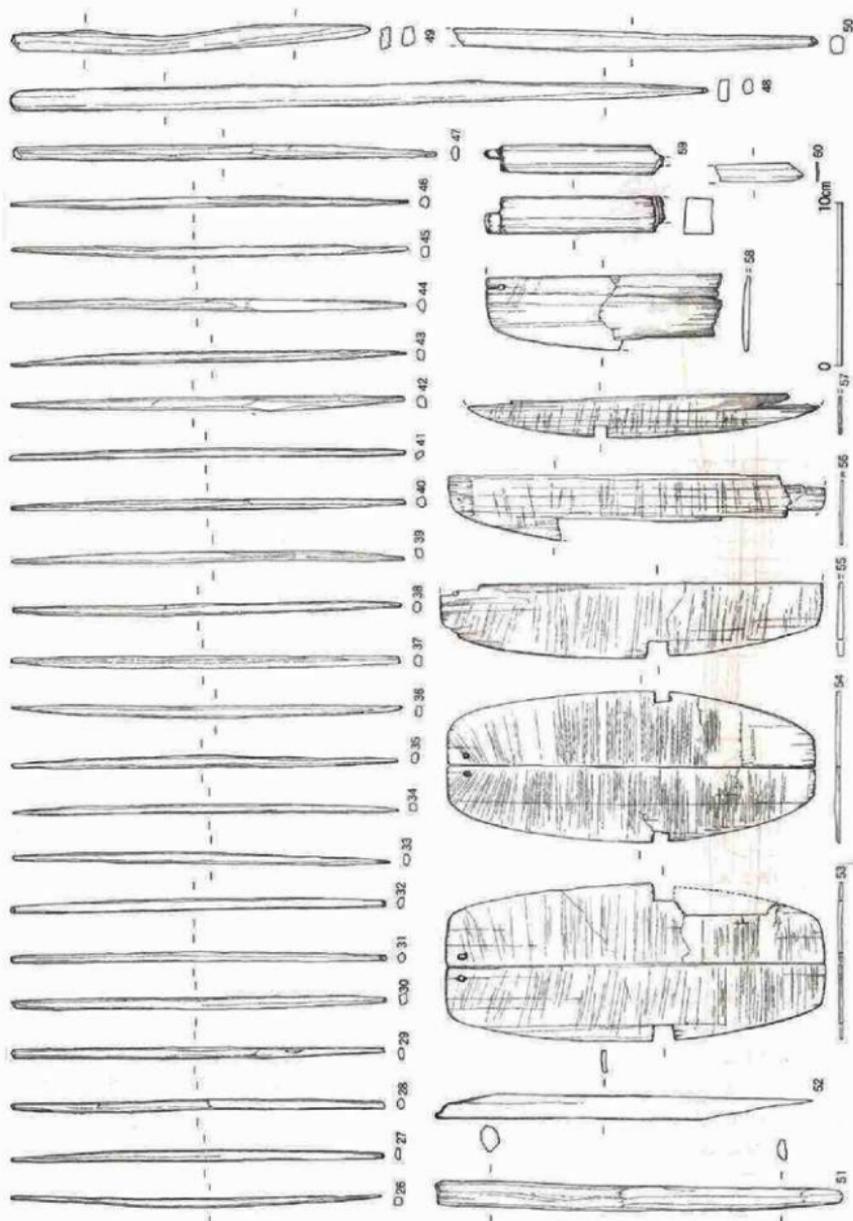


图 17 第 2 面土坑 6 出土遗物 (2)

る。芯板は全体が楕円形で中央から二分された形になり、足先の部分に開けた小さな2穴と、両側縁の中央部にある四角い切込みが鼻緒を取り付けるための加工であろう。出土品は長さ約23.5cm、幅9.5cm前後、厚さ2~3mmというサイズである。この表面には芯板二枚を編み込むように巻き付けたワラ紐の痕跡が認められる。59・60は加工した痕跡をもつがあまりにも部分的な断片で用途を推測しえないものである。以上のように本土壌は、有機物腐蝕土の埋め土中から多量の箸・折敷の用具や草履などの日常品が投棄された状態で出土していることからみて、ゴミ穴と考えるのが妥当であろう。

土壌7：D-5杭に南隣した位置においてP29・土壌8との重複関係にある土壌を検出した。この土壌は土壌8よりも新しいが柱穴のP29掘削で東側一部が壊されていたが規模は東西径130cm、南北径110cm、深さ25cmほどの大きさである。形状は楕円形を呈した底面の平らな浅い皿状の掘り方断面をもち、覆土は薄く層の炭化物や有機物腐蝕土が互相状に堆積した茶褐色粘質土である。出土遺物は、図15-11~15のかわらけ大小皿である。

土壌8：第1面から掘り込まれたピットにより一部掘削される。平面形状は東西位に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は長径115cm、短径約80cm、深さ20cmほどの平らな底面をもつ掘り方、覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含んだ締まりのない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は、図15-16~20に示したようにかわらけの小皿が主体を占めている。16は口縁部内外面に煤の付着がみられた燈明皿である。

土壌10：調査区北壁際、B-5杭西隣の位置において調査区外に少し拡がる土壌を検出した。平面形状は東西位に長軸をもつ楕円形と思われる、規模は長径約90cm、短径約65cm、深さ35cmで逆台形の断面形状をもつ掘り方である。覆土は上層が炭化物・かわらけ小片を含んだ締まりのある茶褐色粘質土、下層が葉状繊維質の目立つ柔らかな暗褐色粘質土であった。出土遺物は少なく図15-21・22のかわらけ大皿2点と23の瀬戸窯入子だけであった。

土壌11：B-5杭に位置で近代擾乱の削平を受けて検出され、さらに北側は調査区外に拡がっているので全体の規模は不明である。確認された規模は東西径83cm、南北径65cm以上、深さ30cmで、掘り方は断面形が逆台形を呈す底面の平らなものである。覆土は葉状繊維質の目立つ有機物腐蝕土の層だけの堆積が観察された。出土遺物は図15-24・25がかわらけ小皿、26が黒漆塗の漆器椀で輪高台になり、高台内中央に竹管文様の痕跡がみられる。

b. 溝・溝状遺構（図11・12・18、図版3~5・12）

溝1：調査区東端の7ラインに沿った位置に標高7.25m前後で検出された南北方向の溝である。調査区内では約8mを確認しているが、南・北はそれぞれ調査区外へさらに延びている。溝東肩に沿って検出された柱穴群や土壌3・5などは土層観察からみて本溝を壊して掘り込まれたと考えられるものである。主軸方位は若宮大路軸線にほぼ近く平行関係になる軸方位を示している。規模は掘り方の上幅が75~113cm、底面幅が53~86cm、確認面からの深さ20~30cmと幅の一定していない浅い溝である。断面形状は逆台形を呈し、溝底の海拔標高は南端で7.05m、北端で6.90mを測り、南から北に向かって緩やかな傾斜をもつ掘り方である。また北側溝内の底面東際で2本の角杭が柱穴を挟んだ位置で確認されたが木組溝のような痕跡は検出できなかった。覆土は木片や葉状繊維質の有機物を多く含む締まりのない明茶褐色腐蝕土で埋められており、その中からはかわらけ・陶磁器類・木製品など多量の遺物が出土している。図18に掲載した出土遺物のうち、特に注目したいのが、鎌倉では極めて珍しい緑釉陶枕片が（同一個体5点）溝底や覆土中から発見されたことである。以下、出土遺物について述べる。

1~15はかわらけ大小皿である。口径をみると、小皿は7.5cm前後のものや8.5cmを超えるものがあり、大皿も口径が11cm代と12cm代との2種に大別される。16~18は龍泉窯系青磁無文碗、19は高麗青磁の

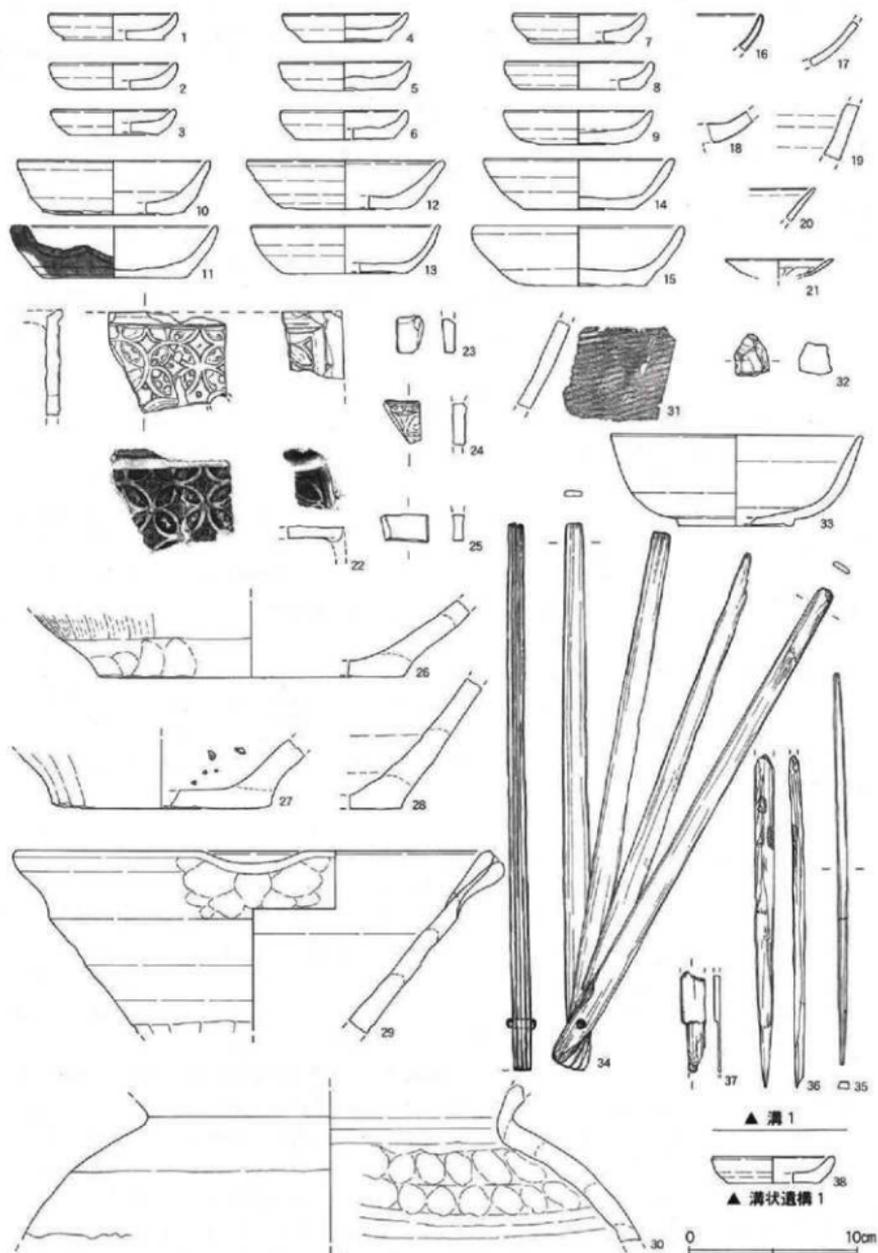


图 18 第 2 面 溝・溝状遺構出土遺物

瓶子または壺類、20は白磁口皿、21は青白磁の印花文小皿である。22～25は磁州窯系緑釉陶枕の同一個体破片の6点と考えられる。資料観察から推測すると、角形を呈する陶枕で各面は別々の板作りしたのちに箱形になるよう張り合わせた製作方法であることがわかる。枕面の文様は板作りの段階で范型による凹凸型の施文と、その後の手描き線刻が併用されており、連続した円圏中には型で施文された七宝文様の幾何学的な図柄に仕上げているが、底面は23・25ように無文の可能性も考えられる。この陶枕についてはあとで詳しく述べることにする。26～29は常滑窯甕と捏鉢Ⅰ・Ⅱ類、30は渥美窯甕、31は須恵器甕の胴部片、32は石英質の火打石、33は黒漆塗の漆器椀、34～37は木製品の扉骨・箸・筥と加工痕のある用途不明品である。

溝状遺構 1・2：調査区北東域の位置で溝1西側の土丹地業面から東西位の溝状遺構2基を検出した。両遺構は共に細長い溝状の掘り方の東端に土丹塊、西端にビットとがセット関係を成していたと考えられる遺構である。

溝状遺構1は主体の溝状掘り方が長さ約78cm・幅23cm・確認面からの深さ15cmと浅い溝状を呈し、ビットは径40cmほどの円形で深さ36cmで中に偏平な土丹塊を据えている。東端の土丹塊は約30×20cmの隅丸長方形のものを置いている。出土物は38のかわらけ小皿だけである。

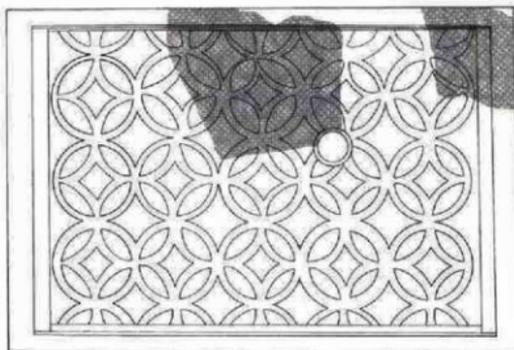
溝状遺構2は溝状掘り方が長さ約98cm・幅25cm・確認面からの深さ18cmであり、ビットは径40×30cmほどの楕円形を呈し、深さ36cmで底面に約14×7cmの安山岩質の長方形の根石が据えられていた。東端には37×20cmほどの不整形の偏平な土丹塊が置かれている。なお、図示可能な遺物は出土していない。

溝1出土の緑釉陶枕について

(図18・19、図版12中段)

ここで紹介する緑釉陶枕片(破片7点で一部接合)は、第2面溝1およびその周辺から出土した。この溝の年代観は出土遺物からみて概ね13世紀末葉～14世紀前葉と思われるが、面上包含層または地業層に伴う出土遺物に関しては、より下層からの古い混入品が多分に含まれている可能性が高く、生活面の存続期間や年代的な位置付けとは必ずしも一致していない。

本資料は磁州窯系と推測される枕面(22・24)と底面(側面か)(23・25)部分の小破片である。現存する破片を観察すると、文様面は厚さ8mm前後で外郭凹線を境に周縁が10mmと肥厚した造り、側面は6mm程とやや薄手の造りになる。素地は肌色に似た淡黄色を呈し、胎土中には黒色微砂粒と白色の光る鉱物微粒(雲母か?)を混入し、やや砂っぽい印象を受けるが精良

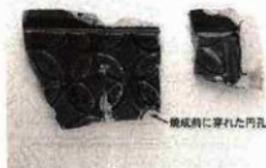


(スクリーントーン部分は遺物破片の範囲を表す)

(文様)
七宝文:不老長寿・子孫繁
を表わすもの
施文:范型を用いて凸の
四葉花弁形に内縁
の線刻をした七宝
髷き



七宝文の紋様パターン



横成りに穿れた円孔

図19 第2面溝1出土の陶枕模式図

で、比較的堅緻な焼成である。釉薬は細かな貫入が多く、概ね深緑色を呈したものを外面だけに薄く施釉しているが、底面と思われる資料では極めて薄い釉層が部分的にみられだけで露胎部分が主体を占めている。内面は側面に平行したナデ整形を施し、側縁には箱物に組立てる際の補強用に貼付けられた粘土や、その剥離した痕跡がみられる。また僅かながら箔状になった黒漆と思しきものが附着しており、割口を漆継で修理したと考えられる。図19の陶枕模式図でも解かるように枕面（図18-22右下）の一方所には焼成前に穿たれた推定径12mm程の円孔がみられた（註1）。枕面の文様は、印花・線刻によって施文された連続する七宝文を表現している（註2）。七宝文の形象は不老長寿や子孫繁栄の象徴としての願いが込められたと云われている。

なお、陶枕模式図では、出土資料が部分的な小破片であり、残念ながら方形陶枕に一般的な反りを復元することができなかったので、ここでは主に枕面文様を重視して長方形に表現したことをお断りしておきたい。

ところで鎌倉中世都市遺跡における当該資料の類品出土例は、筆者の知りえた限りでは極めて少なく、大坪聖子氏が「建長寺西米庵出土の緑釉陶片について」（註3）と題して資料紹介した例だけである。この資料は小破片で再火のためか肌荒れで本来の姿を留めていないが、製作法は板作りで側縁部を直角に貼付け接合した箱物と考えられ、枕・側面の表面には線刻文を配しうえて緑釉を薄く施した緑釉刻花文枕と推測される。この他の陶枕例としては、千葉地遺跡からの無文例が、若宮大路周辺遺跡（小町

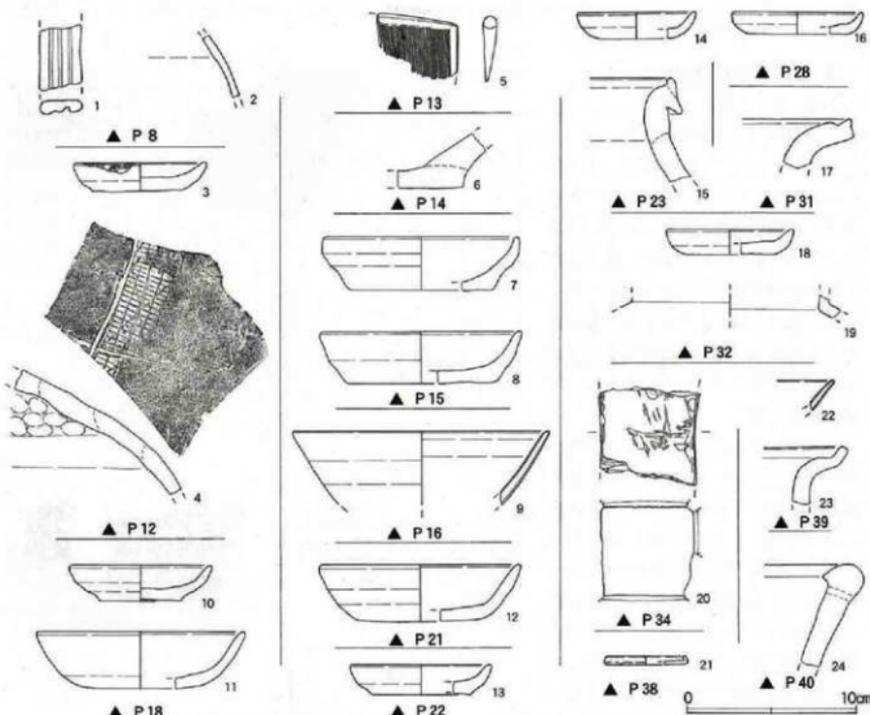


図20 各ピット出土遺物

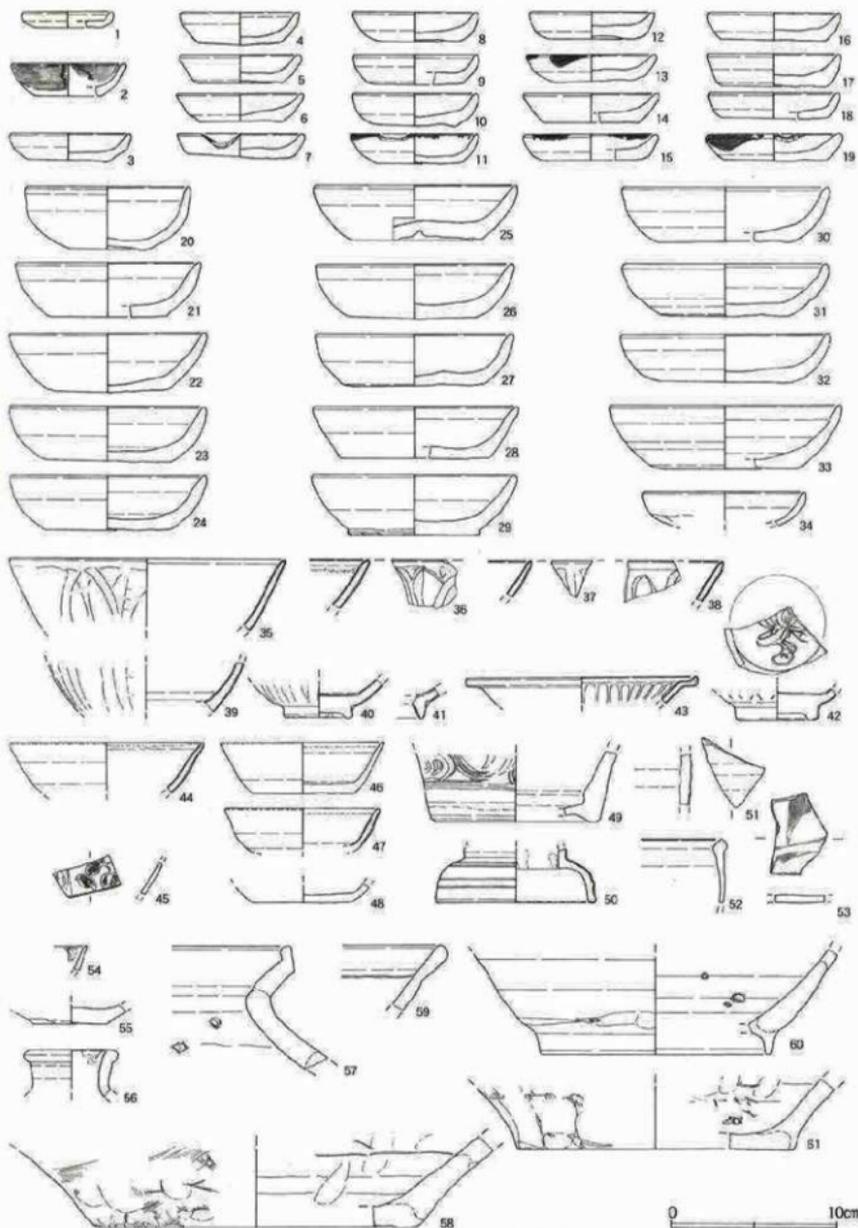


图21 第1面下~第2面上出土遺物(1)

二丁目345番2地点)から線刻文を施した高麗青磁各1点ずつの出土が知られるだけである(註4)。

註1 円孔のある陶枕例としては、『中国美術全集工芸美術編2 陶瓷(中)』上海人民美術出版社1988 北京房山縣金墓出土の三彩蕭何追韓信枕(P195-233・金時代)側面に、また町田市立博物館所蔵品で磁州窯系の白地鉄絵黒花文枕の側面にも、それぞれ円孔が認められる。

註2 七宝文を施した例としては、『中国・磁州窯-なごみと味わい-』出光美術館2005 P38-62は磁州窯系の褐釉印花七宝文枕が掲載されている。なお、磁州窯系鉄絵陶器の鎌倉出土例は13世紀代を中心に少数ながら、白地黒花文壺などが知られている。

註3 大坪聖子「建長寺西米庵出土の緑釉陶片について」『鎌倉考古』No. 27 鎌倉考古学研究所1993 本例と類似した緑釉刻花文枕片が資料紹介されている。

註4 高麗青磁陶枕については、手塚直樹・宗臺秀明ほか「千葉地遺跡」同遺跡発掘調査団1983及び馬淵和雄ほか「若宮大路周辺遺跡-小町二丁目345番2地点-」同遺跡発掘調査団1985の出土がある。その後、これらの陶枕資料は韓盛旭「日本鎌倉出土高麗青瓷の研究」『東亜文化』創刊号(2005)によって集成された研究論文の中で発表されている。調査担当者の手塚直樹氏(青山学院大学教授)より多大な御教示を賜った。感謝の意を表したい。

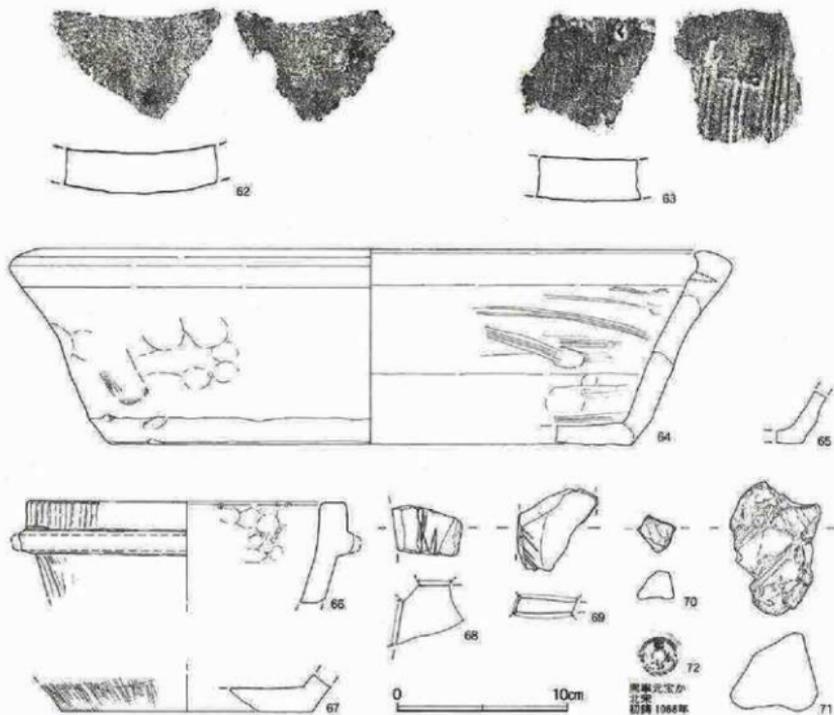


図22 第1面下~第2面上出土遺物(2)

C. 柱穴 (図 12~14・20、図版 5・13a)

この面から底面に礎板や土丹塊、さらに柱を据えた柱穴約65口を検出された。しかし、掘立柱建物跡を構成するような柱穴配置は認めることはできなかった。ここでは柱や礎板が遺存した例や、覆土中から遺物が出土した柱穴について簡単に述べる。溝1東肩に沿って掘られた柱穴の並び(P40~P42の5口)を確認したが、掘り方規模や柱間距離が一定しておらず柱穴列として取り上げていない。各柱穴掘り方は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、規模は径25~60cm程で確認面からの深さ約15~50cmである。柱穴の底面にはP23・33・40例のように1~3枚の礎板を敷いたもの、P12・44例では礎板と土丹塊の根石を併用したものなどがみられ、いずれも柱の沈下防止や高さ合わせの目的で据えられていた。またP8・12・41・43には角柱痕が遺存していた。

各柱穴の出土遺物(図20)は、P8-1・2の褐釉壺、P12-3のロクロ成形かわらけ小皿と4の常滑甕の肩部片、P13-5の黒漆塗り櫛、P14-6が常滑甕の底部片、P15-7・8がロクロ成形かわらけ大皿、P16-9が龍泉窯系の青磁無文碗、P18-10・11がロクロ成形かわらけ大皿である。P21・22-12・13が糸切底かわらけ大皿、P23-14がかわらけ小皿と15が常滑甕の口縁片、P28-16がかわらけ小皿、P31-17が常滑甕の口縁小片、P32-18・19がかわらけ小皿と白磁壺か水注などの袋物、P34-20が九州天草系の砥石、P38-21が瓦質の内折れ小皿、P39-22・23が同安窯系の青磁描文皿と常滑甕の口縁小片、P40-24が鉢形火鉢の口縁部である。

d. 第1面下~第2面上出土遺物(図21・22、図版13下段)

ここでは第1面構築土および第2面の面検出や遺構確認の時に出土したもので、遺構に共判しない遺物を一括した。

図21-1~34のかわらけは、34の手捏ね成形の白かわらけ以外のかかわらけはすべてロクロ成形による製作である。1が口径約5.3cmの内折れ気味になる極小タイプである。2~19の小皿の一群であるが、2・4は器壁が薄手で口径と底径の比率差をもち器高が高目の特徴を有する。それ以外は口径7.4~8.0cm、底径5.0~6.6cm、器高1.6~2.0cmの計測値を示している。20・21は口径12cm以下の中皿であるが、20は器高が高く底径の小さな薄手の器壁をもつ特異な器形である。22~33は大皿になる一群である。口径12.0~12.60cm、底径7.4~9.0cm、器高3.0~3.7cmの計測値を示しているが、33は口径が14cmを超える特大タイプのものである。2・7・11・13・15の小皿には口縁部を中心に煤が付着した灯明皿、7・11は口唇部を打ち欠いている。

35~43は龍泉窯系青磁である。35~37・39・40・42は鎗蓮弁文碗で42の見込に印花蓮華文、38が劃花文碗、41が三角高台になる碗か。43は折縁皿で内面に蓮弁文を陰刻するもの。44~48は白磁の碗・皿類であり、44は口元碗、45が印花草花文碗、46~48が口元皿である。49~51は青白磁、49が牡丹空唐草文梅瓶、50・51が壺台と花瓶と思われるもの。52・53は泉州窯系の黄釉鉄絵盤である。54・55は瀬戸の入子・折縁皿、56~61は常滑製品で、56が虜口壺、57・58が甕、59~61が摺鉢I・II類である。

62・63は女瓦(平瓦)で永福寺II期瓦(女瓦D類)と同じ資料、64・65は丸浅鉢形の火鉢である。68~71は石製品で66・67が滑石製石鍋、68・69が天草・鳴滝産の砥石、70が火打ち石、71が刃物の擦痕がある軽石、72が北宋銭の「熙寧元宝」である。

3. 第3面の遺構・遺物

第3面は、海拔標高7.0m前後で検出された生活面である。この面の下層には中世地山上の有機物腐蝕土の脆弱な土層がやや厚く堆積しており、面を構築する際に地盤改良を行う目的で貝砂を何度かに分けて撒布してから、土丹版築の地業を繰り返して地盤を固めた様子が観察された。そのために地業層の厚みは場所によって異なり、やや起伏のある生活面を構築していた。調査区内で検出された遺構は主に繰り返し掘り直された新旧関係をもつ土壇や柱穴・ピットであるが、南西域だけは遺構密度が低く、小杭・土留板、礎板が置かれていた状況が看取される。

検出遺構は、土壇32基、柱穴・ピット62口、網代壁、杭列などが確認され、出土遺物には多量のかわけをはじめ、舶載陶磁器、常滑窯・瀬美窯製品、瓦質製品、瓦、石製品、漆・木製品などである。

a. 土壇 (図23~31、図版6~8・14~16)

土壇1：調査区南東隅、E-7杭の位置で検出された大型の土壇である。土壇全体を薄い貝砂層が覆つ

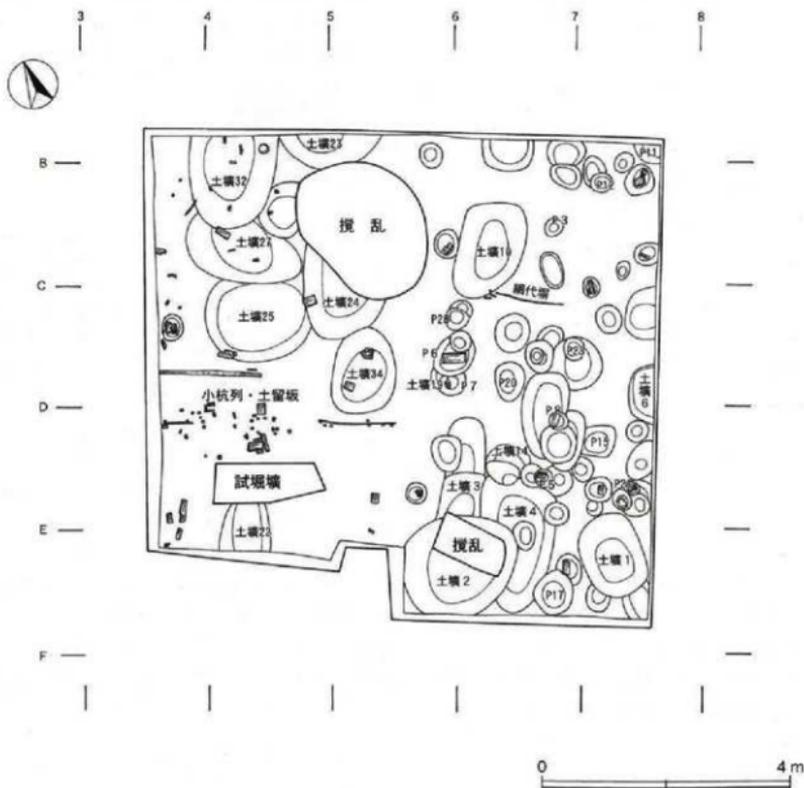


図23 第3面全測図

ていた。形状は隅丸方形を呈するもので、規模は東西軸137cm、南北軸100cm、確認面からの深さ50cm前後を測る。掘り方の断面は逆台形状で底面が東に向かって深くなる。覆土は3層からなり、上層が大小土丹塊を含む有機物腐蝕土、中層が縮まりのない葉状繊維質と木片を多く混入した有機物腐蝕土、下層は炭化物と黒褐色粘質土ブロック（中世地山類似）の多い土層が堆積していた。出土遺物は、図27-1が常滑窯の広口壺、2・3が木製品で表面に刃物傷が組板と折敷である。この他に図示しなかったがロクロ成形と手捏ね成形のかわらけ小片がみられた。

土壌2：調査区南端中央寄りに位置し、攪乱墳の掘削により一部が壊された大型土壌である。確認した規模は東西軸198cm・南北軸168cm程、深さ40cmの浅い掘り方をもつ。平面形状は楕円形を呈し、覆土は3層からなり、中層の縮まりのない葉状繊維質と木片を多く混入した有機物腐蝕土を挟んで縮まりのややある暗茶褐色粘質土が堆積していた。

出土遺物は、図27-4がロクロ成形のかわらけ大皿、5~11が手捏ね成形のかわらけ大・小皿である。12は凸面に斜格子叩き目を施す女瓦で永福寺Ⅱ期瓦の女瓦D類と同一のものである。13は黒漆塗無文棟で四角高台を削り出し、高台内に刃物による記号様の切り込がある。14~23は木製品である。14~16は箸で21も多面加工しており菜箸か、17が表面を多角形に削り、片面を平らに仕上げた篋状工具、18が鳥帽子を被る横向きの人形代で椀目薄板を削り加工、19・20・22・23が刃物加工はあるが用途不明品である。

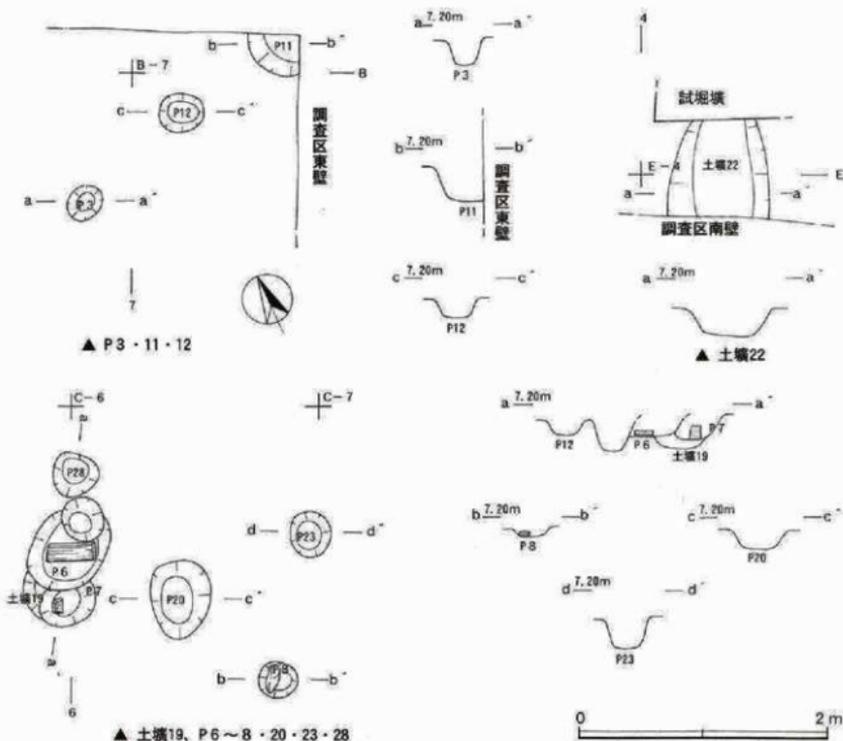
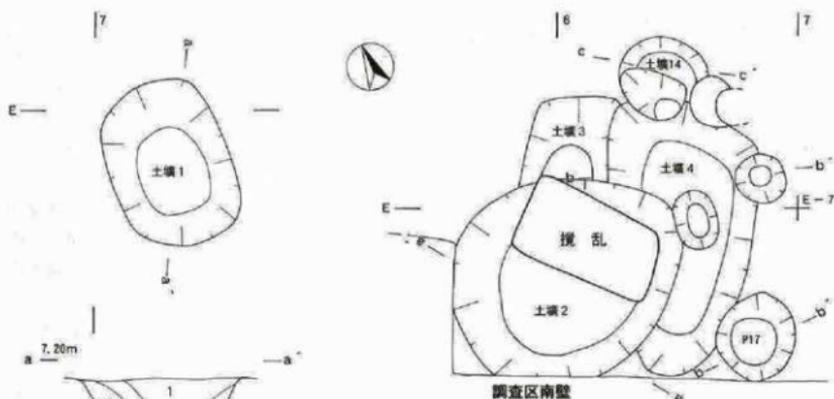
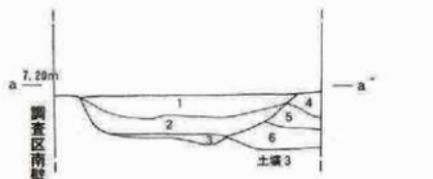


図24 第3面土壌・ピット(1)



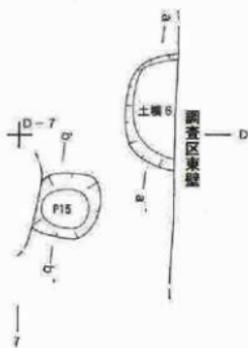
▲ 土壌 6

- 土壌 1 土層注記**
1. 茶褐色粘土質 大小土丹塊をやや含み、有機物腐蝕土ブロック状に混入。しまり無
 2. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、ワラ状の木片多し。しまり無
 3. 暗茶褐色粘土質 小土丹塊 少量含む、炭化物・地山ブロック多し、ややしまり有



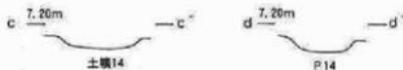
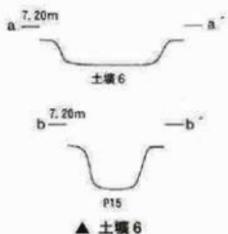
▲ 土壌 6

- 土壌 2・3 土層注記**
1. 茶褐色粘土質 大小土丹塊をやや含む、しまり有
 2. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、木片・ワラ状多し、しまり無
 3. 暗茶褐色粘土質 土丹粒、炭化物や多い、ややしまり有
 4. 茶褐色粘土質 小土丹塊少量含む、しまり有
 5. 茶褐色粘土質 小土粒、炭化物、貝片を含む、ややしまり有
 6. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、ワラ状を多量に含む、しまり無



▲ 土壌 6

- 土壌 4 土層注記**
1. 茶褐色粘土質 土丹粒、炭化物、貝粒を多量に含む、しまり有
 2. 明茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、ワラ状木片多し、しまり無



▲ 土壌 2・4・P17



図 25 第 3 面土壌・ピット (2)

土壌3：E-6杭付近に位置し、遺構大半を攪乱土と土壌2・4によって掘削され、北端一部を残すだけである。確認された規模は南北軸2m以上、東西軸80cm以上、深さ45cm前後を計り、調査区南壁の土層観察から調査区外に延びており、当初は南北に長い溝状を呈した土壌であったと考えられる。覆土は下層に藁状繊維質や木片を多く含む締まりのない有機物腐蝕土を上下に分層される茶褐色粘質土で埋め戻した様子が見られた。図示できた出土遺物は、24～27の箸や筥などの木製品だけである。

土壌4：土壌3東隣の位置で近代の攪乱と土壌2により削平を受けて検出された。確認規模は南北径225cm、東西径123cm、深さ58cm前後と、大型で不整形を呈した底面の平らな掘り方を有している。覆土は下層に厚く堆積した有機物腐蝕土が、貝砂混じりの締まりのある茶褐色砂質土で覆っている。出土遺物が図28-1の薄板で盆などの底破片であろうか。

土壌6：調査区東壁際の中央の位置で調査区外に広がる土壌を検出した。確認した規模は南北軸98cm、東西軸40cm以上、深さ40cmを測り、掘り方の断面が浅い逆台形を呈する。覆土の主体は明茶褐色の有機物腐蝕土である。出土遺物は2が男瓦（丸瓦）で永福寺創建期瓦と同類のもの、3～6が箸や箱物などの木製品である。

土壌10：C-6杭に近接した位置で検出した不整形の土壌であり、網代壁の西側を壊して掘り込んでいる。規模は南北径162cm、東西径105cm、深さ30cm程の掘り方をもち、断面は浅い皿状を呈する。覆土は藁状繊維質を多量に含んだ有機物腐蝕土の単層であり、覆土中からは木材加工の削りカスのような木片だけが出土した。

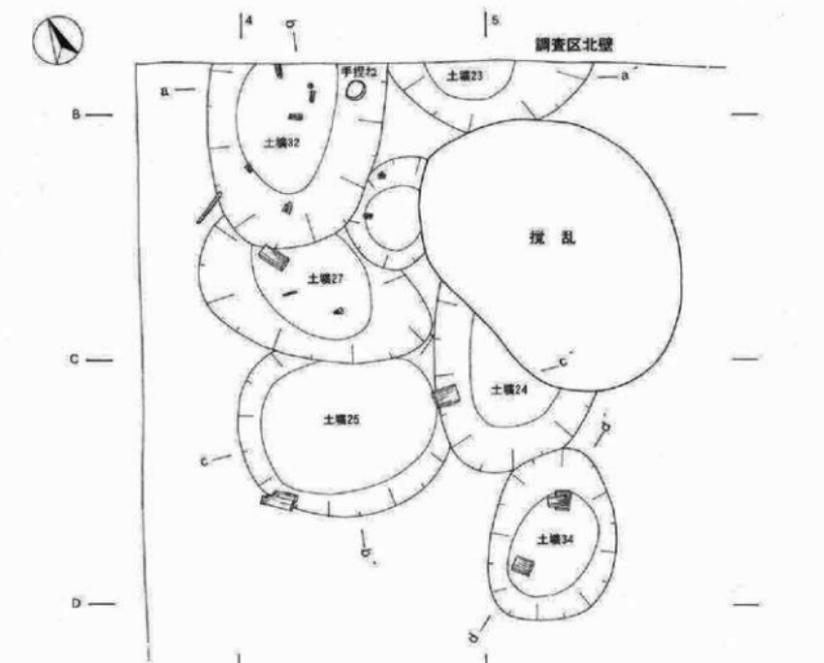
土壌14：土壌3・4の北側に位置し、両土壌やピットに大半を削平されていた。確認した規模は東西径73cm、南北軸50cm以上、深さ10cm程の浅い掘り方である。覆土は明茶褐色の有機物腐蝕土である。出土遺物は7・8が手握ね成形のかわらけ大皿で8の内面に煤が付着した大明皿、16が龍泉窯系の青磁劃花文碗である。

土壌19：D-6杭北側の位置でP6・7に大半を削平された状態で検出された。確認した規模は南北軸40cm以上、東西軸55cm以上、確認面からの深さ約30cmを測り、覆土の主体は明茶褐色の藁状繊維質や焼土・炭化物を多量に混入した有機物腐蝕土である。出土遺物は10が手握ね成形のかわらけ大皿、11が強いロクロ目痕を残した黒漆塗椀であり、高台内にはロクロ挽き製作時の爪痕を残している。

土壌22：調査区南壁西寄りの位置で検出した。北端は試掘堀の攪乱で削平を受け、南側は調査区外に延びている。確認した規模は南北・東西軸共に80cm以上、深さ25cm程と浅いものである。覆土は上層に炭化物・粗砂を多く含む薄茶褐色砂質土がみられ、下層は有機物腐蝕土が堆積している。出土遺物は図29-1～3がロクロ成形のかわらけ小皿、4が阿安窯系の青磁榑掻文皿で割口部分には漆痕の痕跡を残している。5が渥美製の口縁片、6が土器製の火鉢、7～21は木製品である。7は刀子鞘の片面で上端の鯉口部を半円形状に抉り加工を施す、8～17は長さ22～24.7cmの箸、18は円柱に加工した表面に刃物で目鼻を線彫し、鋸挽きされた口をもち、下面木口に穿孔を有しており木偶のようなものか。19～21は加工痕を残すが用途不明のものである。

土壌23：調査区北壁際の5ラインの位置において一部近代攪乱の削平を受けている。調査区北側に広がる土壌を検出したが、土壌32との新旧関係は把握できなかった。確認した規模は東西軸165cm、南北軸60cm以上、深さ38cmで掘り方断面は皿状を呈する。覆土は3層からなり、上・中層の主体が有機物腐蝕土で下層が土器片を含むやや締まりのある粘質土が堆積する。出土遺物は22・23の常滑壺・捏鉢I類である。

土壌24：C-5杭の位置で近代攪乱の削平を受けて検出したもので、土壌25を壊して掘り込んでいる。確認した規模は南北軸150cm以上、東西軸130cm以上、深さ55cmである。覆土は上層に炭化物・粗砂を



土壌23・32 土層注記

1. 暗茶褐色粘土質 粗砂、有機物少量含む
粘性・しまり共にやや有
有機物腐蝕土、粗砂をやや含む
2. 茶褐色粘土質 粘性有、しまり無
水片を少量含む、粗砂をやや含む
3. 灰褐色粘土質 粘性やや有、しまり有
有機物腐蝕土、炭化物粒、土丹粒を多く含む、粘性有、しまりやや無
4. 茶褐色粘土質 有機物腐蝕土、粘性有、しまりやや有
地山に似るが、土器片を少量含む
5. 黄褐色粘土質 粗砂少量含む、しまりも地山に比べやや弱い
6. 黄褐色粘土質

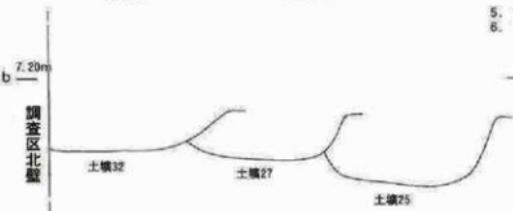
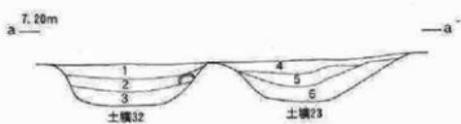


図26 第3面土壌

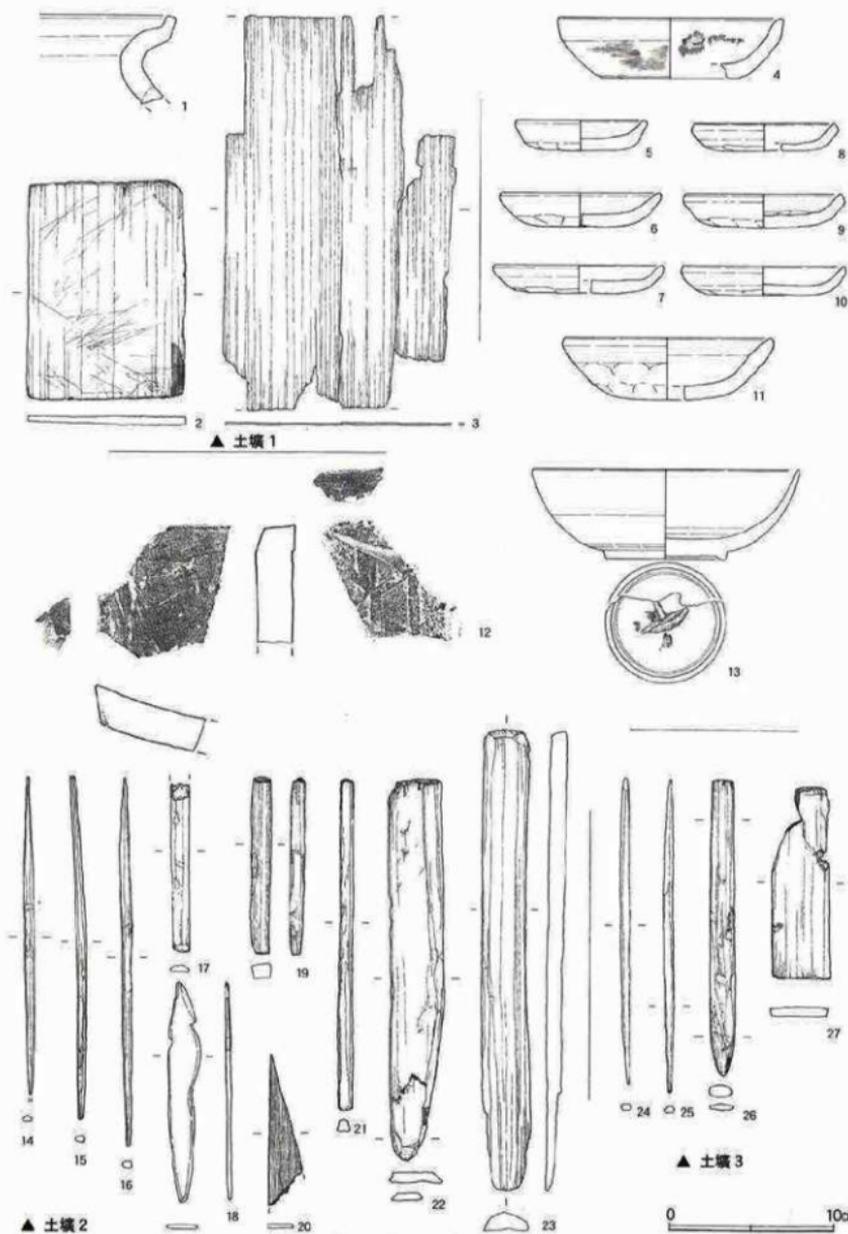


图 27 第 3 面各土坑出土遗物 (1)

多く含む茶褐色砂質土の薄い堆積がみられ、下層は多量の葉状繊維質の有機物腐蝕土となる。出土遺物は図30-1が手捏ね成形のかわらけ大小皿、3が龍泉窯系青磁劃花文碗、内面に手早い彫りで蓮華文を表す。4～16は木製品であり、4～12が両端尖り気味に加工した長さ21.0～25.3cmの箸、13が一回り太い菜箸、14が筥状工具、15・16が金剛草履の板芯にあたるものである。

土壌25：新旧関係は土壌27より古く、土壌24より新しい土壌である。確認した規模は南北軸140cm以上、確認した規模は南北軸170cm以上、東西軸150cm以上、深さ55cmの楕円形を呈する。覆土は3層からなり、上層に貝砂・土丹小塊を含む縮まりのある茶褐色砂質土の薄い堆積、中層が炭化物や有機物腐蝕土ブロックを混入した茶褐色粘質土層、下層が葉状繊維質や木片を含んだ有機物腐蝕土である。出土遺物は17・18がロクロ成形のかわらけ大小皿、19が手捏ね成形のかわらけ小皿、20が鉢形火鉢、21が硯と思われる加工途中品である。22～25は木製品で22が箸、23～25が用途不明品である。

土壌27：土壌25・27に重複した位置で検出され、新旧関係は前者より新しく、後者より古い土壌である。確認した規模は東西軸194cm、南北軸110cm以上、深さ35cm程の長楕円形を呈する。覆土は茶褐色粘

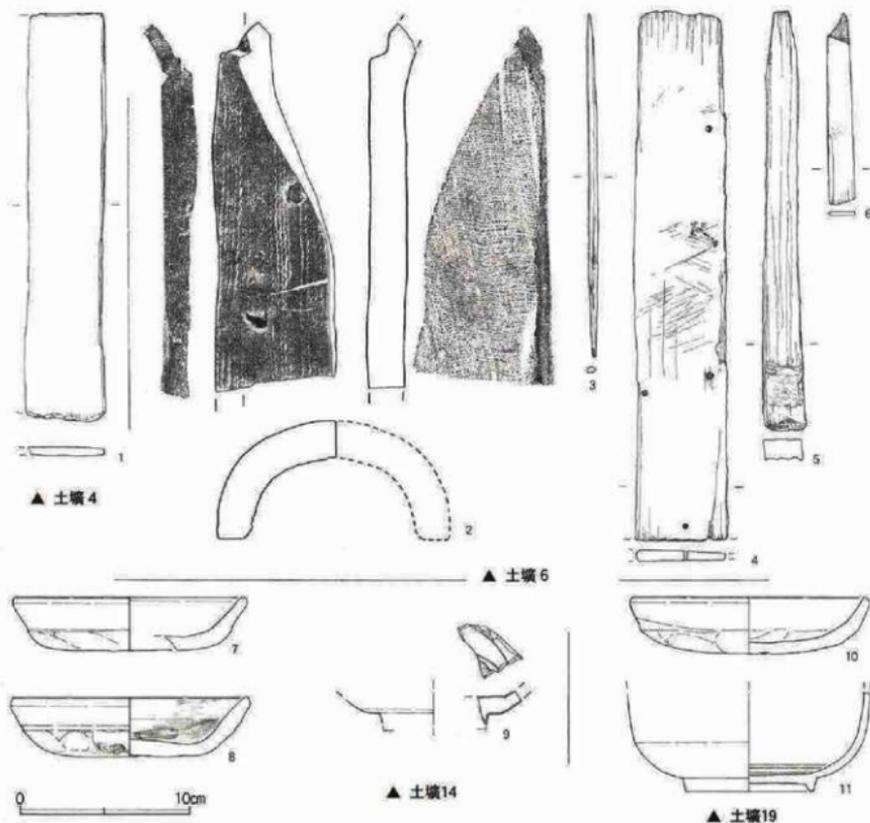
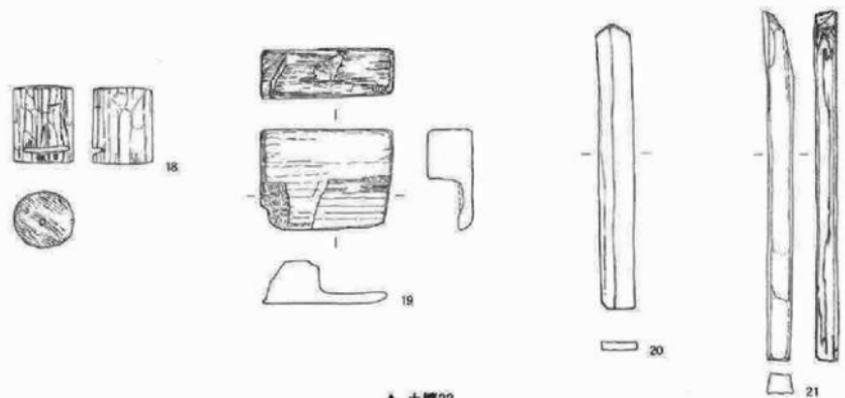
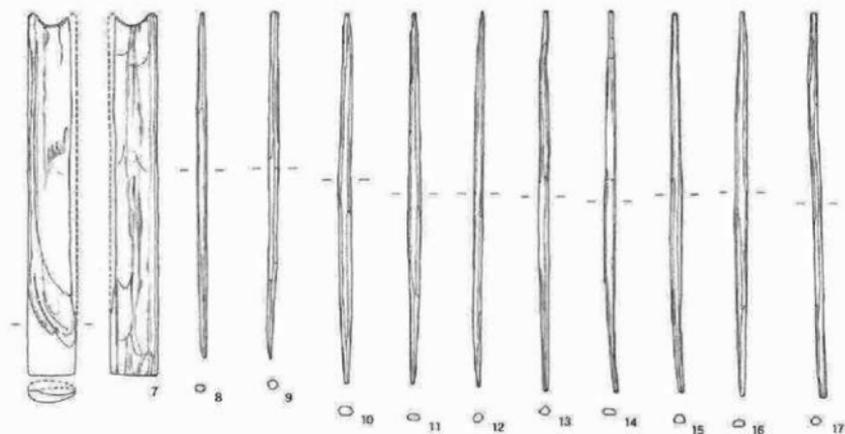


図28 第3面各土壌出土遺物(2)



▲ 土城22



▲ 土城23

0 10cm

图29 第3面各土城出土遺物(3)

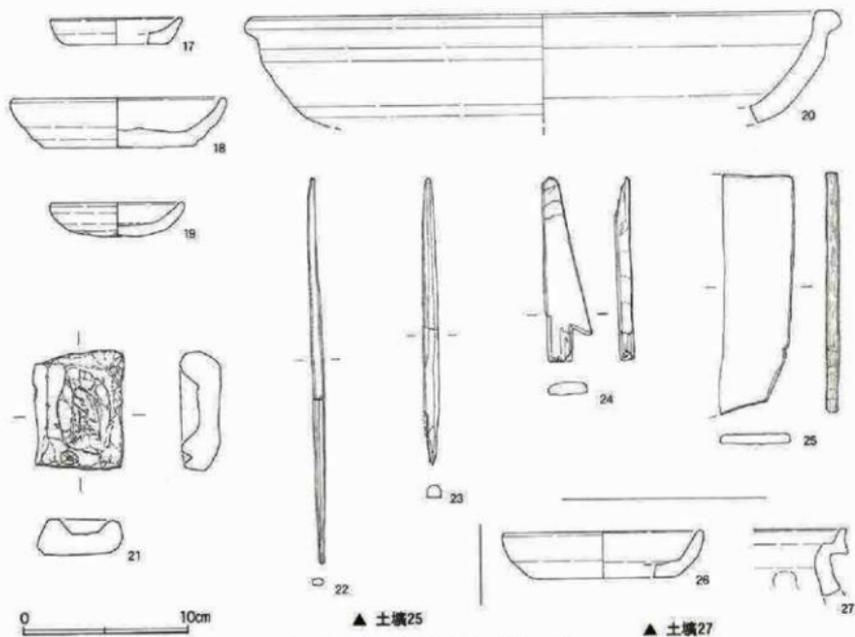
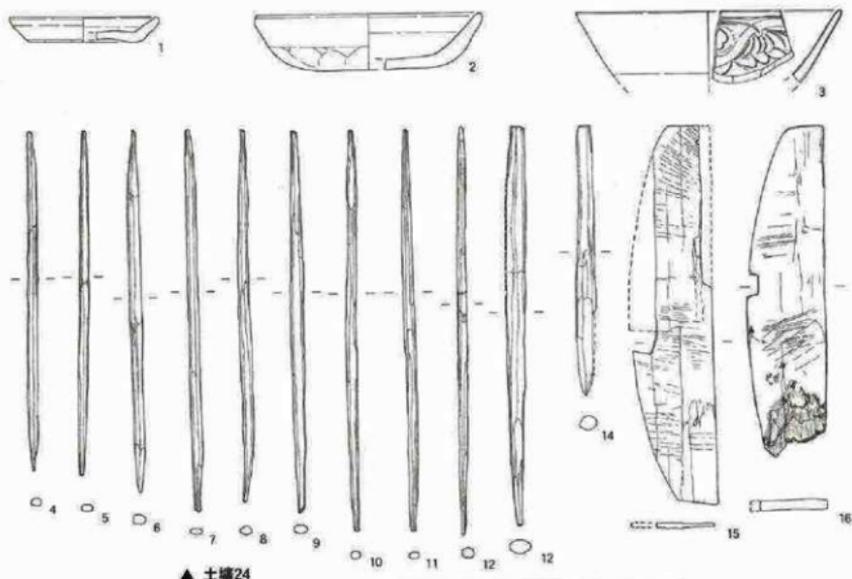


图 30 第 3 面各土坑出土遗物 (4)

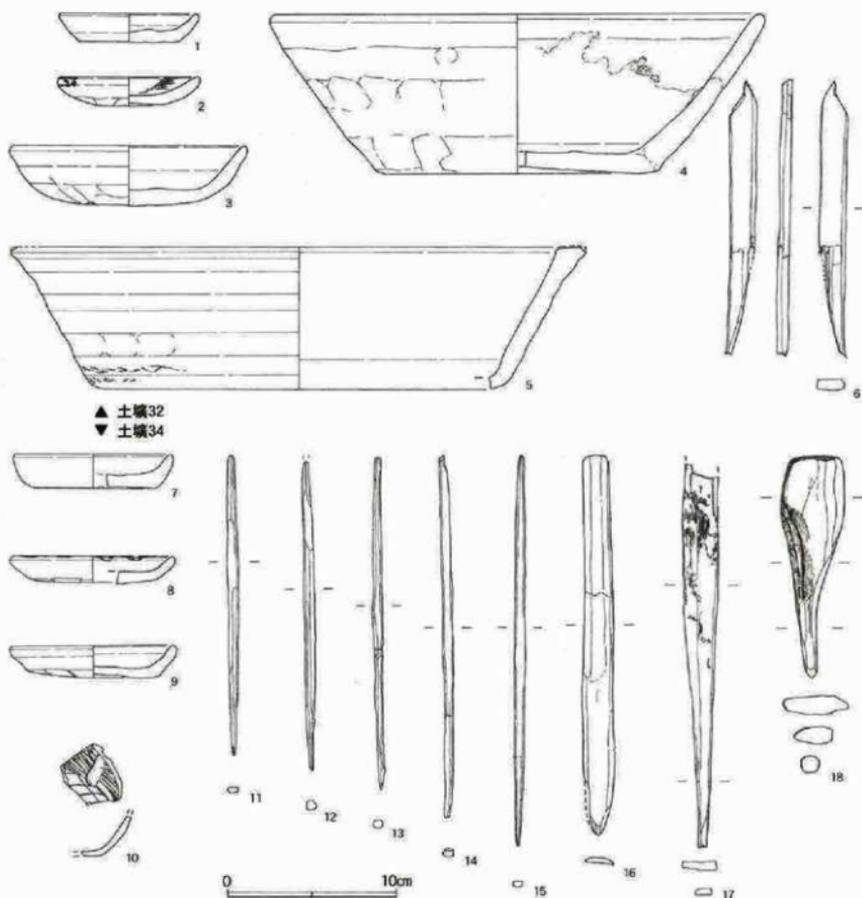


図31 第3面各土壙出土遺物(5)

質土で灰・炭化10や有機物腐蝕土ブロックを多く含む締まりのないもの。出土遺物は26がロクロ成形成かわらけ大皿、27が常滑甕の口縁部片である。

土壙32：土壙27と重複した位置で北側は調査区外に延びている。確認した規模は南北軸150cm以上、東西軸141cm、深さ35cm程でと掘り方断面が皿状を呈する。覆土は炭化物・貝砂を多く含む茶褐色粘質土と、有機物腐蝕土が交互に重なる堆積を示していた。出土遺物は図31-1がロクロ成形成かわらけ小皿、2・3が手捏ね成形成かわらけ大・小皿、4が常滑捏鉢I類と考えられる。5が鉢形火鉢、6は用途不明品としたが、形状は片端を鋭利に削り出し、上端加工の様子からみて人または鳥のような形代類になる可能性もある。

土壙34：土壙24に接した位置で検出されたが、新旧関係を把握することはできなかった。規模は南北

軸140cm、東西軸100cm、深さ18cm、楕円形の掘り方の浅いもの。覆土は藁状繊維や木片を多く含む有機物腐蝕土の単層である。出土遺物は7がロクロ成形かわらけ小皿、8・9が手捏ね成形のかわらけ小皿である。10は京都楠葉系の瓦器碗で内面に暗文を残す。11~18は箸・筥・用途不明の木製品である。

b. 柱穴 (図24・25・32、図版8・16)

この面で柱穴・ビット62口を検出したが建物跡を構成するような配置は認められなかった。各柱穴掘り方の概要は、平面形状が円形もしくは楕円形を呈し、規模が径30~70cm、深さ20~60cmほどであり、底面には大小様々な礎板が柱受けとして掘えられたものがある。以下、図32に示したように各柱穴・ビットの出土遺物について簡単に述べることにする。

P3-1が常滑甕の口縁部片と2が龍泉窯系青磁劃花文碗、P6-3が常滑甕の底部小片と4が漆器碗、P7-5・6が常滑窯捏鉢 類、P11-7~9がロクロ・手捏ね成形のかわらけ小皿、P12-10が常滑窯捏鉢Ⅰ類と用途不明の棒状の木製品、P15-12・13が褥袖壺、P17-14がロクロ成形かわらけ小皿、P20-15ロクロ成形のかわらけ大皿、P23-16が刀子鞘、P28-17が手捏ね成形のかわらけ小皿と18が折敷の残欠と思われるもの。

c. 網代壁・杭列 (図23、図版7)

網代壁：調査区北東域のC-6・7グリット間において、Cライン南隣で東西位120cm程の範囲で検

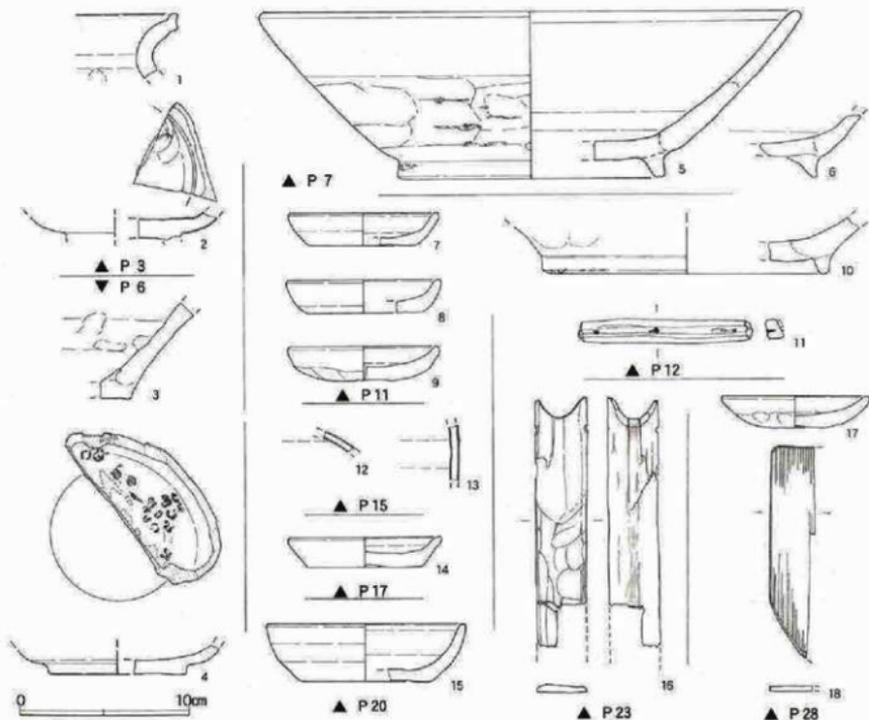


図32 第3面各ビット出土遺物

出された。当初、網代壁の構造をもつ建物や塀などの遺構を想定して周辺域の面上精査を実施したが、この範囲以外に掘り方や板壁の痕跡を確認することはできなかった。網代壁は幅20cm、深さ15cm程の溝状掘り方の北壁面に幅9～12cm、厚さ1.5cm前後の板材を2枚重ねて網代に組み合わせ板壁にしており、掘り方底面から高さ20cm程まで板材が遺存していたが、上部は火災にあったのか焼け焦げていた。また掘り方内の網代壁下部には幅9cm以上でかなり腐蝕した横方向の止め板材が観察されている。ところで本調査地点の北方、若宮大路西側に位置した「北条時房・顕時邸跡」（鶴岡旅館用地）の発掘調査では、二間四方（南北390cm×東西360cm）の網代板壁をもつ建物跡が検出されている（註）。

杭列：調査区南西域で遺構密度の低いDライン南隣においてある程度まとまった杭群を検出した。杭群をみると、Dラインに沿って東側と西端に板材が遺存しており、この板材は内外を細杭で止められていた。さらに両者の直線上付近にも杭列が存在することから一連の遺構として捉えたい。

註 原廣志・福田誠・佐藤泉「北条時房・顕時邸跡－雪ノ下一丁目273番口地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4 昭和62年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会 1988

d. 第2面下～第3面上出土遺物（図33、図版16-b）

ここでは、第2面の構築土および第3面上包含層や遺構確認に伴う精査作業において出土した資料で遺構外の一括した。

図33-1・2は手捏ね成形のかわらけ小皿、3～5が泉州窯系の黄軸鉄絵盤であるが、3・4の内面

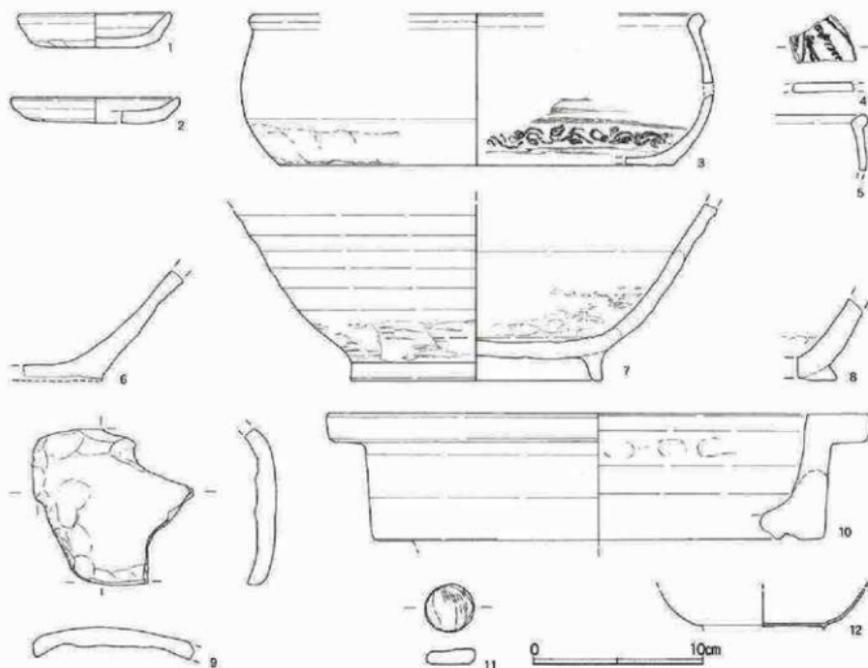


図33 第2面下～第3面上出土遺物

には鉄絵で宝相華唐草文を描いている。6～9は常滑窯製品であり、6が甕底部片、7・8が捏鉢Ⅰ類、9が甕破片で割口の三面に研磨した痕跡が見られる。10は火鉢で口縁部が縁帯状、外方へ四角形に張り出す形を呈したⅡF類に相当するもの（河野眞知郎『中世鎌倉火鉢考』『考古論叢 神奈河』第2集 1993）。11はかわらけ質の円盤でかわらけ底部片を円形に加工している。12は黒漆塗の漆器碗である。

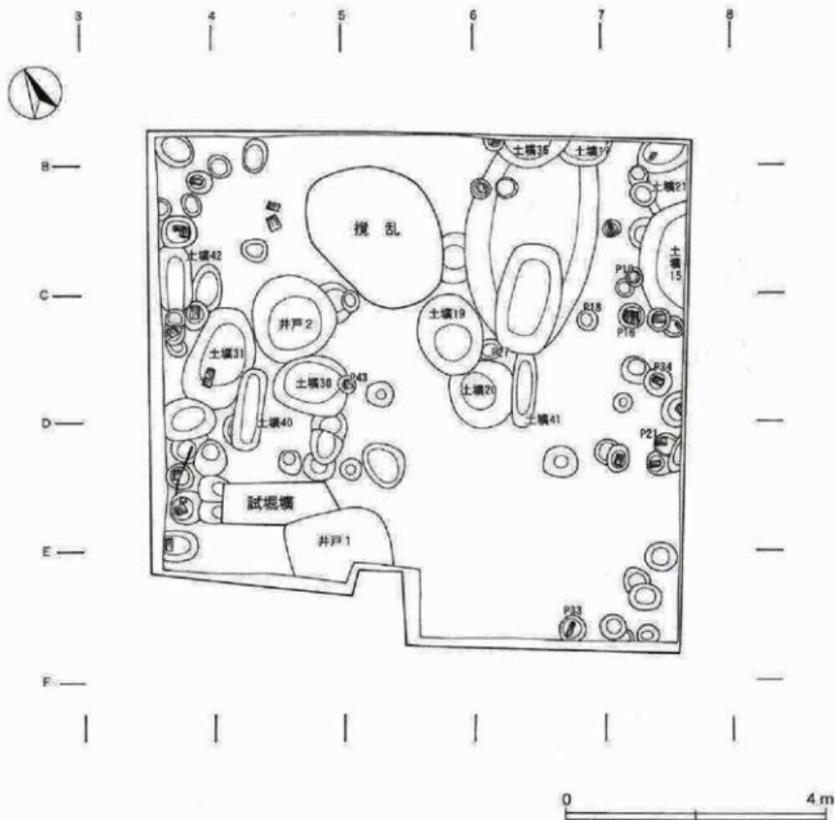


図 34 第 4 面全測図

4. 第4面の遺構・遺物

第4面は、海拔標高6.75m前後で検出した中世地山で強く締まった暗茶褐色粘質であり、遺構検出はこの面上に堆積して調査区全域に拡がりをもせていた有機物腐蝕土を除去して実施された。遺構覆土の多くは第3面遺構覆土と同じように藁状繊維質を多く含んだ有機物腐蝕土が中心である。調査区内で検出された遺構は主に繰り返し掘り直された新旧関係をもつ土壇や柱穴・ビットで、この他に井戸などが確認された。出土遺物には多量のかわらけ・木製品をはじめ、舶載陶磁器、瀬戸窯・常滑窯・渥美窯製品、瓦、金属製品、石製品、漆・木製品などである。

a. 土壇 (図34~38、図版17・18)

土壇15：調査区北東隅に近い位置で検出され、土壇21を壊して掘り込んだ土壇である。調査区外に拡がる大型の土壇で、確認できた規模は南北軸203cm、東西軸75cm以上、確認面からの深さ50cm程である。掘り方の断面は逆台形状と推測され、覆土は2層からなり、上層が厚さ約10cmの炭化物の多い茶褐色粘質土の有機物腐蝕土、下層が純粋な藁状繊維質を多量に含んだ有機物腐蝕土だけが認められた。出土遺物は、図37-1が常滑窯甕小片であるが、この他に図示しなかったがロクロ成形と手捏ね成形のかわらけ小片がみられた。

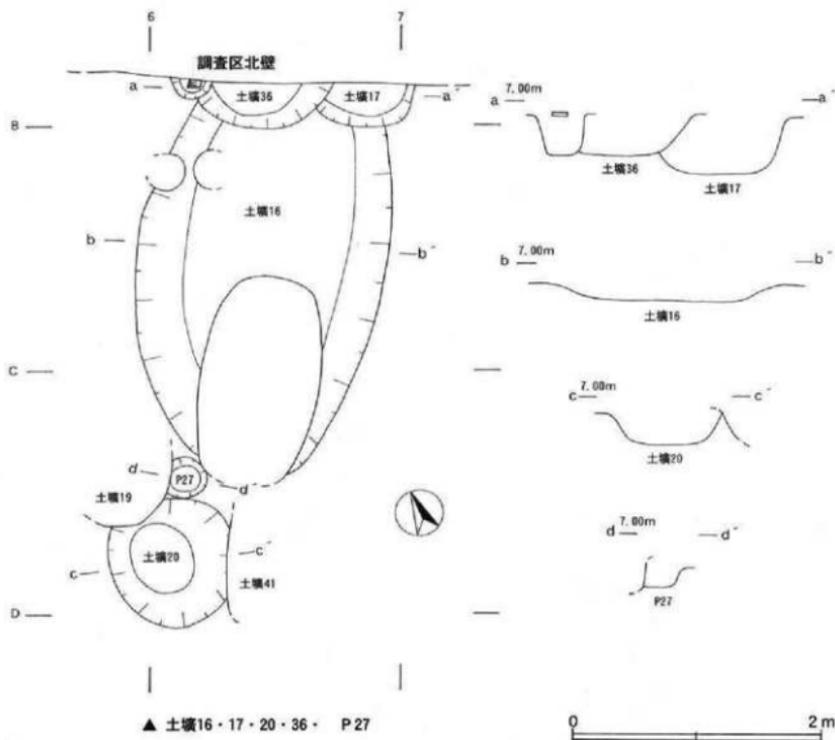


図35 第4面土壇・ビット

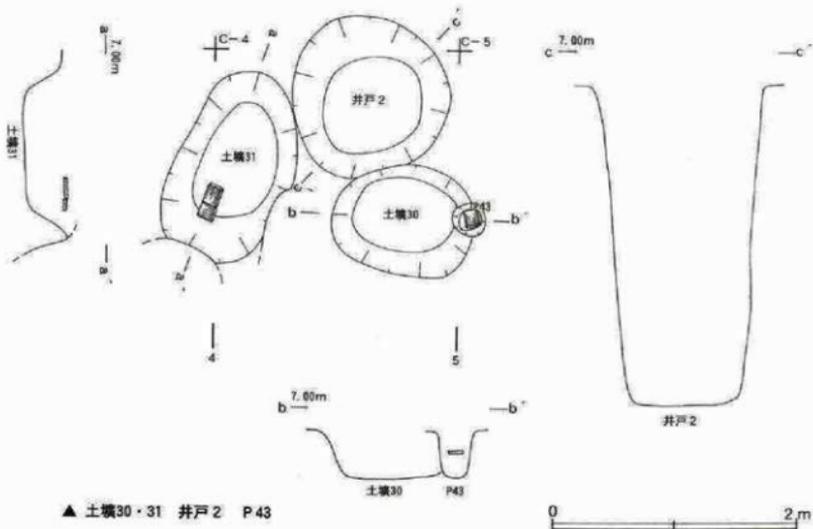
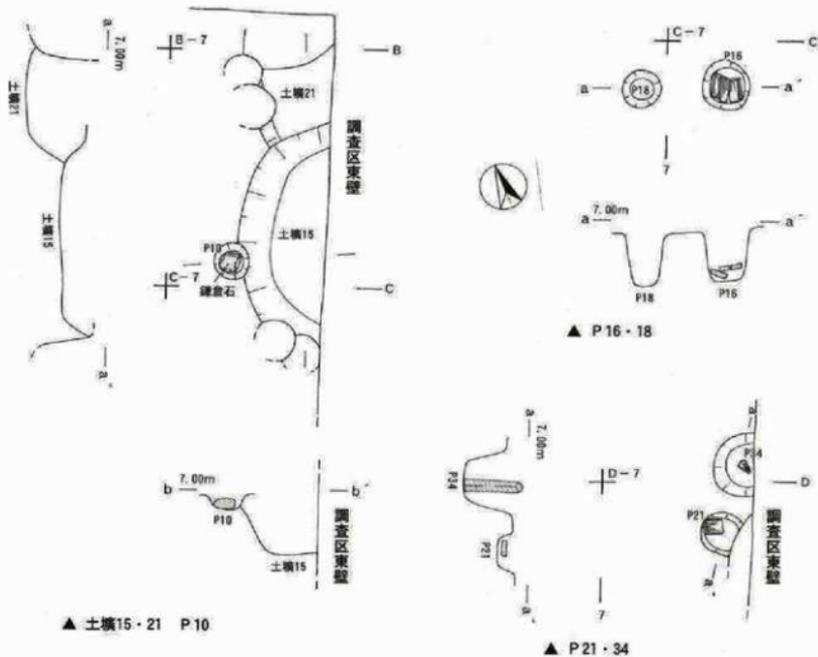


図36 第4面土坑・井戸・ピット

土壌16：調査区北東域の位置で検出され、土壌17・36・38の掘削により一部が壊された大型土壌である。確認した規模は南北軸320cm以上、東西軸203cm、深さ10cmの浅い皿状の掘り方をもつ。平面形状は楕円形を呈し、覆土は締まりのない藁状繊維質と木製品を多く混入した有機物腐蝕土である。出土遺物は、2～5が手捏ね成形のかわらけ大・小皿である。6～21は木製品で6・7が両端を尖り気味に多面加工した箸、8・9が菜箸、10～13が筥状の工具類と思われるもの、14が金剛草履の板芯、15が扇子、16が先端が焼け焦げているので火付け木、17が折敷の再加工品、18～20が盆のようなものの底板が、21が木釘穴があり箱物のようなもののか。

土壌17：調査区北東域の位置で北壁外に延びる土壌を検出したが、新旧関係を観察すると、土壌36より古く、土壌17より新しい。確認できた規模は東西軸110cm、南北軸40cm以上、深さ50cm程、覆土は締まりのない藁状繊維質と木片を多く混入した有機物腐蝕土である。出土遺物は、22が手捏ね成形のかわらけ小皿である。23は泉州窯系黄釉盤、24は木製品の筥状工具である。

土壌19：土壌20に北接した位置で同土壌の北端一部を壊して検出された。規模は南北径125cm、東西径98cm、深さ25cm前後を計り、楕円形を呈した掘り方である。覆土は炭化物と有機物腐蝕土ブロックを多く混入した暗茶褐色粘質土である。図示できた出土遺物は、25の黒漆塗椀だけである。

土壌20：土壌19・41により削平を受けて検出された。確認規模は南北径110cm、東西径104cm程、深さ25cm前後、平面形状はほぼ円形を呈し、底面の平らな掘り方を有している。覆土は2層からなり、下層が厚く堆積した有機物腐蝕土、上層は中世地山ブロック混じりの締まりのある茶褐色粘質土で覆れている。出土遺物は26が手捏ね成形のかわらけ大皿、27が内面に猫手掻き文様のある同安溪系青磁桶挿文皿、28が火打石である。

土壌21：調査区北東隅の壁際の位置で調査区外に拡がる土壌を検出した。確認した規模は南北・東西軸共に80cm以上、深さ55cmを測り、掘り方の断面が逆台形を呈する。覆土の主体は明茶褐色の藁状繊維質の多い有機物腐蝕土である。出土遺物は29がロクロ成形かわらけ小皿、30が箸の木製品である。

土壌30：D-5杭に北隣に位置で検出した不整形の土壌である。井戸2より古くP43よりも新しい重複関係が観察されている。規模は東西径116cm、南北径92cm、深さ45cm程で不整形の掘り方をもち、断面は摺鉢形を呈する。覆土は藁状繊維質を多量に含んだ有機物腐蝕土の単層であり、覆土中からは木材加工の削りカスのような木片が多量に認められた。図示できた出土遺物は、31の煤が付着したロクロ成形かわらけ大皿だけである。

土壌31：調査区西壁際の中央寄りに位置で検出され、土壌41に一部削平を受けていた。確認した規模は東西径163cm、南北径97cm、深さ35cm程の浅い掘り方である。覆土は明茶褐色の有機物腐蝕土である。出土遺物は32の湿美窯捏鉢である。

土壌36：B-6杭北東側の位置で土壌16・17を壊した状態で検出され、遺構の大半は調査区外に延びている。確認した規模は東西軸85cm以上、南北軸50cm以上、確認面からの深さ約35cm程を測る。覆土の主体は藁状繊維質・焼土・炭化物を多量に混入した有機物腐蝕土である。出土遺物は33の金剛草履板芯の破片と思われるものだけである

土壌40：D-4杭北側の位置で土壌31を壊して掘り込まれた土壌である。規模は南北径128cm、東西径50cmで南北位の長楕円形を呈し、確認面からの深さ約45cm程である。覆土の主体は藁状繊維質だけを多量に混入した有機物腐蝕土である。図示できる遺物は出土していない。

土壌41：D-6杭東側の位置で土壌20より新しい土壌を検出した。規模は南北径115cm、東西径37cm、深さ50cm程である。土壌40と同様に長軸が南北位の掘り方をもち、覆土が木片や藁状繊維を多く含む有機物腐蝕土の単層であるが、図示可能な遺物は出土していない。

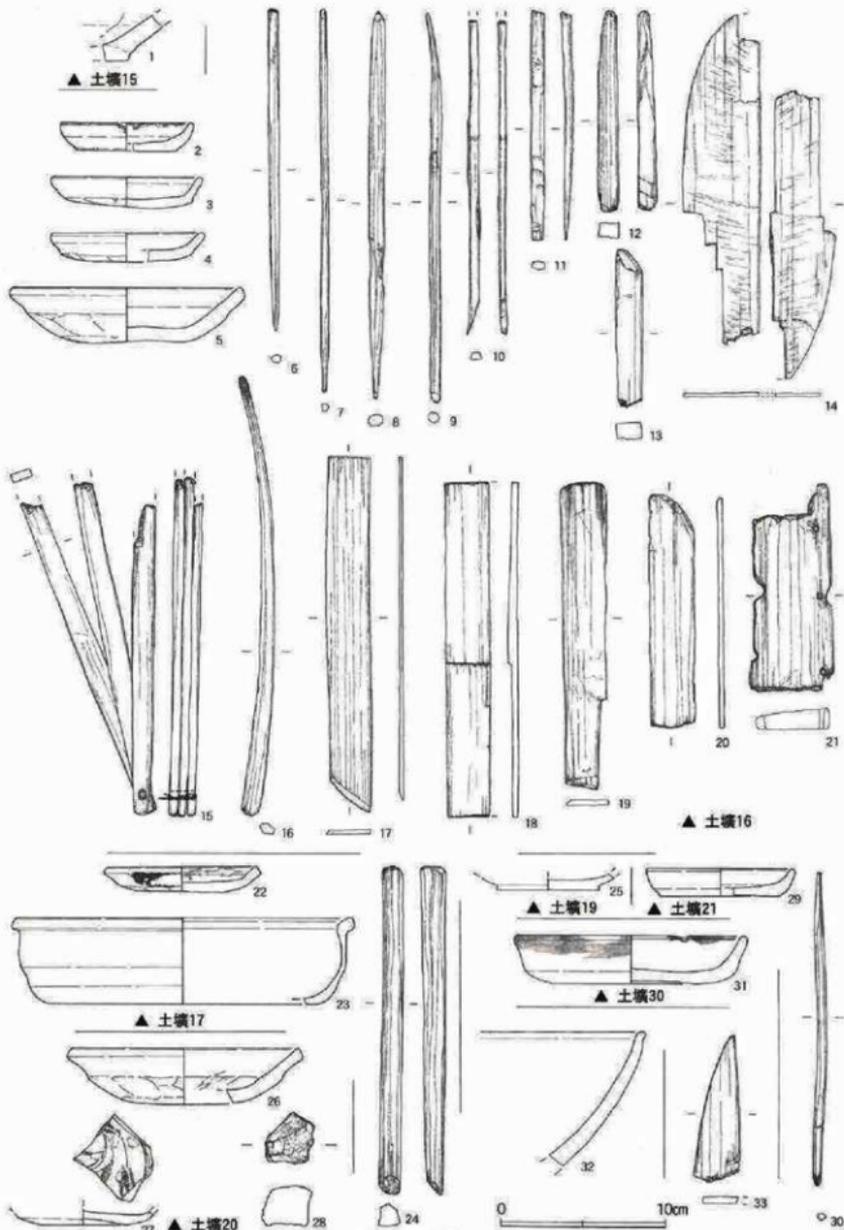


图 37 第 4 面土坑出土遗物

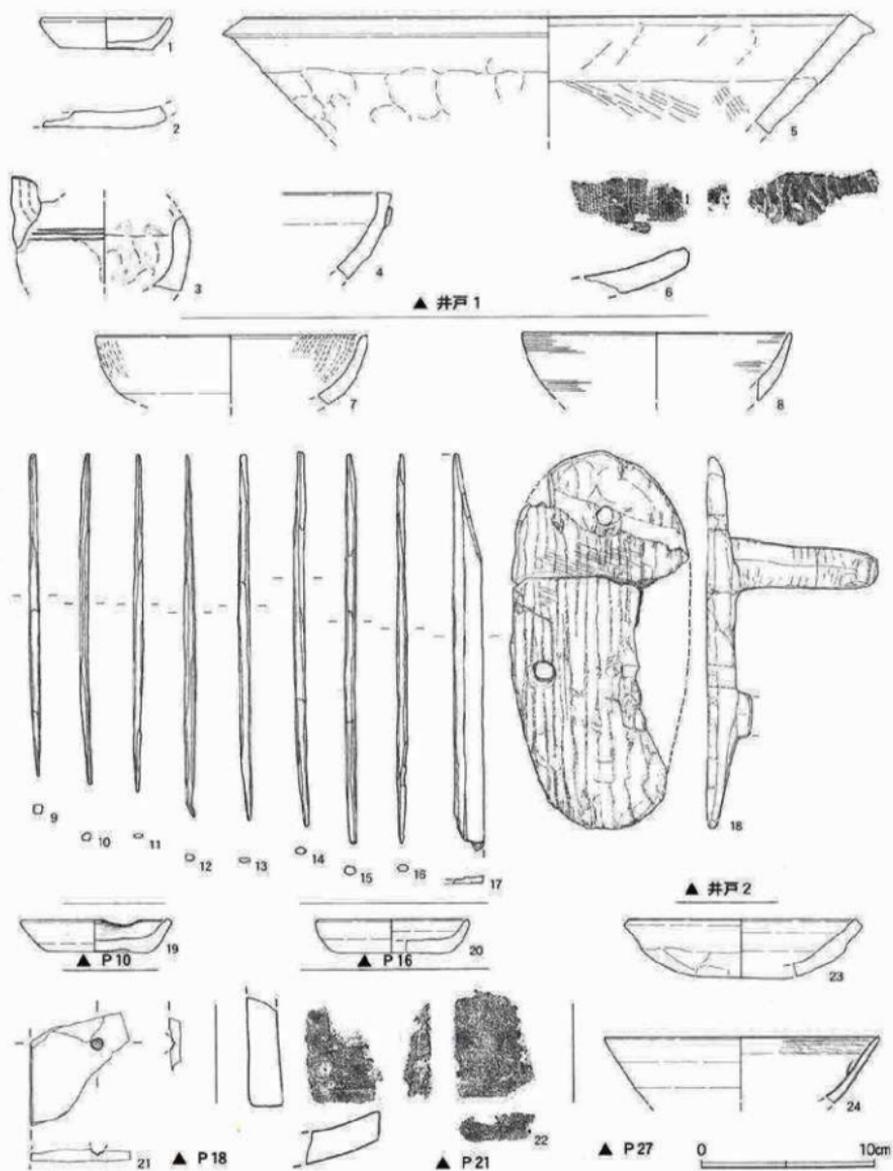


図 38 第4面土壇・井戸・ピット出土遺物（1）

土坑42：調査区西壁際北寄りの位置で検出された。規模は南北径110cm以上、東西径50cm、深さ40cm程の南北位の長楕円形を呈した掘り方である。覆土は明茶褐色の糞状繊維の多い有機物腐蝕土、材加工の削りカスのような木片以外の遺物はみられない。

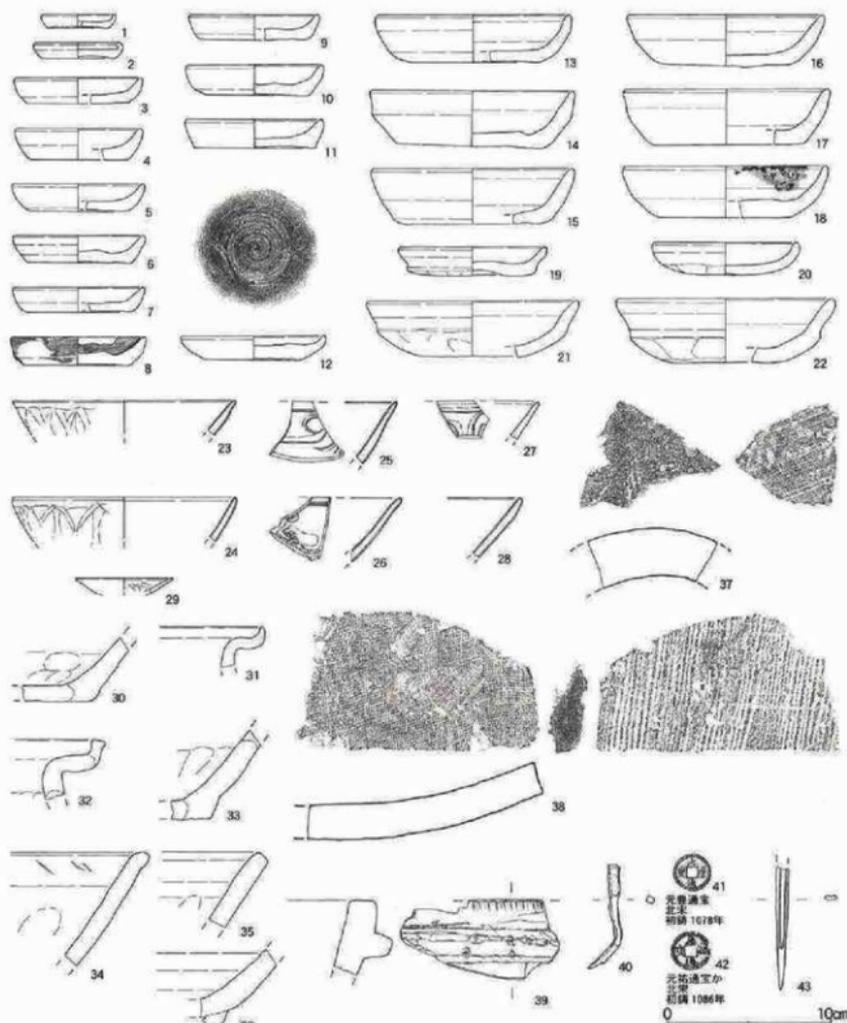


図39 第3面下～第4面上出土遺物(1)

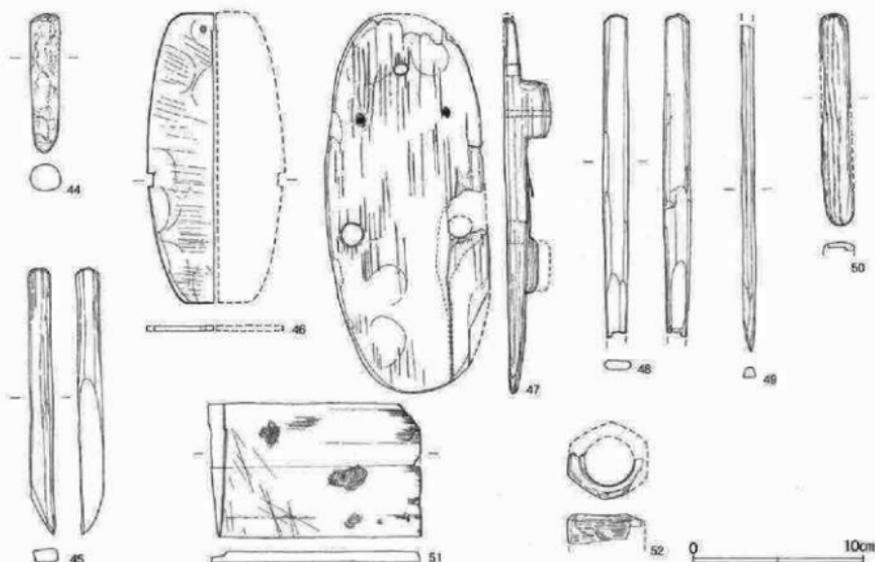


図40 第3面下～第4面上出土遺物(2)

b. 井戸 (図34・36・38、図版9・17)

井戸1：E-5杭の位置で検出した井戸であり、南側は調査区に拭がっている。この井戸は調査区壁際に位置して覆土は締まりのない土で埋め戻されており、降雨や湧水で地盤が緩み調査中に何度か崩落を繰り返した。そのために掘り下げは危険を伴うと判断して、深さ50cm程まで掘り方を確認しただけで中止することにした。本井戸は上部の大半が近代攪乱と試掘壕により削平を受け確認できたのがこの面であった。従って、出土遺物の年代観を含めて後代の遺構であり、少なくとも第3面以降の開削時期の可能性が高いことをお断りしておきたい。出土遺物は図38-1がロクロ成形のかわらけ小皿、2～4が瀬戸窯の折縁鉢・水注・洗、5が常滑窯の握鉢Ⅱ類、6が女瓦で凸面に斜格子叩き目、凹面に布目痕がある。鶴岡八幡宮境内出土瓦の最も古手となる女瓦ⅡB類と同類資料である(註1)。

井戸2：C-5杭西隣で検出した素掘り井戸、海拔標高は上端6.7m、下端底面4.05m前後になり、縄文期海岸線の海進海退時に堆積した砂層まで掘り抜き、豊富な湧水量が確認された。掘り方平面形はほぼ円形、規模は上幅径130cm前後、下幅85cm前後、確認面からの深さ270cmを測り、ほぼ平坦な底面から切り立った壁面に掘っている。覆土は上層に炭化物・粗砂を多く含む厚さ1m程の茶褐色砂質土がみられ、下層は木片の多い有機物腐蝕土と暗茶褐色粘質土ブロックから構成される締まりのない堆積が認められた。出土遺物は7・8が大きな口径で厚手の木地による黒漆塗碗、9～18が木製品の箸・刀形・連筒式の下駄である。また井戸中からは、ほぼ1頭分に相当する犬骨が出土している(図版18a)。

c. 柱穴 (図35・36・38、図版9・17)

この面でも掘立柱建物跡を構成するような柱穴配置を認めることはできなかった。各柱穴・ビットの

概要は、円形または楕円形の掘り方を呈し、径30～60cm、深さ15～50cm程、底面には大小礎板が1～3枚据えられものもある。

図38下段が柱穴に伴う出土遺物で、P10-19がロクロ成形かわらけの灯明皿、P16-20がロクロ成形かわらけ小皿、P18-21が石硯、P21-22が女瓦、P27-23・24は手捏ねかわらけ大皿と龍泉窯系劃花文碗である。

d. 第3面下～第4面上出土遺物(図39・40、図版18)

ここに図示した遺構外とした遺物は、中世地山にあたる第4面上層に堆積していた有機物腐蝕土から出土した資料が大半を占めている。以下、出土遺物の概略について述べる。

図39-1～22はかわらけである。1・2が手捏ねとロクロ成形の内折れかわらけ、3～18がロクロ成形の大・小皿である。小皿は口径7.8～8.8cm、底径6.0～7.4cm、器高1.6～2.0cmを計り、主に低い器高で口径と底径比の差が少ない資料、12は強めのロクロ痕を残し、内底面が未調整の特徴的なものである。大皿は口径12.0～12.8cm、底径7.8～9.0cm、器高3.0～3.5cmを計り、厚手の器壁をもち、口径と底径比の差が小さめの資料が中心を占めていた。8・18のかわらけには煤が付着しており、灯明皿と思われる。

23～28は龍泉窯系青磁である。23・24が鎮蓮弁文碗、25～27が劃花文碗、28が無文碗である。29は青白磁の印花文小皿、30～36は常滑窯製品で30が壺、31～33が甕、34～36が捏鉢 類である。37・38は男・女瓦で鶴岡八幡宮境内出土瓦の最も古手になる男瓦 A類と女瓦 B類と同類資料である(註2)。39は滑石製鍋の口縁部片、40が長さ2寸五分の鉄釘、41・42が北宋銭の「元豊通宝」・「元祐通宝」、43が骨製筭、44～52は木製品である。44が木栓、45・48・49が筒状工具、46が金剛草履板芯、47が連歯式下駄、50が内側の挟り加工から刀子鞘か、51が箱物や曲物などの底板を再加工したものが、52は用途不明品である。しかし想像を逞しくすれば、絵巻物に描かれている銚子や長柄の銚子などの注口部の可能性も考えられる(註3)。

註1 松尾宣方・玉林美男ほか「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(鎌倉国宝館修葺庫建設に伴う緊急調査)」鎌倉市教育委員会 1985

註2 註1文献と同じ

註3 「一遍上人絵伝」や「墓輔絵詞」などの絵巻物には、酒杯や酒壺など共に漆塗製と思われる長柄の銚子が描かれている。本資料は漆塗製品ではないが、その注口部分の破片と考えられないであろうか。

《参考文献》

- 秋山哲雄 「都市鎌倉の形成と北条氏」五味文彦・馬酒和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高書院 2004年
- 河野眞知郎 「中世鎌倉動物誌」『歴史と民俗』3号 平凡社 1988年
- 河野眞知郎 『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社 1995年
- 黒田日出男 『姿としぐさの中世史』平凡社 1986年
- 斎藤 研一 「中世絵画に見る宴-野外での酒宴を中心に-」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『宴の中世 場・かわらけ・権力』高志書院 2008年
- 谷口研語 「犬の日本史 人間とともに歩んだ一万年の物語」PHP新書 2000年
- 茂原信生 「日本犬に見られる時代的形態変化」『国立歴史民族博物館研究紀要』第29集 1991年

表1 遺物観察表(1) ()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.軸差 e.焼成 f.備考
7-1	第1面 土壌1	常滑 広口壺	(20.0)	/	/	b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.暗赤褐色
7-2	*	常滑 甕	口縁部小片			b.褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.褐色
7-3	*	常滑 控鉢Ⅰ類	口縁部小片			b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c.灰色
7-4	*	常滑 控鉢Ⅱ類	口縁部小片			b.暗灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c.暗褐色
7-5	*	滑石製 鉢	底部小片			c.赤味灰色
7-6	第1面 土壌3	常滑 甕	底部小片			b.褐色～橙色 砂粒
7-7	第1面 土壌5	龍泉窯系 青磁刺花文陶	体部小片			b.灰色 黒色粒 精良堅緻 c.緑黄色半透明 f.内面磁刺花
7-8	第1面 土壌7	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.3	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c.黄褐色
7-9	*	かわらけ	(7.5)	(5.1)	2.1	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c.黄灰色
7-10	*	かわらけ	(11.5)	(8.0)	2.7	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色
7-11	*	かわらけ	(12.0)	(8.9)	3.1	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c.黄褐色
7-12	*	龍泉窯系 青磁刺花文陶	体部小片			b.灰色 黒色粒 精良堅緻 c.灰緑色透明 内外面厚く施釉 貫入有り f.内面磁刺花文
7-13	*	女瓦(平瓦)	残存長7.8 残存幅6.0 厚1.7			a.凹・凸面縦位ナデ 側面へラ削り b.黄黄褐色 砂粒 小石粒 良土 c.明黄褐色 e.良好
7-14	第1面 土壌8	かわらけ	(12.2)	(7.8)	3.0	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色
7-15	*	常滑 控鉢Ⅰ類	口縁部小片			b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 多量 c.灰色
7-16	第1面 土壌9	かわらけ	(10.4)	(6.4)	3.0	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c.黄褐色
7-17	*	鉄製品 釘	残存長4.9 幅0.5 厚0.5			
7-18	第1面 土壌10	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.0	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
7-19	*	瀬戸 入子	/	4.0	/	a.外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 小石粒 良土 c.灰黄色 e.良好 硬質
7-20	*	瀬戸 水注	胴部径(15.0)			b.灰白色 砂粒 精良土 c.灰輪灰緑色半透明 外面厚めに施釉 e.良好 やや硬質 f.把手貼り付け
7-21	*	常滑 控鉢Ⅰ類	口縁部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 多量 c.灰白色
7-22	*	常滑 控鉢Ⅰ類	(28.0)	/	/	b.灰色 黒色粒 小石粒 やや多量 c.灰色 黄灰部多量 灰色～灰白色
7-23	*	亀山 甕	胴部小片			b.灰白色 雲母 小石粒 やや粗土 c.外面灰白色 内面灰白色 e.良好 f.再火の為内面一部灰褐色 外面平行状明き目
7-24	*	瓦質 火鉢	/	(19.5)	/	a.外底砂目痕 b.灰色～灰赤色 砂粒 白色粒 小石粒 粗土 c.灰色 e.良好 軟質 f.貼付高台
7-25	*	唐書文字瓦 (軒平瓦)	瓦当部幅4.5 内区幅3.0 残存幅9.0 残存頸部幅2.2			a.瓦当部:内区離れ砂 女瓦部:凹面離れ砂 縦位指ナデ 凸面瓦当部接縁部分横位指ナデ 縦位指ナデ 離れ砂 側面へラ削り b.明灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 粗土 c.灰褐色 e.良好 軟質 f.瓦当部唐草文
8-1	第1面 P2	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
8-2	*	かわらけ	(12.0)	(8.0)	3.0	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 f.磨明肌
8-3	*	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.3	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
8-4	*	常滑 控鉢Ⅱ類	底部小片			a.外底砂目痕 b.明黄褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c.黄褐色 f.内面著しく磨減
8-5	第1面 P5	かわらけ	7.2	4.2	2.0	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 f.磨明肌
8-6	*	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.9	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
8-7	*	常滑 控鉢Ⅰ類	口縁部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 少量 c.灰白色
8-8	第1面 P10	かわらけ	(12.0)	(8.0)	3.6	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄褐色
8-9	*	瓦部 筒	口縁部小片			b.灰白色 砂粒 精良土 c.灰褐色 e.良好 f.内面～外面口縁部にかけ横位唐文
8-10	第1面 P16	鉄製品 釘	残存長8.8 幅0.8 厚0.9			
8-11	第1面 P18	黄釉 盤	(22.5)	(16.4)	4.8	b.灰色 砂粒 黒色粒 褐色粒 やや粗土 d.明灰褐色不透明 全体白濁 f.内底面黄褐色の鉄軸で文様(不明) 再火の為割離
8-12	第1面 P21	鉄製品 釘	残存長5.7 幅0.5 厚0.3			
8-13	第1面 P23	かわらけ	(7.5)	(5.1)	1.7	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄褐色
8-14	*	かわらけ	(8.0)	(7.0)	1.8	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
8-15	第1面 P23	かわらけ	(8.0)	(8.0)	1.8	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄褐色
8-16	*	かわらけ	12.2	8.0	3.5	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
8-17	*	緑釉 盤	底部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗土 d.緑色不透明 緑黄色～赤褐色 外底面磨減 c.良好 硬質
8-18	第1面 P25	かわらけ	7.5	4.9	1.8	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c.褐色
8-19	第1面 P26	瀬戸 おろし皿	底部小片			a.へらによるおろし目 外底糸切痕 b.灰白色 砂粒 良土 d.灰輪 灰緑色半透明 内外面厚く施釉 外底面～体部磨減
8-20	*	鉄製品 釘	残存長4.4 幅0.3 厚0.4			
8-21	第1面 P27	かわらけ	6.0	4.4	1.3	a.口ク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c.黄褐色
8-22	*	鉄製品 釘	残存長4.5 幅0.3 厚0.3			

表2 遺物観察表(2) ()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.輪華 e.焼成 f.備考
9-1	表土層	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.55	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.明黄褐色
9-2	#	かわらけ	(11.6)	(8.4)	3.1	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
9-3	#	阿久留系 青磁焼地文皿	/	(4.4)	/	b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.明緑灰色透明 貫入有り 外底部磨胎 f.内面 磨胎文
9-4	#	黒馬輪 甕	/	(10.4)	/	b.灰白色 砂粒 良土 d.黒褐色不透明 外厚面輪施胎 内面磨胎 a.良好
9-5	#	常滑 控鉢Ⅱ類	/	(13.4)	/	b.黄褐色 砂粒 白色粒 少量 c.黄褐色 e.良好 f.内面磨減痕
9-6	#	土器質 火鉢	口径部小片			b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-1	第1面上	内折れかわらけ	5.2	4.2	1.15	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
10-2	#	かわらけ	7.4	5.0	1.5	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄褐色
10-3	#	かわらけ	7.7	3.7	1.6	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 良土 c.黄灰色
10-4	#	かわらけ	7.8	5.9	1.2	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
10-5	#	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.8	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 f.燈明皿
10-6	#	かわらけ	7.7	5.5	1.7	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c.黄褐色
10-7	#	かわらけ	8.0	5.4	1.4	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄褐色
10-8	#	かわらけ	7.8	4.9	1.95	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 f.燈明皿
10-9	#	かわらけ	7.8	5.4	1.0	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
10-10	#	かわらけ	7.7	5.5	1.9	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
10-11	#	かわらけ	7.9	5.4	1.8	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
10-12	#	かわらけ	8.5	6.9	1.9	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
10-13	#	かわらけ	(11.2)	(7.0)	2.6	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄褐色
10-14	#	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.1	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄褐色 f.燈明皿
10-15	#	かわらけ	(11.2)	(7.0)	3.3	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色
10-16	#	かわらけ	(12.0)	(8.1)	2.8	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
10-17	#	かわらけ	11.9	7.3	3.4	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c.黄褐色
10-18	#	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.6	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.褐色
10-19	#	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.6	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色
10-20	#	かわらけ	(14.1)	(9.4)	3.2	a.ロク口 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
10-21	#	白かわらけ	(11.4)	/	(3.4)	b.微砂 雲母 良土 c.乳白色
10-22	#	龍泉窯系 青磁磨胎弁文碗	口径〜体部小片			b.灰白色 精良堅緻 気孔あり d.灰青色半透明 薄目の施胎 f.外面細磨胎 文
10-23	#	白磁 口瓦皿	(10.6)	/	/	b.灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.灰白色半透明 やや薄い施胎 口唇部磨胎
10-24	#	白磁 口瓦皿	口径部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 口唇部磨胎
10-25	#	白磁 牡丹文合子蓋	(8.45)	/	2.1	b.白色 黒色粒 精良堅緻 d.白色半透明 薄い施胎 外面口唇部〜内面天井 近くまで磨胎 f.外面牡丹文
10-26	#	瀬戸 入子	6.8	3.4	2.0	a.ロク口 外底糸切痕 b.灰褐色 砂粒 精良土 c.灰褐色 内面〜口径に かけ降灰 e.良好 硬質 f.燈明皿 口唇部に注口・帯付着
10-27	#	瀬戸 折縁深皿	(24.2)	/	/	b.黄灰色 砂粒 良土 気孔あり d.灰緑 灰緑色半透明 体部上半輪縁 部分 的に磨胎 貫入有り e.良好 硬質
10-28	#	瀬戸 おろし皿	(14.0)	(8.0)	4.2	a.へうによるおろし目 外底糸切痕 b.明黄灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 精良 良土 d.灰緑 明灰緑色透明 内外面磨く施胎 一部粘胎
10-29	#	常滑 甕	縁磨輪3.9			b.灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 多量 c.褐色
10-30	#	常滑 甕	底部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 多量 c.褐色 降灰部灰白色
10-31	#	常滑 甕	底部小片			b.褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 多量 c.褐色
10-32	#	常滑 控鉢Ⅰ類	(27.6)	/	/	b.灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c.灰色
10-33	#	常滑 控鉢Ⅰ類	/	(12.1)	/	b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 多量 c.灰色 f.内面磨減痕
10-34	#	常滑 控鉢Ⅰ類	口径部小片			b.灰白色 砂粒 少量 c.灰白色
10-35	#	常滑 控鉢Ⅰ類	口径部小片			b.褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c.褐色
10-36	#	常滑 控鉢Ⅱ類	口径部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c.褐色 降灰部灰白色
10-37	#	常滑 控鉢Ⅱ類	口径部小片			b.褐色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c.褐色
10-38	#	常滑 控鉢Ⅱ類	口径部小片			b.褐色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c.褐色
10-39	#	陶片転用品	長6.0 幅3.8 厚0.9〜1.1			b.灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c.内面灰色 外面灰白色 f.常滑窯製品を 転用 割れ口面磨減痕
10-40	#	陶片転用品	最大長10.2 幅4.8 厚0.8〜1.0			b.灰褐色 白色粒 褐色粒 小石粒 やや多量 c.茶褐色 降灰部灰褐色 f.常 滑窯製品を転用 割れ口面磨減痕
10-41	#	瓦質 火鉢	底部小片			a.外底磨胎 b.灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗土 c.内面灰褐色 外面明黄褐色
10-42	#	石製品 硯	残存長4.4 残存幅2.7 厚1.3			c.黒褐色 f.隅に彫形による波頭文 粘灰磨製
10-43	#	鉄製品 釘	残存長5.2 幅0.8 厚0.3			
10-44	#	鉄製品 釘	残存長4.3 幅0.8 厚0.4			
10-45	#	銅製品 銭	/	/	/	f.淨符通宝 北宋 初鑄年1009年

表3 遺物観察表(3) ()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
10-66	第1面上	副製品 銭	/	/	/	f.熙寧元宝 北宋 初降年 1088年
10-47	*	副製品 銭	/	/	/	f.元祐通宝 北宋 初降年 1093年
10-48	*	副製品 銭	/	/	/	f.紹聖通宝 北宋 初降年 1094年
15-1	第2面 土壇1	かわらけ	13.4	7.2	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 赤色粒 小白粒 粗土 c.黄褐色 f.内底面に3本の筋あり
15-2	*	常滑 甕	縁帯幅2.7			b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや多量 c.褐色 厚灰部灰緑色
15-3	第2面 土壇2	かわらけ	(7.8)	(3.4)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄灰色
15-4	*	青白磁 袋物	頸部径(4.0)			b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.明青灰色不透明 内面露胎 外面再火の為釉割離
15-5	*	常滑 捏鉢皿	/	(17.6)	/	a.外底砂目度 b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.褐色 f.内面磨減痕
15-6	*	常滑 甕	口径(29.0)	縁帯幅2.1		b.灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c.褐色
15-7	*	漆器 皿	9.0	(5.4)	(1.9)	f.黒漆塗布 内底面にロクロ挽きの爪痕 高台破損
15-8	*	木製品 板草履芯	長23.0 幅9.4 厚0.3			a.全側縁面取り f.表裏に縄目状の圧痕
15-9	第3面 土壇4	かわらけ	(7.6)	(3.2)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 良土 c.黄褐色
15-10	*	山皿	(8.4)	(4.6)	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.灰色 砂粒 白色粒 精良土 c.灰色 口縁部灰緑色の自然釉付着 内面口縁下より薄い磨減痕
15-11	第2面 土壇7	かわらけ	7.4	5.4	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色
15-12	*	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 やや粗土 c.黄灰色
15-13	*	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
15-14	*	かわらけ	(7.0)	(3.2)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 やや粗土 c.黄灰色
15-15	*	かわらけ	(11.4)	(8.0)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
15-16	第2面 土壇8	かわらけ	7.3	5.6	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 f.磨明肌
15-17	*	かわらけ	(7.1)	(4.4)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄灰色
15-18	*	かわらけ	(8.0)	(4.7)	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c.黄灰色
15-19	*	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄褐色
15-20	*	かわらけ	7.0	5.0	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄褐色
15-21	第2面 土壇8	かわらけ	(12.1)	(8.2)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.褐色
15-22	*	かわらけ	(13.4)	(8.0)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c.黄褐色
15-23	*	瀬戸 入子	(8.69)	(5.0)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 良土 気孔多い c.黄灰色 外面赤褐色 口縁部・内底面磨減
15-24	第2面 土壇11	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
15-25	*	かわらけ	8.0	4.5	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
15-26	*	漆器 椀	/	(8.3)	/	f.黒漆塗布 外底部に竹管文
16-1	第3面 土壇6	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.褐色 f.磨明肌
16-2	*	かわらけ	(8.1)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
16-3	*	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 土丹粒 粗土 c.黄灰色
16-4	*	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 粗土 c.黄灰色
16-5	*	かわらけ	(13.0)	(8.8)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 小石粒 粗土 c.黄灰色
16-6	*	男瓦(丸瓦)	残存長4.0~9.0 残存幅3.9 厚1.9~2.9 筒部径(10.6)			a.凸面縄目直線丁寧に子丁酒し 凹面布目直線 側面・側縁へラ削り b.灰白色 砂粒 雲母 白色粒 良土 c.灰黒色 c.良好 硬質
16-7	*	瓦質 火鉢	(30.0)	(22.0)	9.6	a.外底砂目度 b.灰色 砂粒 雲母 白色粒 良土 c.黒褐色 e.良好 硬質
16-8	*	鉄製品 刀子	残存長6.6 幅1.4 厚0.1			f.基部
16-9	*	木製品 櫛	長4.0 残存幅3.8 厚0.8			f.全体に黒漆塗布
16-10	*	木製品 折敷	残存長7.8 残存幅8.6 厚0.1			f.周縁面取り加工
16-11	*	木製品 折敷	長20.7 残存幅11.9 厚0.1			f.周縁面取り加工
16-12	*	木製品 折敷	長21.4 残存幅2.3 厚0.1			f.周縁面取り加工
16-13	*	用途不明木製品	長15.7 残存幅3.3 厚0.1			f.周縁面取り加工 墨書か汚れか定かではない
16-14	*	木製品 折敷	残存長15.0 残存幅2.7 厚0.1~0.2			f.下部に焼け焦げた痕
16-15	*	木製品 折敷	残存長14.3 残存幅1.6 厚0.1			f.上端丸く面取り加工 所々に焼け焦げた痕
16-16	*	用途不明木製品	残存長15.7 残存幅2.2 厚0.1			f.所々に焼け焦げた痕
16-17	*	木製品 折敷	残存長11.6 残存幅2.9 厚0.1~0.2			f.側縁面取り加工
16-18	*	木製品 折敷	残存長14.1 幅1.1 厚0.1			f.上端・側縁面取り加工 下部に焼け焦げた痕
16-19	*	木製品 折敷	残存長11.8 幅1.4 厚0.05			f.上端・側縁面取り加工 下部に焼け焦げた痕
16-20	*	木製品 折敷	残存長11.4 幅1.2 厚0.07			f.上端・側縁面取り加工 下部に焼け焦げた痕

表4 遺物観察表(4) ()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形 b. 胎土・表面 c. 色調 d. 釉薬 e. 掛成 f. 備考
16-21	第2面 土塊6	木製品 折敷	残存長10.4	幅3.1	厚0.1	f. 上端・側縁面取り加工
16-22	*	木製品 折敷	残存長4.4	残存幅1.9	厚0.1	f. 墨書判読不明
16-23	*	用途不明木製品	残存長13.1	残存幅5.0	厚0.1	f. 折敷の転用加工途中か
16-24	*	用途不明木製品	長13.7	幅2.0	厚0.1~0.2	f. 側縁面取り加工 下部に焦げ焦げた痕
16-25	*	用途不明木製品	長18.5	幅3.2	厚0.15	f. 側縁面取り加工 下部に汚れ有り、墨によるものか
17-06	*	木製品 箸	長22.6	幅0.5	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-07	*	木製品 箸	長22.8	幅0.7	厚0.3	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-28	*	木製品 箸	長22.0	幅0.6	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-29	*	木製品 箸	長22.0	幅0.3~0.7	厚0.3	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-30	*	木製品 箸	長23.1	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-31	*	木製品 箸	長23.1	幅0.7	厚0.3	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-32	*	木製品 箸	長23.0	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-33	*	木製品 箸	長23.2	幅0.7	厚0.3	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-34	*	木製品 箸	長23.9	幅0.5	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-35	*	木製品 箸	長23.8	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-36	*	木製品 箸	長23.6	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-37	*	木製品 箸	長23.9	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-38	*	木製品 箸	長23.8	幅0.7	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-39	*	木製品 箸	長24.0	幅0.6	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-40	*	木製品 箸	長24.3	幅0.6	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-41	*	木製品 箸	長24.1	幅0.5	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-42	*	木製品 箸	長24.1	幅0.8	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-43	*	木製品 箸	長23.4	幅0.6	厚0.4	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-44	*	木製品 箸	長24.2	幅0.7	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-45	*	木製品 箸	長24.4	幅0.6	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-46	*	木製品 箸	長24.3	幅0.6	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-47	*	木製品 箸	長28.0	幅0.9	厚0.5	f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
17-48	*	木製品 箸木	長42.9	幅0.8~1.3	厚0.6	f. 刃物で断面四角形に加工 下端尖り気味
17-49	*	木製品 箸木	長22.0	幅1.2~1.4	厚0.6~0.8	f. 刃物で断面多角形に加工 下端尖り気味 土圧による歪曲か
17-50	*	木製品 箸木	長22.3	幅1.1	厚0.8	f. 刃物で断面多角形に加工 下端尖り気味
17-51	*	木製品 箸	長25.3	幅0.9~1.6	厚0.5~1.1	f. 刃物で断面多角形に加工 下端尖り気味
17-52	*	木製品 箸	長23.0	幅1.6	厚0.2~0.3	f. 刃物で断面四角形に加工 上端僅付着 下端鋭く尖る
17-53	*	金剛草履板芯	長23.5	幅7.7~9.7	厚0.15~0.25	f. 先端鼻緒の小孔 先端近くL字の袂り 側縁方形の袂り 縄編痕
17-54	*	金剛草履板芯	長22.8	幅4.4~8.3	厚0.2~0.3	f. 先端鼻緒の小孔 先端近くL字の袂り 側縁方形の袂り 縄編痕
17-55	*	金剛草履板芯	長23.5	残存幅4.6	厚0.2~0.4	f. 先端鼻緒の小孔 側縁方形の袂り 先端~側縁にかけ塚付着 縄編痕
17-56	*	金剛草履板芯	長23.1	残存幅4.0	厚0.1~0.2	f. 側縁面取加工 縄編痕
17-57	*	金剛草履板芯	残存長21.8	残存幅2.5	厚0.15	f. 側縁方形の袂り 先端僅付着 縄編痕
17-58	*	金剛草履板芯	残存長14.4	残存幅4.6	厚0.1~0.4	f. 先端鼻緒の小孔 所々火を受けている 縄編痕
17-59	*	用途不明木製品	残存長11.1	幅2.2	厚1.8	f. 刃物で断面四角形に加工 先端にぼろろしき突起部分あり
17-60	*	用途不明木製品	残存長3.0	幅1.2	厚0.1	f. 刃物で断面四角形・薄く加工 先端尖る
18-1	第2面 溝1	かわらけ	(7.0)	(4.0)	1.8	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
18-2	*	かわらけ	(7.5)	(5.8)	1.6	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
18-3	*	かわらけ	(7.3)	(5.2)	1.5	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
18-4	*	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.7	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
18-5	*	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.75	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 小石粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
18-6	*	かわらけ	(7.4)	(6.0)	1.7	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
18-7	*	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.8	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
18-8	*	かわらけ	(8.7)	(7.2)	1.7	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
18-9	*	かわらけ	(8.8)	(6.0)	2.1	a. □ク口 外底糸切痕 b. 髹砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色

表5 遺物観察表(5) ()は複元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.輪蓋 e.施成 f.備考
18-10	第2面 溝1	かわらけ	(11.4)	(8.6)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.褐色
18-11	*	かわらけ	(12.2)	(8.6)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.褐色 f.燈明皿
18-12	*	かわらけ	(11.7)	(7.4)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色
18-13	*	かわらけ	(11.2)	(7.4)	2.95	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 黄土 c.黄褐色
18-14	*	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色
18-15	*	かわらけ	12.4	8.1	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.黄褐色
18-16	*	龍泉窯系 青磁碗	口縁部小片			b.明褐色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚手に施釉 貫入有り f.再火の烏灰色
18-17	*	龍泉窯系 青磁碗	体部小片			b.灰白色 精良堅緻 気孔有り d.灰緑色半透明 薄い施釉 f.再火を受けている
18-18	*	龍泉窯系 青磁碗	体部~底部小片			b.灰白色 精良堅緻 気孔有り d.灰緑色半透明 薄い施釉 貫入有り
18-19	*	高麗青磁 壺	体部小片			b.灰褐色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 薄い施釉
18-20	*	白磁 口瓦皿	口縁部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色透明 口唇部露胎 f.再火により口唇部灰色
18-21	*	白磁 小皿	(6.5)			b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 口唇部露胎 薄い施釉
18-22	*	緑釉 陶枕	残存長 6.3 残存幅 7.0 厚 0.8			a.内面強い横穴ナデ b.明灰白色 砂粒 雲母 精良土 d.緑色半透明 外面施釉 内面露胎 e.良好 やや硬質 f.外面顔縁内に花文?を円形に浮き彫り 所々捺片着 図18-22~25は同一個体
18-23	*	緑釉 陶枕	残存長 2.3 残存幅 1.6 厚 0.5~0.7			
18-24	*	緑釉 陶枕	残存長 2.6 残存幅 2.1 厚 0.7			
18-25	*	緑釉 陶枕	残存長 1.6 残存幅 2.6 厚 0.6			
18-26	*	常滑 甕		(11.5)		a.外底砂目痕 b.褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.褐色
18-27	*	常滑 甕		(13.2)		a.外底砂目痕 b.灰白色 砂粒 白色粒 やや少量 c.褐色 f.内面粘土地付着
18-28	*	常滑 甕	底部小片			a.外底砂目痕 (多量) b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや少量 c.褐色
18-29	*	常滑 器鉢1類	(28.6)			b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.灰白色
18-30	*	須美 甕	面体部(22.0)			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや多量 c.灰白色 f.外面白・灰色の斑状の自然釉
18-31	*	須志原 甕	体部小片			a.外面平行条痕 b.灰白色 微砂 黄土 c.灰白色
18-32	*	石製品 火打石	長 2.5 幅 2.0 厚 1.3			c.灰白色 f.石製の石材 表面打撃痕
18-33	*	漆器 椀	(15.1)	6.9	5.5	a.削り出し高台 f.全体に黒漆塗布 無文
18-34	*	木製品 椀	長 33.1 幅 1.0~1.4 厚 0.2~0.3 木釘着 0.5			f.下方を木釘で穿らねる 板状で断面両側縁を割く削り加工
18-35	*	木製品 箸	長 23.7 幅 0.6 厚 0.4			f.刃物で断面四角形に加工 下端尖り気味
18-36	*	巻状木製品	残存長 20.3 幅 1.1 厚 0.7			f.刃物で断面多角形に加工 下端尖り気味
18-37	*	用途不明木製品	残存長 6.0 幅 1.5 厚 0.1~0.4			f.上部薄く削り加工 下部さらに薄く削り加工
18-38	第2面 溝状遺構1	かわらけ	(7.2)	(5.5)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 黄土 c.黄褐色
20-1	第2面 P8	褐釉 壺	残存長 3.6 幅 2.5 厚 0.8			b.灰褐色 砂粒 黄土 d.灰褐色半透明 e.良好 硬質 f.耳部取手欠
20-2	*	褐釉 壺	肩部小片			b.灰褐色 砂粒 黄土 d.灰褐色半透明 内外面薄く施釉 e.良好 硬質
20-3	第2面 P12	かわらけ	7.7	5.4	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.褐色 f.燈明皿
20-4	*	常滑 甕	肩部小片			b.明灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c.灰褐色 f.外面格子文に對角線状條の押印
20-5	第2面 P13	木製品 櫛	残存長 1.7 幅(3.9) 厚 0.8			f.全体に黒漆が塗布されていた模様 刺繍・冴れが著しい
20-6	第2面 P14	常滑 甕	底部小片			a.外底砂目痕 b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c.黄褐色
20-7	第2面 P15	かわらけ	(11.3)	(8.4)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-8	*	かわらけ	(11.6)	(8.6)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-9	第2面 P16	龍泉窯系 青磁無紋碗	(15.2)			b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚手に施釉
20-10	第2面 P18	かわらけ	8.2	5.0	2.15	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-11	*	かわらけ	12.2	7.4	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
20-12	第2面 P21	かわらけ	(11.7)	(7.5)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.褐色
20-13	第2面 P22	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-14	第2面 P23	かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-15	*	常滑 甕	縁部幅 2.3			b.灰褐色 砂粒 白色粒 やや少量 c.褐色 降灰部灰緑色
20-16	第2面 P28	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 黄土 c.黄褐色
20-17	第2面 P31	常滑 甕	縁部幅 1.1			b.灰褐色 砂粒 白色粒 やや少量 c.褐色 降灰部灰緑色
20-18	第2面 P32	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c.黄褐色
20-19	*	白磁 袋物	頸部径(11.8)			b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.白灰色半透明
20-20	第2面 P34	石製品 磁石	残存長 5.5 幅 5.5 厚 5.4			e.明灰白色・灰褐色の花文 f.底部が3面 火を受けている 天草系の龍泉宮貫貫
20-21	第2面 P38	瓦質 内折白磁	(4.6)	(4.8)	0.55	a.外底指痕痕 b.灰白色 砂粒 黄土 c.黒褐色 e.良好
20-22	第2面 P39	龍泉窯系 青磁皿	口縁部小片			b.灰色 砂粒 精良堅緻 d.灰緑色透明
20-23	*	常滑 甕	口縁部小片			b.灰褐色 砂粒 少量 c.褐色

表6 遺物観察表(6) ()は複元値

器番号	出土面・遺物	種別	口径(cm)		器高(cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 施装 e. 焼成 f. 備考	
			口径	底径		口縁部小片	
21-1	第1面下 ~第2面上	かわらけ	(5.3)	(3.8)	1.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 黄土 c. 黄褐色	
21-2	*	かわらけ	(6.8)	(4.0)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 黄土 c. 褐色 f. 燈明皿	
21-3	*	かわらけ	7.4	5.0	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 小石粒 やや粗土 c. 褐色	
21-4	*	かわらけ	(7.0)	(5.0)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 やや粗土 c. 黄褐色	
21-5	*	かわらけ	7.4	5.1	1.75	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 小石粒 粗土 c. 褐色	
21-6	*	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 やや粗土 c. 褐色	
21-7	*	かわらけ	7.8	6.4	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 赤色粒 小石粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色	
21-8	*	かわらけ	7.8	5.0	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 小石粒 粗土 c. 黒褐色 e. 不良(生焼け)	
21-9	*	かわらけ	(7.4)	(6.0)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 褐色	
21-10	*	かわらけ	7.5	4.8	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 やや粗土 c. 褐色	
21-11	*	かわらけ	7.7	5.0	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 f. 燈明皿	
21-12	*	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 褐色	
21-13	*	かわらけ	7.8	4.6	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 f. 燈明皿	
21-14	*	かわらけ	(8.0)	(5.8)	(1.8)	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-15	*	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 小石粒 やや粗土 c. 黒褐色 f. 燈明皿	
21-16	*	かわらけ	(8.0)	(6.6)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 やや粗土 c. 黄褐色	
21-17	*	かわらけ	8.0	6.4	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-18	*	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 白鈔 やや粗土 c. 褐色	
21-19	*	かわらけ	8.0	6.2	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 f. 燈明皿	
21-20	*	かわらけ	(10.0)	4.6	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 小石粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-21	*	かわらけ	(11.2)	(7.0)	3.35	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 土丹粒 粗土 c. 褐色	
21-22	*	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-23	*	かわらけ	(12.0)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 小石粒 土丹粒 粗土 c. 褐色	
21-24	*	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-25	*	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 白鈔 小石粒 土丹粒 粗土 c. 褐色 f. 外底部に穿孔あり	
21-26	*	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 粗土 c. 黄灰色	
21-27	*	かわらけ	(12.0)	(8.6)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-28	*	かわらけ	(12.0)	(9.0)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色	
21-29	*	かわらけ	(12.4)	(8.2)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗多し 雲母 白鈔 小石粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-30	*	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-31	*	かわらけ	(12.4)	(8.2)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色	
21-32	*	かわらけ	12.6	8.0	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 白鈔 土丹粒 粗土 c. 黄褐色	
21-33	*	かわらけ	(14.0)	(8.0)	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 襷紗 雲母 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 褐色	
21-34	*	白かわらけ	(10.8)	(8.8)	✓	a. 手捏ね b. 襷紗 黄土 c. 灰白色	
21-35	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗	(17.0)	✓	✓	b. 灰色 精良堅緻 気孔あり d. 灰緑色半透明 粗めの貫入有り 内外面やや厚めの施釉 f. 外面施透弁文	
21-36	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗		口縁部小片		b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 内外面やや厚めの施釉 f. 外面施透弁文	
21-37	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗		口縁部小片		b. 明灰色 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 内外面厚めの施釉 f. 外面施透弁文	
21-38	*	龍泉窯系 青磁刻花文碗		口縁部小片		b. 灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 f. 内面刻花文	
21-39	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗		内底径(8.0)		b. 灰色 黒色粒 精良堅緻 気孔あり d. 灰緑色半透明 f. 内面施透弁文	
21-40	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗	✓	(4.2)	✓	b. 明灰色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 高台内盤付露胎 f. 外面施透弁文	
21-41	*	龍泉窯系 青磁碗		底部小片		b. 明灰色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 厚めの施釉 高台盤付露胎	
21-42	*	龍泉窯系 青磁施透弁文碗	✓	(4.8)	✓	b. 明灰色 精良堅緻 気孔多い d. 灰緑色半透明 高台内盤付露胎 f. 内面刻花文 外面施透弁文	
21-43	*	龍泉窯系 青磁内盤付新緑碗	(14.0)	✓	✓	b. 明灰色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 f. 再火の高、一部欠逃 内面施透弁文	
21-44	*	白磁 口瓦筒	(11.8)	✓	✓	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 気孔あり d. 灰白色不透明 やや厚めの施釉 口唇部露胎	
21-45	*	白磁 草花文皿		体部小片		b. 白色 精良堅緻 d. 白色半透明 f. 内面草花文	
21-46	*	白磁 口瓦皿	(6.5)	(6.0)	3.2	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 気孔あり d. 灰白色不透明 口唇部露胎	
21-47	*	白磁 口瓦皿	(6.2)	✓	✓	b. 灰白色 精良堅緻 気孔あり d. 灰白色不透明 口唇部露胎	
21-48	*	白磁 口瓦皿	✓	6.0	✓	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰白色不透明	
21-49	*	青白磁 胸瓶	✓	9.8	✓	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明青灰色半透明 高台内~外底部露胎 f. 下部に二重穴施 唐草文	
21-50	*	青白磁 燗か	口径(9.5) 内口径(5.2)			b. 明灰白色(真味) 砂粒 d. 明青灰色(青味)半透明 粗い貫入有り 外面~口縁部施釉 f. 周囲する二組の二重穴を施す	

表7 遺物観察表(7) ()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 施装 f. 備考
21-51	第1面下 ~第2面上	青白磁 花瓶				h. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰色半透明 外面施釉 内面露胎 f. 再火により胎に針穴6つ
21-52	*	黄釉 盤				b. 黄灰色 砂粒 白色粒 褐色粒 小石粒 粗土 d. 黄灰色半透明 胎かいい貫入有り 内外面施釉 e. 良好 硬質 口縁部~外面にかけ物染の薄い部分で赤褐色に変色
21-53	*	黄釉(二彩) 鉄絵 盤				b. 黄灰色 砂粒 白色粒 褐色粒 粗土 d. 黄灰色半透明 内底面施釉 貫入 有り f. 内底面に文様不詳の鉄絵
21-54	*	瀬戸 入子				b. 灰色 精良土 気孔あり c. 灰色 口縁部~内面降灰により一部灰褐色 e. 良好 硬質 f. 外面口縁部施付着
21-55	*	瀬戸 皿	/	(4.4)	/	a. 外底糸切痕 b. 黄味灰白色 砂粒 雲母 精良土 気孔あり c. 黄味灰白色 e. 良好 硬質 f. 再火を受けている
21-56	*	常滑 蓋口壺	(5.0)	/	/	b. 灰色 砂粒 黒色粒 少量 c. 暗褐色
21-57	*	常滑 壺		縁幅1.6	/	b. 灰色 砂粒 黒色粒 小石粒 多量 c. 暗褐色 薄灰褐色
21-58	*	常滑 壺	/	(20.0)	/	b. 灰色 砂粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c. 赤褐色
21-59	*	常滑 控鉢Ⅰ類		口縁部小片	/	b. 灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c. 灰色
21-60	*	常滑 控鉢Ⅱ類	/	(14.0)	/	b. 灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 多量 c. 灰色
21-61	*	常滑 控鉢Ⅱ類	/	(16.8)	/	b. 灰褐色 白色粒 小石粒 やや多量 c. 外面赤褐色 内面灰褐色~褐色 f. 内底面に磨滅痕
22-62	*	女瓦(平瓦)	残存長9.0 残存幅0.9 厚2.3			a. 凹・凸面離れ砂 覆位ナデ 厚紙痕 b. 明灰色 砂粒 白色粒 小石粒 や粗土 c. 凹面明灰色 凸面灰黒色 e. 良好 軟質
22-63	*	女瓦(平瓦)	残存長8.2 残存幅0.8 厚2.5			a. 凹面横位の横位ナデ 斜位のナデ 凸面離れ砂 覆位ハ筋痕 b. 灰色 砂 粒 白色粒 小石粒 や粗土 c. 明灰色 e. 良好 硬質
22-64	*	瓦葺 火鉢	(39.4)		/	b. 灰色 砂粒 黒色粒 良土 c. 灰褐色 e. 良好 軟質 f. 内面口縁下に穿孔あり
22-65	*	瓦葺 火鉢		底部小片	/	b. 灰褐色 砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c. 灰褐色 e. 良好 軟質
22-66	*	滑石製 鍋	/	(15.0)	/	a. 外面細かな縦位のノミ痕 内面平らなノミで切り出し痕を加工 c. 灰赤色
22-67	*	滑石製 鍋	(18.3)		/	a. 内外面細かな加工痕 鈔部削り出し痕 c. 灰色
22-68	*	石製品 砥石	残存長2.5 残存幅4.0 厚3.0			c. 明灰褐色 f. 砥面が2面 燒痕あり 凝灰岩製 中砥
22-69	*	石製品 砥石	残存長4.5 残存幅5.0 厚0.9			c. 灰褐色 f. 砥面が2面 燒痕あり 凝灰岩 仕上げ砥
22-70	*	石製品 火打石	長2.2 幅2.2 厚1.6			c. 灰白色 f. 石灰岩製
22-71	*	銅製品 銭	f. 期末元宝か 北宋 初鑄年1068年			/
22-72	*	鋳石	長8.0 幅5.0 厚4.7			b. 灰色 f. 噴石 上下部摩耗
27-1	第3面 土壇Ⅰ	常滑 広口壺		縁幅1.4		b. 灰褐色 砂粒 小石粒 やや多量 c. 褐色 一部外面降灰の爲、灰褐色
27-2	*	用途不明木製品	長13.4 幅9.8 厚0.3~0.5			f. 切り傷縦横に残る一部端に燒痕
27-3	*	木製品 折敷	長24.3 残存幅13.9 厚0.1			f. 上端・側縁面取り加工
27-4	第3面 土壇Ⅱ	かわらけ	(13.8) (8.4)	3.7		a. コウロ 外底糸切痕 b. 黄砂 雲母 良土 c. 褐色 f. 内面僅か 黒色~暗褐色に変色
27-5	*	かわらけ	(7.9) (6.8)	1.9		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄灰色
27-6	*	かわらけ	(9.8) (8.2)	2.1		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 白針 良土 c. 黄灰色
27-7	*	かわらけ	(10.2) (8.8)	1.7		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 雲母 白針 良土 c. 黄灰色
27-8	*	かわらけ	(8.5) (7.4)	1.7		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 褐色
27-9	*	かわらけ	9.6 8.3	2.1		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 雲母 白針 良土 c. 黄灰色
27-10	*	かわらけ	(10.0) (8.1)	1.8		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 褐色
27-11	*	かわらけ	(12.8) (11.8)	3.8		a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 黄砂 雲母 白針 良土 c. 黄灰色
27-12	*	女瓦(平瓦)	残存長7.3 残存幅7.1 厚2.0~2.15			a. 凹面横位のヘラナデ 凸面離れ砂 斜格子の叩き b. 灰褐色 砂粒 白色 粒 褐色粒 小石粒 や粗土 c. 灰褐色 e. 良好
27-13	*	漆器 桶	(18.4) (7.5)	5.6		a. 内外面黒漆塗布 f. 裏台~内底部にかけ所々漆付着 外底部にコウロ焼き爪痕有り
27-14	*	木製品 箸	残存長19.9 幅0.6 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 上端尖り気味
27-15	*	木製品 箸	長21.5 幅0.6 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工
27-16	*	木製品 箸	長23.1 幅0.6 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
27-17	*	木製品 箸	残存長10.5 幅1.1 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 下端尖り気味
27-18	*	木製品 人形代	長13.6 幅2.0 厚0.3			f. 砥石を削り加工
27-19	*	用途不明木製品	長11.0 幅1.3 厚0.10			f. 断面四角形に加工 加工途中か
27-20	*	用途不明木製品	残存長9.4 幅0.1~2.0 厚0.25			f. 先端鋭く尖り断面平らに加工 形代か
27-21	*	用途不明木製品	長20.7 幅0.8 厚0.7			f. 断面多角形に加工 棒状
27-22	*	用途不明木製品	長23.7 幅0.7~3.3 厚0.5~0.6			f. 断面へら状に加工
27-23	*	用途不明木製品	長28.5 幅2.7 厚0.4~1.0			f. 全体を削り加工 鞘などの加工途中か
28-1	第3面 土壇Ⅳ	用途不明木製品	長24.5 残存幅4.5 厚0.5			f. 先端部に尖味を帯びた磨滅痕
28-2	第3面 土壇Ⅴ	男瓦(丸瓦)	残存長22.2 残存幅7.2 厚2.0~2.2 側縁長13.8			a. 凸面横位目を横位ナデで消し 凹面有目痕 玉縁部へラ削り ナデ調整 側面・側 縁へラ削り b. 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 良土 c. 灰褐色 e. 良好 軟質
28-3	*	木製品 箸	長20.7 幅0.5 厚0.3			f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
28-4	*	木製品 箸	残存長31.7 幅3.4 厚0.6			f. 3箇所に穿孔 内1つは斜めに開けられるが貫通 切り傷多数 削けている箇所有り

表8 遺物観察表(6) ()は復元値

発掘号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.輪藻 e.焼成 f.備考
28-5	第3面 土壇6	木製品 工具	長25.2 幅0.9~2.5 厚1.2			f.板状に加工 一部横方向に線が入る
28-6	*	用途不明木製品	長11.6 幅1.5 厚0.2			f.平らに加工 先端切り込みを入れ尖らせ気味
28-7	第3面 土壇14	かわらけ	(13.8) (12.0)	3.2		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色
28-8	*	かわらけ	(14.0) (12.8)	3.6		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 土丹粒 粗土 c.褐色 f.内面煤片着 磨痕
28-9	*	龍泉窯系青銅刺花文陶	推定底径6.0			b.明灰褐色 黒色粒 精良堅緻 d.緑灰色半透明 f.内面刺花文
28-10	第3面 土壇19	かわらけ	(14.0) (13.0)	3.4		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
28-11	*	漆器 椀	/(7.0)	/(7.0)	/	a.削り出し高台 内外面加漆塗布 f.高台内訳入りか 外底面口ロ口長き爪痕有り 蓋文
29-1	第3面 土壇22	かわらけ	(7.5) (6.0)	1.5		a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
29-2	*	かわらけ	(9.0) (8.4)	1.4		a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄褐色
29-3	*	かわらけ	12.0 8.0	3.35		a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c.黄褐色
29-4	*	同安窯系青銅刺花文皿	/(5.0)	/	/	a.外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 精良堅緻 微気孔あり d.灰緑色半透明 黒い貫入有り 内外面加漆 外底面露筋 f.内面刺花文 底部部に漆もしくは炭化物付着
29-5	*	御美 火鉢	口縁部小片			b.灰色 微砂 赤色粒 良土 d.灰色半透明 一部灰緑色の降灰 内外面加漆 e.良好 破痕
29-6	*	土器 火鉢	口縁部小片			b.灰色 ~黄褐色 砂粒 雲母 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 ~灰色 e.良好 f.内外面に丁寧に横位の磨き 煤付着
29-7	*	木製品 駒	長23.1 幅3.0 厚0.6			f.滑らかな丸球を帯びた加工 端部切分断痕 口部内面に挟る 片面破損
29-8	*	木製品 箸	長22.0 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
29-9	*	木製品 箸	長22.1 幅0.6 厚0.6			f.刃物で断面多角形に加工 先端尖り気味
29-10	*	木製品 箸	長23.6 幅0.8 厚0.5			f.刃物で断面六角形・偏平に加工 両端尖り気味
29-11	*	木製品 箸	長23.7 幅0.7 厚0.5			f.刃物で断面台形状に加工
29-12	*	木製品 箸	長23.8 幅0.8 厚0.4			f.刃物で断面六角形・偏平に加工 先端尖り気味
29-13	*	木製品 箸	長24.2 幅0.6 厚0.55			f.刃物で断面五角形に加工
29-14	*	木製品 箸	長24.2 幅0.7 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工
29-15	*	木製品 箸	長24.2 幅0.65 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工
29-16	*	木製品 箸	長24.6 幅0.8 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工
29-17	*	木製品 箸	長24.7 幅0.55 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工
29-18	*	木製品 木俵	頭部径3.7 長4.8 孔径0.2			f.柱目材を円柱に加工 上下切筋痕があるが未調整 目鼻は先端尖ったもので線彫り口は縦で引いたような形 下部に首を握える穿孔あり
29-19	*	用途不明木製品	長8.2 幅0.4 厚2.8			f.台形状の深い削りをもつ 全体に腐食進む
29-20	*	用途不明木製品	長18.2 幅2.7 厚0.5			f.先端を削り出し平らに加工
29-21	*	用途不明木製品	長24.4 幅1.5 厚1.2			f.先端を粗く削る 断面台形状に加工
29-22	第3面 土壇23	常滑 釜1類	推定底径15.4			b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c.灰色 f.内面非常に磨減
29-23	*	常滑 釜	(16.0)	/	/	b.灰色 砂粒 小石粒 やや多量 c.褐色 口縁部 ~外面肩部にかけ漆灰により灰緑色 f.二次焼成のため器底が荒れて危立
30-1	第3面 土壇24	かわらけ	(9.0) (7.2)	1.6		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
30-2	*	かわらけ	(13.8) (12.4)	3.5		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色
30-3	*	龍泉窯系青銅刺花文陶	(16.1)	/	/	b.灰色 黒色粒 精良堅緻 d.灰緑色透明 内外面加漆 f.内面刺花文
30-4	*	木製品 箸	長21.0 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
30-5	*	木製品 箸	長21.4 幅0.7 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
30-6	*	木製品 箸	長22.4 幅0.75 厚0.6			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖る
30-7	*	木製品 箸	長23.6 幅0.75 厚0.55			f.刃物で断面多角形に加工
30-8	*	木製品 箸	長23.0 幅0.7 厚0.6			f.刃物で断面多角形に加工
30-9	*	木製品 箸	長23.8 幅0.8 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工
30-10	*	木製品 箸	長25.1 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工
30-11	*	木製品 箸	長25.1 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工
30-12	*	木製品 箸	長25.3 幅0.7 厚0.6			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
30-13	*	木製品 箸	長24.7 幅1.3 厚0.8			f.全体角を落とす断面八角形に加工 先端やや磨減
30-14	*	木製品 釜状工具	長16.9 幅1.1 厚1.0			f.先端平らに尖り加工 角を磨削り丸球をもたせる
30-15	*	金剛草履板芯	長23.6 幅1.8~5.0 厚0.2~0.3			f.先端草履の小孔直 縦線方形の挟り 編織痕
30-16	*	金剛草履板芯	吸存長20.5 幅2.2~4.8 厚0.6			f.縦線方形の挟り 表裏に刀物状の切り傷 下部横溝 加工途中とと思われる
30-17	第3面 土壇25	かわらけ	(8.0) (6.0)	1.6		a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
30-18	*	かわらけ	(8.0) (6.0)	2.1		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
30-19	*	かわらけ	(13.0) (9.2)	3.1		a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.褐色
30-20	*	土器 火鉢	(8.0)	/	/	b.灰色 砂粒 赤色粒 小石粒 粗土 c.灰褐色 ~黒色 e.良好
30-21	*	石製品 碓か	長7.2 幅5.4 厚2.2			c.灰色 f.縦灰質泥岩製 底部平らに加工 加工途中か

表9 遺物観察表(9) ()は復元値

調査号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・赤土 c.色面 d.釉薬 e.焼成 f.備考
30-22	第3面 土壌 25	木製品 箸	長 23.8	幅 0.7	厚 0.4	f.刃物で断面多角形に加工
30-23	#	用途不明木製品	長 17.7	幅 0.9	厚 0.7	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る 注木か
30-24	#	用途不明木製品	長 11.5	幅 1.0~2.7	厚 0.8	f.裏面平らに加工 先端細く削る 先端磨耗
30-25	#	用途不明木製品	長 14.8	残存幅 4.3	厚 0.6	f.粗雑な切断加工 下部空型に削る
30-26	第3面 土壌 27	(12.0)	(9.0)	2.9		a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
30-27	#	常滑 甕	線径幅 1.6			h.黄灰色~灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c.褐色 f.赤井・中野編平6型式
31-1	第3面 土壌 32	かわらけ	8.2	6.0	1.8	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.棕色
31-2	#	かわらけ	(8.2)	(6.8)	1.8	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.棕色 f.燈明皿
31-3	#	かわらけ	14.0	12.0	3.6	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄灰色
31-4	#	常滑 控鉢Ⅱ類	(29.2)	(17.1)	(9.8)	b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.暗褐色 内面降灰部緑灰色 内面体部に粘土残存者
31-5	第3面 土壌 32	土器質 灰鉢	(34.0)	(26.0)	8.7	a.内外面備い横ナデ b.黄灰褐色 砂粒 雲母 赤色粒 良土 c.内面灰色 外面灰黑色 e.良好 軟質 底部垂状の隆起
31-6	#	用途不明木製品	長 10.8	幅 1.0	厚 0.5	f.断面四角形に加工 両端尖らせる 角形代か
31-7	第3面 土壌 34	かわらけ	(9.3)	(7.4)	2.1	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
31-8	#	かわらけ	(9.6)	(7.0)	1.6	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色 f.燈明皿
31-9	#	かわらけ	9.8	8.0	2.0	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.棕色
31-10	#	瓦器 碗	体部~底部小片			a.輪花状の成形 b.灰白色 砂粒 精良土 c.灰黑色 e.良好 f.内面~外面 体部模様の繪文 内底面格子の繪文 輪葉系
31-11	#	木製品 箸	長 18.4	幅 0.7	厚 0.4	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
31-12	#	木製品 箸	残存長 18.9	幅 0.6	厚 0.6	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
31-13	#	木製品 箸	長 20.3	幅 0.6	厚 0.4	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
31-14	#	木製品 箸	長 22.2	幅 0.6	厚 0.4	f.刃物で断面多角形に加工
31-15	#	木製品 箸	長 24.0	幅 0.6	厚 0.45	f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
31-16	#	木製品 籠状工具	長 23.2	幅 1.8	残存厚 0.4	f.表面丸く面取り 裏面破損 先端尖らせる
31-17	#	用途不明木製品	残存長 23.5	幅 0.5~2.1	厚 0.3~0.5	f.先端細く加工 断面面取り 表面煤付着
31-18	#	用途不明木製品	長 13.6	幅 4.0	厚 1.0~1.2	f.下部先端丸みを帯びた加工 上部細い削り 表面中央付近・側面煤付着 上部磨損 刃文か
32-1	第3面 P3	常滑 甕	線径幅 1.0			b.灰褐色 黒色粒 褐色粒 やや多量 c.褐色 内面降灰部灰緑色
32-2	#	龍泉窯系 青磁刺化文碗	推定底径 5.0~8.0			b.灰色 砂粒 白色粒 精良堅軟 d.明灰緑色半透明 内外面施釉 高台内底面 胎灰層あり f.内底面に凹回する沈積内に刺化文
32-3	第3面 P6	常滑 甕	底部小片			b.灰色 砂粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c.褐色 内面降灰部灰緑色
32-4	#	漆器 碗	/(8.2)	/(8.2)	/(8.2)	a.口口外 黒漆地に朱漆 f.底部高台 文様不明
32-5	第3面 P7	常滑 控鉢Ⅰ類	(31.8)	(15.6)	10.0	a.砂目底 貼付け高台 外面下半傾位の削り b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 多量 c.灰色 内面降灰部暗灰緑色 f.内面体部下半磨滅
32-6	#	常滑 控鉢Ⅰ類	底部小片			a.貼付け高台 粉砂痕 b.灰色 砂粒 黒色粒 少量 c.明灰色 f.内面磨滅して降灰層が剥落ち
32-7	第3面 P11	かわらけ	(8.8)	(6.4)	2.0	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.棕色
32-8	#	かわらけ	9.0	6.6	2.0	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.棕色
32-9	#	かわらけ	(8.8)	(8.2)	2.0	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄褐色
32-10	第3面 P12	常滑 控鉢Ⅰ類	/(7.2)	/(7.2)	/(7.2)	a.砂目底 貼付け高台 粉砂痕 b.灰色 砂粒 黒色粒 少量 c.灰色 f.内面磨滅 内面煤付着 外面煤付着
32-11	#	用途不明木製品	長 10.4	幅 1.2	厚 1.0	f.中央に残り溝が走り、上部・中央に錆びた釘が残る
32-12	第3面 P15	釉薬 壺	胴部小片			b.灰褐色 精良堅軟 d.灰緑色不透明 厚めの施釉 内外面施釉 高台内底面 f.二次焼成の釉薬が溜まつ 同一個体と思われる
32-13	#	釉薬 壺	胴部小片			
32-14	第3面 P17	かわらけ	(8.8)	(6.8)	1.8	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄褐色
32-15	第3面 P20	かわらけ	(11.8)	(7.8)	3.4	a.口口外 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.褐色
32-16	第3面 P23	木製品 刀子柄	残存長 14.8	幅 3.0	厚 0.3~0.4	f.表面丸く加工 端部・両側面一部丸く削る
32-17	第3面 P28	かわらけ	(8.4)	(7.2)	1.9	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄褐色
32-18	#	木製品 折敷	残存長 12.9	幅 2.5	厚 0.45	f.先端丸味を持たせた鋭い面取り
33-1	第2面下~第3面上	かわらけ	(9.0)	(7.8)	2.1	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
33-2	#	かわらけ	(9.8)	(8.4)	1.5	a.手握ね 外底指痕痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.棕色
33-3	#	黄釉 鉄絵盤	(26.6)	(23.4)	9.1	b.灰色 黄色粒 褐色粒 石灰粒 粗土 d.灰黄色半透明 内面~外面体部下段まで施釉、以下露胎一部白濁 胎かな貫入あり e.良好 硬質 f.内面鉄絵唐草文 隅江口に黒漆付着 (後著用)
33-4	#	黄釉 鉄絵盤	底部小片			b.灰褐色 砂粒 褐色粒 やや粗土 d.黄灰色不透明 隅江口 胎かな貫入多い 外面露胎 e.良好 硬質 f.内底面に鉄絵 (文様不詳)
33-5	#	黄釉 盤	口縁部小片			b.灰褐色 砂粒 褐色粒 石灰粒 やや粗土 d.黄灰色半透明 内外面施釉 胎かな貫入あり 一部白濁 e.良好 硬質
33-6	#	常滑 甕	底部小片			b.暗灰色 砂粒 白色粒 褐色粒 やや多量 c.黒褐色 降灰部暗灰緑色 f.内底面降灰厚
33-7	#	常滑 控鉢Ⅰ類	/(15.0)	/(15.0)	/(15.0)	a.貼付け高台 外面強い横ナデ 体部下位へ削り b.灰褐色 砂粒 小石粒 多い 多量 c.灰褐色 e.やや甘い 軟質 f.内面非常に磨滅

表10 遺物観察表()は復元値

資料番号

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 輪葉 e. 焼成 f. 備考
33-8	第2面下 ~第3面上	常滑 程鉢Ⅰ類	底部小片			a. 三角形の貼付が高台 b. 灰色 砂粒 黒色粒 少量 c. 灰色 f. 内面磨減
33-9	*	常滑転用品	長9.4 幅8.5 厚0.8~1.2			b. 褐色 砂粒 黒色粒 小石 や中量 c. 褐色 f. 凸面(器表面)及び角を研ぎされている
33-10	*	土製品 火鉢	口径32.0 内口径25.0			b. 赤味灰色 砂粒多い 黄母 白色粒 小石粒 粗土 c. 赤味灰色 e. 良好 f. 高台付きの火鉢
33-11	*	土製品 鉢葉	直径2.9 厚0.9			b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 褐色 f. かわらけ底部を円形に加工 側面全体に滑らかな磨減痕
33-12	*	漆器 輪	/	7.3	/	a. 黒漆塗布 f. 木地・高台部磨減
37-1	第4面 土壇15	常滑 甕	底部小片			a. 砂目底 b. 暗褐色 小石粒 石英粒 や中量 c. 暗褐色
37-2	第4面 土壇16	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.8	a. ロク口 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 や粗土 c. 黄灰色 f. 燈明皿
37-3	*	かわらけ	9.1	8.0	1.8	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
37-4	*	かわらけ	(9.2)	(8.2)	1.8	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
37-5	*	かわらけ	14.0	12.2	3.4	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄褐色
37-6	*	木製品 箸	長19.9 幅0.8 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 先端尖る
37-7	*	木製品 箸	長23.7 幅0.4 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
37-8	*	木製品 箸箸	長23.9 幅0.4 厚0.4			f. 刃物で断面多角形に加工 先端部片面切れ込みにより尖らせる 一部使用の跡が滑減している
37-9	*	木製品 箸箸	長24.0 幅0.6 厚0.6			f. 断面丸く加工 先端内曲している 一部砥付磨
37-10	*	木製品 箸状工具	残存長19.4 幅0.7 厚0.4			f. 断面台形状に加工 先端斜めに切り尖らす
37-11	*	木製品 箸状工具	長14.2 幅0.8 厚0.5			f. 断面多角形に加工 先端尖らす
37-12	*	木製品 箸状工具	長12.5 幅1.2 厚0.9			f. 断面四角状に加工 側面丁車・上下端削り加工 先端磨減
37-13	*	木製品 箸状工具	長9.8 幅1.7 厚1.1			f. 断面四角状に加工 先端斜の削り加工・磨減
37-14	*	金剛燧板芯	残存長22.5 幅8.4 厚0.2~0.3			f. 編織痕 全体を平らに調整 破損痕あり
37-15	*	木製品 皿	残存長21.0 幅1.4 厚0.5			f. 骨を基部に木釘で固定 骨全体をほぼ均一の厚さに整えている
37-16	*	用途不明木製品	長27.8 幅0.5~1.1 厚0.5			f. 全体が湾曲 先端火を受けたかの焼痕あり
37-17	*	用途不明木製品	長20.2~22.1 幅2.7 厚0.3			f. 全体を平らに加工 端部斜めに削り尖らす
37-18	*	用途不明木製品	長20.7 幅2.8 厚0.4~0.6			f. 全体丁寧な削りで整える 中央付近に切れ込み入る
37-19	*	用途不明木製品	長19.9 幅2.1~2.7 厚0.2			f. 全体平らに加工 数ヶ所に切り傷
37-20	*	用途不明木製品	長14.3 幅2.7 厚0.3			f. 全体平らに加工 端部斜めに削りこみ
37-21	*	用途不明木製品	長10.9 幅1.3~5.0 厚0.9~1.4			f. 三ヶ所に穿孔 中央穿孔に木釘残る 穿孔周囲に鉄分が変色した痕痕る
37-22	第4面 土壇17	かわらけ	9.0	7.5	1.6	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 小石 や粗土 c. 黄褐色
37-23	*	黄釉 皿	(20.4)	(16.6)	5.3	b. 明黄灰色 白色粒 黒色粒 褐色粒 石英粒 粗土 d. 黄褐色半透明 内外面薄く輪軸 外面体部下磨減 e. 良好 硬質
37-24	*	木製品 箸	長20.2 幅1.3 厚1.4			f. 断面多角形に加工 先端斜めに加工 一部磨耗
37-25	第4面 土壇19	漆器 輪	/	(6.3)	/	a. ロク口 内外面黒漆塗布 f. 内底面にロク口残き痕
37-26	第4面 土壇20	かわらけ	(14.2)	(12.0)	3.5	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄灰色
37-27	*	阿安窯系 青磁燧板文皿	(5.2)	/	/	a. 外底面へら削り 体部下端傾位へら削り b. 灰色 黒色粒 精良整熟 d. 灰緑色透明 内外面磨粉 外底面磨粉 f. 内底面磨粉文
37-28	*	石製品 火打石	長3.2 幅3.0 厚3.0			c. 白~黒色 f. 一部打撃痕
37-29	第4面 土壇21	かわらけ	(9.0)	(7.5)	(1.7)	a. ロク口 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 褐色
37-30	*	木製品 箸	残存長19.9 幅0.5 厚0.4			f. 断面五角形に加工 先端尖らせ気味 下端焼痕
37-31	第4面 土壇30	かわらけ	(14.0)	(10.4)	3.0	a. ロク口 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄褐色 f. 内外面煤付着 燈明皿 口縁注口あり
37-32	第4面 土壇31	湿灰 鉢鉢	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 良土 d. 灰紫色 内面体部~外面体部下位輪軸 f. 輪軸れが跡残るか外面灰白色点状
37-33	第4面 土壇36	用途不明木製品	残存長9.1 残存幅2.7 厚0.5			f. 全体を平らに加工 側面丸味をもつ加工 板草履片
38-1	第4面 井戸1	かわらけ	7.6	5.4	1.9	a. ロク口 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色
38-2	*	瀬戸 鉢	底部小片			b. 黄灰色 砂粒 白色粒 良土 d. 明灰緑色半透明 内面薄く輪軸 外底面磨粉 e. 良好 硬質 f. 外底粘土塊付着 重ね焼き痕か
38-3	*	瀬戸 水注	胴部径(10.3) 注口径1.5 注口内径0.6			b. 灰色 砂粒 良土 d. 灰緑色透明 青入りより一部白く 断面口・口縁に厚く輪軸 下位に輪軸 f. 胴部に厚く輪軸 赤褐色に発色 内面磨粉 e. 良好 硬質 f. 胴部に二重の輪軸痕 内面に炭化付着
38-4	*	瀬戸 洗	口縁部片			b. 黄灰色 砂粒 褐色粒 良土 d. 灰緑色半透明 内外面輪軸 貫入 靨気泡あり 一部白濁 e. 良好 硬質 f. 外面口縁部下連珠状の貼付けが周回
38-5	*	常滑 程鉢Ⅱ類	(35.8)	/	/	b. 茶褐色 黒色粒 小石粒 石英粒 多量 c. 暗赤褐色
38-6	*	瓦瓦(平瓦)	残存長3.4 残存幅6.2 厚0.7~0.9			a. 断面布目面 凸面平行斜削位の叩き 側面へら削り b. 灰色 砂粒 雲母 小石粒 良土 c. 灰色 e. 良好 軟質 f. 古代瓦
38-7	第4面 井戸2	漆器 輪	(16.0)	/	/	f. 内外面黒漆塗布
38-8	*	漆器 輪	(16.0)	/	/	f. 外面黒漆塗布 内面煤剥離

表11 遺物観察表()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・薬土 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
38-9	第4面 井戸2	木製品 箸	長19.6	幅0.5	厚0.5	f.刃物で断面四角形に加工 先端尖る
38-10	*	木製品 箸	長20.1	幅0.5	厚0.4	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖り気味
38-11	*	木製品 箸	長20.4	幅0.5	厚0.2	f.刃物で断面四角状に加工 両端尖り気味
38-12	*	木製品 箸	長22.0	幅0.4	厚0.5	f.刃物で断面多角形に加工 両端尖る 先端折れ曲がる
38-13	*	木製品 箸	長22.2	幅0.65	厚0.25	f.刃物で断面四角状に加工 先端尖り気味
38-14	*	木製品 箸	長22.5	幅0.85	厚0.4	f.刃物で断面六角形に加工 先端尖り気味
38-15	*	木製品 箸	長23.5	幅0.65	厚0.5	f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
38-16	*	木製品 箸	長23.5	幅0.6	厚0.4	f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
38-17	*	木製品 刀形代か	長(23.8)	幅(1.7)	厚0.3	f.先端斜めに削り加工
38-18	*	木製品 漆面下駄	台部長22.7 幅10.4 厚1.7 前後径0.7 横径1.2 前後高8.7 厚3.0			f.前上部指圧痕 前歯先端部磨痕 後歯根元残し破損 木地全体が傷んで いる
38-19	第4面 P10	かわらけ	8.8	6.0	1.9	h.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 やや砂質 c. 黄灰色 f.内面残付着 燈明皿 注口2あり
38-20	第4面 P16	かわらけ	(8.8)	(6.8)	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄褐色
38-21	第4面 P18	石製品 硯	長4.9 幅5.7 厚0.5~0.7			c.灰色 f.背割製 二次焼成か大部分割離損壊 中央部に円形の穿孔 円芯 の部分まで円錐状に穿つ
38-22	第4面 P21	灰瓦(平瓦)	長5.0 幅6.5 厚1.8~2.0			a.凹面縦位の指ナゲ 凸面離れ砂 縦位の指ナゲ 断面・端へう削り b.灰色 砂粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.灰黒色 e.良好 軟質
38-23	第4面 P27	かわらけ	(13.2)	(12.0)	3.5	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
38-24	*	龍泉窯系 青磁刺花文碗	(16.2)	/	/	d.黄灰色 精良堅緻 気孔あり d.灰緑色透明 内外面施釉 気泡あり f.内 面刺花文
38-1	第3面下 ~第4面上	極小内折れ かわらけ	(4.4)	(3.8)	0.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母少量 良土 c.灰褐色
38-2	*	極小内折れ かわらけ	5.2	4.6	1.0	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.褐色
38-3	*	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
38-4	*	かわらけ	(7.8)	(6.0)	2.0	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄褐色
38-5	*	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.75	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 白針 良土 c.黄灰色
38-6	*	かわらけ	8.0	6.4	1.7	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c.黄灰色
38-7	*	かわらけ	(8.0)	6.4	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
38-8	*	かわらけ	8.2	6.6	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 良土 c.黄灰色 f.厚く付着 燈明皿 注口あり
38-9	*	かわらけ	(8.0)	(6.6)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
38-10	*	かわらけ	8.2	6.4	1.9	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 良土 粉質 c.黄灰色
38-11	*	かわらけ	(8.4)	(7.4)	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
38-12	*	かわらけ	8.8	6.0	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 やや 砂質 c.黄褐色 f.見込みナゲなし
38-13	*	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.0	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色
38-14	*	かわらけ	12.6	9.0	3.5	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c.褐色
38-15	*	かわらけ	(12.3)	(8.2)	3.5	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄褐色
38-16	*	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c.褐色
38-17	*	かわらけ	(12.4)	(9.0)	3.5	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c. 黄褐色
38-18	*	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.褐色 f.内面残付着 燈明皿
38-19	*	かわらけ	(9.0)	(7.8)	1.8	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄灰色
38-20	*	かわらけ	(8.8)	(8.0)	2.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 白針 良土 c.黄褐色
38-21	*	かわらけ	(12.8)	(11.8)	(8.5)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 良土 粉質 c.褐色
38-22	*	かわらけ	(13.4)	(12.0)	4.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 雲母 良土 c.黄褐色
38-23	*	龍泉窯系 青磁鎗蓮弁文碗	(13.8)	/	/	b.灰白色 精良堅緻 d.明灰緑色不透明 やや厚めに施釉 f.外面鎗蓮弁文 覆弁
38-24	*	龍泉窯系 青磁鎗蓮弁文碗	(14.0)	/	/	b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色透明 薄くに施釉 粗い貫入あり f.外面鎗 蓮弁文 覆弁
38-25	*	龍泉窯系 青磁刺花文碗				口縁部小片 h.灰色 黒色粒 精良堅緻 d.灰緑色透明 粗い貫入あり f.内面刺花文
38-26	*	龍泉窯系 青磁刺花文碗				口縁部小片 h.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.灰緑色透明 内外面施釉 貫入あり f.内面刺 花文
38-27	*	龍泉窯系 青磁刺花文碗				口縁部小片 h.灰色 褐色粒 精良堅緻 d.黄味灰緑色透明 内外面施釉 f.内面刺花文
38-28	*	青磁 無文碗				口縁部小片 h.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.灰緑色透明 内外面施釉 f.無文
38-29	*	青白磁 皿	6.0	/	/	h.白色 精良堅緻 d.明黄灰色半透明 やや厚めに施釉 f.内面に押型した花文か
38-30	*	常滑 壺				底部小片 a.砂目底 h.暗灰色 砂粒 やや多量 c.褐色 内面降灰部灰緑色
38-31	*	常滑 壺				砂目底 h.灰黄色 砂粒 褐色粒 やや多量 c.褐色 内面降灰部灰白色
38-32	*	常滑 壺				緑帯幅1.5 h.灰褐色 砂粒 小石粒 やや多量 c.茶褐色 内面降灰部灰緑色
38-33	*	常滑 壺				底部小片 a.砂目底 h.暗灰色 砂粒 多量 c.茶褐色 内面降灰部灰緑色

表12 遺物観察表(2) ()は復元値

調査号	出土面・遺構	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
39-34	第3面下 ~第4面上	常滑 捏鉢1類	口縁部小片			b.灰褐色 砂粒 黒色粒 小石粒 多量 c.暗灰褐色
39-35	*	常滑 捏鉢1類	口縁部小片			b.灰色 砂粒 小石粒 少量 c.灰色
39-36	*	常滑 捏鉢1類	底部小片			a.貼付け高台 b.灰色 砂粒 黒色粒 少量 c.灰色
39-37	*	男瓦(丸瓦)	残存長 残存幅 8.0 厚 2.7~3.1 貫径径(18.0)			a.凸面側目叩き 丁寧なナデ 凹面布目痕 糸切痕 b.灰色 砂粒 雲母 精良土 c.灰色 e.良好 軟質
39-38	*	女瓦(平瓦)	残存長 9.0 残存幅 15.0 厚 2.0~2.2			a.凹面布目痕 斜位のナデ 凸面側目叩き 糸切痕 離れ砂 割面へウ割り b.灰色 砂粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 軟質
39-39	*	滑石製網	残存長 9.0 残存幅 5.0 厚 1.5~3.1			e.灰色 f.滑石製 内面丸味を帯びた加工 口縁平らに加工
39-40	*	鉄製品 釘	長 7.3 幅 0.4~0.7 厚 0.45			
39-41	*	銅製品 鏡	/	/	/	f.元宝通宝 北宋 初年 1078年
39-42	*	銅製品 鏡	/	/	/	f.口通宝 初年不明
39-43	*	骨製品 筭	残存長 7.6 幅 7.5 厚 0.2			c.黄灰色 f.下位部分 汚れの混入りか
40-44	*	木製品 栓	長 8.4 径 1.8			f.上部角を面取り 底面大 下部先端丸く加工 磨滅大
40-45	*	木製品 箸	長 15.7 幅 0.7~0.9 厚 0.7~0.75			f.上部丸味をつけた面取り 下部先端鋭利に切り削り出す
40-46	*	板草履芯	長 17.4 幅 4.0 厚 0.2			f.前端部穿孔あり 側縁方形の袂り
40-47	*	木製品 連筒下駄	台部長 23.6 幅 9.4 厚 1.3 前筒径 0.8 横筒径 1.3 筒部高 1.7 厚 3.4			f.前端部押圧痕 前筒に2本の鉄釘打つ 後筒破損 木地全体が傷んでいる
40-48	*	用途不明木製品	残存長 19.5 幅 1.1~1.5 厚 0.5			f.全体丁寧な削り 先端に向かってやや細く削る
40-49	*	用途不明木製品	残存長 19.6 幅 0.7 厚 0.6			f.断面台形状に加工 先端鋭利に削り出し
40-50	*	用途不明木製品	残存長 12.7 幅 1.7 残存厚 0.3			f.両端磨らかに加工 裏面破損
40-51	*	用途不明木製品	長 12.5 幅 5.0 厚 0.7			f.折敷底板再加工中 刃物による削痕 遺使用か
40-52	*	用途不明木製品	残存長 4.4 幅 1.3 残存厚 0.5~0.7 内径 2.9			f.六角形の筒部状の一部 滑らかに丸味をもたせた加工

第4章 まとめ

今回の調査地点では、大正12（1923）年の関東大震災の後片づけのために掘られたゴミ穴が深くまで及んでおり、第1・2面を中心に生活面や遺構が破壊されていた。また限られた範囲内での調査であり。残念ながら鎌倉時代当時、この場がどのような空間の拡がりを見せていたか、その様相や性格を遺構からは明確な形で読み取ることは残念ながらできなかった。しかし、遺構大半の主軸方位は現若宮大路と平行もしくは直交する位置関係にあり、調査地が若宮大路と密接にかかわって規制を受けた敷地・区画であったと考えられる。

以下、第1面～第4面において検出した遺構の様相を整理し、出土遺物の組成や特徴なども含めて全体を概ね三時期に分けて概要を述べたことにしたい。

第4面の様相は、海拔標高6.8m前後の強く締まった中世地山上の生活面であり、面上層の全域には厚めの有機物腐蝕土の堆積が認められ。また発見した遺構の中で大小土壌の覆土は殆どが有機物腐蝕土で構成されており、出土遺物の組成も含めて考えると、連続的に掘り返されたゴミ穴的な土壌が遺構の主体を占めている。発見遺構からは調査地点の性格は掴めなかったが、若宮大路に隣接した地点にあたり、ここが有力武士の屋敷地の一角とみてよいであろう。その様相は広い武家屋敷の中の空閑地、裏手のようなところでゴミなどが廃棄されたような場所と想像される。年代は出土遺物からみて鎌倉時代前期に属するおそらく13世紀前半頃に相当しよう。

第3面の様相は、中世地山上に堆積した締まりの弱い有機物腐蝕土を覆うように海砂や土丹版築の地業を何度も施して地盤を固めた様子が観察された。検出した遺構は主に繰り返し掘り直された重複するゴミ穴的な土壌と建物配置を示さない柱穴など密度の高い遺構であるが、調査区南西域だけは木杭・横板材・礎板などが確認され、調査区外に拡がる建物遺構の存在が考えられよう。調査区内の土地利用の性格は判然としないが、遺構の様相をみると前代から継承された屋敷内の空間利用のあり方を踏襲したものと考えられる。搬入遺物からみた年代は、同安窯・龍泉窯系青磁碗や常滑・渥美窯製品など13世紀前半の要素をもつ資料も認められるが、主に13世紀中～後半として大過ないと思われる。

第1・2面の様相は、第1面は調査区全体で関東大震災後の復旧作業に伴う大擾乱や近代の建築建物の基礎工事で打ち込まれた丸太材が深くまで及びかなり荒れた様子であった。この面は疎密の土丹版築による整地層とその上面を覆う炭化物層で構成され、その下の第2面とは層位による時間的新旧関係はあるが両生活面ともに掘立柱建物を構成しない柱穴、ゴミ穴の土壌や南北方向の溝と思われる遺構などが連続して発見されるのみであった。第3面の様相と同様に調査区内の土地利用の性格は不明であるが、遺物組成からみて概ね13世紀後葉から14世紀前半を主体とした年代様相が伺えよう。

参考文献

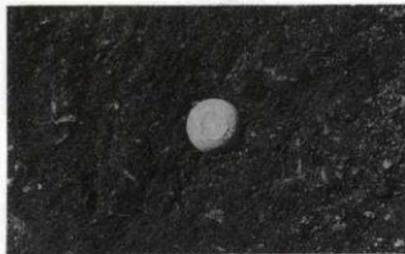
- 宗森秀明 1996 『かわらけと瓦の廃棄・転用』『横小路周辺遺跡—二階堂字横小路110番3地点—』
・原廣志 横小路周辺遺跡発掘調査団
- 宗森富貴子 1996 『鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について—古瀬戸前期から後期までの出土様相—』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯
- 馬淵和雄 1997 『中世食器の地域性 鎌倉』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

図版 1



▲ a. I区 第1面全景 (南から)
▼ II区





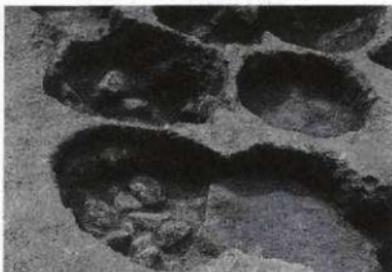
▲ a. かわらけ出土状況 (南から)



▲ b. 瀬戸卸皿出土状況 (南から)



▲ c. 土壇 7 (東から)



▲ d. P17・18・27 (北から)



▲ e. P13 (西から)

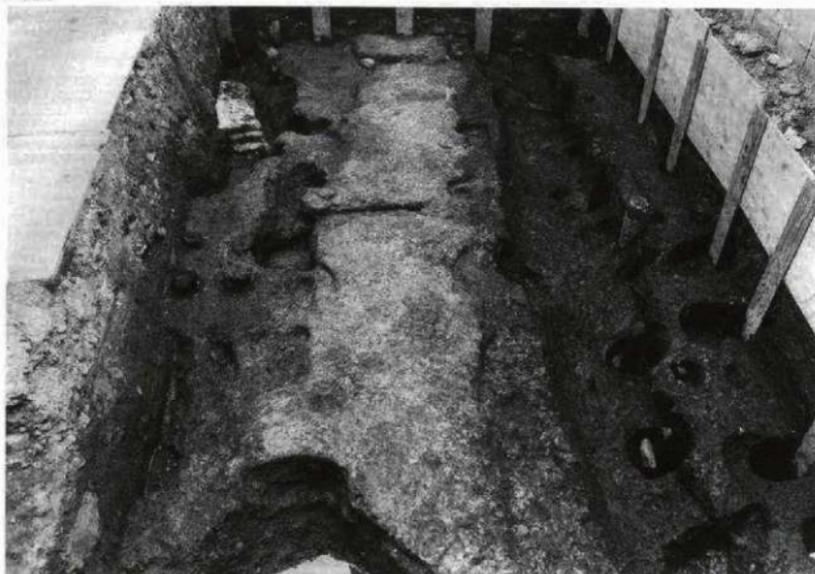


▲ f. P15 (北から)



▲ g. P16 (西から)

第 1 面



▲ a. | 区 第2面全景 (南から)
▼ || 区





◀ a. 土壇 6 (南から)



◀ b. 溝 1 (北から)



▲ c. 溝 1 土層堆積 (南から)

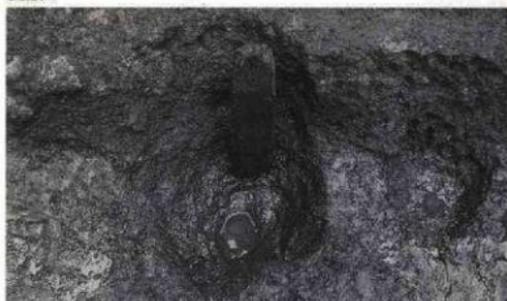


▲ d. 肩骨出土状況 (西から)



▲ e. 陶枕出土状況 (西から)

第 2 面



◀ a. P8 (西から)

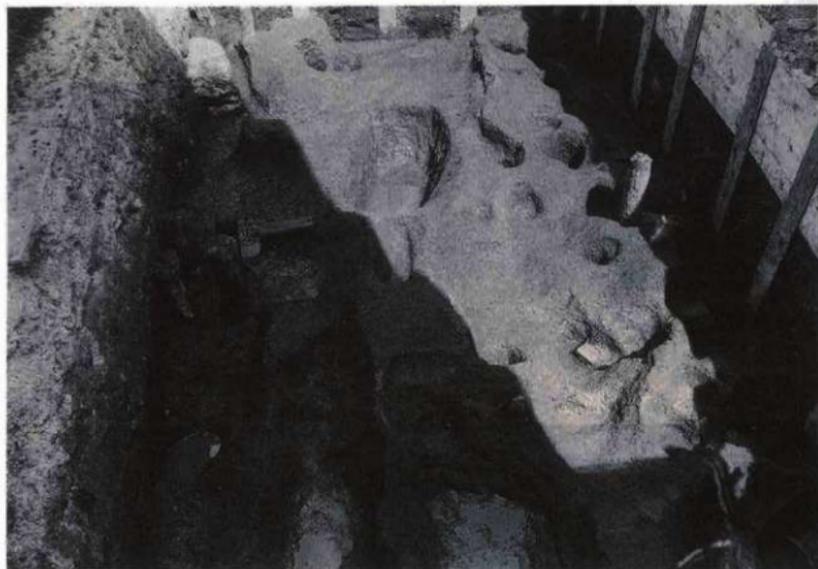
b. P12 (西から) ▶
面取柱で底面には
二段重ねの礎板や
土丹塊の栗石がある



◀ c. P33 (東から)

d. P39 (東から) ▶





▲ a. Ⅰ区
Ⅱ区 第3.4面全景(南から)



図版 7



(北東から)

a. 調査区北東 網代堀 ▲▶



(西から)



(南から)

b. 調査区南西 枕列 ▲▶▶

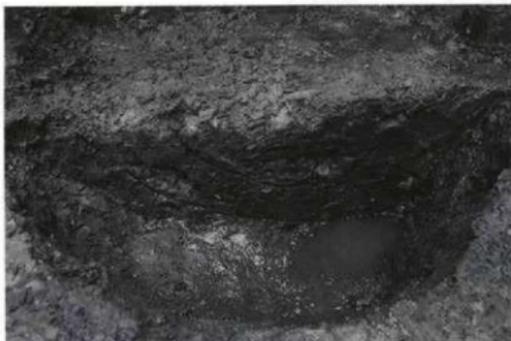


(西から)



(南から)

第 3 面



▲ a. 土壌1 覆土土層堆積 (西から)



▲ b. 土壌2~4 (南から)



▲ c. 土壌10 (北から)



▲ d. P21 (北から)



▲ e. P5 (南から)



◀ a. P33 (北から)



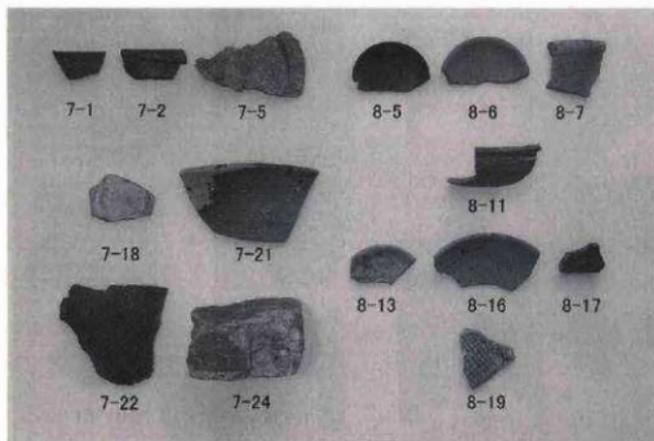
b. P34 (北から) ▶



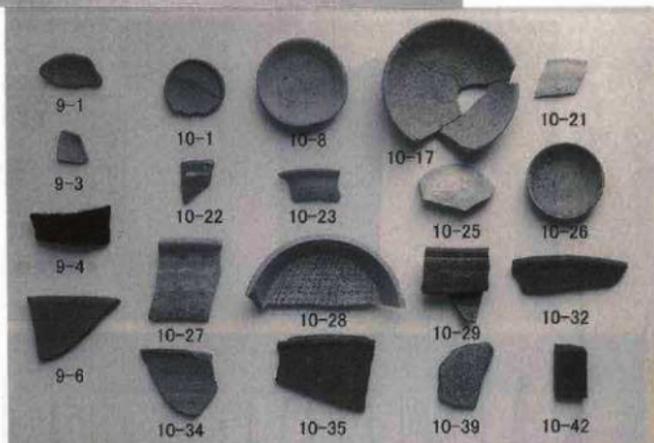
◀ c. 調査区西壁際
柱穴及び土壌 (西から)



d. 井戸2 (北から) ▶



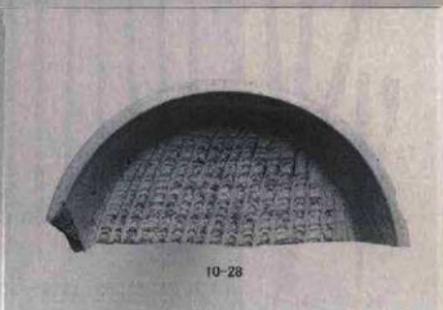
◀ a. 第1面
各土層・ピット



b. 表土層・
第1面上 ▶

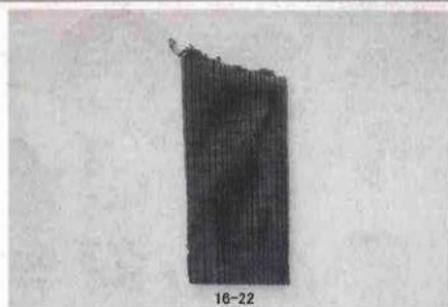
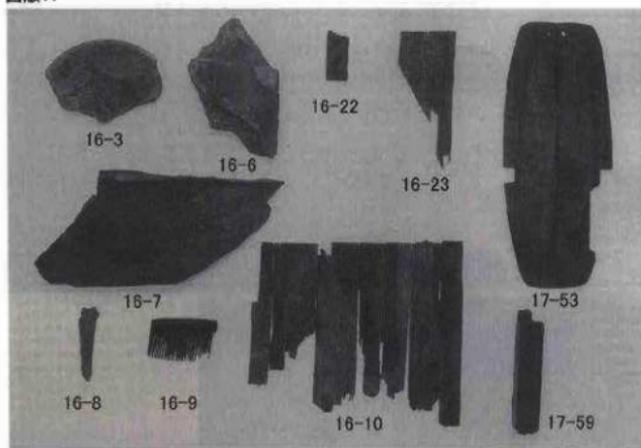


▲ 第1面上出土 瀬戸入子



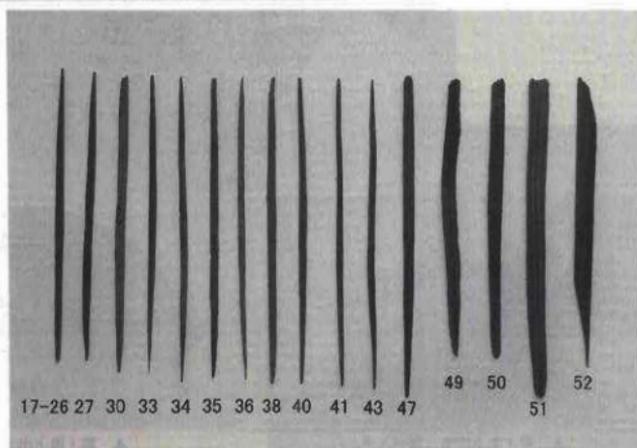
▲ 第1面上出土 瀬戸卸皿

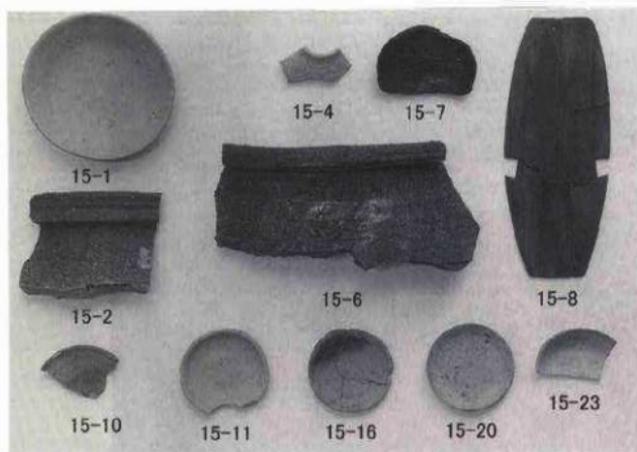
圖版11



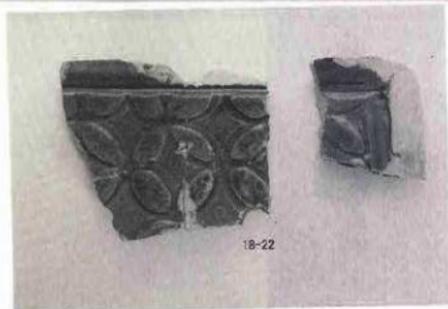
◆ a. 第2面土壤6

◀ 墨書折數 (判談不明)



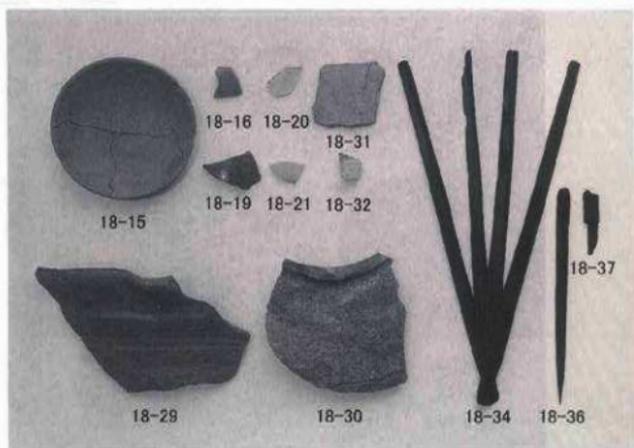


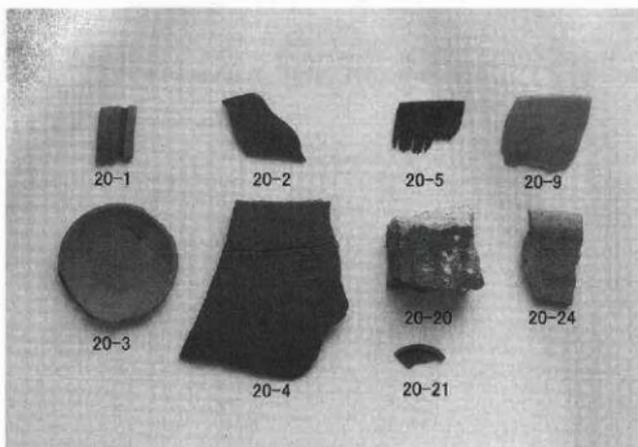
◀ a. 第2面各土塊



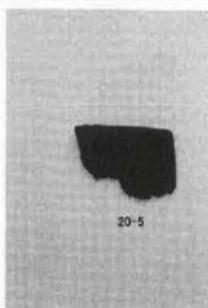
◀ 溝1出土 陶枕

b. 第2面溝1 ▶



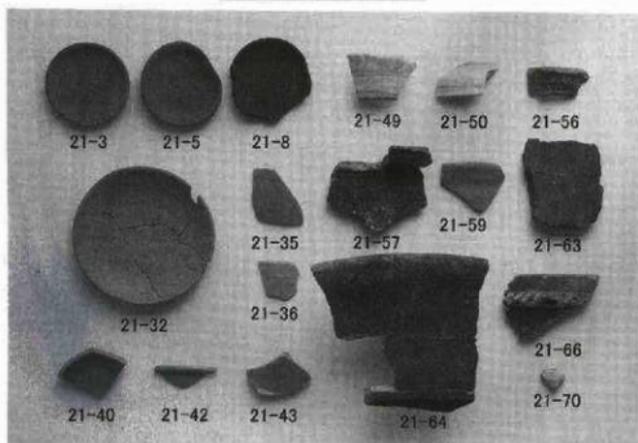


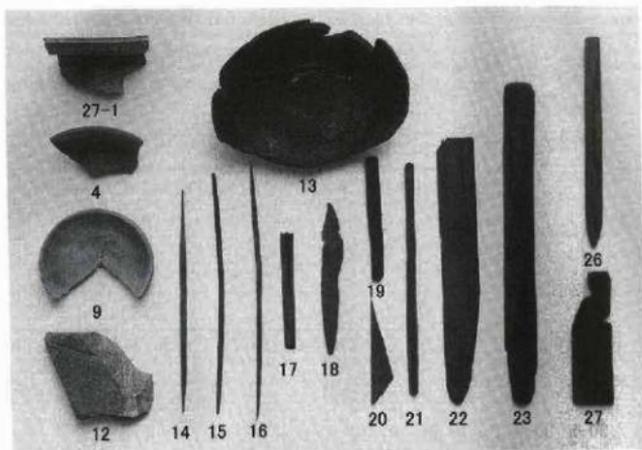
▲ a. 第2面各ビット



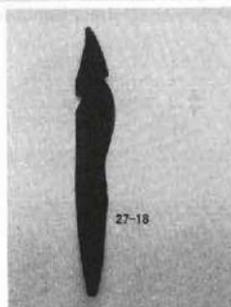
◀ P13 出土 櫛

b. 第1面下~第2面上

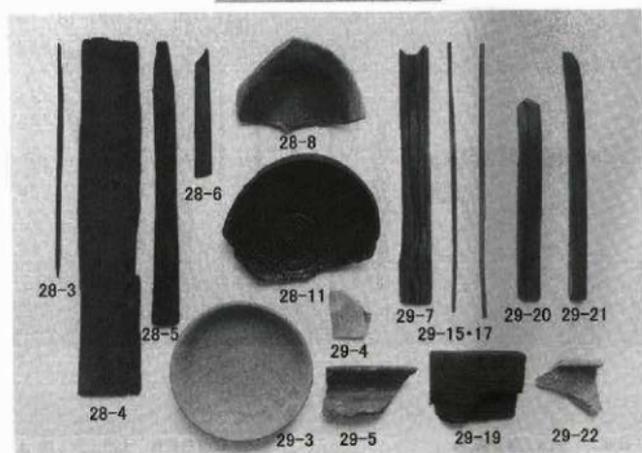


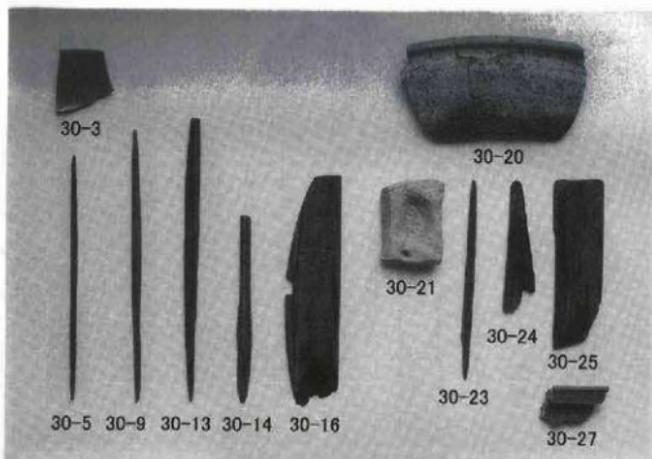


主墳2出土 人形代 ▶

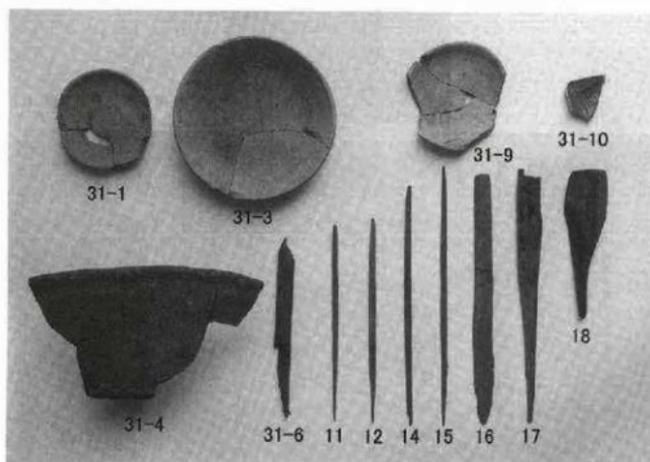


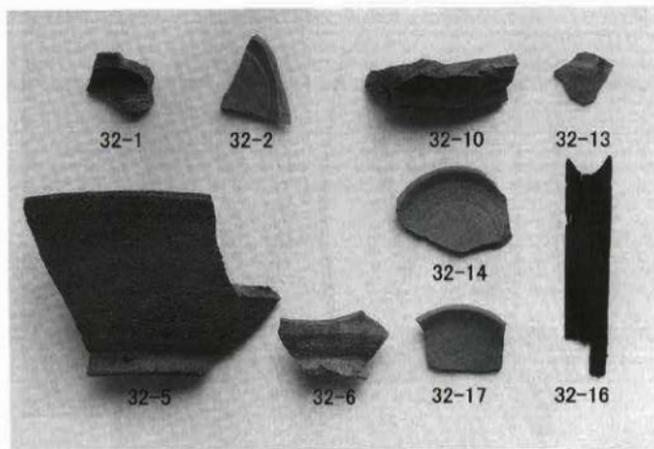
◀ a. 第3面各土壙





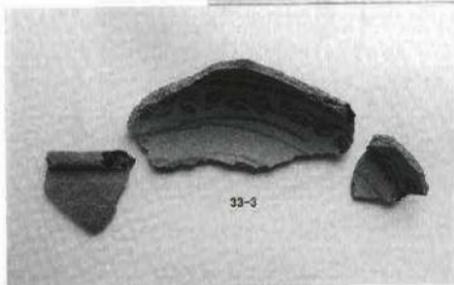
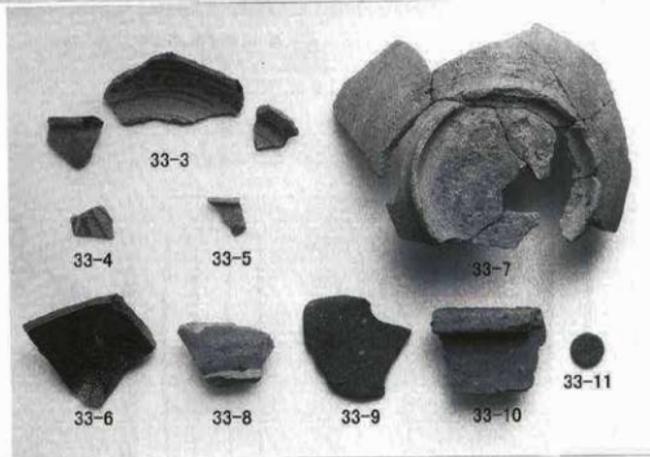
▲ a. 第3面各土塊





◀ a. 第3面
各ビット

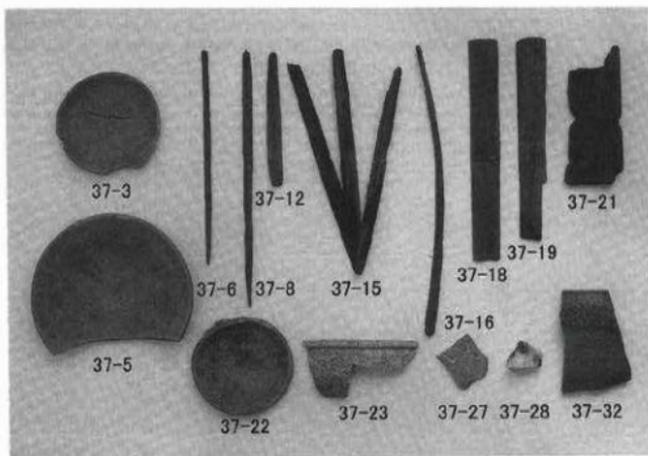
b. 第2面下～
第3面上 ▶



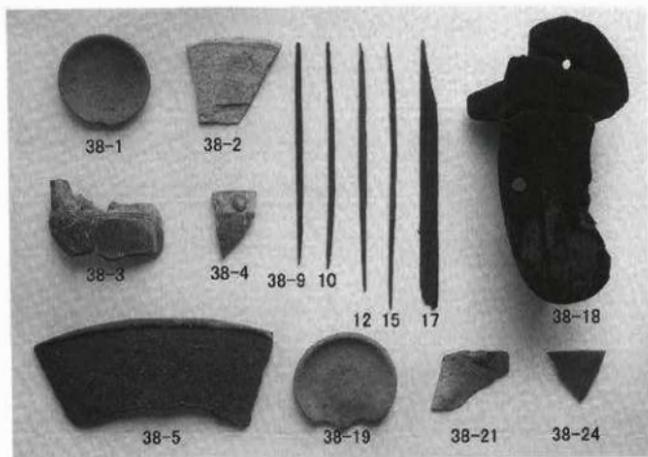
▲ 第3面上出土 黄釉鉄絵盤



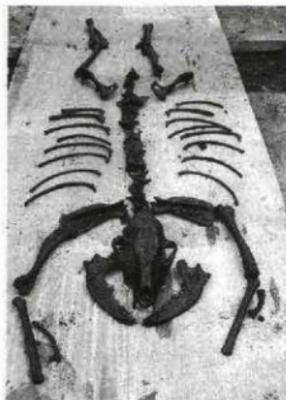
▲ 第3面上出土 土製品 駒



▲ a. 第4面 各土塊



▲ b. 第4面 各井戸・ピット

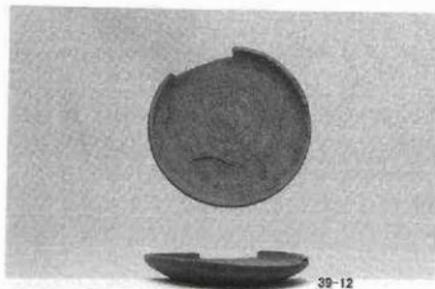
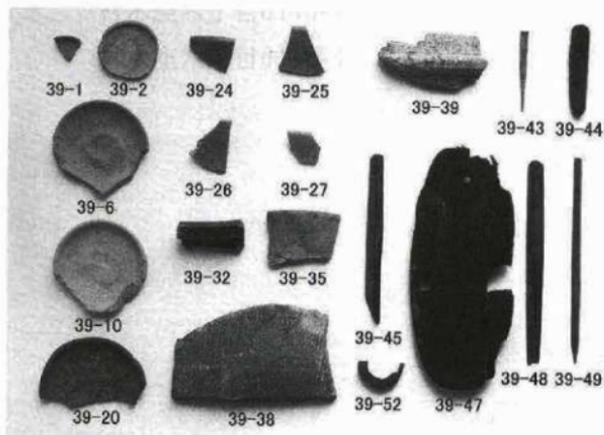


a. ▶
第4面井戸2出土犬骨
(現地撮影)



▲ 同左 前身体部分
犬骨は、現地調査終了後、整理作業までの時間経過で腐食が進み激しく劣化していた為、現地撮影写真を掲載したことをお断りしておきたい。

b. ▶
第3面下ノ第4面上出土遺物



▲ かわらけ小皿 (図39-12)
口口口成形であるが、内底面は未調整口口口目痕を残す。

39-12

べんが やつ い せき
弁ヶ谷遺跡 (No. 249)

材木座六丁目643番5

材木座六丁目643番4

例 言

1. 本報は、弁ヶ谷遺跡 (No.249) で実施した2地点の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 2地点の地番と本報での呼称は以下のとおり
材木座六丁目 643 番地 5 「Ⅰ区」
材木座六丁目 643 番地 4 ほか 「Ⅱ区」
3. 調査期間 平成 15 年 10 月 20 日～同年 11 月 17 日
4. 調査面積 材木座六丁目 643 番地 5 25.80㎡
材木座六丁目 643 番地 4 ほか 25.00㎡
5. 本地点の整理上の略称は BZ 6643 とした。
6. 調査体制
担 当 者 馬淵和雄
調 査 員 鍛冶屋勝二・松原康子 (整理)
調査補助員 鈴木弘太・古田土俊一・宇都洋平・佐藤あおい (整理)
作 業 員 秋田公佑・天野隆男・牛嶋道夫・奥山利平・川島仁司・倉沢六郎・沼上三代治・山本記康
7. 本報作成分担
遺構図版作成 鍛冶屋
遺物実測 鍛冶屋・松原・佐藤
実測図墨入れ 松原
挿図版組 鍛冶屋・松原・馬淵
遺物写真撮影 鍛冶屋・馬淵
写真版組 鍛冶屋
原稿執筆 馬淵・鍛冶屋・松原
編集・総括 鍛冶屋
8. 原稿執筆者については担当箇所末尾に名を記した。

本文目次

第1章 遺跡と調査地点の概観	89
1. 位置と地勢	89
2. 歴史的環境	92
第2章 調査の概要	101
1. 調査にいたる経緯	101
2. 調査方法と経過	101
第3章 調査の成果	103
第1節 層序と面の概要	103
第2節 各説	106
1. I区1面	106
2. I区2a面	110
3. I区2b面	111
4. II区2面	117
5. I区3面	117
6. II区3面	122
7. II区4面	126
8. 中世以前の遺物	130
9. 表採遺物	130
第4章 調査のまとめ	138
1. 遺構の変遷と年代	138
2. 補論	139

図目次

図1 調査地点位置図	90	図15 I区2面(a・b一括)出土遺物	116
図2 明治15年ごろの遺跡周辺地図	91	図16 II区2面遺構全図、柱六列1、 遺構および2面出土遺物	118
図3 座標図	102	図17 I区3面遺構全図、建物4、柱六列4・5	119
図4 調査区位置関係図	103	図18 I区3面井戸1、土坑26~32、 3面遺構出土遺物	121
図5 I区調査区壁土層図、I区深掘り出土遺物	104	図19 I区3面出土遺物	122
図6 II区調査区壁土層図	105	図20 II区3面遺構全図、建物1、柱六列2~4	123
図7 I区1面遺構全図、建物1、 柱六列1、1面遺構出土遺物(1)	107	図21 II区3面溝1、土坑1・2・4・5、 3面遺構および深掘り出土遺物	124
図8 I区1面柱六列2、土坑2~5、 1面遺構出土遺物(2)	108	図22 II区3面出土遺物	125
図9 I区1面遺構出土遺物(3)	109	図23 II区4面遺構全図、柱六列5~8、 P.49、土坑11・12	127
図10 I区1面出土遺物	110	図24 II区方形土坑1、 4面遺構および深掘り出土遺物	128
図11 I区2a面遺構全図、土坑8~10、 同出土遺物	111	図25 II区4面出土遺物	129
図12 I区2b面遺構全図、建物2・3、柱六列3	112	図26 中世以前の遺物・採集遺物	130
図13 I区2b面土坑11~13・16~19・ 22~25、P.22、2b面遺構出土遺物(1)	114	図27 遺構変遷図	141
図14 I区2b面遺構出土遺物(2)	115		

表 目 次

表1 出土遺物観察表(1).....131	表5 出土遺物観察表(5).....135
表2 出土遺物観察表(2).....132	表6 出土遺物観察表(6).....136
表3 出土遺物観察表(3).....133	表7 出土遺物観察表(7).....137
表4 出土遺物観察表(4).....134	表8 建物・柱穴一覧.....139

図 版 目 次

図版1-1 調査地点鳥瞰.....142	図版4-1 I区北壁土層断面.....145
1-2 調査地区近景(北から).....142	4-2 I区東壁土層断面.....145
1-3 調査地区近景(中央の道が 高御倉小路、南から).....142	4-3 I区南壁土層断面.....145
図版2-1 I区1面全景(北から).....143	図版5-1 II区2面全景(南から).....146
2-2 I区2a面全景(北から).....143	5-2 II区3面全景(南から).....146
2-3 I区2b面全景(北から).....143	5-3 II区4面(1)全景(南から).....146
図版3-1 I区3面全景(北から).....144	図版6-1 II区4面(2)全景(西から).....147
3-2 I区1面土坑5(北から).....144	6-2 II区北壁土層断面.....147
3-3 I区1面建物1P.2内 瀬戸広口窓(南から).....144	6-3 II区西壁土層断面.....147
3-4 I区3面井戸1・木枠(西から).....144	図版7 出土遺物(1).....148
3-5 I区3面柱穴列4P.3(北から).....144	図版8 出土遺物(2).....149
	図版9 出土遺物(3).....150
	図版10 出土遺物(4).....151

第1章 遺跡と調査地点の概観

1. 位置と地勢

鎌倉市材木座は市街地東南部に位置し、材木座海岸に南面する。かつての乱橋村（北半部）と材木座村（南半部）の2村を合わせた地域で、江戸時代前期の一時期、および1889年（明治22）～1957年（昭和32）には「乱橋材木座村」と称されていた（以下、年紀表記については、明治時代以前は年号を優先し、以後は西暦を優先する）。南北1.5 km、東西1.2 kmほどの広さがあり、北辺は鉄道線を境に大町と、西辺は滑川を隔てて由比ガ浜と、東辺は名越山塊をはさんで逗子市と接する。

近代以前の材木座地域西半部（現在の上河原・下河原一帯）は、海岸の砂堆を除いて滑川河口近くに形成された沼沢地もしくは低湿地であった。明治時代に名越隧道掘削にともなう土砂で埋め立てられ、現在のような居住可能な環境となった。したがって、それ以前の人跡は、ほぼ元八幡宮を中心とした北半部、東半部、そして九品寺から飯島にかけての東南海岸部一帯に限られる。このうち東半部がかつての乱橋村、東南部が材木座村にあたる。調査地点のある弁ヶ谷は材木座の東端に位置する。

弁ヶ谷は逗子市小坪との境の山裾に開折された谷である。長さ500 mほど、途中いくらか北に折れるが、ほぼ東北東—西南西に主軸を持ち、3つないし4つの枝谷を蔵する。調査地点はその開口部近くのやや東寄りに位置する。ここからはほんの200 mほどで逗子市との境となる。また、現在は住宅によって視界が遮られているものの、海岸は実際には200～250 mという目と鼻の先にある。往時の調査地点は浜の縁辺とっていい位置に相当したであろう。貞享二年（1865）成立の『新編鎌倉志』（『大日本地誌大系』巻七）には、弁ヶ谷について、「補陀落寺の東の谷を云」とある。

弁ヶ谷はかつての名越の域内に含まれる。「名越」は、『新編鎌倉志』に「大町の四辻より、山に随^つて南の材木座村に至るまでの東方を、皆名越という」とあり、相当に広大な地域であったことがわかる。後述するように、この谷にはかつて新善光寺という寺院があった。この寺院に関連して、『吾妻鏡』正嘉二年（1258）五月五日条に、尾張前司（名越時章）の「名越山庄」が「新善光寺辺」にある、と割注があり、また延慶三年（1310）には金沢実時の「名越新善光寺下毘沙門堂入地」が確認されている（『東寺百合文書』リ）。このことからみても、弁ヶ谷が名越に属していたことは確実である。なお、名越の範囲が『新編鎌倉志』の通りだとすると、これはほぼ西方の「甘縄」に対面する位置に相当する。甘縄も二ノ島居西の並び付近から長谷観音前交差点付近までにおよぶ、鎌倉中西半部の広範な地域をさす。

弁ヶ谷からは豆腐川という名の小さな独立河川が海に流れ込む。この川に沿って小道が海岸通りから通じており、これを「高御倉小路」という。高御倉小路を弁ヶ谷に向かって入ると、ほぼ200 mで西からの道に接続する地点がくる。調査地点はこの小さな丁字型交差点の北西角にある。現在の住宅地割で東西に隣り合った2区画である。『新編相模国風土記稿』には、乱橋村の小字として高御倉小路が記されている。現在の地番は鎌倉市材木座六丁目643番4および5。

調査地点付近で地表面の標高は7.3 m前後、谷の中の平坦面最奥部では30 m前後であり、さほど広くはない谷の中で比高差は大きい。調査地点の基盤は海成砂層で、標高4.7 m程度だから、乾燥化は海退の著しく進んだ縄文晩期から弥生前期を待たねばならなかったはずである。上本進二によると、材木座の海岸線が現在に近い位置まで退くのは中世だという（上本2000, 第196～204図）。

後述するように、弁ヶ谷には中世にいくつかの寺が存在し、浄土宗西山派（義）を中心とした独特の宗教空間が形成されていたことで知られる（高橋1995）。調査地点はこのうち谷口のすぐ東にあったと

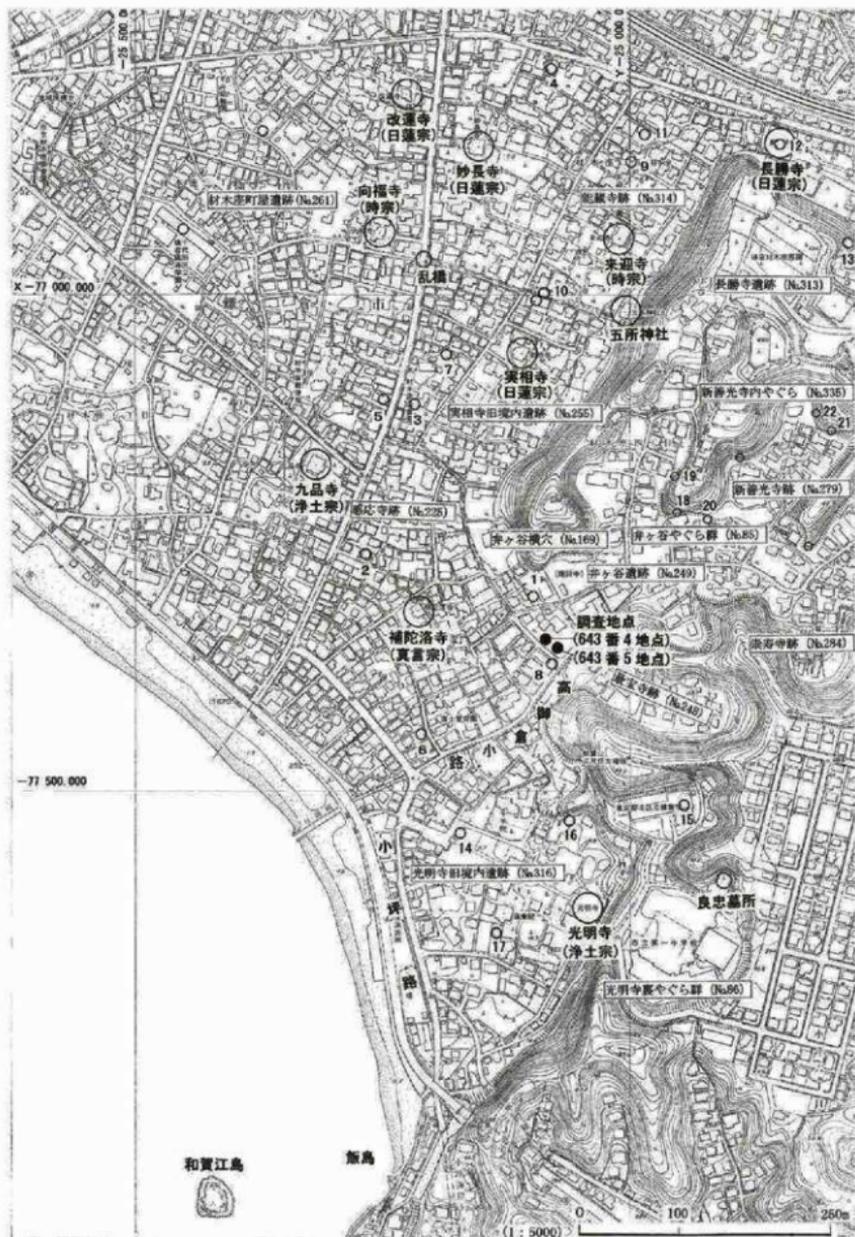


図1 調査地点位置図



図2 明治15年ごろの遺跡周辺地図（迅速測図）

される最宝寺のすぐ前（西側）になる。谷開口部には源頼朝が開いたと伝える真言宗補陀落寺があり、浄土宗の大利・光明寺も、調査地点から直線距離でほんの200m足らずの南方にある。

図1調査地点名一表記No.の地番、調査担当者、調査年度を示す。○内は同地点の報告書編纂者、発行年度を示す。詳細は第4章末尾・引用文献内に記した。

井ヶ谷遺跡 (No.249)

1. 材木座4-336-7 宮田1999(宮田眞ほか2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 第1分冊』) 感応寺跡 (No.225)

2. 材木座6-722-1 沙見2002(沙見一夫2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 第2分冊』)

材木座町屋遺跡 (No.261)

3. 材木座4-260-1 松尾・田代1988(田代郁夫1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』) 4. 材木座2-217-6 瀬田1993(瀬田哲夫1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 第2分冊』) 5. 材木座1-890-7 沙見1998(沙見一夫2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 第1分冊』) 6. 材木座6-780-1 大河内1999(大河内ほか2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 第2分冊』) 7. 材木座4-256-1 野本2000(沙見一夫2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 第2分冊』) 8. 材木座6-674-8外・9・10・15 齋木2002~03(齋木秀雄ほか2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』(第1分冊))

能蔵寺跡 (No.314)

9. 材木座2-303 大三輪1971(松尾宜方1983『鎌倉埋蔵文化財発掘調査年報1』) 10. 材木座2-274-4 馬淵1993(馬淵和雄1995『能蔵寺跡』) 11. 材木座2-297-1 大河内2001(伊丹まどか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』)

長勝寺遺跡 (No.313)

12. 材木座2-2182-2 大三輪1976(大三輪龍彦ほか1978『長勝寺遺跡』) 13. 材木座2-2168-3 田代1997(土屋浩美ほか1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』)

光明寺旧境内遺跡 (No.316)

14. 材木座6-846-1 斎木1977(松尾宜方1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』) 15. 材木座6-846-1 斎木1978~79年(斎木秀雄ほか1980『光明寺裏遺跡』) 16. 材木座6-846-1 斎木1984(斎木秀雄1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺』) 17. 材木座6-855-21外 福田2003

弁ヶ谷やぐら群 (No.85)

18. 材木座4-594-14 滝沢1986 19. 材木座4-594 田代1989(田代・原1991『平成元年鎌倉市急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』) 20. 材木座4-10-14 上田・依田2000(上田薫・依田亮一『かながわ考古学財団調査報告98 弁ヶ谷やぐら群』)

新善光寺内やぐら (No.335)

21. 材木座4-542-16他 原1987(原廣志ほか1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』) 22. 材木座4-12-7 長谷川1998~99(長谷川厚ほか1999『かながわ考古学財団調査報告74 鎌倉城(No.87)所在やぐら群』)

2. 歴史的環境

鎌倉時代以前の鎌倉東南部一帯

古代の鎌倉を語るのに欠くことのできない存在として、東海道がある。大化元年(645)に五畿七道制が定められてから、宝龜二年(771)年に改編されるまで、東海道は鎌倉を通過していた。これが中世、ひいては現代まで、鎌倉の集落構造に多大な影響を及ぼしたといっても過言でない(馬淵1994・2004ほか)。

東海道駅路は当時、相模国府から東進して鎌倉を通過、御浦(三浦)郡の馳水(現横須賀市走水)から房総にいたる道筋をたどった。しかし、それがどこを通過したかについてはいまだ定まらない。まず、鎌倉に入ってくる経路からして、大きく二通り予想される。ひとつは、海岸べりを東進し、稲村ガ崎のどこかを通過してくる、というもの(野口1993・馬淵1994)。もうひとつは藤沢市北部から南下し、大仏坂付近から入ってくる、というもの、である(木下1997)。複数の想定経路の存在はその時々々の相模国府の位置によるのだろう。鎌倉内においても、下馬四ツ角で若宮大路を横断する現県道鎌倉葉山線(旧国道134号線)説、その1本南に断続的に残る東西道路をそれとするもの(高柳1959)の二説がある。さらにその先についても、大町四ツ角から東に直進して名越山塊にいたるといものと、大町四ツ角から南に折れて小坪に向かう、という二説がある。

弁ヶ谷にとって問題は、最後に挙げた経路をとった場合である。谷開口部の眼前を通過することになるからだが、この問題は結局、考古学的調査によって古代官道の規格に合った道路が発見されるのをまつほかなかろう。この一帯の発掘調査では、ほとんど必ず律令時代の遺物が出土するといっている。その要因として、幹線道路が近在にあるからか、それとも鎌倉市内東南部に大規模な律令集落が存在したためかについては、まだまだ検討を要する。

現在の材木座地区が史料に現れるのは、『吾妻鏡』治承四年(1180)十月十二日条まで待たねばならない。この日の記事には、康平六年(1063)秋八月、源頼義が念願をかええてひそかに石清水八幡宮を勧請し、由比郷に瑞籬を営んだ、とある。このときの八幡宮は鎌倉時代になって『小林郷北山』に移転し、現在の鶴岡八幡宮となった。滑川河口近くに形成された沼沢地の北辺に当たるこの場所に、頼義はなぜ八幡神を勧請したのか。先に挙げたいくつかの古東海道の想定経路のうちで、県道鎌倉葉山線の1本南に断続的に残る東西道路にきわめて近い、という地理的要件が関連するのだろうか。

「材木座」とその歴史の変遷

材木座の地名は中世に材木を販売した座に由来する。史料上では鎌倉時代末期、金沢貞顕の被官と推定される「宗清」なる人物の、年末詳二月一日付極楽寺宛とみられる書状が早い例として知られる。

「(前略) 一日さいもくさ (材木座) に五六候ハで候しあいた、御さいもくあけす候事、心もとなくそんし候 (後略)」(『神奈川県史 資料編』2-1634号)

「焼亡した極楽寺を再建するためとみられる材木の購入に関して) 先だつてのある日、材木座に5×6寸角の材木がなかったため、(極楽寺への) 材木のご用達ができないでいることを心もとなく思っております」という意味に読める。前浜における資材調達を語る史料として、かつて石井進が注目したことでも知られる(石井1981)。

南北朝時代の貞治六年(1367)9月5日と10日の足利義詮御教書案では、「鎌倉材木座」が佐々木高氏(道誉)に返付されている(『神奈川県史 資料編』3-4606・4607、以下、地の文中で日付を記す場合は算用数字を、資料の条日として日付を記す場合は漢数字を用いる)。南北朝の動乱を経て、この頃には佐々木氏の所有するところとなっていたらしい。

周知の史料ではあるが、すでに建長五年(1253)10月11日、「和賀江津材木事」について、近年寸法が不法で使えないとして鎌倉幕府が長さなど規格を定めていることや(『吾妻鏡』同日条)、先の宗清書状にも「はまのさいもくうり」とみえることなどから、「材木座」の位置は和賀江付近と推定できる。おそらく「西浜」と称された飯島のどこかにあったはずである。建長五年の法令からは、すでにこの頃和賀江の辺にかなりの材木業者が集まっていたことがうかがえる。

座自体は鎌倉時代後期には生まれており、貞治六年佐々木高氏に返付されたという「鎌倉材木座」も座の名称とみるのが妥当であろう。しかし、それがいつ一帯の地名となったかは詳らかではない。江戸時代初期の「十二所村等鎌倉中幕領寺社領相給村総高帳」には、「材木座分」(『神奈川県史 資料編』6-)とあり、また17世紀半ば成立の『正保国絵図』には「材木座村」がみえるところから、遅くとも近世初期には地名となっていることがわかる。しかし「材木座村」の疆域は、その由来からも推測できるとおりもともと海岸沿いの一部に過ぎず、現在の材木座地区の過半はかつての乱橋村であった。1905・1906(明治38・39)編纂の『相模国鎌倉郡村誌』(『神奈川県皇国地誌』)には、「近世マテ今ノ北部ノ地ヲ乱橋ト呼ビ南部海辺ノ地ヲ材木座ト称シテ自ラ別村ノ形状ヲナセシト云フ」とある。

乱橋については、すでに『吾妻鏡』宝治二年(1248)六月十八日条に、「宣慰、濫橋辺一許町以下南雪降、其辺如霜」とみえ、この地名が鎌倉時代中期には存在していることがわかる。しかし、その一方材木座は、あったとしても座の名称としてのみのはずである。するとその頃、現材木座海岸一帯は何と呼ばれていたのだろうか。

「飯島」・「西浜」・「和賀江」

滑川河口東側の海岸部に該当する地名としては、「飯島」・「西浜」・「和賀江」がある。三者の位置関係はどうであったか。それはのちの材木座とどう関係するのか。このことについてはすでに伊藤一美が、内湊町としての「飯島」と和賀江港との関係を詳細に考察した中で触れている(伊藤1994)。しかし、この論考のなかで伊藤は明らかに「西浜」の「西」を東と取り違えており、そのために「西浜」という名称からうかがえるその東側の何らかの起点の存在が不明確になっている。したがって、この三者の位置関係については、依然として整理できていないと考える。

なぜ鎌倉海岸東端に位置する場所が「西浜」と呼ばれるのかという点については、ひとまず措く。このうち史料に最も早く現れるのは「飯島」で、早く『吾妻鏡』寿永元年(1182)十一月十日条に初めて出てくる。頼朝がその寵姫亀前を伏見冠者広綱の「飯島家」に住まわせていたことが露顕し、政

子の激しい怒りを買った、というよく知られた記事である。

「西浜」と「和賀江」は、『吾妻鏡』承元三年（1209）五月二十八日条に「飯島」とともに初めてみえる。この日西浜の辺で騒動があった。梶原兵衛太郎家茂が、小坪浦で「遣還」しての帰途、彼に宿意を抱いていた土屋三郎宗速と和賀江のあたりで出会い、殺害されたのである。小坪浦からの帰りがけだから、和賀江はその西になる。位置関係から当時も今と変わらぬ名称であることがわかる。

この記事には、西浜について「飯島と号す」と割注がある（「号之飯島」）。「号す」といつているのだから、史料における初出の先後はともかく、伊藤一美もいうように、論理的には「西浜」の地名のほうが先に存在していたと考えなくてはならない（伊藤1994、178頁）。少なくとも後ではない。「飯島」の初出である寿永元年11月といえは、頼朝入部からたった2年後、鎌倉時代のごく初期である。西浜の名称はこの時点ですでに存在していたことになる。

さて、誰もが抱くに違いない疑問に戻るが、鎌倉海岸の東端の一隅をなぜ「西浜」と称するのか。何に対しての「西」か。結論からいえば、これはやはり「和賀江」とみるほかあるまい。「和賀江」の初めて史料に現れる承元三年（1209）5月28日の時点で、築島としての和賀江島はもちろん存在しない（貞永元年—1232築造）。しかし、伊藤も指摘するとおり、「江」とは海や湖水が陸地に入り込んだ地形をあらわす文字である。もともと入江状になっていたのであろう。そして、それが港湾として機能していたことも間違いない。

『海道記』のよく知られた記事を引く。貞応二年（1223）四月、京・白河の渡（わたり）、中山の龍に住む「侘士（人）」が、鎌倉に着く。源光行ともいわれるこの人物は（五味2003）、稲村から入ったときの景色をこう描写する（いずれも岩波書店版）。

申ノ斜ニ湯井浜ニオチツキヌ、暫休ミテ此処ヲヨミレハ、数百艘ノ舟、トモ調ヲクサリテ天津ノ浦ニ似タリ。千万宇ノ宅、軒ヲ双（ならべ）テ大淀ノ渡ニコトナラス。

これは由比ヶ浜全体をいつているが、数日後あらためて浜に出たときには、次のように書く。

此ノ縁ニツキテ、オロオロ歴覽スレハ、東南角ノ一道路舟楫津、商賈ノアキ人八百族瀛ニキワイ

文飾を割り引いても、鎌倉の浜がおおいに舟で賑わい、なかでも東南角の一隅に、盛んな港と商業地が形成されていたことがうかがえる。ここにいう「舟楫津」とは和賀江であり、商人で賑わっているのが飯島に違いない。伊藤一美の指摘するとおり、港湾としての和賀江と、港町としての飯島の姿がここに見える。飯島が「西浜」の号ならば、「西」とは和賀江を起点にした言い方としか考えられない。そしてそうだとすれば、この言葉を用いる背景に、和賀江には単なる小さな入江状の地形にとどまらない、地域社会の中での存在感が感じられる。すなわち、先に寿永二年の時点で西浜の地名がすでにあったと推測したように、鎌倉時代のごく初期から和賀江は港として機能していた可能性があらう。

和賀江に関してもう一つ付言しておきたい。『吾妻鏡』にあらわれる関連地名は、「和賀江」・「和賀江島」・「和賀江津」で、10回ある。このうち築島以前の2回はいずれも「和賀江」で、貞永元年（1232）7月12日の往阿弥陀仏による築島進言のときに「和賀江島」が初めて現れ、これ以後は「島」もしくは「津」がつくようになる。赤星直忠は築造の方法について、おそらくもともと岩礁が岬状に飯島から突き出していたところに石を積んで島とした、と推測している（赤星1980、427頁）。『吾妻鏡』にみえる表現の違いは、その形状変化に由来すると考えてよいのだろう。

これ以後「和賀江」の出てくるのは2回で、建長三年（1251）12月3日、鎌倉中に定められた小町屋7地点のひとつとして、および建長四年（1252）2月8日、鎌倉中の大半が焼けたときその南限の場所として、である。この2例はいずれも陸地でなければ表せない性質のものなので、要するに港を表すとき

には「和賀江島」「和賀江津」が使われていることになる。港湾施設としての後二者の名称と、それに近接した陸部の名称とが区別されていることがわかる。

「西浜」は、和賀江築島翌年の天福元年（1233）八月十八日条を最後に、『吾妻鏡』に出てこなくなる。「飯島」は承元三年（1209）五月二十八日条を限りとするが、これは現代まで残る地名であるから、その後も使われ続けていたはずである。和賀江島が港湾として整備され存在感を増すにつれ、次第に「西浜」の名は薄れ、替わって「和賀江」または「飯島」が使われるようになったのではないかと推測される。

井ヶ谷と「高御倉」

上述のように、井ヶ谷には「高御倉小路」という小道がある。『新編相模国風土記稿』には、乱橋村の小字として高御倉小路のあったことが記されている。この名称は、よくいわれるように、やはり幕府あるいは將軍家にかかわる高床式の倉庫に由来するとみるのが妥当であろう。史料には関連するとおぼしい、次の呼称がある。

①「浜庫倉」 『吾妻鏡』 承久元年（1219）九月二十二日条（『国史大系』本、以下同）

（前略）鎌倉中焼亡、火起阿野四郎浜宅北辺。南風甚利。上延永福寺惣門。至浜庫倉。東及名越山之際。西限若宮大路。右大將軍以來。未有此例云々。

北は永福寺惣門から南は浜庫倉まで、西は若宮大路から東は名越山麓まで、「鎌倉中」東半部の大半が焼失した。頼朝以来例のない大火であった。「浜庫倉」は、その表現と火事の範囲からいって現在の材木座海岸（滑川以東）近くでなければならぬ。しかし、先述のように、材木座地域の西半分は当時滑川河口に形成された沼沢地または低湿地だったと推定されるので、「浜庫倉」は東半分のどこかでなくてはならず、しかも北限の永福寺惣門に対する南限の表示として出ているので、これは明らかに浜辺、すなわち飯島辺ということになる。

②「浜御倉」 『吾妻鏡』 寛元三年（1245）五月二十二日条

浜御倉内小蛇出来。五六ヶ日惱乱。今日申刺達死云云。（中略）是武州令管領給之庫倉也。被納武蔵国乃真云云。

「武州」とは執権武蔵守経時のこと。武蔵国からの年貢を納めた彼の倉庫に小蛇が出て、「惱乱」のうちに死んだという。「浜御倉」が浜のどの辺にあるのかは、本条のみではわからない。

③「浜高御倉」 『吾妻鏡』 建長五年（1253）十二月二十二日条

丑剋。経師谷口失火。北風頓扇。余炎迄浜高御倉前。焼死者十余人云云。

「経師ヶ谷」の位置についてはいくつか説がある。ひとつは名越の長勝寺東方の谷という『日本歴史地名大系14 神奈川県地名』の説である（石井ほか1984、291頁）。『新編相模国風土記稿』は、比企ヶ谷に続く谷で妙本寺院家常住院の所在したところ、とする。『鎌倉庵寺事典』の「鎌倉庵寺地図」中では、現材木座四丁目所在日蓮宗実相寺ないし庵寺能蔵寺東側の山裾（山を挟んで井ヶ谷西）に比定されている（貴・川副1980、付図）。また、近年刊行された『鎌倉の地名由来辞典』でも、おそらくは『鎌倉庵寺事典』の影響下で、実相寺付近という説が出されている（三浦ほか2005、60・61頁）。本条の「谷口」という表現は、当然その奥にある程度湾入する地形（＝谷）の存在することを示唆している。ところがこの付近には、現在でもより明治15年の迅速測図においても、まったく谷と呼べるような地形が見当たらない。とすれば、この説は成り立ちにくいのではないかと推測される。『新編鎌倉志』には「経師谷は井ヶ谷の北にあり、土俗ちやうしが谷と云ふ」とあり、それを信じるならば、結局、位置については『日本歴史地名大系』説を採るのが妥当であろう。長勝寺とその東の谷といえ、まさしく井ヶ谷の北側に接する場所にあたるからである。なお、付け加えれば、現在鉄道の「名越踏切」脇に残る「鏡子の井戸」は、「ちやうしが谷」に由来する可能性があるのではないかと推測される。さて、いずれにしても、

掲出の文面は火が北風に煽られたといっているから、付会の気味を承知でいえば、「浜高御倉」はおおむね経師ヶ谷の南方に位置すると推測されよう。火はおそらく乱橋の民家群をなめつつ南下したのであろう。そうすると、ここにいう「浜高御倉」も、鎌倉海岸西半部（由比ガ浜）ではなく、現在の材木座海岸、それも①に述べた地勢的条件から、やはり飯島辺にあるとみていいことになる。

④「高御蔵」 明徳四年（1393）十二月六日付最宝寺宛京極高詮安堵状に、

鎌倉高御蔵前敷地内太子堂々立事（『神奈川県史 資料編』3-5104）

とみえる。「最宝寺」は弁ヶ谷入り口近くの東側にあったとされる寺である。「高御蔵」の前に寺領があり、そこに太子堂があったことがわかる。「高御蔵」がどこにあるのか、おおむね推定できるが、次に挙げる史料でいっそう鮮明になる。

⑤「高御蔵」 享徳元年（1452）十一月九日付京極持清書下には、

鎌倉弁ヶ谷高御蔵最宝寺寺領等事（『神奈川県史 資料編』3-6139）

とあり、「先師明雅讓状並先祖寄進之旨」に任せて安堵している。南北朝期以後この地が京極氏の有するところとなり、最宝寺（現横須賀市野比）の寺地に寄進されていたことがわかる。これは確実に④と同じ場所であろう。しかし、④では「高御蔵前」とあって高御蔵が太子堂の位置を示す指標として使われているから、倉建物自体を示していると取れる。すなわち高倉がまだ存在している可能性が高い。「鎌倉新造」・「鎌倉丸」などの文字の見える著名な「武蔵国品河湊船帳」（『神奈川県史 資料編』3-5094）はまさしく④の時期であり（明徳三年）、この頃鎌倉の港、それもおそらく和賀江津がまだまだよく機能していることがうかがえる。となれば、依然海上輸送物資集積施設としての倉は必要とされたであろう。これに対し、その60年後に出た本状では「弁ヶ谷高御蔵にある最宝寺寺領」と読めるので、この時点ではもう地名に転化しているようにもみえる。15世紀に入っていっそう顕著になる鎌倉の頹勢とともに、和賀江の性格も海上輸送拠点から一漁港へと変貌し、大型の倉は消滅してしまっただろうか。

いずれにしても、④・⑤の「高御蔵」により、それが弁ヶ谷にあることが確認された。もちろん現「高御倉小路」の由来でもある。ではそれ以前の①～③はどうであろうか。

少なくとも③の「浜高御倉」については、④・⑤の「高御蔵」と同じとみていいのではないか。飯島辺にあるらしいこと、そして「最宝寺寺領」がその前にあるという「高御蔵」もまた、飯島の地に含まれることがその理由である。①もまた飯島辺りに比定できるから、④・⑤との関連でいえば、少なくともきわめて近接した位置にある、ということはある。

②については場所の手がかりがない。しかし、武蔵国の年貢を収納する執権経時の倉庫であり、執権の倉がそうそう移転するとも考えにくい。したがって、これも強引の気味は否めないが、「浜」とはやはり飯島であり、④や⑤と同じような場所と考えるのが自然ではないか。

以上を要するに、中世の史料に見える「浜庫倉」・「浜御倉」・「浜高御倉」・「高御蔵」はいずれも同一の地点を示している可能性が高い。おそらく、飯島の一角、弁ヶ谷入り口に、幕府の管理する高床式庫倉の立ち並ぶ場所があった。そこは最宝寺に至近の場所でもある。そして最宝寺といえば、本地点東側隣地の谷に存在したといわれる寺である。間違いなく、ここにいう「高御倉」は、調査地点にきわめて近い場所であろう。とすれば、海岸通りから調査地点前（南面）の小路あたりまで、高御倉小路西側の方形区画をそれに充てても、大きくずれることはあるまい。

調査地点から西に200～300mほど行った九品寺のある一角に、かつて「蔵屋敷」の小字があった。これとの関係は不明だが、御成町に残るこの地名の場所には鎌倉時代後期の竪穴建物の群集がみられることから、材木座においてもやはり同様の遺構との関連を想起すべきであろう。あるいは、東の高御

倉小路から九品寺交差点あたりまで、ずっと倉庫が立ち並んでいたのかもしれない。

なお、2002年に道路を挟んだ本地点南側の対面位置で、発掘調査が4箇所おこなわれている（地点8）。高御倉の位置が上述の通りだとすると、4地点いずれもその範囲に含まれているが、詳細は不明である（斎木ほか2005）。

宗教空間としての弁ヶ谷

弁ヶ谷にはかつていくつかの寺院があった。それらはすべて廃寺となったり、移転したりして、今はない。しかし、宗教空間としての弁ヶ谷が中世都市鎌倉の中で果たした役割は大きい。この点については高橋慎一郎がすでに詳細に論じており（高橋1995）、またその法流の系譜についても高橋以前に納富常天が明らかにしている（納富1987）、筆者の付け加えるべきことはほとんどない。とはいえ、遺跡理解の一助として、ここであらためて整理するとともに、鎌倉時代後期の宗教・政治動静のなかでこの谷が果たした役割を確認しておきたい。

『新編相模国風土記稿』によれば、弁ヶ谷の廃寺の一つである崇寿寺には、北条高時（崇鑑）寄進、物部道光作の梵鐘があり、その鐘銘には「飯嶼之良、鎌倉之巽、弁ヶ谷靈区」とあったという（梵鐘は現存せず）。「飯嶼」は飯島である。弁ヶ谷を語るのに飯島との位置関係から始めているのは、飯島の存在感とともに、高橋もいうように、『新編相模国風土記稿』執筆者の裡に、あるいは鎌倉人の間に、両者の一体性が認識されていたことを示唆している。そして「靈区」という表現には、弁ヶ谷が単に寺が多いというにとどまらない、独特の宗教空間と見做されていたことが感じ取れる。そのことは、この谷の山裾のいたるところにかつてやぐらが存在していたという事実によっても、裏付けられよう。

【新善光寺】 新善光寺は『鎌倉廃寺事典』巻末付図では弁ヶ谷の谷奥北側の枝谷にあるとされているが、詳しい根拠はわからない。現在葉山町上山口にある不捨山摂取院新善光寺は、この新善光寺が移ったものである。同事典は「名越の善光寺は、弁ヶ谷の奥で松ヶ谷の長勝寺のうらにあたる辺にあった」という現在の善光寺住持の話を引いているので、そこから類推したのかもしれない。また『新編相模国風土記稿』に「新善光寺蹟、名越にあり、新善光寺屋敷と唱う」とあるから、同事典は「土地の呼び名がのこっているようである。その位置は古老ならば知っているかもしれない」というが、今のところは確定されていないといわねばならない（貫・川副1980, 102頁）。

弁ヶ谷は法然の弟子証空を派祖とする浄土宗西山（せいざん）派（義）の、関東における拠点であった。法然滅後教団は四分五裂し、その多くが度重なる弾圧によって潰滅的状態となる。その中で、唯一西山派は武士と結び、関東に進んで弁ヶ谷に新善光寺を開いた。高橋慎一郎によれば、西山派が北条氏と結んだのは六波羅を介してのことであった（高橋1995, 128～131頁）。派の口伝によれば、両者の結びつきは、派祖証空が寛喜元年（1229）ごろ東国に旅をした際、鶴岡八幡宮に参籠したことに始まるらしい。証空は大内大臣久我（源）通親の猶子であり、当時鶴岡八幡宮別当であった定親が通親の子であったことから、その俗縁を頼って八幡宮に参じた可能性があるという（高橋1995, 123・126頁）。このときはまだ一時的な滞在であったとみていい。しかし鎌倉時代中期の仁治三年（1242）には、鎌倉においてすでに西山派が確たる地位を築いていることを示す史料がある（『鎌倉年代記裏書』六月十五日条）。

入道前武蔵守正四位下平朝臣泰時卒、六十、新善光寺智導上人、為知識、奉勸念仏（『増補史料大成』）智導（道）は、西山派の分流である東山（とうざん）流の流祖証入の弟子で、証空の孫弟子に当たる。前執権北条泰時の葬儀で念仏を読んでいるのだから、鎌倉の諸寺の中でも新善光寺は相当高位を占めていることがわかる。とすると、それ以前から新善光寺があったとみて間違いない。高橋慎一郎は、智導が新善光寺の初代長老であった可能性が高い、という（高橋1995, 127頁）。

寺の開創時期は明確ではないが、念仏と激しく対立した日蓮の著名な「名越の一門の善覺（光）寺、長楽寺、大仏殿立させ給いてその一門のならせ給事をみよ」という一節（「兵衛志殿御返事」『昭和定本日蓮上人道文』1406頁）が真実であれば、名越北条氏の力によるところが大きいのであろう。あるいはむしろ六波羅以来の、北条氏との親密な関係が背後にあったとみるべきかもしれない。頼朝以来北条氏も信濃善光寺を厚く信仰していたことは、文治三年の再興やたびたびの参詣など、『吾妻鏡』のいくつかの記事から明らかである。

新善光寺の僧としては、弘長二年（1262）の西大寺叡尊関東下向を記した『関東往還記』七月十九日条にみえる、叡尊に面会を求めて宿まで来た「新善光寺別当道教念仏者主願」（念空）が知られている（『西大寺叡尊伝記集成』89頁）。道教は、証入の兄弟弟子長西の始めた諸行本願義の僧で、法然の孫弟子になる。納富常天は智導が道教の前の別当である可能性を指摘しているが（納富1987、165頁）、そうだとすれば、その相承は西山義から諸行本願義への転換でもあったことになる。福島金治によれば、金沢称名寺の浄土教は西山派や聖光の鎮西派から諸行本願義へ移っていくという（福島1993）。同様のことが、鎌倉でも起きていた可能性は十分にあろう。長西弟子本願の弟子真阿は扇ヶ谷浄光明寺開山であり、道教の弟子性仙は同寺三世であった。第六代執権北条長時建立の浄光明寺は、四宗兼学の寺として鎌倉における教学研究を率いるとともに、仏教興隆運動の中心でもあった。

新善光寺は鎌倉時代後期以降、大いに盛んとなった。これに関して、周知の史料を紹介しておかなければならない。鎌倉最末期の元徳元年（1329）に比定される年未詳十二月三日付崇願（金沢貞願）書状である。

（前略）、関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勳進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候、常在光院一切経あつらへ申候僧をも、わたされ候へきよし申候、（後略）（『神奈川県史資料編』2-2788）

翌春に発遣される関東大仏造営料船の大勳進を新善光寺長老が努めている。この寺の鎌倉政治社会における地位の高さをしのぶに十分であろう。

新善光寺比定地の枝谷奥の山裾からかつて、火葬骨の入った白磁四耳壺を中央に埋めた長方形区画が発見されている（原ほか1988）。この区画は、崖面を幅8.2m（奥壁側）×奥行6mのコの字形に掘り込んだもので（報告書により馬淵計測）、状況からみて天井部を失ったやぐらの可能性が高い。そうだとすれば鎌倉地方で確認されたやぐらとしては最も大きい部類に入る。区画の左右にそれより小ぶりの方形やぐらをとともなう。田代郁夫は、高僧の舍利塔や墓塔と「やぐら」の配置が、祖師とその弟子・寺の世代という僧侶の位置関係を表現するというが（田代1999）、そうであれば、あるいはここに見る状況も、中央の長方形区画を祖師として左右をそれに結縁した僧のやぐらと考えることができよう。

注目すべきは長方形区画の位置であって、ほぼ枝谷を貫く中軸線上にある。それはこの区画に葬られた人物が、当該地に存在したと想定される寺院の長老級であることはもちろん、そのなかでも相当に重要な位置にあったことを示唆するものに違いない。

遺構年代については、同形式の白磁四耳壺が埋納されていた埼玉県東松山市光福寺の宝篋印塔が「元亨癸亥」（元亨三年—1323）銘であることから（小峰ほか1980）、ほぼ同年代、すなわち14世紀前半頃と考えてよからう。前田元重は新善光寺比定地で発見された墓について、道教のそれである可能性を指摘しているが、年代からいって検討の余地は残る（前田ほか1988での発言）。

このやぐら群のすぐ西側でも幅7.9m×奥行5.2～5.5mという大規模なやぐらが発見されている（長谷川ほか1999）。先の幅8.2mの「長方形区画」といいこの例といい、かくも大型のやぐらが並立するさまは、やはりここにあったであろう寺院の格の高さを示すものに違いない。

新善光寺はいつ葉山町に移ったのか。明確ではないが、貫達人は『新編相模国風土記稿』が「中興の僧密道、天正十八年七月朔日に寂すとすれば其の世代なるべし」としているのについて、「従ってよい」と評価している（貫・川副1980, 102頁）。

【最宝寺】 先に触れたとおり、高御倉小路を挟んだ調査地点東側の枝谷にあったとされる寺である。現在は横須賀市野比に所在する。この寺については不明なことが多い。『新編鎌倉志』に「五明山高御蔵と号す、浄土真宗、京西六条本願寺末」とある。同書は寺伝を引いて、「源頼朝始め鎌倉扇ヶ谷に棚（創）^{（中略）}建し、僧明光を延いて開山とす、建久六年弁ヶ谷 鎌倉材木座村属に寺を移し、業師を本尊となす、此頃は天台宗なり」という。その上で『大谷遺跡録』によって、明光は正和五年（1316）31歳であり、また真宗の僧であるから寺伝とは大いに異なれり、とする。建久六年は1195年。明光（了円）は、親鸞の弟子光信（源海）の法流に属する僧で、鎌倉時代末期に鎌倉の甘繩道場で指導者として活動していたというから（納富1987, 189頁）、寺伝とは確かに年代が合わない。しかし、高橋慎一朗もいうように、鎌倉時代末期の弁ヶ谷に親鸞流の念仏系寺院として最宝寺が存在していたことは間違いない。納富常天は、甘繩道場のちに弁ヶ谷に移り、明徳四年（1393）三世明円が受け継いだとき最宝寺と改称したという（納富1987, 190頁）。

弁ヶ谷から横須賀市野比に移転した時期は明確ではない。先の享徳元年（1452）十一月九日付京極持清書下は、「鎌倉弁ヶ谷高御蔵最宝寺僧領等事」についての安堵状だから、少なくともこの頃までは弁ヶ谷に最宝寺があったことは確かである。『鎌倉庵寺事典』よれば、寺伝にその前正慶二年（1333）の兵火で扇ヶ谷にも最宝寺が移ったとある。大永元年（1521）、扇ヶ谷の最宝寺は焼亡したという。『庵寺事典』は、大永元年兵火にかかり、ときの住僧九世明心が野比に逃れ来たという『新編鎌倉志』の記事に、肯定的評価を与えている（41頁）。

【崇寿寺】 山号金剛（『新編相模国風土記稿』所引の梵鐘銘）、元亨元年（1321）北条高時開創、開山は南山土雲。寺の名は崇鑑北条高時に因んだものだろう。寺格の高さがうかがえる。『庵寺事典』巻末付図によれば、その位置は谷奥近くの東側、最宝寺跡比定地の北側の谷となっているが、根拠は本文中には示されていない。あるいは、最宝寺や新善光寺の位置がほぼ推定可能なので、谷の中の残った空間に充てたのだろうか。

『風土記稿』所引の鐘銘によると、鐘は嘉暦二年（1327）高時（崇鑑）寄進、鋳工は物部道光（「大工沙弥道光」とある。物部姓鋳物師は、鎌倉大仏造立のため鎌倉時代中期に畿内河内から関東に招請され、大仏完成後はおもに幕府系の臨濟宗寺院に梵鐘を寄せた（馬淵1998）。道光は鎌倉時代末期に鎌倉近辺でいくつかの作品を残している。

元亨三年（1323）の北条貞時十三年忌供養の際、崇寿寺の僧衆13人が参加しているので（『鎌倉市史料編』2-69）、その頃かなりの寺勢であったことがわかる。

いつ廃されたかは、ここも明らかでない。『鎌倉庵寺事典』によれば、応永三十一年（1424）までは存在していたようである（106頁）。

この谷所在のやぐらもすでに1地点7基が調査されている。最大のもの（「第7号やぐら」）は残存部の幅6.6mの堂々たる規模をもつ。また他にも幅5.68m（入口側）～6.1m（奥壁）、奥行5.8mの立派なものがある（「第1号やぐら」）。後者の床には14世紀前半代の常滑大甕が埋められており、中に改葬人骨1体が入っていた。骨は焼かれておらず、土葬後時間を経て白骨化したものを収めたと思われる（鈴木ほか2000）。

【毘沙門堂】 先述したように、金沢実時の「名越新善光寺下毘沙門堂入地」が延慶三年（1310）に確認される（『東寺百合文書』リ）。堂の正確な場所は不明だが、新善光寺跡の推定位置が正しいならば、

その「下」とは調査地点のすぐ北側にあたる。またそうだとすれば、新善光寺比定地西側山塊先端の山裾にかつていくつも存在したやぐら群は「新善光寺下」一帯の隣地に相当することになる。このやぐら群はかつて何度か発掘調査され、いずれも14～15世紀前半の年代が与えられている（坂口ほか1986/継1991/上田・依田2000）

引用・参考文献

- 赤星直忠1933 「和賀江島築港址」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』2（のち1980『中世考古学の研究』有隣堂 所収）
- 石井進1981 「都市鎌倉における『地獄』の風景」『御家人制の研究』吉川弘文館（のち『石井進著作集第9巻 中世都市を語る』所収）
- 石井進ほか1984 『日本歴史知名体系14 神奈川県地名』平凡社、291頁「経師ヶ谷」の項
- 伊藤一美1994 「鎌倉の内浜町『飯島』と『和賀江津』—都市鎌倉の渡機能と材木座との若干の関係について—」『歴史の中の都市と村落社会』思文閣出版
- 上田薫・依田亮一2000 『弁ヶ谷やぐら群 平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査』財団法人かながわ考古学財団
- 坂口皓ほか1986 『弁ヶ谷やぐら群』相武考古学研究所
- 鎌倉市教育委員会1971 『鎌倉市文化財資料第7集 としよりのほなし』
- 木下良1997 「総説『神奈川の古代道』『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会博物館準備担当
- 小峰啓太郎ほか1980 『東松山市文化財調査報告第12集 光福寺宝篋印塔』東松山市教育委員会
- 五味文彦2003 「紀行文の形成『海道記』『東関紀行』の歴史的位置」「書物の中世史」みすず書房
- 斎木秀雄ほか2005 「材木座町屋遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21
- 鈴木清一郎ほか2000 「弁ヶ谷東やぐら群 平成11年度 鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」財団法人かながわ考古学財団
- 高橋慎一郎1995 「中世鎌倉における浄土宗西山義の空間」五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館（のち『鎌倉における浄土宗西山派と北条氏』と改題 1996『中世の都市と武士』吉川弘文館 所収）
- 田代都夫1990 「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』笹目遺跡内・公方原敷内・十二所稲荷小路内やぐら発掘調査団
- 田代都夫1999 「（やぐら）に眠る死者の夢」『別冊歴史読本 鎌倉と北条氏』新人物往来社
- 継実1991 「弁ヶ谷遺跡内やぐら」弁ヶ谷遺跡内やぐら群発掘調査報告書（『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』）
- 貫達人・川副武胤1980 『鎌倉慶寺事典』有隣堂
- 納富常天1987 『鎌倉の仏教』かまくら春秋社
- 野口実1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45（財）古代学協会
- 長谷川厚ほか1999 『鎌倉城所在やぐら群 平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査』財団法人かながわ考古学財団
- 原廣志ほか1988 『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団
- 福島金治1993 「鎌倉北条氏と浄土宗—律宗以前の金沢称名寺をめくって—」『鎌倉』70・71 鎌倉文化研究会（のち1997『金沢北条氏と称名寺』吉川弘文館 所収）
- 前田元重ほか1988 「座談会 中世鎌倉の発掘」『有隣』251号
- 馬淵和雄1994 「武士の都鎌倉—その成立と構想をめくって—」網野善彦・石井進編『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
- 馬淵和雄1998 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
- 馬淵和雄2004 『中世都市鎌倉成立前史』馬淵和雄・五味文彦編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
- 三浦勇男ほか2005 『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版、60・61頁「経師ヶ谷」の項

（馬淵）

第2章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

個人専用住宅の鋼管杭打ちによる基礎工事が、隣接する2区画（材木座六丁目643番地4ほか、同5）で行われることになり、平成15年9月16日から翌日まで確認調査を行った。宅盤表土下約98cmより土師器、陶磁器などの中世遺物とともに中世遺構面を確認したため、同年10月20日より643番5地点をⅠ区、643番4ほか地点をⅡ区と定め、2地点の本調査を同時進行した。調査区はⅠ区約42㎡、Ⅱ区約42㎡の各工事範囲内に沿って行った。

2. 調査方法と経過

調査地点は材木座海岸豆腐川河口より北東約33m、光明寺本堂より北へ25m、弁ヶ谷開口部付近に位置する。南西側には豆腐川、秋葉山が近在し、その奥には最宝寺跡とよばれる谷戸が広がる。調査地点は海拔約7.3m、盛り土による宅盤地で、隣接する市道との比高差は1mほど高い。調査は重機による表土掘削からはじまり、現行の道路高に近い約6.3～6.0mより中世遺構面を検出した。調査時の測量は便宜上、任意の方眼設定を用いて実測した。国土座標4級点(C 0001・C 0002)を起点として調査地点の座標をもとめた後、遺構図と座標軸を照合したものを本書に掲載した。Ⅰ区はX-74 351～76 360・Y-25 070～25 079内、Ⅱ区はX-74 343～76 352・Y-25 081～25 090内に位置する。

調査は平成15年10月21日～同年11月21日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり

- 10月20日（月）重機による表土掘削（Ⅱ区は翌21日まで継続）。
- 10月21日（火）機材搬入。
- 10月24日（金）Ⅰ区1面精査・遺構検出。Ⅱ区は全体が攪乱を受け1面は消失。2面の面出し。
- 10月29日（水）Ⅱ区2面全景撮影・実測。
- 10月30日（木）Ⅰ区1面全景撮影・実測。
- 10月31日（金）Ⅰ区2 a面精査・実測。
- 11月5日（水）Ⅰ区2 b面全景撮影・実測。
- 11月7日（金）Ⅱ区3面全景撮影・実測。
- 11月14日（金）Ⅰ区3面全景撮影・実測。
- 11月17日（月）Ⅰ区調査区壁撮影・実測。Ⅱ区4面全景撮影・実測。
- 11月18日（火）Ⅱ区4面追加撮影、調査区壁撮影・実測。座標測量。
- 11月21日（金）機材撤収。調査完了。

（鍛冶屋）

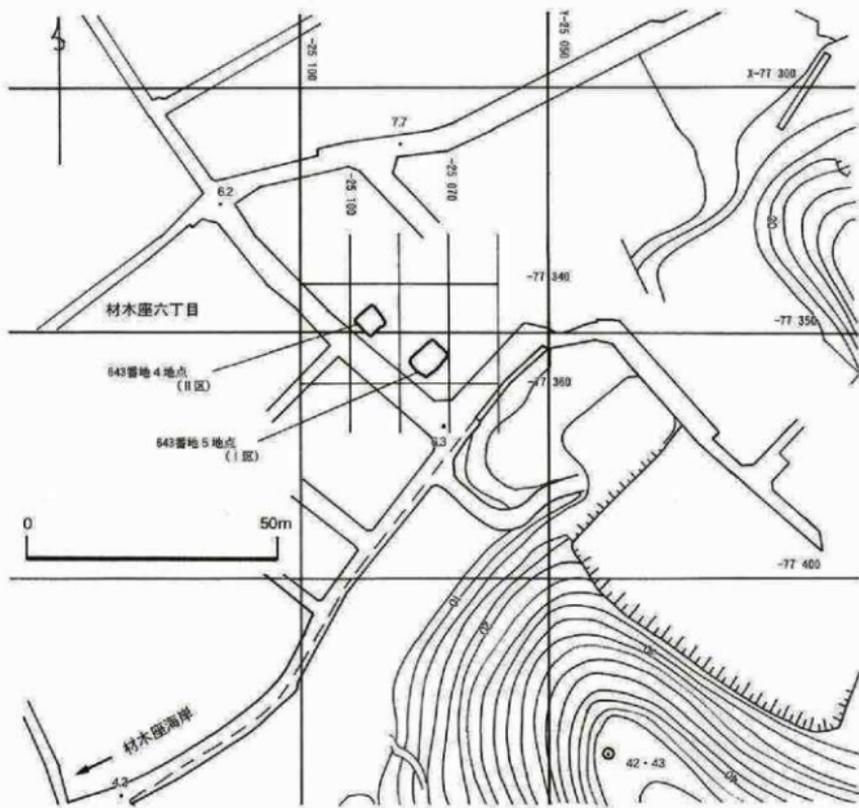


図3 座標図

第3章 調査の成果

第1節 層序と面の概要

調査地点は壇状に造成された宅地内にある。地表高は約7.3m、土層図でみるとおり西壁側にある市道の高さ6.3mまでは現代造成土によるもので、中世遺物と遺構を含む層は造成土直下よりあらわれる。

I区1面の検出高は6.3~6.0m、II区は6.0mまで造成土で覆われており、I区1面に相当する中世面は消失したと推測する。またI区の構成面が比較的礫石であったのに対し、II区は地下水によって構成土全体が脆弱化していたので、比高差だけで関連性をもとめるのは難しい。I区1面は粗い半人頭大の泥岩がやや雑につまった暗褐色土（土層図No.3）と、部分的だが破砕泥岩で整地された地行面が存在した。また全体に炭が散在していて、I・II区とも1面~3面にわたって炭層が重層しているのが土層図で確認できる。これらのことから、調査地点近辺で度重なる火災、または大規模な焼却行為があったと想像できる。遺構は礎石などを含んだ掘立柱建物の柱穴、集石土坑などを検出した。

2面は1面直下であり、構成土が1面と類似している。I区では2層に分層し、2a面は検出高約6.0m、東半分は炭土で著しく覆われていた。炭層を除くと一部で破砕泥岩による整地がみられたが、遺構はあまり検出されなかった。II区2面の検出高は5.8~6.1m、東側は攪乱を受けて消失していたが、西北側は泥岩地行土で覆われていたが、西南はごつごつとした大型泥岩と多量の炭が散在し、生活面と呼ぶことはむづかしい。西壁際に柵列のような柱穴列が見つまっている。I区2b面は再び夥しい量の炭が区内を覆っていた。検出高は5.7~6.0m、炭層の直下から泥岩地行面や炭を多く含んだ暗黄灰褐色土（土層図No.28）などを確認した。さらに検出された遺構の中には大量の炭が詰まっていたものが多く、本遺跡の顕著な特性があらわれている。1面と同じく、建物・柱穴列・大型土坑などを検出した。

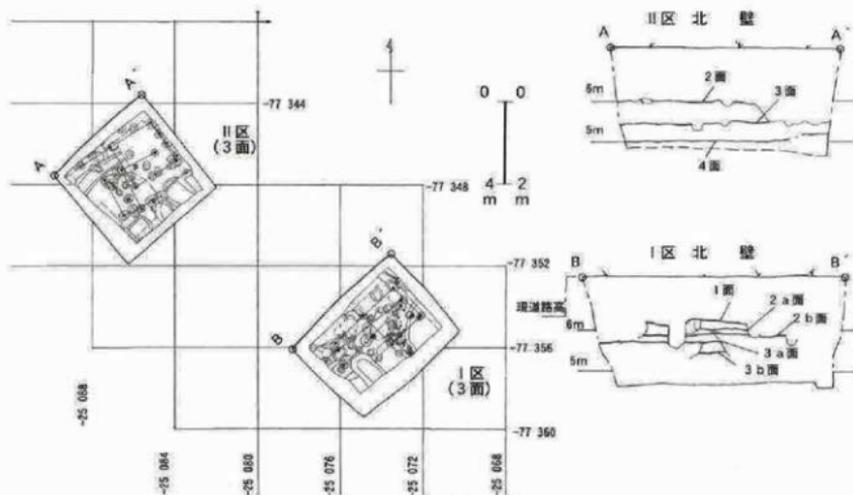


図4 調査区位置関係図

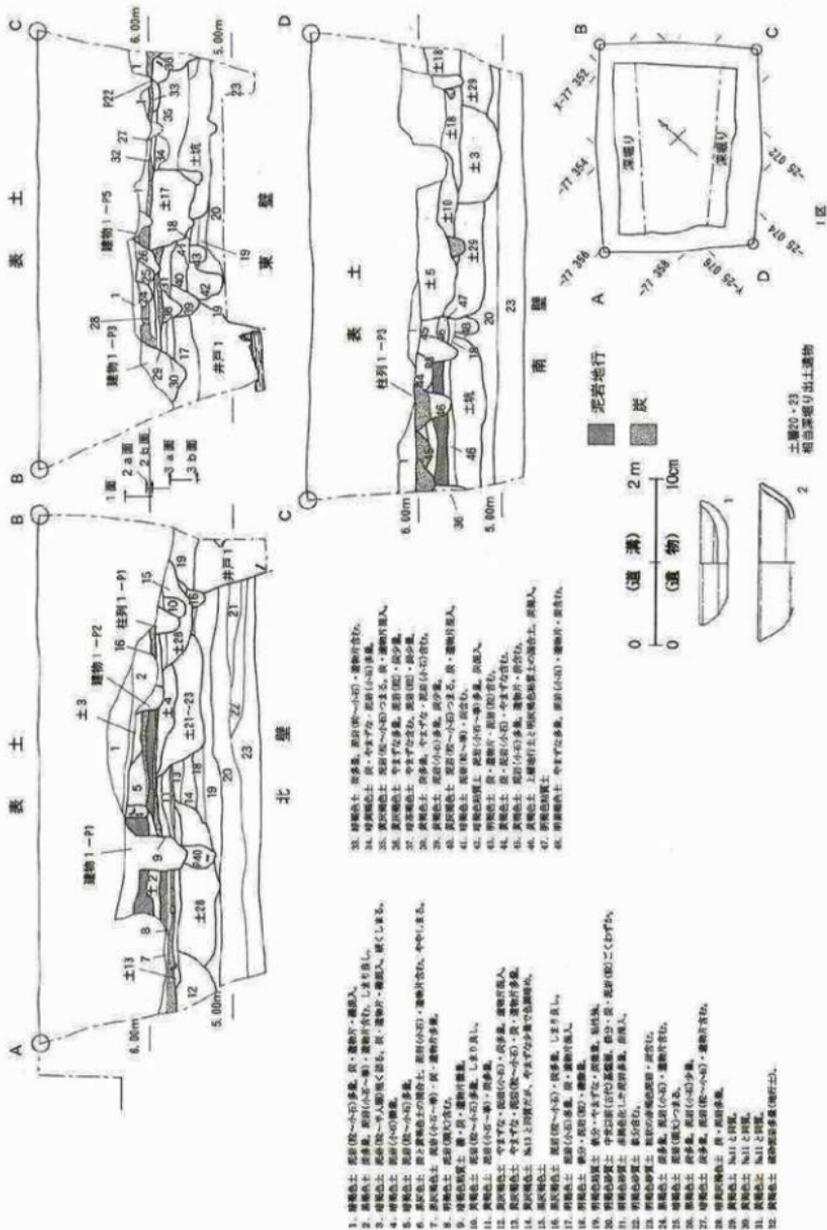


図5 一岡遺跡の縄文層図、一岡湖遺跡の土層図

- 33. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 34. 埴輪粘土 灰、中(灰)少、埴土(灰)多量。
- 35. 埴輪粘土 灰、中(灰)少、埴土(灰)多量。
- 36. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 37. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 38. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 39. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 40. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 41. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 42. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 43. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 44. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 45. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。
- 46. 埴輪粘土 埴土多量、灰中(灰)少、遺物共存性。

- 1. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 2. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 3. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 4. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 5. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 6. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 7. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 8. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 9. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 10. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 11. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 12. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 13. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 14. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 15. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 16. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 17. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 18. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 19. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 20. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 21. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。
- 22. 埴輪粘土 埴土(灰)少多量、灰、遺物共存性。

I区3面は2時期の構成面が確認できた。3aの検出高5.5~5.7m、黄褐色土(土層No.11・13・14)で泥岩と砂などを多く含み、間層には炭をはさむ部分もあった。3bは約5.4mにあり、鉄分・炭・砂などを微量に含む明褐色土の粘質土が拡がっていた。遺構の充填土は炭を多く含んだものと、大きな泥岩がつまったものと一緒に類別できるが、遺構をaまたはb面へ厳密に帰属させることができなかったため一括して3面遺構とした。把握できる遺構は各節で述べていきたい。3面は南西側に大型土坑、中央より北側は建物・柱穴列が集中しているが、これら施設の配置を含む地割や方位は、以降の2面・1面へと継続されている。II区は5.4~5.7mに泥岩粒・炭・砂などを多く含んだ灰黄褐色弱砂質土(土層No.19)、大きめの泥岩がつまった黄褐色土(土層No.11・43)などからなる面があり、I区と対比して3面に準ずると判断した。大型土坑や溝、建物、柱穴列などを検出したが、軸方位はI区の遺構と大きく異なる。

4面はII区のみ検出した。検出高は5.0~5.1m、含有物をほとんど含まない暗褐色粘質土(土層No.34)で、面上の生活痕は見当らなかった。本来はI区3面に相当する面が存在していたのが、ある時期に削平を受け、下層部の土だけが残存したと推測できる。よって、検出した遺構は3bに帰属させるのが妥当かもしれないが、比高差を勘案して、新たに4面遺構とした。I区では鉄分と僅かな炭・泥岩粒を含んだ明褐色砂質土(土層No.20・23)などから、中世以前の構成土と認識した。深掘り調査においても明確な遺構はみつからなかった。一方、II区はこの明褐色砂質土が確認できなかった。II区側のみ、中世以前の土を掘り込んで4面を造成したという可能性もあるが、いずれにしてもI区とのつながりは不明である。

第2節 各説

1. I区1面(図7~10)

検出高:約6.0~6.3m 構成土:暗褐色土・破砕泥岩地行・炭層 検出遺構:土坑4基・小穴37口(内建物1棟、柱穴列2列含む)

建物1(図7)

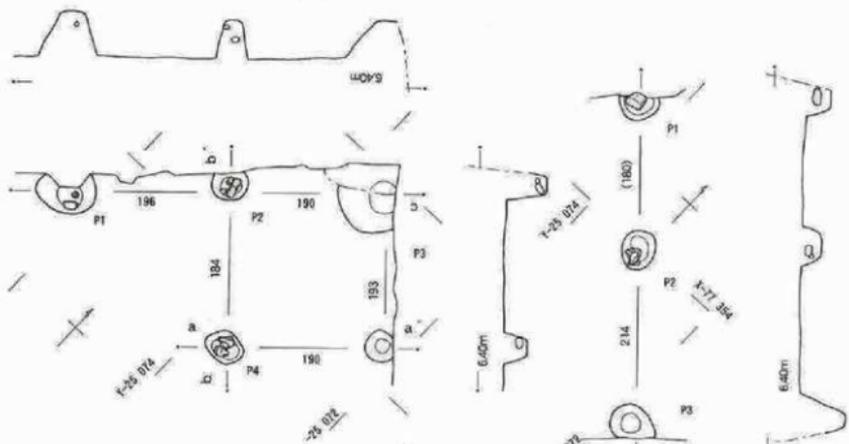
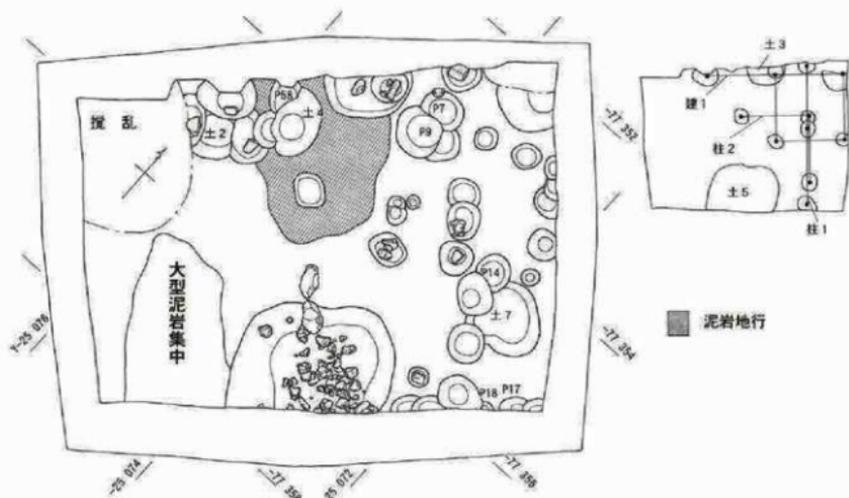
位置:X-77 351~77 355 Y-25 072~25 077 規模:東西2間(柱間距離1.91m)×南北1間(柱間距離1.88m)・柱穴底面高5.67m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-43°-W 重複関係:土坑3を切る 出土遺物:P.1より瀬戸双耳小壺(1) P.3より常滑甕(2)・常滑片口鉢II類(3)・釘(4) 特記事項:充填土は泥岩や礫(礎石含む)が多くつまった暗褐色土。I区の柱穴が北側だけに群集し、比較的整地されていることから、建物の南半分を検出したと推測される。

柱穴列1(図7)

位置:X-77 352~77 356 Y-25 071~25 075 規模:南北2間(柱間距離約1.97m)柱穴底面高5.66m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-43°-W 重複関係:柱穴列2を切る 出土遺物:P.2より罎釜(5)・瀬戸灰軸折縁小皿(6) 特記事項:軸線が建物1とほぼ同位にあることから、類似施設の可能性が高い。柱穴充填土の上面は大量の炭土が含まれていた。これは1面と2a面の間層にある炭層が入り込んだものであり、建物より古い時期の遺構だと推測する。

柱穴列2(図8)

位置:X-77 353~77 356 Y-25 071~25 075 規模:東西1間(柱間距離1.92m)×南北1間(柱間距離約1.89m)柱穴底面高5.70m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-42°-W 重複関係:柱穴列1に切られる 出土遺物:P.1より淳熙元寶(7) 特記事項:建物1・柱穴列1と同軸上にあり、北へ伸びていると想像する。時期的には柱穴列1に近い。



建物1	
No.	長×幅×深さ
P. 1	73×(58)×54
P. 2	(46)×43×48
P. 3	(-)×(-)×46
P. 4	43×38×23
P. 5	39×(39)×24

単位cm

柱穴列1	
No.	長×幅×深さ
P. 1	46×(43)×31
P. 2	48×41×23
P. 3	(58)×45×54

単位cm

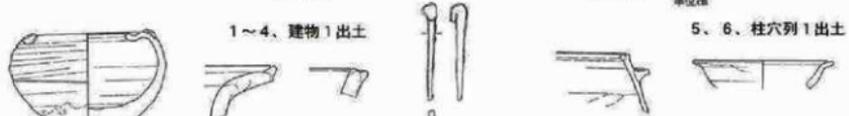


図7 1区1面遺構全図、建物1、柱穴列1、1面遺構出土遺物(1)

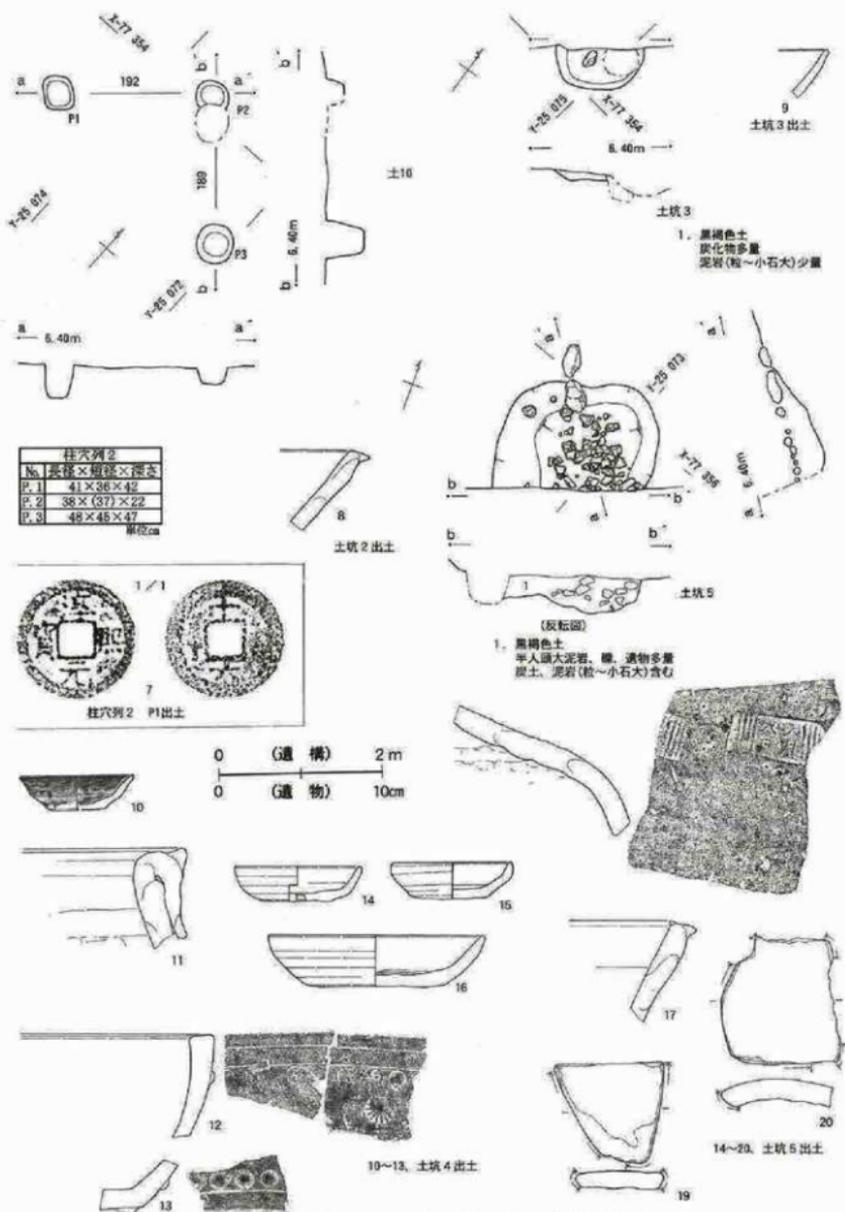


图8 1区1面柱穴列2、土坑2~5、1面遺構出土遺物(2)

土坑2 (図8) 出土遺物: 常滑片口鉢Ⅱ類(8)

土坑3 (図8)

位置: X-77 353~77 355 Y-25 074~25 076 規模: 東西107cm×南北50cm以上×深さ約10cm (底面高6.00m) 平面形: (楕円形) 断面形: 浅皿形 主軸方位: (N-47° - E) 充填土: 図に記載 重複関係: 建物1P. 2に切られる 出土遺物: 瀬戸碗(9)

土坑4 (8図) 出土遺物: 土師器皿R種小型(10)・常滑甕(11)・瓦質火鉢(12・13)

土坑5 (図8)

位置: X-77 355~77 358 Y-25 072~25 075 規模: 東西約200cm×南北130cm以上×深さ約48cm (底面高5.54m) 平面形: (不定楕円形) 断面形: 不整の皿形 主軸方位: 不明 充填土: 黒褐色土 泥岩(粒~半人頭大)・礫・遺物・炭土多量 出土遺物: 土師器皿R種小型(14・15)・土師器皿R種大型(16)・常滑片口鉢Ⅱ類(17)・常滑甕(18)・磨耗陶片(19・20) 特記事項: 泥岩や安山岩、焼石炭や遺物を多量に含む。(18)の叩き目『大日大月』はⅡ区3面からも同一固体と思われる破片(図22-20)が出土している。矩形の枠内に縦線と組み合わせた同意匠の叩き目が千葉地遺跡(御成町15-5地点)3面から出土しているが、字体は異なる。また本調査地点の南に位置する材木座町屋遺跡(材木座6-674-15地点、本図1-8地点)のB地点1面井戸1内から同様のものが出土したことは留意すべきだろう。

土坑7 出土遺物(図9): 土師器皿R種小型(21)・瀬戸灰釉折縁深皿(22)

土坑9 出土遺物(図9): 土師器皿R種大型(23)・白磁口兀皿(24)

P. 11 出土遺物(図9): 常滑甕(25)

P. 14 出土遺物(図9): 土師器皿R種小型(26)・瀬戸瓶子(27)

P. 17 出土遺物(図9): 土師器皿R種小型(28)

P. 18 出土遺物(図9): 土師器皿R種大型(29)・瓦質火鉢(30)

P. 58 出土遺物(図9): 土師器皿R種大型(31)

Ⅰ区1面 遺構以外からの出土遺物(図10) 土師器皿R種小型(1・2)・瓦質火鉢(3・4)・瓦質香炉(5)・常滑片口鉢Ⅱ類(6・7)・常滑甕(8)・瀬戸? (9・10)・瀬戸灰釉折縁深皿(11)・褐釉托? (12)・淨化元寶(13)・不明鉄製品(14)・硯(15) 特記事項: 充填土は土坑9と同質。(12)は今小路西遺跡(御成町171番1外地点)に報告された洪塘窯か?

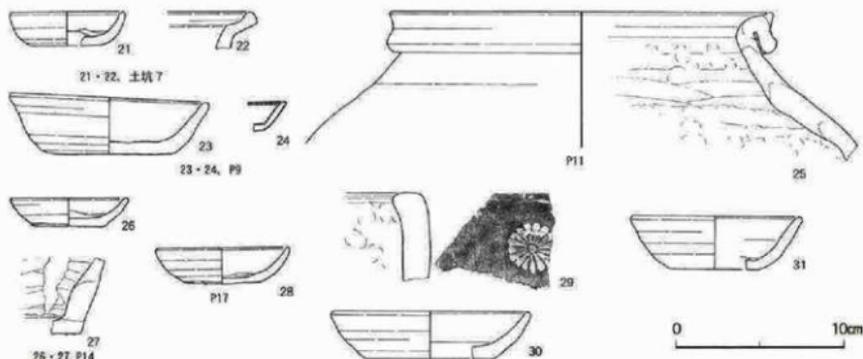


図9 Ⅰ区1面遺構出土遺物(3)

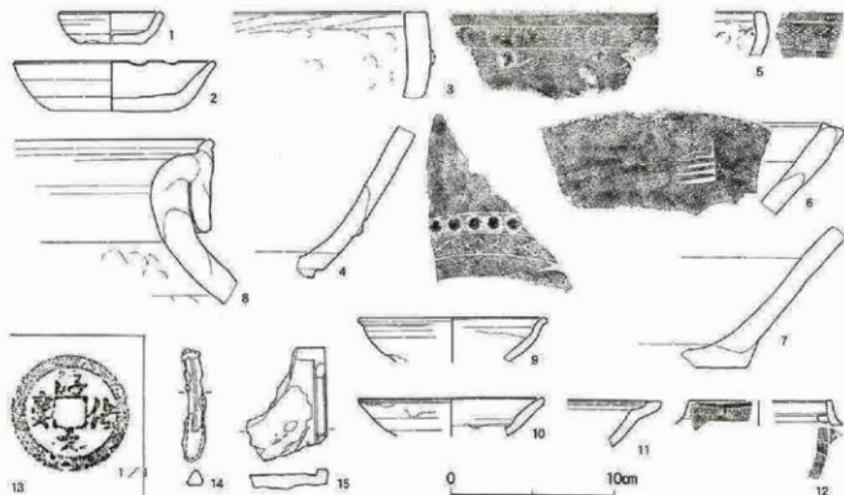


図10 I区1面出土遺物

2. I区2a面 (図11・15)

検出高：約6.0m 構成土：炭層・破砕泥岩地行 検出遺構：土坑3基

土坑8 (図11)

位置：X-77 355~-77 357 Y-25 074~-25 076 規模：東西30cm以上×南北116cm以上×深さ約20cm (底面高5.71m) 平面形：(楕円形) 断面形：(逆台形) 主軸方位：(N-3.5° -W) 充填土：黒褐色土 炭化物と泥岩 (小礫石~拳大) 多量 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・瀬戸平碗(2)・瀬戸香炉(3)・磨耗陶片(4・5) 特記事項：土坑群のうちの1基

土坑9 (図11)

位置：X-77 356~-77 358 Y-25 074~-25 076 規模：東西106cm以上×南北70cm以上×深さ約30cm (底面高5.64m) 平面形：(楕円形) 断面形：(逆台形) 主軸方位：不明 充填土：黒褐色土 炭土と泥岩 (小石~拳大) 多量 出土遺物：常滑片口鉢II類(6)・常滑甕(7)・磨耗陶片(8) 特記事項：土坑群のうちの1基

土坑10 (図11)

位置：X-77 356~-77 358 Y-25 072~-25 075 規模：東西182cm以上×南北80cm以上×深さ約32cm (最下高5.52m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：皿形 主軸方位：(N-67.5° -E) 充填土：灰黄褐色土 山砂・泥岩 (小石大) 多量、炭・礫・遺物含む 重複関係：土坑5に切られる 出土遺物：瓦質火鉢(9)・磨耗陶片(10) 特記事項：土坑群のうちの1基

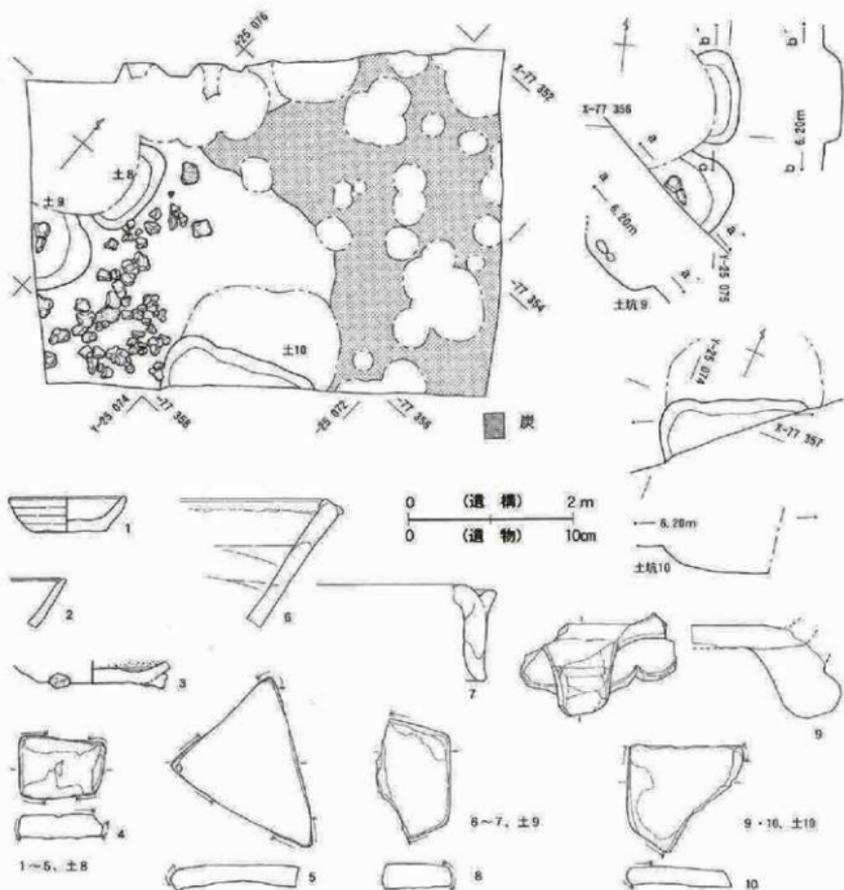


図11 I区2 a面遺構全図、土坑8~10、同出土遺物

3. I区2 b面 (図12~15)

検出高：約5.7~6.0m 構成土：炭土・破碎泥岩地行・暗黄灰褐色土 検出遺構：土坑11基・小穴28口
(内建物2棟・柱穴列1列含む)

建物2 (図12・13)

位置：X-77 353~77 357 Y-25 072~25 077 規模：東西2間(柱間距離1.97m)×南北1間(柱間距離2.00m)・柱穴底面高5.19m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-48° - W 重複関係：柱穴列3・土坑23を切り、土坑11・16に切られる 出土遺物：P. 2より土師器皿R種小型(1) 特記事項：おもな充填土は炭土で、礎板や柱材の一部が残存していた。1面建物1より主軸が5°ほど西へ傾いているものの、ほぼ同位置で検出されており、施設の継続性が窺える。

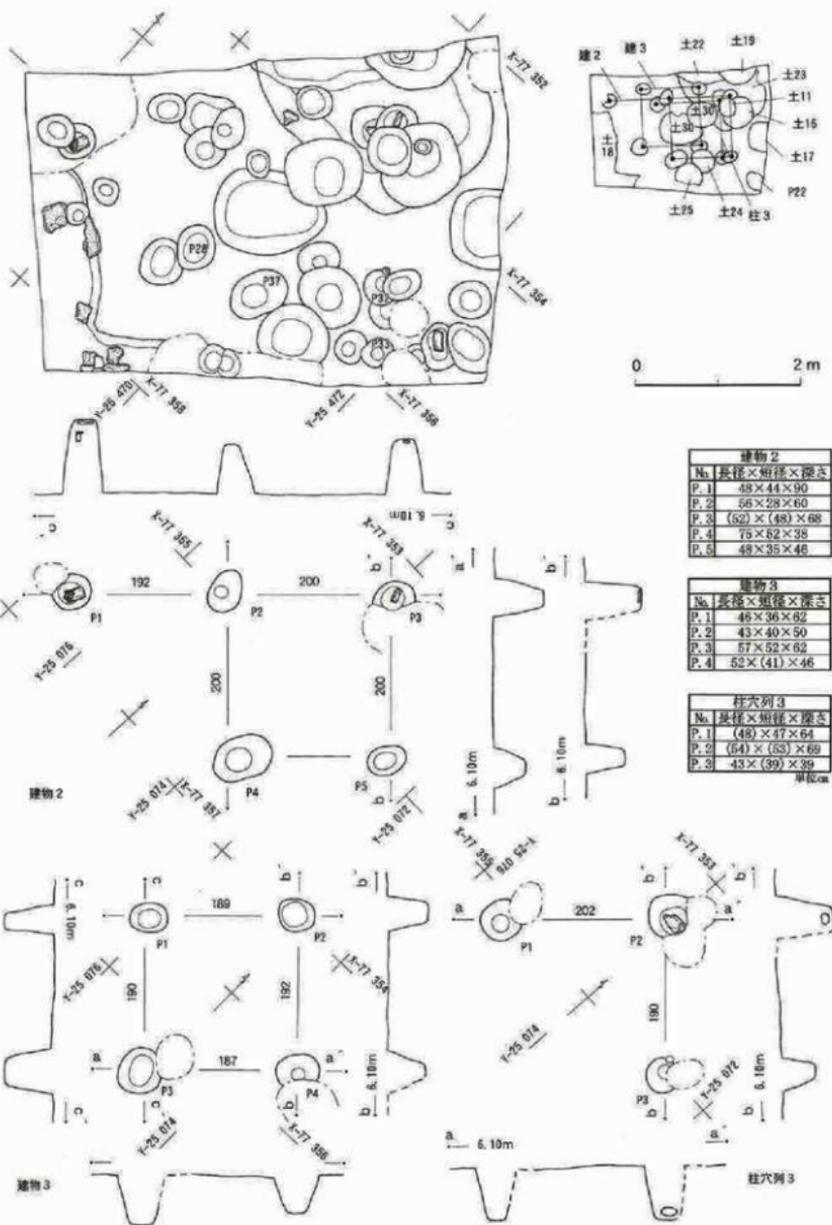


図12 I区2b面遺構全圖、建物2・3、柱穴列3

建物3 (図12・13)

位置：X-77 352～-77 357 Y-25 073～-25 077 規模：東西1間(柱間距離1.88m)×南北1間(柱間距離1.91m)・柱穴底面高5.49m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-44° -W
重複関係：土坑22・23を切り、土坑24に切られる 出土遺物：P. 2より土師器皿R種小型(2)・土師器皿R種大型(3) 特記事項：充填土・方位・配列などから比較して建物2と同類施設だろう。

柱穴列3 (図12)

位置：X-77 353～-77 356 Y-25 072～-25 076 規模：東西1間(柱間距離2.02m)×南北1間(柱間距離約1.90m) 柱穴底面高5.25m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-48.5° -W
重複関係：土坑23を切り、建物2・土坑11に切られる 特記事項：充填土は炭化物・泥岩(粒～小石大)・遺物片を含む明褐色粘質土。ほかは建物2・3との相関性が高い。

土坑8 (図13) 出土遺物：鳴滝仕上げ砥(4)

土坑11 (図13)

位置：X-77 353～-77 355 Y-25 073～-25 074 規模：東西59cm×南北62cm×深さ約22cm(最下高5.63m) 平面形：楕円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-44° -W 充填土：炭土 泥岩(粒～小石)・遺物片含む。締まり弱い 重複関係：建物2、柱穴列3、土坑16・23を切る 出土遺物：土師器皿R種小型(5) 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑12 (図13)

位置：X-77 354～-77 355 Y-25 073～-25 075 規模：東西82cm×南北94cm×深さ約50cm(最下高5.32m) 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 主軸方位：N-37.5° -E 充填土：炭土 泥岩(粒～小石)・遺物片含む。締まり弱い 重複関係：土坑13・23を切る 出土遺物：白磁口瓦皿(6) 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑13 (図13)

位置：X-77 354～-77 356 Y-25 073～-25 075 規模：東西105cm×南北138cm×深さ約44cm(最下高5.40m) 平面形：長円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-48° -E 充填土：明褐色粘質土 炭化物・泥岩(粒～小石大)・遺物片、炭層を含む 重複関係：土坑12に切られる 出土遺物：常滑片口鉢Ⅱ類(7) 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑16 (図13・14)

位置：X-77 353～-77 355 Y-25 072～-25 074 規模：東西100cm×南北101cm×深さ約71cm(最下高5.14m) 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 主軸方位：N-25.5° -E 充填土：褐灰色土 炭土多量。泥岩(小石大)含む 重複関係：建物2、土坑23を切り、土坑11に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(8)・土師器皿R種大型(9)・瀬戸灰釉折縁深皿(10)・備前插鉢(11)・常滑壺(12)・滑石鍋(13)・皇宋通寶(14) 特記事項：土坑群のうちの1基。(12)の常滑片には矩形の枠に縦線と三つ鱗文を配する叩き目

土坑17 (図13・14)

位置：X-77 353～-77 355 Y-25 071～-25 073 規模：東西100cm×南北60cm以上×深さ約52cm(最下高5.44m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：箱型 主軸方位：N-42° -W 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿R種小型(15) 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑18 (図13・14)

位置：X-77 356～-77 359 Y-25 074～-25 077 規模：東西152cm以上×南北242cm以上×深さ26～42cm(最下高5.51m) 平面形：不定形 断面形：逆台形 主軸方位：(N-48.5° -E) 充填土：

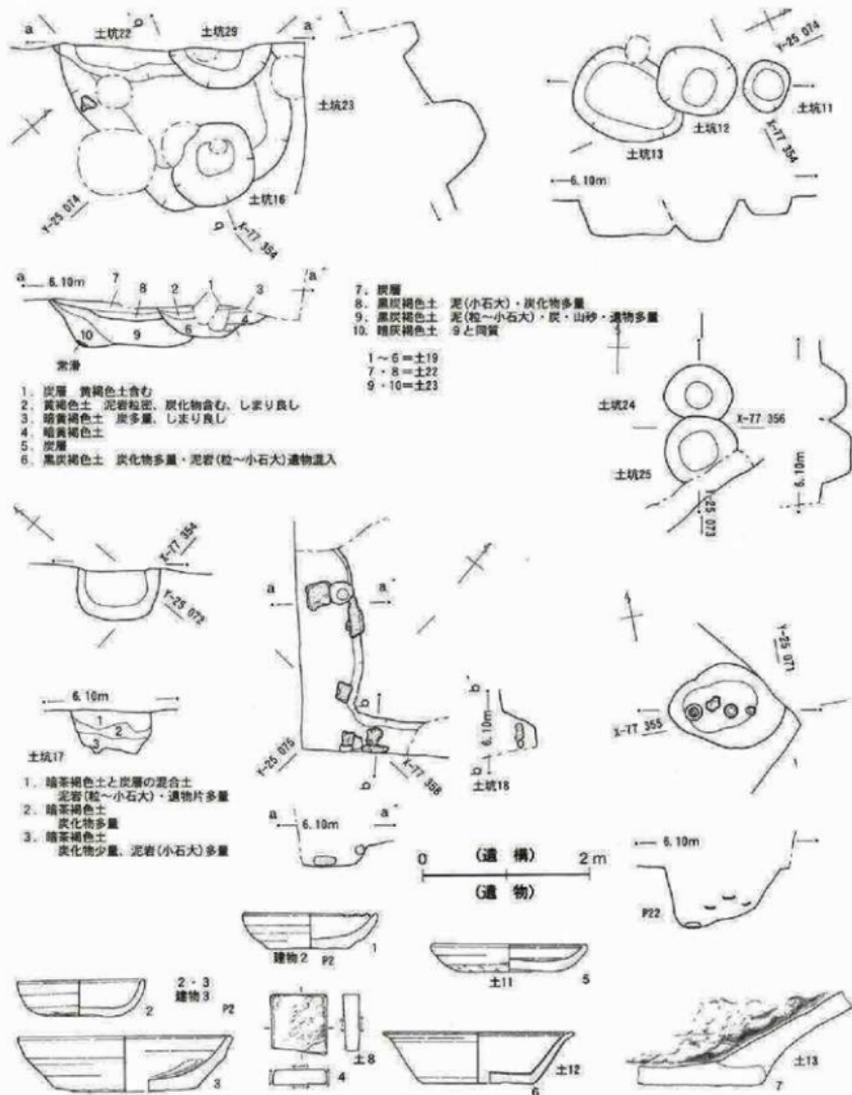


図13 I区2b面土坑11~13・16~19・22~25、P. 22、2b面遺構出土遺物(1)

灰褐色弱砂質土 砂・灰混りの砂・泥岩(小石~半人頭大)・礫・砂岩・炭化物など多量 出土遺物：土師器皿R種小型(16・17)・土師器皿R種大型(18)・常滑片口鉢Ⅱ類(19)・磨耗陶片(20)・青白磁梅瓶(21)・加工骨(22) 特記事項：調査区南西で検出した。L字状に屈曲していて、溝の可能性が高い。

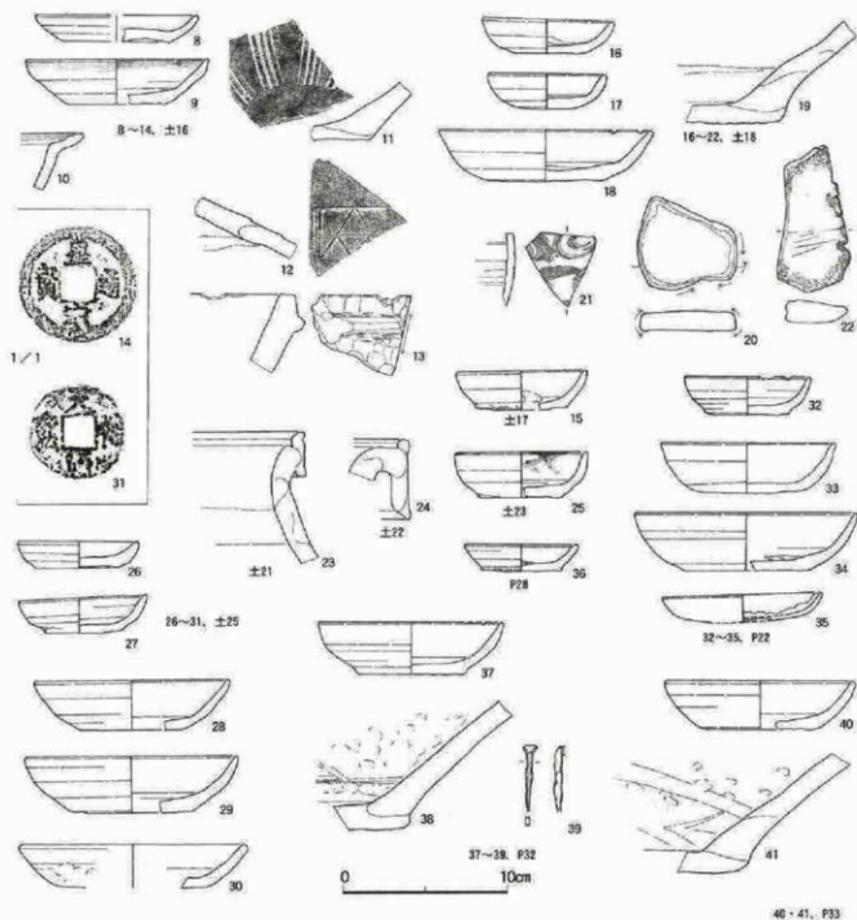


図14 I区2b面遺構出土遺物(2)

建物や柱穴などの方位や配列の相関性が高く、なんらかの付帯施設の可能性がある。

土坑19 (図13)

位置：X-77 352～77 354 Y-25 073～25 075 規模：東西124cm×南北50cm以上×深さ約40cm (底面高5.51m) 平面形：(楕円形) 断面形：深皿形 主軸方位：(N-53°-E) 充填土：図に記載 重複関係：土坑22・23を切る 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑21

出土遺物 (図14)：常滑甕 (23)

土坑22 (図13・14)

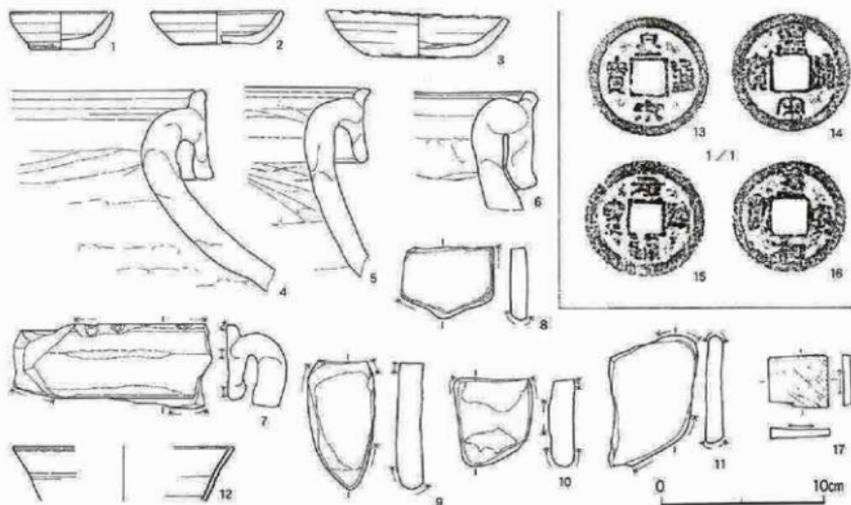


図15 1区2面(a・b一括)出土遺物

位置：X-77 352～77 355 Y-25 074～25 076 規模：東西162cm以上×南北40cm以上×深さ約20cm(底面高5.70m) 平面形：不明 断面形：皿形 主軸方位：(N-41.5° - E) 充填土：図に記載 重複関係：土坑23を切り、建物3、土坑19に切られる 出土遺物：常滑甕(24) 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑23(図13・14)

位置：X-77 352～77 355 Y-25 072～25 076 規模：東西260cm以上×南北225cm以上×深さ約60cm(底面高5.38m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：逆台形 主軸方位：(N-78° - W) 充填土：図に記載 重複関係：建物2・3、柱穴列3、土坑11・12・16・19・22に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(25) 特記事項：土坑群のうちの1基だが、中では最も大きい。

土坑24(図13)

位置：X-77 355～77 357 Y-25 072～25 074 規模：東西84cm×南北70cm以上×深さ約33cm(底面高5.52m) 平面形：楕円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-87° - E 充填土：炭土 重複関係：建物3を切り、土坑25に切られる 特記事項：土坑群のうちの1基。

土坑25(図13.14)

位置：X-77 355～77 357 Y-25 072～25 074 規模：東西89cm×南北71cm以上×深さ約38cm(底面高5.47m) 平面形：楕円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-66° - E 充填土：炭土 重複関係：土坑24を切る 出土遺物：土師器皿R種小型(26・27)・土師器皿R種大型(28・29)・土師器皿T種大型(30)・天福通寶(31) 特記事項：土坑群のうちの1基。

P.22(図13・14)

位置：X-77 354～77 356 Y-25 071～25 072 規模：東西71cm以上×南北53cm×深さ約38cm(底面高5.56m) 平面形：不定楕円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-88° - E 充填土：黄灰褐色土 暗褐色土・炭・遺物・泥岩(粒～小石大) 多量 出土遺物：土師器皿R種小型(32)・土師器皿R

種大型(33・34)・鉄皿(35) 特記事項：土師器埋納遺構。充填土から、建物3と同時期と類別できる。

P. 28 出土遺物(図12・14)：土師器皿R種小型(36)

P. 32 出土遺物(図12・14)：土師器皿R種大型(37)・常滑甕(38)・釘(39)

P. 22 出土遺物(図12・14)：土師器皿R種大型(40)・常滑甕(41)

I区2面出土遺物(図15) a面・b面の遺構以外から出土した遺物を一括して示した。土師器皿R種小型(1・2)・土師器皿R種大型(3)・常滑甕(4~6)・磨耗陶片(7~11)・白磁口元皿(12)・皇末通寶(13・14)・元祐通宝(15・16)・鳴滝仕上げ砥(17)

4. II区2面(図16)

検出高：約5.8~6.1m 構成土：破砕泥岩地行・黄褐色土・炭土 検出遺構：土坑1基・小穴11口(内柱穴列1列含む)

柱穴列1(図16)

位置：X-77 347~-77 351 Y-25 086~-25 088 規模：南北4間(柱間距離約0.9m) 柱穴底面高5.58m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：(N-46°-W) 出土遺物：P4より常滑甕(1) 特記事項：西壁際で検出した柱穴列。柱間隔が一定ではないか。軸的にはI区の建物、柱穴列と同じ。

P. 4 出土遺物(図16)：瓦質火鉢(2)

II区2面遺構以外の出土遺物(図16) 土師器皿R種小型(3・4)・土師器皿R種大型(5)・常滑片口鉢II類(6)・常滑壺(7)・瀬戸緑釉小皿(9~11)・瀬戸灰釉鉤皿(12)・瀬戸碗(13)・瀬戸鉢(14・18)・瀬戸灰釉折縁深皿(15~17)・褐釉壺(19)・白磁口元皿(20)・竜泉窯青磁画花文碗[21]・釘(22・23)・中砥? (24) 特記事項：動物骨(長径17.3cm、短径15.3cm、厚さ2.2cmの円盤状)図版10の写真参照

5. I区3面(図17~19)

検出高：約5.4~5.7m 構成土：黄褐色土、明褐色土 検出遺構：井戸1基・土坑7基・小穴41口(内建物1棟・柱穴列2列含む)・杭穴26口

建物4(図17)

位置：X-77 352~-77 356 Y-25 071~-25 077 規模：東西2間(柱間距離1.96m)×南北1間(柱間距離1.92m)・柱穴底面高5.12m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-43.5°-W 重複関係：井戸1を切り、土坑26・28・29・32に切られる 特記事項：おもな充填土は泥岩(小石~拳大)を多量に含んだ明褐色粘質土。軸・配列状況などの共通性からみて、前述の2面で検出された建物など一連の施設は、3面時の地割や施設が大きく影響しているとみるのが妥当だろう。

柱穴列4(図17)

位置：X-77 353~-77 357 Y-25 072~-25 077 規模：東西2間(柱間距離1.96m) 柱穴底面高5.04m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：N-44°-E 重複関係：柱穴列5、土坑31を切る 特記事項：充填土、軸とも建物4とほぼ同じ。礎板や柱の一部が残存し、P.3の柱の規模は14cm×13cm×30cm以上で面取りされて八角形状に成形されていた。先述のとおり、I区は1~3面にかけて北側は柱穴群、南側は土坑群という、一貫した配列にあるが、この柱穴列はその境界部付近に位置することから、建物の南辺、または地境にある柵列のようなものであろう。

柱穴列5(図17)

位置：X-77 353~-77 357 Y-25 072~-25 077 規模：東西2間(柱間距離1.96m) 柱穴底面高5.04m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：N-51.5°-E 重複関係：土坑31を切り、

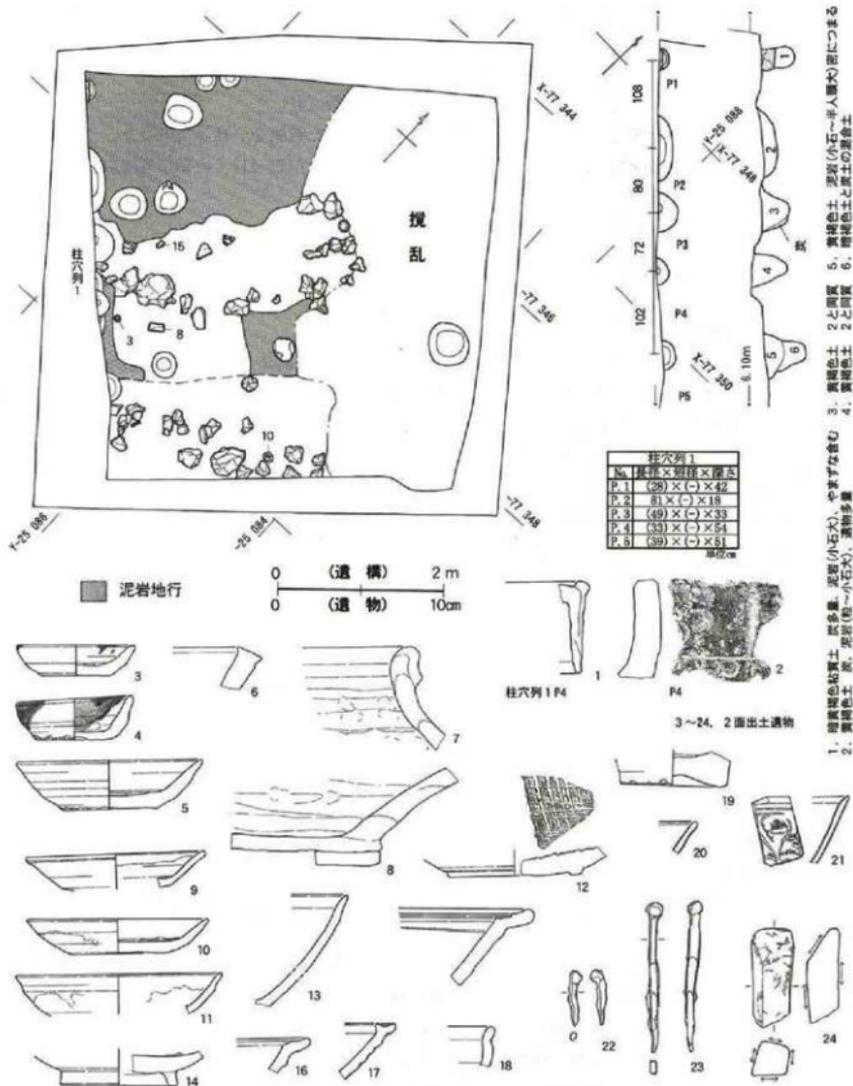


図16 II区2面遺構全図、柱穴列1、遺構および2面出土遺物

柱穴列4に切られる 特記事項：おもな充填土は建物4、柱穴列4などと同じで、礎板を持つ。軸線がほかのものより若干東へ傾いているが、性格は柱穴列4と同様だろう。

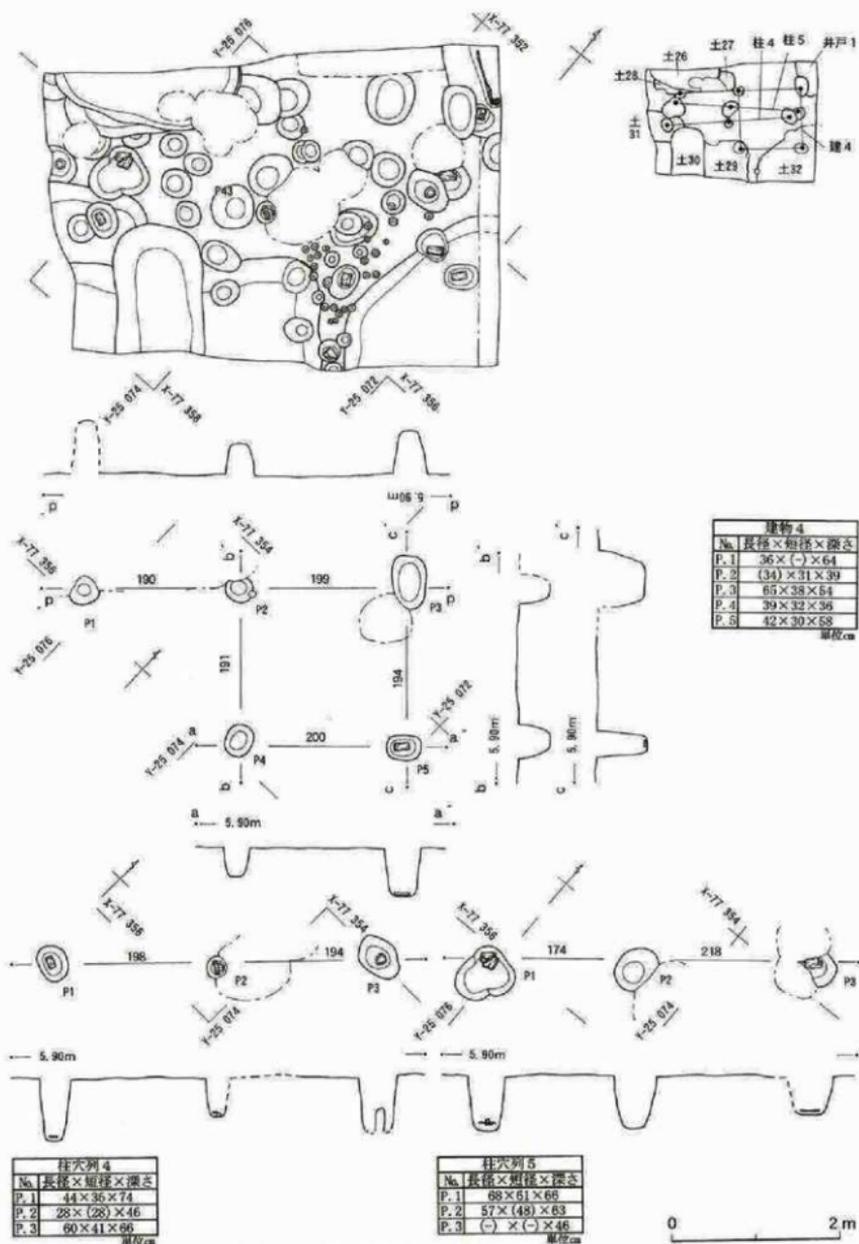


図17 I区3面遺構全図、建物4、柱穴列4・5

井戸1 (図18)

位置：X-77 352～-77 354 Y-25 072～-25 075 規模：東西120cm以上×南北68cm以上×深さ約88cm以上(標高4.62m以下は未掘) 平面形：(方形) 断面形：逆台形 主軸方位：(N-57.5° - W) 充填土：図に記載 重複関係：建物4に切られる 特記事項：方形の掘方に方形の木製井戸枠を納めた井戸。南西一角のみを検出した。木枠は縦板組隅柱と横棧の一部で構成されているが、崩落の危険が大きいため、底面まで掘削することはできなかった。

土坑26 (図18)

位置：X-77 354～-77 356 Y-25 075～-25 078 規模：東西220cm以上×南北80cm以上×深さ約9cm(底面高5.61m) 平面形：(長円形) 断面形：皿形 主軸方位：(N-62.5° - E) 充填土：図に記載 重複関係：土坑27・28を切る 出土遺物：土師器皿R種大型(1)・竜泉窯青磁碗? (2)・景德元寶(39) 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。土坑28の掘り直し遺構といえる。

土坑27 (図18)

位置：X-77 354～-77 356 Y-25 075～-25 077 規模：東西120cm以上×南北約64cm×深さ約74cm(底面高4.85m) 平面形：長円形 断面形：逆台形 主軸方位：N-46° - E 充填土：明褐色粘質土 泥岩(小石～拳大)多量。炭・砂含む 重複関係：建物4を切り、土坑26・28に切られる 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。

土坑28 (図18)

位置：X-77 354～-77 356 Y-25 075～-25 077 規模：東西216cm×南北70cm以上×深さ約44cm(底面高5.16m) 平面形：(長円形) 断面形：深皿形 主軸方位：(N-41° - E) 充填土：図に記載 重複関係：建物4、土坑27を切り、土坑26に切られる 出土遺物：常滑甕(4) 特記事項：土坑26の直下にあることから、同種の遺構と判断する。一連の土坑群のうちの1基。

土坑29 (図18)

位置：X-77 355～-77 359 Y-25 072～-25 076 規模：東西300cm以上×南北124cm以上×深さ約51cm(底面高5.10m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：逆台形 主軸方位：(N-46.5° - E) 充填土：図に記載 重複関係：建物4、土坑31を切り、土坑30に切られる 出土遺物：土重(5) 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。形状は明らかでないが、先の2b面土坑18と同位置にある。土坑30～32を含め、周辺建物にともなう付帯施設か。南調査区外へ広がる。

土坑30 (図18)

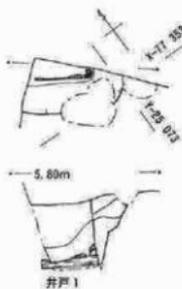
位置：X-77 356～-77 358 Y-25 073～-25 076 規模：東西約108cm×南北154cm以上×深さ約48cm(底面高5.02m) 平面形：(隅丸長方形) 断面形：深皿形 主軸方位：(N-43.5° - W) 充填土：図に記載 重複関係：土坑29・31を切る 出土遺物：土師器皿R種中型(6)・土師器皿R種大型(7)・常滑甕(8) 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。

土坑31 (図18)

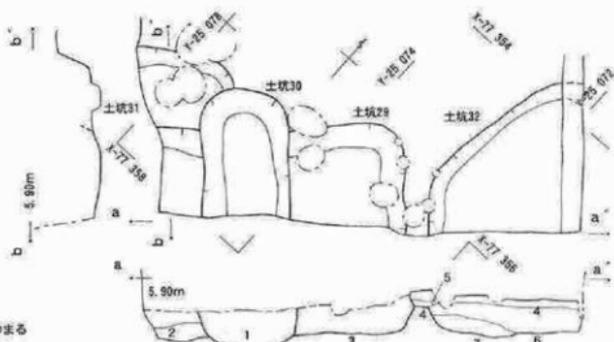
位置：X-77 356～-77 358 Y-25 075～-25 077 規模：東西112cm以上×南北100cm以上×深さ約40cm(底面高5.19m) 平面形：不明 断面形：(逆台形) 主軸方位：不明 充填土：明褐色粘質土 泥岩(小石～拳大)多量。炭・砂含む 重複関係：柱穴列4・5、土坑29・30に切られる 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。

土坑32 (図18)

位置：X-77 353～-77 357 Y-25 071～-25 073 規模：東西約186cm以上×南北180cm以上×深さ約50cm(底面高5.20m) 平面形：(楕円形) 断面形：深皿形 主軸方位：不明 充填土：図に記載

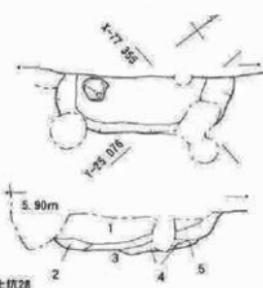
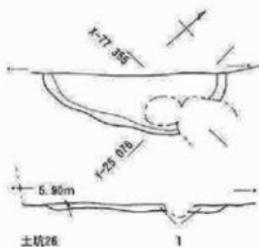


1. 溶岩層
2. 暗褐色粘質土と泥岩(準大)堆積につまる
3. 泥岩層
4. 暗茶色粘質土 砂粒状炭、泥岩を少量含む
5. 暗褐色粘質土 4と同質。粘性強

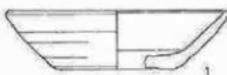
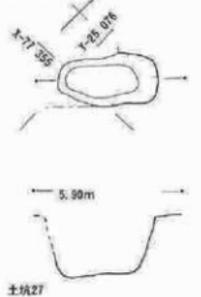


1. 暗灰褐色土 泥岩(小石~半人拳大)密につまる炭・砂混入
2. 泥岩(小石~準大)密につまる。炭混入
3. 大型泥岩層
4. 黄褐色土 深い泥岩層行土。暗灰褐色土・炭含む
5. 暗茶褐色粘質土
6. 黄灰褐色土内に大型泥岩がつまる
7. 暗褐色粘質土 泥岩(準~大型)・炭・遺物を含む

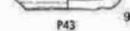
1=土坑30 2・3=土坑29 4~7=土坑32



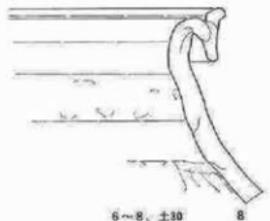
1. 黄褐色土 砂・泥岩(半準大)・炭多量
2. 暗褐色粘質土 炭・泥岩含む
3. 暗黄灰褐色粘質土 1に比べ含有物少ない。炭多量
4. 暗黄灰褐色粘質土 大型泥岩混入
5. 灰土



1~3, 土26



土29



6~8, 土30

図18 I区3面井戸1、土坑26~32、3面遺構出土遺物

重複関係：建物4を切る 特記事項：一連の土坑群のうちの1基。

P. 43 出土遺物 (図18)：土師器皿R種小型(9)

Ⅰ区3面遺構以外の出土遺物(図19) 土師器皿R種小型(1・2)・土師器皿R種大型(3~6)・土師器皿R種極小型(7)・瀬戸内系瓦器碗(8)・常滑片口鉢Ⅰ類(9)・常滑片口鉢Ⅱ類(10)・瀬戸灰釉御皿(11)・瀬戸灰釉折縁深皿(12)・白磁皿？(13)・竜泉窯青磁蓮弁文碗(14)・皇宋通寶(15)・元祐通寶(16・17)・種不明銭(18)・天草中砥(19)・硯(20)

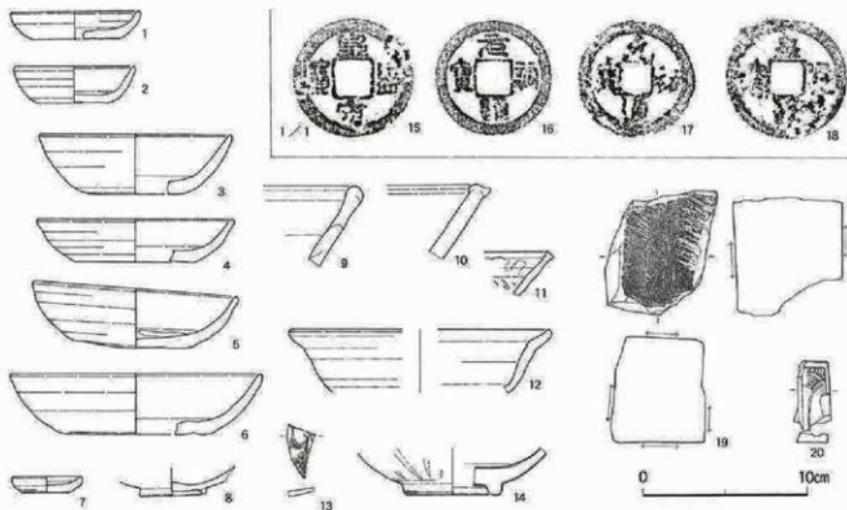


図19 Ⅰ区3面出土遺物

6. Ⅱ区3面 (図20~22)

検出高：約5.4~5.8m 構成土：灰黄褐色弱砂質土、黄褐色土 検出遺構：溝1条・土坑4基・小穴49口 (内建物1棟・柱穴列3列含む)

建物1 (図20)

位置：X-77 344~77 349 Y-25 083~25 089 規模：東西2間 (柱間距離2.10m)×南北1間 (柱間距離2.20m)・柱穴底面高5.21m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-25.5° - W 重複関係：柱穴列2を切る 特記事項：おもな充填土は炭土・泥岩粒を含んだ暗褐色土。軸方位はⅠ区の建物より20°ほど東に傾いているので、関連性は低い。

柱穴列2 (図20・21)

位置：X-77 344~77 347 Y-25 083~25 086 規模：南北3間 (柱間距離約0.56m) 柱穴底面高5.18m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：(N-39° - W) 重複関係：建物1に切られる 出土遺物：P.4より竜泉窯青磁蓮弁文碗(1)・天草中砥(2) 特記事項：東壁際で検出した柱穴列。上面柱穴列1と同様柵列と認識できる。

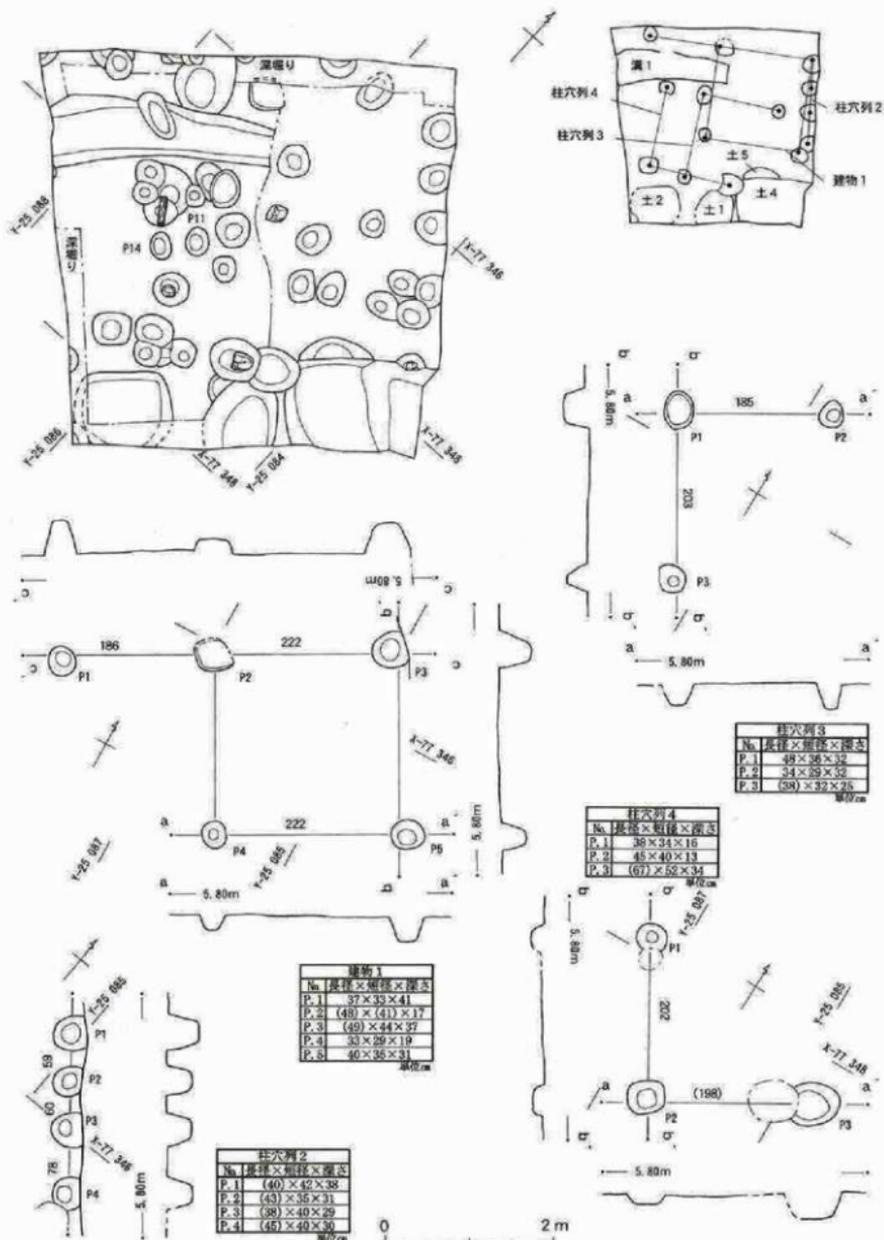


图20 II区3面遺構全圖、建物1、柱穴列2~4

柱穴列 3 (図20)

位置: X-77 346~77 350 Y-25 084~25 087 規模: 東西1間(柱間距離1.85m)×南北1間(柱間距離2.03m)柱穴底面高5.24m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位: (N-30° - W) 特記事項: おもな充填土は建物1と同じ。

柱穴列 4 (図20)

位置: X-77 347~77 350 Y-25 084~25 088 規模: 東西1間(柱間距離約1.98m)×南北1間(柱間距離2.00m)柱穴底面高5.33m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位: (N-30° - W) 重複関係: 土坑1・4を切る 特記事項: 柱穴列3とほぼ同位にあり、充填土も同じ。柱穴は深さ平均21cmと浅い。

溝 1 (図21)

位置: X-77 346~77 349 Y-25 086~25 089 規模: 南北幅46~84cm×深さ約10cm(底面高5.26m) 断面形: 皿形 流下方向: 不定 主軸方位: (N-49.5° - E) 充填土: 図に記載 重複関係: 建物4を切る 特記事項: 調査区東側は、攪乱により上面が消失していたため、全容も確認することができなかった。溝幅や方位も不安定。

土坑 1 (図21)

位置: X-77 348~77 350 Y-25 084~25 088 規模: 東西約88cm×南北92cm以上×深さ約

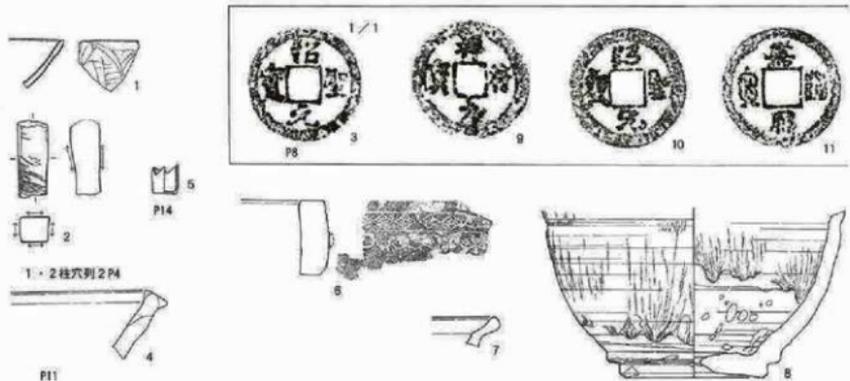
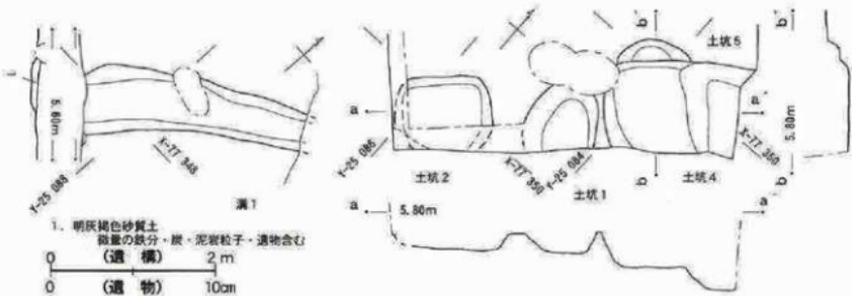


図21 II区3面溝1、土坑1・2・4・5、3面遺構および深掘り出土遺物

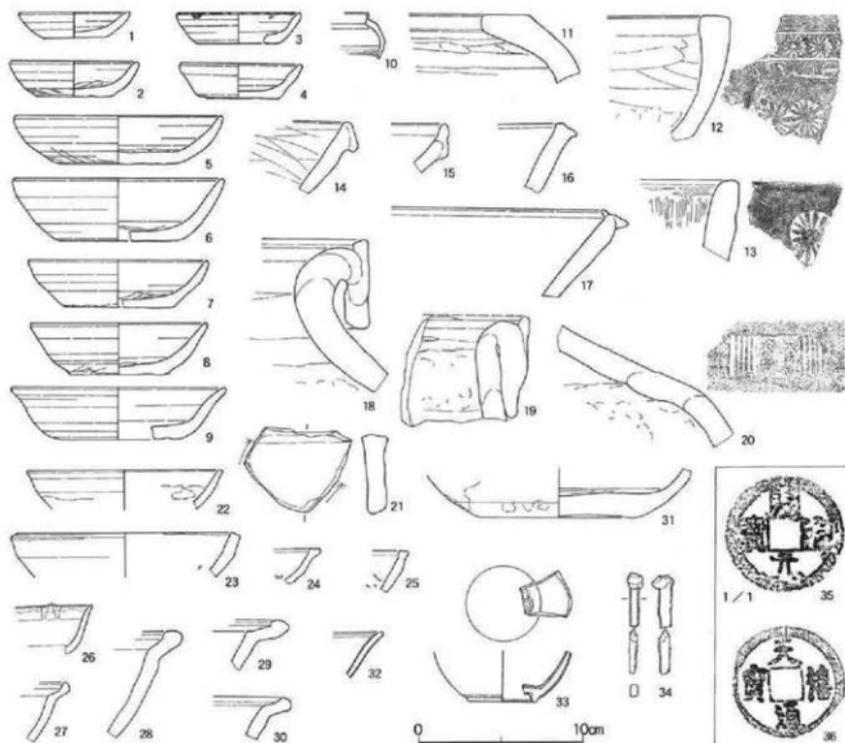


図22 II区3面出土遺物

26cm (底面高5.30m) 平面形：(楕円形) 断面形：逆台形 主軸方位：(N-29.5° -W) 充填土：黒褐色土 炭土多量。泥岩(半拳大)含む 重複関係：柱穴列4に切られる 特記事項：南壁近くに集中する土坑群のうちの1基。

土坑2 (図21)

位置：X-77 349~-77 351 Y-25 085~-25 087 規模：東西約118cm×南北89cm以上×深さ約46cm (底面高5.33m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：逆台形 主軸方位：N-43.5° -E 充填土：暗褐色土 炭多量。泥岩粒含む 特記事項：南壁近くに集中する土坑群のうちの1基。

土坑4 (図21)

位置：X-77 347~-77 350 Y-25 082~-25 085 規模：東西約182cm以上×南北111cm以上×深さ約46~74cm (底面高4.84m) 平面形：(長方形) 断面形：逆台形 主軸方位：N-50.5° -E 充填土：黒褐色土 炭土多量。泥岩(半拳大)含む 重複関係：柱穴列4に切られる 特記事項：南壁近くに集中する土坑群のうちの1基。東へ段状に落ちているが南東側がつかみず、遺構の性格はよくわからない。建物1の付帯施設の可能性もある。

土坑5 (図21)

位置: X-77 347~77 349 Y-25 084~25 085 規模: 東西約89cm以上×南北37cm以上×深さ約14cm (底面高5.22m) 平面形: (楕円形) 断面形: (逆台形) 主軸方位: 不明 充填土: 黒褐色土炭多量。泥岩 (小石大) 含む 重複関係: 土坑4に切られる 特記事項: 南壁近くに集中する土坑群の1基

P. 8 出土遺物 (図21): 紹聖元寶 (3)

P. 11 出土遺物 (図21): 常滑片口鉢Ⅱ類 (4)

P. 14 出土遺物 (図21): 不明銅製品 (5)

Ⅱ区3面深掘りから出土した遺物 (図21) 瓦質火鉢 (6)・瀬戸灰釉折縁深皿 (7)・澁青釉植木鉢 (8)・苧符元寶 (9)・紹聖元寶 (10)・嘉祐通寶 (11) 特記事項: 8の澁青釉植木鉢は浙江省金華県にある婺州窯系の倣約窯製品 (金英美・今井敦氏示教)。類似品の口縁部片が武蔵大路周辺遺跡 (扇ガ谷二丁目382番1地点) で出土しているが、未報告。

Ⅱ区3面遺構以外からの出土遺物 (図22) 土師器皿R種小型 (1~4)・土師器皿R種大型 (5~9)・? 小型土鍋 (10)・瓦質火鉢 (11~13)・魚住捏ね鉢 (14・15)・常滑片口鉢Ⅱ類 (16・17)・常滑甕 (19・20)・磨耗陶片 (21)・瀬戸緑釉皿 (22)・瀬戸灰釉卸皿 (23~25)・瀬戸入れ子 (26)・瀬戸灰釉折縁深皿 (27~31)・白磁口元皿 (32)・青磁小鉢 (33)・釘 (34)・開元通寶 (35)・天禧通寶 (36)

7. Ⅱ区4面 (図23~25)

検出高: 約5.0~5.1m 構成土: 暗褐色粘質土 検出遺構: 土坑3基・小穴65口 (内柱穴列4列含む)・杭穴22口

柱穴列5 (図23)

位置: X-77 345~77 348 Y-25 084~25 086 規模: 南北4間 (柱間距離約0.53m) 柱穴底面高4.79m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位: N-32° -W 重複関係: 方形土坑1を切る 特記事項: おもな充填土は明茶褐色粘質土。柱穴列1・2と同種の遺構と認識できる。方位的には柱穴8との関連性が窺える。

柱穴列6 (図23・24)

位置: X-77 344~77 347 Y-25 084~25 086 規模: 南北3間 (柱間距離約0.43m) 柱穴底面高4.95m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位: N-46° -W 重複関係: 方形土坑1を切る 出土遺物: P. 3より土師器皿T種小型 (1)・常滑甕 (2) 特記事項: おもな充填土は暗茶褐色粘質土。間断なく柱穴が並び、柱穴列1・2・5と同種の櫛列状遺構と認識する。このような遺構はⅡ区特有で、2~4面にかけて造設が継続していたことから、この周辺に長期にわたる地割が存在していたと推測できる。また方位的からみて柱穴列7の関連施設ととらえることもできる。

柱穴列7 (図23)

位置: X-77 345~77 348 Y-25 084~25 089 規模: 東西1間 (柱間距離2.09m)×南北1間 (柱間距離1.97m) 柱穴底面高4.73m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位: N-43° -W 重複関係: 方形土坑1・土坑12を切る 特記事項: おもな充填土は茶褐色粘質土で礎板を含む。

柱穴列8 (図23)

位置: X-77 347~77 349 Y-25 083~25 087 規模: 東西2間 (柱間距離約1.98m) 柱穴底面高4.84m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位: N-55° -E 重複関係: 方形土坑1を切る 特記事項: おもな充填土は暗茶灰色粘質土。方位的にみれば3面のⅡ区建物1やⅠ区柱穴列5と似通っている。

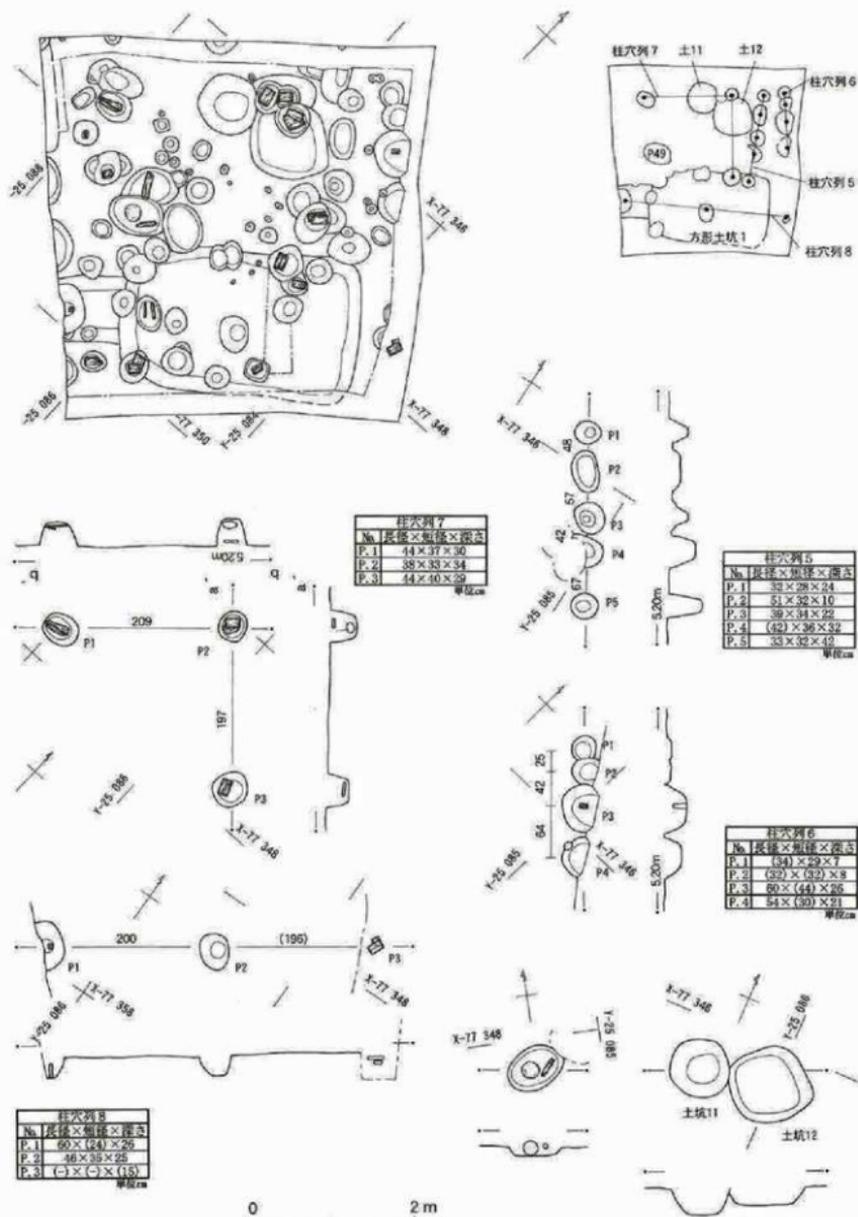


图23 II区4面遺構全圖、柱穴列5~8、P.49、土坑11·12

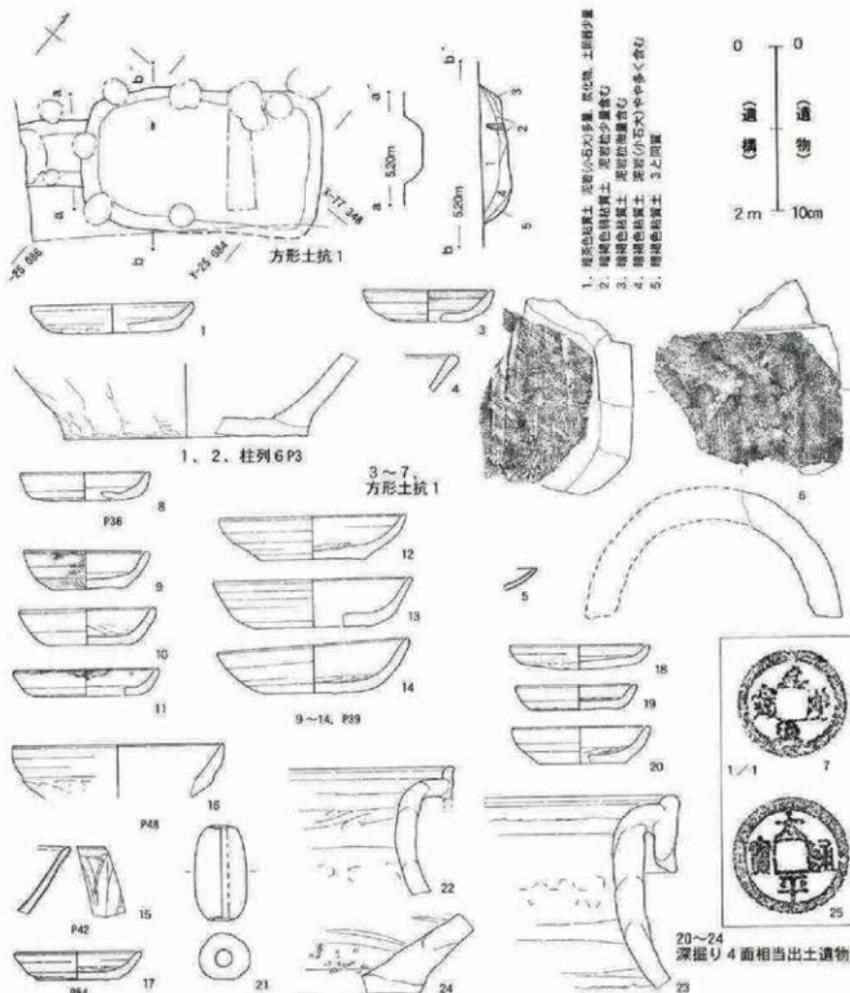


図24 方形土坑1、II区4面遺構および深掘り出土遺物

方形土坑1 (図24)

位置：X-77 347~-77 350 Y-25 083~-25 087 規模：東西292cm×南北180cm以上×深さ約38cm (最下高4.76m) 平面形：方形 断面形：逆台形 主軸方位：N-49° -E 充填土：図に記載
 重複関係：柱穴列5・7・8に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(3)・常滑片口鉢I類(4)・青白磁皿(5)・丸瓦(6)・元豊通寶(7) 特記事項：調査区南側に位置する。3面時に検出した土坑4などと同位にあり、同類施設としての継続性がうかがえる。西側に伸びる溝状遺構との関連性は不明。

土坑11 (圖23)

位置: X-77 346~77 347 Y-25 085~25 087 規模: 東西73cm×南北72cm×深さ約32cm
(最下高4.66m) 平面形: 楕円形 断面形: 逆台形 主軸方位: N-58.5° -E 充填土: 暗茶褐色粘質土 重複関係: 土坑12を切る 特記事項: 接続した内の1基

土坑12 (圖23)

位置: X-77 346~77 347 Y-25 085~25 087 規模: 東西94cm×南北90cm×深さ約22cm
(最下高4.78m) 平面形: 方形 断面形: 逆台形 主軸方位: N-55° -E 充填土: 明褐色砂質土 重複関係: 柱穴列7を切り、土坑11に切られる 特記事項: 接続した内の1基

P. 49 (圖23)

位置: X-77 348~77 349 Y-25 086~25 088 規模: 東西約71cm×南北50cm×深さ約11cm
(最下高4.89m) 平面形: 楕円形 断面形: 皿形 主軸方位: N-59.5° -E 充填土: 暗茶褐色粘質土 特記事項: 直径約20cm弱の球状の石(多孔質安山岩)、木製品を含む。

P. 36 出土遺物 (圖24): 土師器皿R種小型(8)

P. 39 出土遺物 (圖24): 土師器皿R種小型(9~11)・土師器皿R種大型(12~14)

P. 42 出土遺物 (圖24): 竜泉窯鑄蓮弁文碗(15)

P. 48 出土遺物 (圖24): 土師器皿T種大型(16)

P. 54 出土遺物 (圖24): 土師器皿R種小型(17)

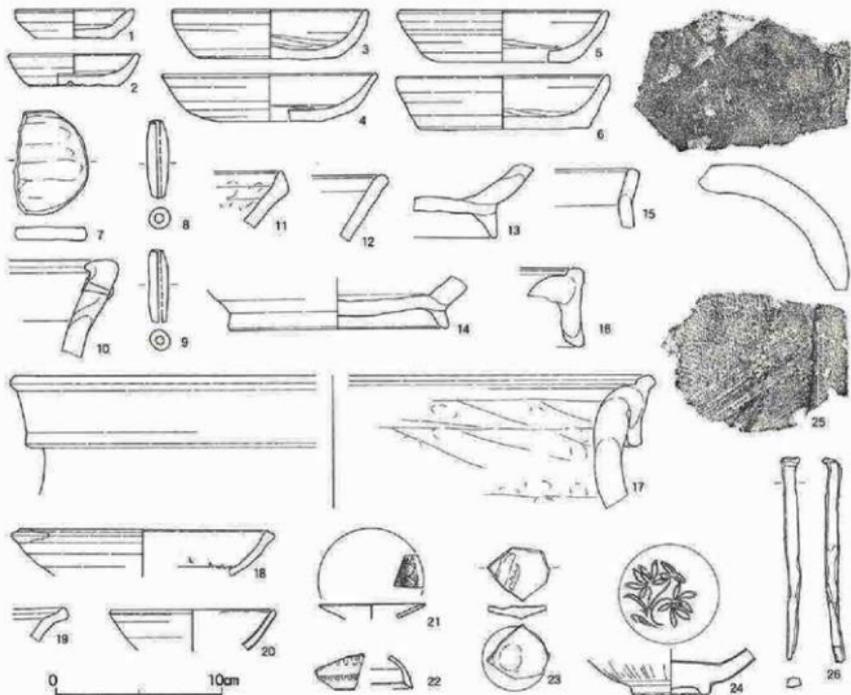


图25 II区4面出土遺物

II区4面深掘りから出土した遺物 土師器皿T種小型(18)・土師器皿R種小型(19・20)・土垂(21)・常滑甕(22~24)・太平通寶(25)

II区4面の遺構以外からの出土遺物(図25) 土師器皿R種小型(9)・土師器皿R種大型(3~6)・円盤状土製品(7)・土垂(8・9)・土器火鉢(10)・魚住ね鉢(11)・常滑片口鉢I類(13・14)・瀬戸片口鉢(14)・常滑甕(15~17)・瀬戸灰釉卸皿(18)・瀬戸灰釉折縁深皿(19)・白磁口元皿(20)・青白磁小皿(21)・青白磁合子蓋(22)・不明青白磁製品(23)・竜泉窯青磁蓮弁文碗(24)・丸瓦(25)・釘(26)

8. 中世以前の遺物(図26)

ほとんどがI区の3面から出土している。(図26) 須恵器高台付坏(1)・須恵器坏蓋(2)・須恵器坏(3)・土師器短頸広口甕(4)・土師器坏(5)・土師器甕(6)・土師器甕(7)

9. 表採遺物(図26)

土師器皿R種小型(8・9)・北部系山茶碗(10)・磨耗陶片(11)・瀬戸灰釉香炉(12)・瀬戸灰釉大平鉢(13)・青白磁梅瓶蓋(14)・青磁香炉(15)・青磁碗(16・17)・鉄鍋(18)・開元通寶(19)・皇宋通寶(20)・骨角器双六駒(21)

(遺構関係:鍛冶屋/遺物関係:松原・馬淵)

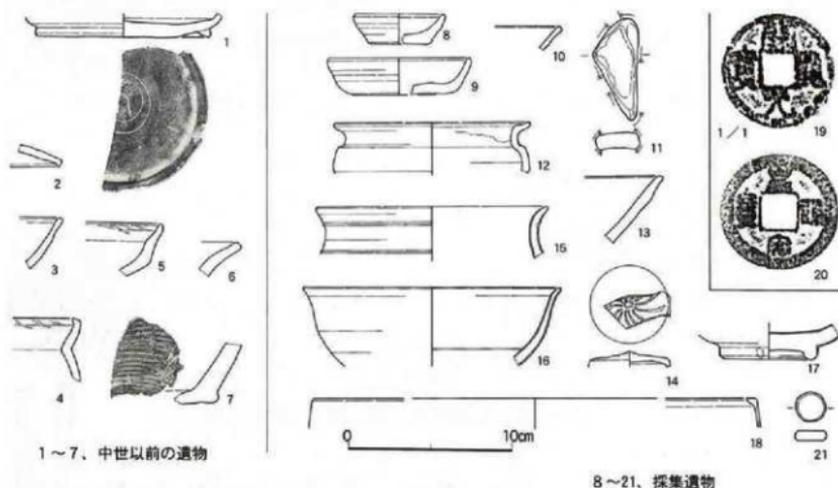


図26 中世以前の遺物・採集遺物

表1 出土遺物観察表(1) ()は復元値

検出番号	区	面	出土遺構	種別	備	考
図5-1	I	-	I区西深掘り	土師器 瓦類 小型	口径(7.3)cm 底径(4.0)cm 器高1.7cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰褐色、赤色粒子・質・雲母片・砂粒を含む	
2	I	-	I区深掘り	白磁 土	口径(8.4)cm 底径(4.0)cm 器高2.0cm 素地は灰白色 輪はかすかに青み帯びた灰白色透明で内 外面無施 太宰府分類Ⅰ-類	
図7-1	I	1	建物1 P. 1	瀬戸 双耳無須口 甕	口径4.7cm 底径5.3cm 器高5.45cm 右回転クワ口成形 底面糸切り 胎土は黄灰色 灰 緑色灰釉が内全体と外側縁部下位まで厚く掛かる 後期样式 15c 半ば	
2	I	1	建物1 P. 3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 口縁端部は少し上方に向く 胎土は灰白色を含む灰色土 器表 は暗茶褐色	
3	I	1	建物1 P. 3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 口縁端部は沈没 胎土は暗灰色できめ細かい 器表は明茶色	
4	I	1	建物1 P. 3	釘	遺存長5.9cm 幅0.4cm 厚0.5cm	
5	I	1	柱穴1 P. 2	鈔鍋	口縁部から割部片 胎土は黄灰色、胎芯は灰色を帯びる 割部外側は木口状またはササウ 状工具による痕き撫で 外面鈔端部以下に配付着	
6	I	1	柱穴1 P. 2	瀬戸 反輪折縁小皿	口径(8.4)cm 底径(4.0)cm 器高2.1cm 右回転クワ口成形 胎土は灰褐色、赤色粒子・質・雲母片・砂粒を含む 以下は露胎	
図8-7	I	南	柱穴1 P. 1	淳厚土質	初陣1174年 南宋 青瓷 青文、十・六	
8	I	1	土坑2	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰褐色、長石・石英・砂含む 器表は暗茶褐色に酸化	
9	I	1	土坑3	瀬戸 碗	口縁部片 胎土は淡黄色 輪は淡緑色で外側下位は露胎 露胎部の器表は茶褐色に酸化	
10	I	1	土坑4	土師器 瓦類 小型	口径(7.0)cm 底径(3.2)cm 器高2.15cm 右回転クワ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は灰褐色、海綿骨芯、雲母片・砂粒を含む 内側と外側中央まで油煙厚く付着	
11	I	1	土坑4	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 10型式か 胎土は灰褐色、長石・石英・気泡多く 器表は青茶色	
12	I	1	土坑4	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は明灰色土、表面は黒色処理 口縁下に3本の沈線に挟まれた連続押印文と 連続文がめぐり、その下に菊花押印 12の底部と同一個体の可能性あり	
13	I	1	土坑4	瓦質 火鉢	底部片 胎土は明灰色土、表面は黒色処理 胴部下位連続文と沈線がめぐり、外表面に雲母 片本の貼り付け脚部露胎の一部残る	
14	I	1	土坑5	土師器 瓦類 小型	口径(7.55)cm 底径(4.65)cm 器高2.2cm 右回転クワ口 底面糸切り、外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 内底部中央に径0.5cmの穿孔	
15	I	1	土坑5	土師器 瓦類 小型	口径7.3cm 底径4.7cm 器高2.3cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部 ナデ 胎土は灰褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む	
16	I	1	土坑5	土師器 瓦類 大型	口径(12.15)cm 底径(8.4)cm 器高3.2cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧 痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む	
17	I	1	土坑5	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石・砂含む 器表は茶褐色に酸化	
18	I	1	土坑5	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で若石質、大粒の長石・石英多く含む 器表は茶色 「大目大月」の印目 図2-2-2と同じ個体と思われる	
19	I	1	土坑5	瀬戸陶片	最大長6.5cm 最大幅6.7cm 最大厚1.0cm 常滑甕転用 凸部のみ露胎	
20	I	1	土坑5	瀬戸陶片	最大長8.0cm 最大幅6.9cm 最大厚1.2cm 常滑甕転用 凸部のみ露胎	
図9-21	I	1	土坑7	土師器 瓦類 小型	口径(6.75)cm 底径(4.5)cm 器高2.1cm 右回転クワ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は褐色、白色粒子・赤色粒子・雲母片・砂粒を含む	
22	I	1	土坑7	瀬戸 反輪折縁深皿	口縁部片 クワ口成形 胎土は淡黄灰色 輪は淡灰緑色半透明 外面に被熱痕	
23	I	1	土坑9	土師器 瓦類 大型	口径11.35cm 底径7.6cm 器高3.45cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・砂粒を含む	
24	I	1	土坑9	白磁 ロハズ皿	器高1.7cm 素地は灰白色 輪はかすかに青み帯びた灰白色半透明 口縁露胎部に油煙付着	
25	I	1	P. 1.1	常滑 甕	口径(22.7)cm 輪積み成形 胎土は褐色～灰色、長石・石英含む 器表は茶褐色 内外 に黒色付着物(油分か)	
26	I	1	P. 1.4	土師器 瓦類 小型	口径(6.8)cm 底径(4.5)cm 器高1.7cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・黒雲母・砂粒を含む	
27	I	1	P. 1.4	瀬戸 甌子	底部片 胎土は淡灰褐色で微砂粒多く含む 輪は緑色透明 外側被熱により輪縁の剥落が顕著	
28	I	1	P. 1.7	土師器 瓦類 小型	口径(7.8)cm 底径(4.8)cm 器高2.2cm 右回転クワ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む	
29	I	1	P. 1.8	土師器 瓦類 大型	口径(11.0)cm 底径(7.4)cm 器高2.85cm 右回転クワ口 底面糸切り 胎土は褐色、 黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む 釉質	
30	I	1	P. 1.8	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は淡褐色、砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む 表面は暗灰色 内外とも磨き 外面口縁下に菊花押印文	
31	I	1	P. 5.8	土師器 瓦類 大型	口径(10.1)cm 底径(5.25)cm 器高3.2cm 右回転クワ口 底面糸切り 胎土は褐色、 黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む	
図10-1	I	1	1面	土師器 瓦類 小型	口径(6.1)cm 底径(4.0)cm 器高2.0cm 右回転クワ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は赤褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子を含む 施成良好	
2	I	1	1面	土師器 瓦類 大型	口径12.2cm 底径8.15cm 器高3.1cm 器壁は少し外反 右回転クワ口 底面糸切り 外底 部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部は断続的に打ち欠かれている	
3	I	1	1面	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は灰褐色、赤色粒子・白色粒子・黒色鉱物結晶、砂粒含む 表面は灰褐色～ 灰色 口縁下に3本の沈線に挟まれた菊花の押印文と連続文がめぐり	
4	I	1	1面	瓦質 火鉢	胴部～底部片 胎土は灰褐色、赤色粒子・白色粒子多く含む 表面は灰褐色、外側露胎 割部 下位に沈線3本めぐり、内側に配付連続文と花葉押印文を挟む 外表面に雲母片本の貼付 部露胎	
5	I	1	1面	瓦質 香炉	口縁部片 胎土は明灰色、白色粒子・海綿骨芯含む 表面は灰色 口縁下に3本の沈線に挟ま れた花葉文と連続・輪縁部組み合わせの押印文がめぐり 内側に指輪痕と瓦風残る	

表2 出土遺物観察表(2) ()は復元値

押収番号	区	面	出土遺構	種別	備考
6	1	1	1面	常滑 片口鉢Ⅱ型	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石少し含む 器表は茶褐色 内側に使用とみられる 印き痕跡の印痕 口縁部を中心に凸部→凹部磨耗した部分あり
7	1	1	1面	常滑 片口鉢Ⅱ型	底部片 輪積み成形 外面下部に向けてへぐなで 胎土は灰色 器表は灰色～灰褐色 使用 による内底面の磨耗甚しい 破片凸部にもかすかに磨耗あり
8	1	1	1面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石灰・礬を含む 器表は茶褐色に酸化
9	1	1	1面	瀬戸 緑釉皿	口径(11.3cm) 胎土は淡黄色 内側は口縁下まで、外側は下位まで淡緑色半透明の灰釉がかかる
10	1	1	1面	瀬戸 緑釉皿	口径(11.05cm) 胎土は淡黄灰色 外側は口縁下及び内側に淡緑色半透明の灰釉かかる
11	1	1	1面	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は淡黄灰色 淡灰緑色不透明の灰釉ハケ塗り 内外二次焼成
12	1	1	1面	常滑 飛輪杓	口径(8.7cm) 胎土は暗灰色で堅緻 器表は茶色 外側口縁部下に雷文の押印めぐる内側 口縁下には水平に突起盛り付け、その裏に布目理れる 肌塗あり?
13	1	1	1面	浄化元書	初稿909年 北宋 行書
14	1	1	1面	不明鉄製品	長6.8cm 幅0.95cm 厚0.9cm 断面三角形のやや曲した棒状
15	1	1	1面	炭	塊長(0.8)cm 塊幅(4.8)cm 塊厚(1.3)cm 茶褐色→暗赤褐色粘板質
11-1	1	2a	土坑8	土師器Ⅲ R種 小型	口径9.9cm 底径4.6cm 器高2.15cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底 部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・黒濁骨芯・黒炭屑・砂粒を含む 磁質
2	1	2a	土坑8	瀬戸 灰釉平碗	口縁部片 ロクロ成形 胎土は淡黄灰色 釉は淡緑色半透明
3	1	2a	土坑8	瀬戸 香炉	底径(8.8cm) ロクロ成形 胎土は黄灰色 釉は灰緑色に灰釉 外底面は露胎で酸化して いる 内底面に降灰
4	1	2a	土坑8	瀬戸陶片	最大長5.8cm 最大幅3.9cm 最大厚1.4cm 常滑製變形部片転用 緑釉の焼成部分を丁寧に 磨り平滑に仕上げると、凸部のみ磨耗
5	1	2a	土坑8	瀬戸陶片	最大長10.6cm 最大幅7.7cm 最大厚1.3cm 常滑製變形部片転用 凸部のみ磨耗
6	1	2a	土坑9	常滑 片口鉢Ⅱ型	口縁→腹部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石・石灰を含む 器表は二次焼成により暗灰 色を呈す 内面半位以下および角部口縁部の内外両面磨耗あり
7	1	2a	土坑9	常滑 甕	緑帯部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石・石灰・黒色粒を含む 器表は茶→茶褐色
8	1	2a	土坑9	瀬戸陶片	最大長7.1cm 最大幅4.5cm 最大厚1.5cm 常滑製變形部片 磨耗後に割れている
9	1	2a	土坑10	瓦葺木付底部→脚部片	胎土は明灰褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒多く含む 脚部は粘り 付け
10	1	2a	土坑10	瀬戸陶片	最大長8.6cm 最大幅7.0cm 最大厚1.95cm 常滑製變形部片転用 磨耗後に割れている 凸 部のみ磨耗
11-1	1	2b	建物② P2	土師器Ⅲ R種 小型	口径8.0cm 底径5.15cm 器高2.15cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底 部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒濁骨芯・黒炭屑・砂粒を含む 磁質
2	1	2b	建物③ P2	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.5cm 底径4.5cm 器高2.35cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底 部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒濁骨芯・黒炭屑・砂粒を含む
3	1	2b	建物③ P2	土師器Ⅲ R種 大型	口径(12.7)cm 底径(8.8)cm 器高3.4cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒濁骨芯・黒炭屑・砂粒を含む
4	1	2b	土坑8	甕焼仕上紙	塊長(3.7)cm 幅3.4cm 厚1.0cm 肌色 紙面両面 両側面は磨られて切り出され残さ ない
5	1	2b	土坑11	土師器Ⅲ T種 小型	口径(9.2)cm 器高(1.7)cm 内底部ナデ 胎土は肌色、黒色粒子・赤色粒子・黒濁骨芯を含 む
6	1	2b	土坑12	白磁 口鉢Ⅱ面	口径(11.4)cm 底径(6.6)cm 器高3.3cm 素地は灰白色、黒色微粒子を含む 釉は灰色を 帯びた乳白色赤色半透明
7	1	2b	土坑13	常滑 片口鉢Ⅱ型	胴部→底部片 輪積み成形 胎土は灰色 器表は灰褐色～灰色 内側に黒褐色のタール状 物質付着
11-4-8	1	2b	土坑16	土師器Ⅲ R種 小型	口径(8.8)cm 底径(6.5)cm 器高(1.65)cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状 圧痕 内底部ナデ 胎土は暗褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒濁骨芯を含む
9	1	2b	土坑16	土師器Ⅲ R種 中型	口径(10.85)cm 底径(6.18)cm 器高2.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧 痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・黒濁骨芯・砂粒を含む 磁質 口 縁下に磨り着
10	1	2b	土坑16	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は淡黄灰色できめ粗く 淡灰緑色不透明の灰釉 両面に二次 焼成
11	1	2b	土坑16	瀬戸 摺鉢	底部片 胎土は灰褐色、白色粒・砂粒を含む 糸縷5.2cm 磨面に磨耗
12	1	2b	土坑16	常滑 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石を含む 器表は暗赤褐色 三ツ腰文の印き目
13	1	2b	土坑16	磨石皿	口縁部片 断面の一部が早に切断されている 再利用または再加工途中か 全体に二次焼 成により白味を帯びている
14	1	2b	土坑16	皇太極寶	初稿1038年 北宋 楷书
15	1	2b	土坑17	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.8)cm 底径(3.4)cm 器高2.45cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は暗褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子を含む
16	1	2b	土坑18	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.9cm 底径4.35cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡 褐色、黒色粒子・白色粒子・砂粒を含む
17	1	2b	土坑18	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.0)cm 底径(3.7)cm 器高2.2cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡 褐色、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・黒濁骨芯・砂粒を含む
18	1	2b	土坑18	土師器Ⅲ R種 大型	口径12.8cm 底径7.2cm 器高3.2cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒濁骨芯・砂粒を含む 口縁面に打ち欠きあり
19	1	2b	土坑18	常滑 片口鉢Ⅱ型	底部片 輪積み成形 胎土・器表は灰色～灰褐色、長石・大粒石灰・礬を含む
20	1	2b	土坑18	瀬戸陶片	最大長6.0cm 最大幅5.8cm 最大厚1.2cm 常滑製變形部片転用
21	1	2b	土坑18	青白磁 板瓦	胴部片 素地は灰白色 釉は水色半透明 唐草文
22	1	2b	土坑18	加工甕	長さ8.0cm 幅4.5cm 厚1.4cm 断面に人為による盛り込み 表面に数本の切り筋
23	1	2b	土坑21	常滑 甕	緑帯部片 輪積み成形 胎土は灰褐色、長石・赤色粒子を含む 器表は茶褐色、降灰あり
24	1	2b	土坑22	常滑 甕	頸部→口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色できめ細かい、長石を含む 器表は茶褐色、頸部 に降灰

表3 出土遺物観察表(3) ()は複元値

押印番号	区	面	出土遺構	種別	備考
25	I	2b	土坑23	土師器Ⅱ R種 小型	口径(7.9)cm 底径(4.95)cm 器高2.8cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含みや砂質 口縁 に油層付着
26	I	2b	土坑25	土師器Ⅱ R種 小型	口径7.25cm 底径4.85cm 器高1.65cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
27	I	2b	土坑25	土師器Ⅱ R種 小型	口径7.6cm 底径4.3cm 器高2.2cm 右回転ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡 褐色、黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、海綿骨芯を含む
28	I	2b	土坑25	土師器Ⅱ R種 大型	口径(11.7)cm 底径(5.85)cm 器高3.05cm 右回転ク口 底面糸切り 胎土は褐色、 黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
29	I	2b	土坑25	土師器Ⅱ R種 大型	口径(12.8)cm 底径(7.55)cm 器高3.5cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧 痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
30	I	2b	土坑25	土師器Ⅱ 下種 大型	口径(13.45)cm 胎土は淡褐色、赤色粒子、黒色粒子、白色粒子、海綿骨芯、砂粒、礫を 含む
31	I	2b	土坑25	常滑 甕	初跡1017年 北宋 磨書 加工跡、周縁部が削りとられている
32	I	2b	P. 22	土師器Ⅱ R種 小型	口径7.35cm 底径5.0cm 器高2.4cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底 部ナデ 胎土は淡赤褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
33	I	2b	P. 22	土師器Ⅱ R種 大型	口径10.5cm 底径6.45cm 器高3.15cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒、礫を含む
34	I	2b	P. 22	土師器Ⅱ R種 大型	口径(13.4)cm 底径(7.1)cm 器高3.6cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
35	I	2b	P. 22	鉄皿	口径(9.6)cm 器高1.65cm
36	I	2b	P. 28	土師器Ⅱ R種 小型	口径(6.7)cm 底径(4.8)cm 器高1.7cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
37	I	2b	P. 32	土師器Ⅱ R種 大型	口径(11.1)cm 底径6.7cm 器高3.3cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯を含む 割割質 口縁に打ち欠きあり
38	I	2b	P. 32	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は褐色～灰褐色、長石、石英、礫を含む 器表は茶褐色～黄褐色 焼成やや不良
39	I	2b	P. 32	釘	残長(3.9)cm 幅0.3cm 厚0.5cm 鉄製
40	I	2b	P. 33	土師器Ⅱ R種 大型	口径(11.3)cm 底径(7.2)cm 器高3.0cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、礫、砂粒を含む
41	I	2b	P. 33	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は暗灰色～灰褐色、長石、石英を含む 器表は明茶褐色～赤褐色、 褐色
図15-1	I	2ab	2ab面	土師器Ⅱ R種 小型	口径(6.1)cm 底径(3.7)cm 器高2.3cm 右回転ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む 砂質
2	I	2ab	2ab面	土師器Ⅱ R種 小型	口径(7.7)cm 底径(4.7)cm 器高2.0cm 右回転ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、砂粒を含む
3	I	2ab	2ab面	土師器Ⅱ R種 大型	底径6.2cm 残存器高(2.6)cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、海綿骨芯、礫、砂粒を含む 弱砂質 口縁全体を破損に打ち欠く
4	I	2ab	2ab面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石、石英、礫粒を含む 器表は茶褐色
5	I	2ab	2ab面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石、石英、礫粒を含む 器表は茶褐色
6	I	2ab	2ab面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石、石英を含む 器表は茶褐色
7	I	2ab	2ab面	磨耗陶片	最大長5.3cm 最大幅11.9cm 最大厚3.4cm 常滑甕口縁部転用
8	I	2ab	2ab面	磨耗陶片	最大長4.1cm 最大幅5.4cm 最大厚1.0cm 常滑片転用
9	I	2ab	2ab面	磨耗陶片	最大長7.9cm 最大幅4.0cm 最大厚1.5cm 常滑片転用
10	I	2ab	2ab面	磨耗陶片	最大長5.4cm 最大幅4.7cm 最大厚1.4cm 常滑片転用
11	I	2ab	2ab面	磨耗陶片	最大長5.3cm 最大幅7.2cm 最大厚1.1cm 常滑片転用
12	I	2ab	2ab面	白磁 口ハグ皿	口径(13.2)cm 裏地は灰白色 輪転成型を併びた白色透明
13	I	2ab	2ab面	皇宋通寶	初跡1035年 北宋 磨書
14	I	2ab	2ab面	皇宋通寶	初跡1035年 北宋 磨書
15	I	2ab	2ab面	元祐通寶	初跡1089年 北宋 磨書
16	I	2ab	2ab面	元祐通寶	磨書
17	I	2ab	2ab面	噴染仕上皿	残長(3.2)cm 幅3.6cm 厚0.05cm 肌色 紙面1面
図16-1	II	2	柱穴例1 P.4	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色～灰褐色、長石、石英を含む 器表は茶褐色
2	II	2	P.4	瓦質 大鉢	胴部片 胎土は灰褐色、赤色粒子、白色粒子、砂粒を含む 表面は淡灰色 胴部下位に沈澱と小 型青花文押印をめぐらす 中には大型の菊花を小型の菊花が丸く囲む帯の押印文を配する
3	II	2	2面	土師器Ⅱ R種 小型	口径7.1cm 底径4.2cm 器高1.95cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナ デ 胎土は淡褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、礫を含む 粉質 口縁に三箇所油層付着
4	II	2	2面	土師器Ⅱ R種 小型	口径6.9cm 底径4.75cm 器高2.6cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底 部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子、赤色粒子、白色粒子、針白色状物を含む 礫、砂粒を含む 弱 砂質 胴面の半分は焼付着
5	II	2	2面	土師器Ⅱ R種 大型	口径(11.2)cm 底径(5.7)cm 器高3.0cm 右回転ク口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子、赤色粒子、海綿骨芯、質片、砂粒、礫を含む
6	II	2	2面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗褐色、石英、金雲母少し含む 器表は茶褐色
7	II	2	2面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰～灰褐色、石英、長石を含む 器表は茶褐色、薄灰少量 口縁は玉縁状に折り返す
8	II	2	2面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色、大きめの石英粒を含む 器表は茶褐色～灰色 外底面の 周辺に比べて常滑製品の破片が散らばっている
9	II	2	2面	瀬戸 緑釉小皿	口径(10.7)cm ロ口成形 胎土は淡黄色、砂粒を含む 口縁部に黒褐色の鉄粒を撒く
10	II	2	2面	瀬戸 緑釉小皿	口径10.9cm 底径8.0cm 器高2.1cm ロ口成形 胎土は淡灰褐色 口縁部下まで淡緑色 の灰輪かかる 内底面に目録4箇所 外底部は回転系きりで胎土質付着

表4 出土遺物類表(4) ()は復元值

標記番号	区	面	出土遺構	種別	備	考
11	II	2	2面	瀬戸 鉄軸小皿	口徑(12.4)cm 口ク口成形 胎土は淡黄灰色 口縁部に淡緑色の灰釉かかち、内側はその下がハケ塗り	
12	II	2	2面	瀬戸 灰釉煎蓋	底径(7.9)cm 口ク口成形 削り出し高台 胎土は黄褐色 内底面は薄いハケ塗り	
13	II	2	2面	瀬戸 灰釉平碗	口縁部片 口ク口成形 胎土は黄褐色 内側と外側高台輪まで淡灰緑色の灰釉かかち 目地4箇所 外底面は回転糸りまで胎土付着	
14	II	2	2面	瀬戸 高台付鉢	底径(6.9)cm 口ク口成形 貼付高台 胎土は淡灰色 内底面は淡緑色の灰釉や厚く、目地あり 断面に僅付着	
15	II	2	2面	瀬戸 灰釉折縁皿	口縁部~側部片 口ク口成形 胎土は淡灰色 灰釉ハケ塗りと思われるが、生焼けのため白っぽくざらついている	
16	II	2	2面	瀬戸 灰釉折縁皿	口縁部片 口ク口成形 胎土は淡黄灰色 黄緑色透明の灰釉や厚めにかかち	
17	II	2	2面	瀬戸 灰釉折縁皿	口縁部片 口ク口成形 胎土は淡灰色でめく離れ 淡緑色の灰釉や厚めにかかち	
18	II	2	2面	瀬戸 鉢	口縁部片 口ク口成形 胎土は淡灰黄色 淡緑色の灰釉 口縁部は直下より内凹気味 ためへ見丸味状、直立もしくは少し内凹気味	
19	II	2	2面	飛輪 壺	高さ9.4cm 口ク口成形 削り出し高台、唇付の一連はこすれて胎土剥がれている 素地は茶褐色、器入物はとどなく堅緻 胎土は黄褐色、外面に器入り、内底面にも塗まる	
20	II	2	2面	白磁 口ハケ皿	口縁部片 素地は灰白色、釉は灰色を帯びた白色	
21	II	2	2面	高良窯 青磁 蓮文文筒	口縁~体部片 口ク口成形 素地は灰白、黄褐色胎子、褐色粒を含む 釉は青灰色半透明、やや厚くかかち内外面ともに使用による磨滅傷が残る 内側に蓮文、外側は無文	
22	II	2	2面	釘	長さ4cm 幅0.4cm 厚0.5cm 鉄製	
23	II	2	2面	釘	長さ0.3cm 幅0.35cm 厚0.5cm 鉄製	
24	II	2	2面	上野中統	残長(6.1)cm 幅2.6cm 厚2.05cm 灰緑色 砥部4面	
図18-1	I	3	土坑26	土師器皿 R緑 大型	口徑(13.3)cm 底径(5.55)cm 器高2.6cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒、赤色粒、海綿骨を含む 弱砂質	
2	I	3	土坑26	電泉窯 青磁 壺	高さ9.6cm 口ク口成形 素地は灰白色、黒色粒粒を含む 釉は淡緑色半透明、器入あり 削り出し、唇付より内凹は磨滅 内底面に牡丹の押文	
3	I	3	土坑26	茶臼元寶	初録1004年 北宋 行書	
4	I	3	土坑28	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英を含む 器表は茶褐色	
5	I	3	土坑29	土壺	長さ1cm 最大径2.85cm 乳径0.9cm 胎土は灰色、赤砂を含む	
6	I	3	土坑30	土師器皿 R緑 中型	口徑(10.4)cm 底径(5.45)cm 器高2.3cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底面少量付着、打ら欠き	
7	I	3	土坑30	土師器皿 R緑 大型	口徑(11.8)cm 底径7.7cm 器高3.4cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒、赤色粒、白色粒、海綿骨、砂粒を含む 弱砂質	
8	I	3	土坑30	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石を含む 器表は茶褐色	
9	I	3	p.43	土師器皿 R緑 小型	口徑7.3cm 底径3.35cm 器高1.7cm 右回転口ク口 底面糸切り 外底面板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒、赤色粒、白色粒を含む	
図19-1	I	3	3面	土師器皿 R緑 小型	口徑(7.7)cm 底径(5.1)cm 器高1.7cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、黒色粒、赤色粒、白色粒、海綿骨、葉片、砂粒を含む	
2	I	3	3面	土師器皿 R緑 小型	口徑(7.3)cm 底径4.3cm 器高2.3cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒、海綿骨、砂粒を含む 弱砂質	
3	I	3	3面	土師器皿 R緑 大型	口徑(11.5)cm 底径(6.1)cm 器高3.7cm 右回転口ク口 底面糸切り 胎土は淡褐色、黒色粒、赤色粒、白色粒、海綿骨、葉片、砂粒を含む	
4	I	3	3面	土師器皿 R緑 大型	口徑(11.8)cm 底径(7.3)cm 器高2.6cm 右回転口ク口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒、赤色粒、赤色粒、海綿骨を含む 弱砂質	
5	I	3	3面	土師器皿 R緑 大型	口徑(12.45)cm 底径7.4cm 器高3.6cm 右回転口ク口 底面糸切り 外底面板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒、赤色粒、赤色粒、海綿骨を含む 弱砂質	
6	I	3	3面	土師器皿 R緑 大型	口徑(13.2)cm 底径(8.4)cm 器高3.75cm 右回転口ク口 底面糸切り 外底面板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒、赤色粒、赤色粒、海綿骨、葉片、砂粒を含む	
7	I	3	3面	土師器皿 R緑 極小型	口徑(4.1)cm 底径3.1cm 器高1.0cm 回転口ク口 底面糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒を含む淡褐色土	
8	I	3	3面	瀬戸内系 瓦腹碗	高さ3.8cm 回転口ク口 底面糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄色偏黄土、胎土は灰色、表面は削りかけで赤三角形と方形の部分が凹凸する様な作り	
9	I	3	2面	常滑 片口鉢 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石・石英を含む粗めの明灰色土 器表は灰色	
10	I	3	2面	常滑 片口鉢 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石・石英を含む粗めの灰白色土 器表は褐色	
11	I	3	2面	瀬戸 灰釉煎蓋	口縁片 口ク口成形 胎土は淡灰褐色 灰釉ハケ塗り	
12	I	3	2面	瀬戸 灰釉折縁皿	口徑(15.5)cm 口ク口成形 胎土は淡黄灰色 灰釉ハケ塗り	
13	I	3	2面	白磁皿?	小片 素地は白色で緻密 釉は灰色を帯びた白色透明 内側に草花文型押し	
14	I	3	2面	高台付 電泉窯 青磁蓮弁文筒	高さ9.5(5.0)cm 口ク口成形 素地は灰白色 釉は白色半透明 削り出し高台 器み付きは磨滅	
15	I	3	2面	泉末遺寶	初録1035年 北宋 行書	
16	I	3	2面	元祐遺寶	初録1086年 北宋 篆書	
17	I	3	2面	元祐遺寶	初録1086年 北宋 行書	
18	I	3	2面	銭輪不明		
19	I	3	2面	天草 中統	残長(7.1)cm 幅5.9cm 厚0.5cm 乳白色に赤い筋 砥部4面	
20	I	3	2面	観	残長(4.2)cm 残幅(2.3)cm 厚0.6cm 黒色粘板岩 葉片を持つ 縁部には放葉文の磨滅を施す	
図21-1	III	3	柱穴列2 P.4	高良窯 青磁蓮弁文筒	口縁部片 口ク口成形 素地は灰色、釉は青灰色半透明	
2	III	3	上野中統	残長(4.6)cm 幅1.8cm 厚1.5cm 緑色を帯びた灰色 砥部4面		
3	III	3	P.8	紹聖元寶	初録1064年 北宋 行書	
4	III	3	P.11	常滑 片口鉢 壺類	口縁部片 輪積み成形 胎土は褐色、長石・石英多く含む 器表は褐色	

表5 出土遺物観察表(5) ()は復元

神居番号	区	面	出土遺構	種別	備考
5	Ⅱ	3	P.14	不明陶製品	外径1.5cm 高さ1.7cm 厚さ0.1cmの内筒形で、平らな底と反斜線の縁に突った二つの突起がある
6	Ⅱ	3	深堀り	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は灰色、白色粒子・砂粒・礫を含む 表面は暗灰色 口縁部下に2本の沈線に はさまれて花意文の押印をめぐらし、その下に幾何文貼り付け痕が残る
7	Ⅱ	3	深堀り	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 口口成形 胎土は淡灰色 淡緑色透明の灰釉
8	Ⅱ	3	深堀り	葦藁筒 櫛木鉢	底径(8.4) cm 口口成形 胎土は灰色、白色微粒子を含む、縦線・内・外とも胴部下位まで 高縁の上に黒青緑が厚く掛かる 底部中央に孔が貫通 赤江省金華県の豊州高直系制造
9	Ⅱ	3	深堀り	柱管元蓋	加埴1068年1068年? 北宋 磁書
10	Ⅱ	3	深堀り	紹聖元蓋	初埴1064年 北宋 行書
11	Ⅱ	3	深堀り	嘉祐通書	初埴1056年 北宋 篆書
B22-1	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 小型	口径(8.55) cm 底径(3.3) cm 器高1.6 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黒色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片を含む
				土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.65) cm 底径(3.4) cm 器高2.2 cm 右側転口口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨を含む
2	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.5) cm 底径(3.55) cm 器高1.9 cm 右側転口口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は灰色、黒色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
				土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.5) cm 底径(3.55) cm 器高1.9 cm 右側転口口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は灰色、黒色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
4	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.5) cm 底径(3.55) cm 器高1.9 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨を含む
				土師器Ⅲ R種 大型	口径(12.6) cm 底径(6.9) cm 器高3.0 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨を含む
6	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 大型	口径(12.7) cm 底径(7.7) cm 器高3.8 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨・雲母片を含む
				土師器Ⅲ R種 中型	口径(8.3) cm 底径(3.4) cm 器高2.9 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・雲母片を含む
8	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 大型	口径(10.6) cm 底径(5.6) cm 器高3.2 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨を含む
				土師器Ⅲ R種 大型	口径(13.0) cm 底径(7.5) cm 器高3.2 cm 右側転口口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は灰色、黒色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
9	Ⅱ	3	3面	土師器Ⅲ R種 大型	口径(13.0) cm 底径(7.5) cm 器高3.2 cm 右側転口口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎 土は灰色、黒色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
10	Ⅱ	3	3面	極小型土鍋	胎土は灰色、きめ細かい 口縁部下に径1.5mmの小孔貫通 外側は肩部から下に薄く皮付 着 内側は下位に油皮付着
11	Ⅱ	3	3面	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は灰色、白色粒子・砂粒・少量の褐色微塵を含む 表面は黒灰色で、外側は磨き、 内側は横溝で及び指頭痕が残る 口縁は水平に内に張り出す
12	Ⅱ	3	3面	瓦質 火鉢	口縁部～胴部 胎土は灰褐色、白色粒子・砂粒・赤色粒子・礫を含む 表面は灰褐色、口縁下 に2本の沈線に挟まれて菊文文押印、その下に貼り付け幾何文がめぐり、胴部中央にやぐら 大形の菊文文押印を配す
13	Ⅱ	3	3面	瓦質 火鉢	口縁部片 胎土は灰褐色、白色粒子・砂粒・礫を含む 表面は黒灰色 内側は横方向 削り、菊文文押印 内側は縦方向削り 口縁は丸みを帯びる
14	Ⅱ	3	3面	灰住 忍む鉢	口縁部片 胎土は灰色、白色粒子・多数の砂粒を含む
15	Ⅱ	3	3面	灰住 忍む鉢	口縁部片 胎土は青灰色、白色粒子・砂粒を含む
16	Ⅱ	3	3面	常滑 片口鉢1類	口縁部片 輪積み成形 胎土は淡褐色、石灰・赤色粒子・砂粒・礫を含む 器表は褐色
17	Ⅱ	3	3面	常滑 片口鉢2類	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、石灰・長石・砂粒多く含む 器表は明茶褐色
18	Ⅱ	3	3面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、長石・大粒石灰含む 器表は暗茶褐色
19	Ⅱ	3	3面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・大粒石灰・砂粒を含む 器表は暗褐色
20	Ⅱ	3	3面	常滑 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は暗灰色、大粒の長石、石灰多く含む 器表は茶色 『大日 月』の明き目 図8-18と同一物体と思われる
21	Ⅱ	3	3面	磨耗陶片	最大径4.9 cm 最大幅6.0 cm 最大厚1.6 cm 常滑片転用
22	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉餅皿	口縁～胴部片 口口成形 胎土は淡灰色 淡緑色の灰釉がやや厚く口縁部に掛かる
23	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉餅皿	口径(13.2) cm 口口成形 胎土は淡灰色 灰緑色灰釉ハケ塗り
24	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉餅皿	口縁部片 口口成形 胎土は淡灰色 灰緑色灰釉ハケ塗り
25	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉餅皿	口縁部片 口口成形 胎土は淡灰色 灰緑色灰釉ハケ塗り 火を受け表面は白っぽくザッ ツ
26	Ⅱ	3	3面	瀬戸 入れ子	口縁～胴部片 口口成形 胎土は淡灰色、きめ細かい 内側からへらで押しつけて輪花を作 る 口縁内側に押印
27	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 口口成形 胎土は明灰色 淡緑色灰釉 口縁から内側にかけては輪刺彫
28	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁～胴部片 口口成形 胎土は明灰色～淡褐色 淡茶緑色灰釉
29	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 口口成形 胎土は淡白色 淡灰緑色灰釉掛け掛け
30	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉折縁深皿	口縁部片 口口成形 胎土は黄白色 黒褐色鉄粒濃く掛ける
31	Ⅱ	3	3面	瀬戸 灰釉折縁深皿	底径(8.4) cm 口口成形 胎土は黄白色 淡灰緑色灰釉濃く掛ける 内底面に溝で及び 目跡と思われる跡のハケあり
32	Ⅱ	3	3面	白磁 口ハケ皿	口縁部片 素地は灰白色、釉は褐色を帯びた水色
33	Ⅱ	3	3面	青磁 小鉢	底径(4.0) cm 素地は灰白色、釉は青灰色不透明で厚く掛かり、貫入あり 高台端部周辺 は胎胎 内底面に點付文、双魚の一部か
34	Ⅱ	3	3面	釘	長さ(5.8) cm 幅0.55cm 厚0.75cm 鉄製
35	Ⅱ	3	3面	開元通書	初埴821年 唐 楷書
36	Ⅱ	3	3面	天徳通書	初埴1017年 北宋 楷書 加埴、周縁の一部が削りとられている
B24-1	Ⅱ	4	柱穴内6 P.3	土師器Ⅲ T種 小型	口径(9.7) cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は黒雲母色・赤色粒子・海綿骨・砂粒を含む 灰緑褐色土
				常滑 甕	底径(14.0) cm 輪積み成形 胎土は暗灰色、礫・砂粒を含む 器表は暗褐色 内底面隆起
2	Ⅱ	4	柱穴内6 P.3	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.7) cm 底径(4.1) cm 器高2.0 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨・黒雲母を含む 全体に薄く 皮付着
				土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.7) cm 底径(4.1) cm 器高2.0 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨・黒雲母を含む 全体に薄く 皮付着
3	Ⅱ	4	方形土坑1	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.7) cm 底径(4.1) cm 器高2.0 cm 右側転口口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、黒色粒子・赤色粒子・海綿骨・黒雲母を含む 全体に薄く 皮付着

表6 出土遺物観察表(6) ()は復元値

持回番号	区	面	出土遺構	種別	備	考
4	Ⅱ	4	方形土坑1	常滑 片口鉢1類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色。長石含む	
5	Ⅱ	4	方形土坑1	青白磁 皿	口縁部片 素地は灰白色 胎土は水色半透明で表面はざつつく	
6	Ⅱ	4	方形土坑1	瓦瓦	胎土は白色粒状を含む灰色微密土 凸面は縦目叩き直。凹面は布目直が残る	
7	Ⅱ	4	方形土坑1	元寇通寶	初節1078年 北宋 行書	
8	Ⅱ	4	P.36	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(7.8)cm 底径(6.2)cm 器高1.75cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む	
9	Ⅱ	4	P.39	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径7.4cm 底径4.45cm 器高2.4cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片・雲母粉・砂粒を含む	
10	Ⅱ	4	P.39	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径8.15cm 底径5.15cm 器高2.25cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片・微砂粒を含む	
11	Ⅱ	4	P.39	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(8.7)cm 底径(4.8)cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面糸切り 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片・微砂粒を含む	
12	Ⅱ	4	P.39	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(11.15)cm 底径(6.4)cm 器高2.7cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片・微砂粒を含む	
13	Ⅱ	4	P.36	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(11.95)cm 底径(7.05)cm 器高2.9cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片を含む	
14	Ⅱ	4	P.36	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径11.55cm 底径6.8cm 器高3.0cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片を含む	
15	Ⅱ	4	P.42	常滑 青白磁通弁文輪	口縁部片 クロ口成形 素地は明灰色。褐色粒・白色粒を含む 胎土は褐色半透明	
16	Ⅱ	4	P.48	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(12.8)cm 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む褐色	
17	Ⅱ	4	P.54	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(7.65)cm 底径(5.0)cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片・微砂粒を含む	
18	Ⅱ	—	深掘り	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(8.3)cm 器高1.5cm 胎土は淡褐色。黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む	
19	Ⅱ	—	深掘り	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径7.2cm 底径5.3cm 器高1.5cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡肌色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片・微砂粒を含む	
20	Ⅱ	—	深掘り	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(8.3)cm 底径(5.4)cm 器高2.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む	
21	Ⅱ	—	深掘り	土壘	長8.9cm 最大径3.2cm 孔径1.0cm 胎土は肌色。赤色粒・砂粒・黒雲母・白色粒を含む	
22	Ⅱ	—	深掘り	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色。長石・石英・砂粒を含む 胎土は暗茶褐色。口縁部へ面部に施す	
23	Ⅱ	—	深掘り	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色。長石・礫・砂粒を含む 器表は明褐色。口縁部へ面に施す	
24	Ⅱ	—	深掘り	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色。長石・大粒の礫を含む 器表は淡茶褐色。内表面に厚く施す	
25	Ⅱ	—	深掘り	太平土甕	初節1078年 北宋 楷书	
26-1	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(7.0)cm 底径(4.7)cm 器高1.75cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む	
2	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 小型	口径(7.6)cm 底径5.4cm 器高1.95cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片・雲母粉を含む	
3	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径11.5cm 底径8.6cm 器高3.15cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・雲母片を含む	
4	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(12.8)cm 底径(6.0)cm 器高2.9cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色。黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・微砂粒を含む	
5	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(12.3)cm 底径(5.0)cm 器高3.2cm 右回転口クロ 底面糸切り 胎土は淡褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・高岭土・黒雲母・微砂粒を含む	
6	Ⅱ	4面	4面	土師器Ⅱ 瓦種 大型	口径(12.6)cm 底径(6.0)cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色。黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒雲母・微砂粒を含む	
7	Ⅱ	4面	4面	円筒状土製品	径3cm 厚0.8cm 土師器Ⅱ種の底部断面 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母・砂粒を含む褐色	
8	Ⅱ	4面	4面	土壘	長4.4cm 最大径1.2cm 孔径0.5cm 胎土は肌色でできが細かい	
9	Ⅱ	4面	4面	土壘	長4.7cm 最大径1.3cm 孔径0.5cm 胎土は肌色でできが細かい	
10	Ⅱ	4面	4面	土壘 大鉢	口縁部片 胎土は赤褐色。白色粒子・赤色粒子・砂粒・礫を含む 表面は灰色 口縁下に肌色孔あり	
11	Ⅱ	4面	4面	魚住 握ね鉢	口縁部片 胎土は灰色。白色粒子・砂粒を含む 口縁外側は灰褐色を呈す 内側に指環痕	
12	Ⅱ	4面	4面	常滑 片口鉢1類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色。白色粒子・砂粒を含む	
13	Ⅱ	4面	4面	常滑 片口鉢1類	底部片 輪積み成形 胎土は灰色。白色粒子・礫・砂粒を含む	
14	Ⅱ	4面	4面	瀬戸 片口鉢1類	底径(12.0)cm 輪積み成形 胎土は灰色。白色粒子・黒色粒子を含む	
15	Ⅱ	4面	4面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は淡褐色。白色粒子を含む 胎土は茶・緑褐色	
16	Ⅱ	4面	4面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色。多量の長石と砂粒を含む 器表は茶色	
17	Ⅱ	4面	4面	常滑 甕	口径(37.8)cm 輪積み成形 胎土は灰色。白色粒子・礫・砂粒を含む 器表は灰色	
18	Ⅱ	4面	4面	瀬戸 灰輪印皿	口径(4.8)cm クロ口成形 胎土は淡灰色 灰輪ハケ塗り	
19	Ⅱ	4面	4面	瀬戸 灰輪折縁深皿	口縁部片 クロ口成形 胎土は明灰色 淡緑色灰輪	

表7 出土遺物観察表(7) ()は復元値

標記番号	区	面	出土遺構	種別	備考
20	Ⅱ	4面	4面	白磁 口ハズ皿	口径(8.8)cm 素地は灰白色 釉は灰色を帯びた水色。透明
21	Ⅱ	4面	4面	青白磁 小皿	口径(6.4)cm 素地は白色 釉は水色透明 内面に花卉と小珠の文様を型押し
22	Ⅱ	4面	4面	青白磁 合子蓋	素地は白色 釉は水色透明 側面に蓮弁と蓮珠をめぐらす
23	Ⅱ	4面	4面	不明青白磁製品	碗の底部が 高台内部の径(3.8)cm 素地は白色 釉は薄い水色半透明 見込みに削りによる不明文様 削り出し高台で、高台内縁部
24	Ⅱ	4面	4面	竜泉窯 青磁鉢蓮弁文碗	底径4.2cm 素地は灰白色 釉は青緑色半透明。厚く掛かり貫入あり 外側面は幅のふらめの蓮弁文 見込みに蓮華文 高台は削り出して登付より内側は露胎
25	Ⅱ	4面	4面	瓦丸	厚さ(1.0)cm 胎土は白っぽい灰褐色。粉粒・黒色粒子・雲母を含む。凹面は布目が残る
26	Ⅱ	4面	4面	釘	頭長(12.1)cm 軸0.8cm 厚0.6cm 鉄製
826-1	I	3面	3面直上	須磨窯 坏	身 底径(10.5)cm 胎土は灰色 口クロ成形 付け高台
2	I	3面	土層20・23	須磨窯 坏蓋	胎土は明灰色
3	I	3面	柱穴例5・4 P. 3	須磨窯 坏	胎土は灰色。陶質骨芯・黒色顔料子・白色微粒子含む
4	I	3面	柱穴例5・4 P. 3	土師器 短頸大口甕	製塩土器か? 口縁部片 胎土は多量の砂粒・赤色粒子・雲母片・白色微粒を含む褐色土
5	I	3面	井戸1	土師器 坏	口縁～胴部片 胎土は微砂を含む褐色土 下位へら削り
6	I	3面	深瀬0	土師器 甕	口縁部片 胎土は砂粒・赤色粒子・金雲母を含む褐色土
7	I	3面	土層20・23	土師器 甕	底部片 胎土は砂粒・赤色粒子・雲母を含む褐色土 内側刷毛目 外底部黒色
8	—	—	表採	土師器皿 R種 小型	口径(5.45)cm 底径(3.45)cm 器高1.85cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナゲ 胎土は橙色。赤色粒子・微砂を含む
9	—	—	表採	土師器皿 R種 小型	口径(8.5)cm 底径(5.9)cm 器高2.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 胎土は橙色。赤色粒子・陶質骨芯・雲母片を含む
10	—	—	表採	北部系山笠碗	口縁部片 胎土は濃灰褐色できめ細かく緊緻
11	—	—	表採	磨純陶片	最大長6.7cm 最大幅2.7cm 最大厚1.0cm 常滑片転用
12	—	—	表採	瀬戸 灰輪香炉	口径(11.8)cm 口クロ成形 胎土は淡灰黄色 濃緑色灰釉が胴側と口縁内側に掛かる 外側は剥落部分が多い
13	—	—	表採	瀬戸 灰輪大平鉢	口縁部片 口クロ成形 胎土は淡灰黄色 灰緑色灰釉
14	—	—	表採	青白磁 梅魚蓋	頂部径(4.8)cm 素地は灰白色 釉は水色透明 珠状の突起を中心に放射状の文様
15	—	—	表採	青磁 香炉か?	口径(14.0)cm 素地は灰白色 釉は青緑色不透明 口縁部下と肩部に深い凸帯筋
16	—	—	表採	青磁 碗	口径(15.6)cm 素地は灰色 釉は青灰色透明。全体に細かい貫入。口縁部外反する 見込み外側に沈線が巡る 高麗か
17	—	—	表採	竜泉窯 青磁鉢蓮弁文碗	底径5.8cm 素地は灰色 釉は灰緑色透明。貫入少し入る 削り出し高台。登付より内側は露胎
18	—	—	表採	鉄鍋	口径(27.0)cm
19	—	—	表採	開元通寶	初陣021年 唐 鑄書
20	—	—	表採	皇宋通寶	初陣1038年 北宋 鑄書
21	—	—	表採	瓦六 駒	計1.57センチ 厚さ0.6cm 鉄製 上下面・側面とも丁寧に磨削されている

第4章 調査のまとめ

1. 遺構の変遷と年代 (図27)

本調査地点は約42㎡の二つの区画をⅠ区(643番5地点)、Ⅱ区(643番4ほか地点)と定めて同時進行で調査をおこない、前者で5面、後者では3面の生活面を検出した。二つの調査区は8mほどしか離れていないにも係わらず、その連続性を把握することには困難がともなった。それでも、両区各面の基盤層の性質、検出高、出土遺物などの諸要素から、以下のように考察した。

なお遺物に関して、道路を挟んで本地点の南10m足らずに所在する材木座町屋遺跡・材木座6-674-10、6-674-15、6-674-8外、6-674-9地点(畜木2003~04年調査、本図1-8地点)とは、「大日大月」の叩き目のある常滑甕破片や、瓦質火鉢などに関連する要素が認められる。しかし土層観察や遺構の状況からでは、比高差が著しいこともあって、対比は困難であった。この点の検討については、今後の周辺調査を待ちたい。

第1期(Ⅱ区4面、検出高約5.0m)

Ⅱ区4面に相当する。地盤の生活痕は見当たらず、構成土も含有物を含んでいないが、遺構は柱穴列や方形土坑など多数が検出され、相応の施設が存在していたといえる。一方Ⅰ区では3面以下より中世遺構は確認できず、須恵器・土師器(図26参照)などが出土したにとどまる。土層観察で確認したⅠ区3b面がⅡ区の4面である可能性も否定できないが、面の比高差が約40cmもあり、同時期の遺構と断定するには至らなかった。主な遺物は土師器ⅢR種とT種が混在し、貿易陶磁器(青磁・白磁・青白磁)、瀬戸、常滑のほか火鉢、瓦、土錘、銭、加工骨、双六の駒などが出土している(図24)。

年代は13世紀前半と考える。

第2期(Ⅰ区3a・b面、Ⅱ区3面、検出高約5.4~5.7m)

第三章で詳述したとおり、少なくとも2時期以上の生活地盤が造成され、多量の炭が出始めるものこの時期からである。建物、柱穴列、土坑群など多くの遺構群からみて、この地域が盛期に入ったと認識できる。ただしⅠ・Ⅱ区の遺構の主軸が画一的ではなく、施設の関連性や地割りにについては不明な点が多い。遺物は土師器ⅢR種、瀬戸、常滑のほか火鉢、磨耗陶片、銭、砥石、土鍋などの生活用品を中心に出土した(図18・21参照)。

年代は13世紀中葉~後半か。

第3期(Ⅰ区2a・b面、Ⅱ区2面、検出高約5.8~6.3m)

この時期にはさらに顕著に炭の層が検出される。破砕した泥岩を敷いた整地面があり、土坑や建物、柱穴列も多く検出できることから、第2期に始まった盛期が依然として続く。Ⅰ区の建物については2期からの連続性が窺える。遺物も第2期と同種の生活用品が多く、特にⅠ区の土坑内や面上から磨耗陶片が多く出土した(図11~14参照)。磨耗陶片は何かを卸したり、潰したり、あるいは摺ったりする日用の用具であり、火鉢や砥石、常滑、瀬戸の出土、炭の詰まった土坑が多く検出されていることなどからみて、Ⅰ区周辺には生活臭が強く漂う。

年代は13世紀後半と考えたい。

第4期(Ⅰ区1面、検出高約6.0~6.3m)

Ⅱ区は現代の造成により消滅したと考える。Ⅰ区は堅牢な泥岩層からなり、建物や柱穴列、集石土坑などが検出された。建物の主軸方位は3期とは若干異なる。面の上下層には多量の炭があり、柱穴や土

坑の充填土にも炭が大量に入っていた。この点は2・3期と共通する。遺物は土師器皿R種、常滑、火鉢などの出土が目立つ。

年代は13世紀末～14世紀前半、およびそれ以降とみたい。

(鍛冶屋・馬淵)

2. 補論

炭について

本遺構の第1の特徴として、大量の炭が中世期の構成土中につまっていたことが挙げられる。鎌倉の遺跡において、大量の炭が出ることは珍しくないが、本地点の炭は生活上に積層していたばかりでなく、多くの土坑や柱穴などの埋土として長期にわたり（少なくとも2期から4期まで）発生している。状況から判断して、火事以外にも建物の中の恒常的な火所、あるいは焼却場のような施設のあった可能性も視野に入れておかねばならない。

火災については、第1章でも述べたとおり、承久元年（1219）九月二十二日の鎌倉の大火、建長五年（1253）年の経師谷口から浜高御倉前までの火事、また弁ヶ谷高御蔵にあったとされる最宝寺が、正慶二年（1333）と大永元年（1521）兵火にかかったという記事などがある。本地点もこれらの影響を少なからず受けていると考えるのが妥当だろう。あるいは、面自体の年代観から、例えば第2期（I区3a・b面・II区3面）の火災層を建長五年の火事に、第4期（I区1面）の火災層を正慶二年の兵火に充てる

周辺地形と遺構主軸について

I・II区で検出した建物・柱穴列の概要を表記すると以下のとおりになる。

区・検出面	遺構	軸方位	柱間距離（平均）	深さ・底面高（平均）
I区・1面	建物1	N-43° -W	1.89m	39cm・5.67m
	柱穴列1	N-43° -W	1.97m	36cm・5.66m
	柱穴列2	N-42° -W	1.90m	37cm・5.70m
I区・2b面	建物2	N-48° -W	1.98m	42cm・5.19m
	建物3	N-44° -W	1.89m	55cm・5.49m
	柱穴列3	N-48.5° -W	1.96m	57cm・5.25m
I区・3面	建物4	N-43.5° -W	1.94m	50cm・5.12m
	柱穴列4	N-44° -W	1.96m	62cm・5.04m
	柱穴列5	N-51.5° -W	1.96m	58cm・5.04m
II区・2面	柱穴列1	(N-46° -W)	0.9m	39cm・5.58m
II区・3面	建物1	N-25.5° -W	2.15m	29cm・5.21m
	柱穴列2	(N-39° -W)	0.56m	32cm・5.18m
	柱穴列3	(N-30° -W)	1.94m	29cm・5.24m
	柱穴列4	(N-30° -W)	1.99m	21cm・5.33m
II区・4面	柱穴列5	N-32° -W	0.53m	26cm・4.79m
	柱穴列6	N-46° -W	0.43m	15cm・4.95m
	柱穴列7	N-43° -W	2.03m	31cm・4.73m
	柱穴列8	N-55° -E	1.98m	22cm・4.84m

表8 建物・柱穴列一覧

ことも可能かもしれない。しかし、今次調査で確認された火災層、あるいは被熱層の数は、記録されたものを上回る。13世紀後半に比定される第3期の面にも被熱層が観察される。鎌倉時代後半の当地地帯は相当繁華であったことが推察されるので、記録にない火事があった可能性も少なくないのではないか。この点については、もう少し周辺の資料増加を待ちたい。軸方位で類別するとI区はN-33~34°-Wのものが多く、豆腐川沿いにある高御倉小路と呼ばれる道とほぼ一致する。このことは、高御倉小路が中世期のこの谷にあって基軸とされていたことを示唆している。

往時の豆腐川は海岸付近で深さ約9m、幅約5.4m以上あり、近代には飯島から船がのぼったと『としよりのはなし』には書かれている。荷揚げ場がどこにあったかは不明だが、高御倉が鎌倉時代の倉庫群であったとすれば、調査区近辺は、中世にあって相当繁華な地帯だったと推測される。I区にみられた堅牢な面と関連があるのだろうか。

なお「光明寺境内図 嘉永3年(1850)」をみると境域外から乱橋村の往還路が描かれている。これは、調査地点に向かって西から来る現在の市道に違いない。往還路の傍らには感応寺と書かれていて現在は廃寺となっている。かつてここに立っていた板碑は現在五所神社にあり、弘長二年(1262)の年紀がある。感応寺は鎌倉中期には存在していた可能性が高く、また第1章でもふれたとおり、調査区南の谷戸にあったとされる最宝寺が鎌倉末期に建立されていたとすれば、調査区西の道は感応寺あたりから弁ヶ谷前を通って飯島に行く道として、遅くとも鎌倉中〜後期には存在していたことになろう。

(鍛冶屋)

引用・参考文献

貫達人・川福武胤1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

岡岡一郎2001「材木座地区」『切通周辺詳細分布調査報告書』註：本踏査では秋葉社の現在の参道とは別に、天保の紀年銘が刻まれた石柱が両脇に立つ旧参道の平場が見つかっている。これは「光明寺境内図 嘉永3年(1850)『鎌倉の古絵図Ⅱ 鎌倉国宝館図録第16集』に描かれている秋葉社参道と位置的にも符合する。

鎌倉市教育委員会編1971「材木座」『としよりのはなし』

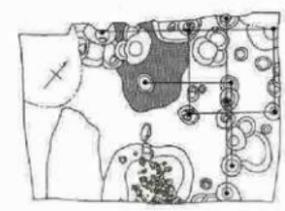
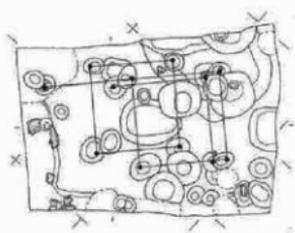
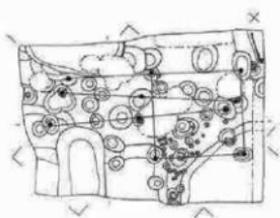
三浦勝男編2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版

三浦勝男編『鎌倉の古絵図Ⅱ 鎌倉国宝館図録第16集』鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

赤星直忠1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館

斎木秀雄ほか2005「材木座町屋遺跡(Nr.261)材木座6-674-10、6-674-15、6-674-8外、6-674-9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

(I区)



3面



2 b面



2 a面



1面

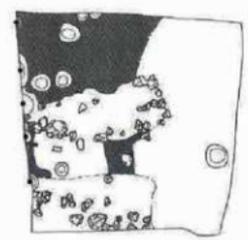
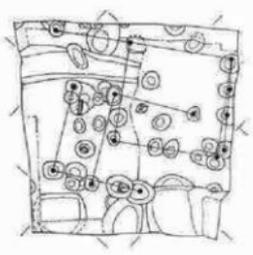
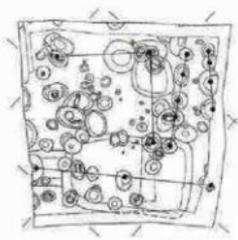


(II区)

第1期
4面



第2期
3面



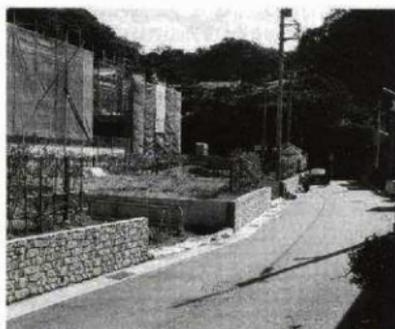
2面

图27 遺構変遷図

図版 1



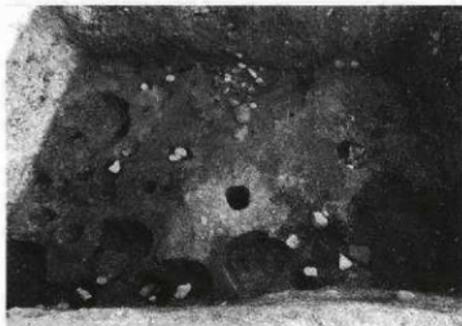
1. 調査地点鳥瞰(丸印が調査地点)



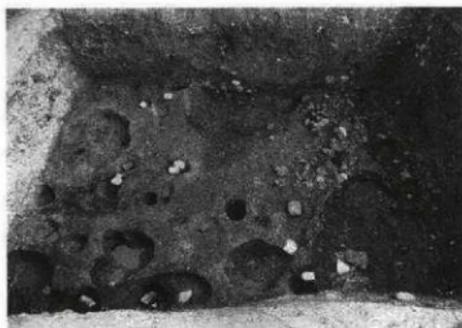
2. 調査地区近景(北から)



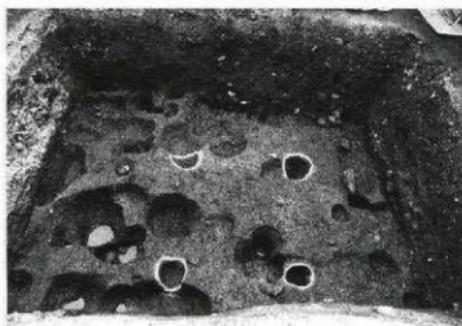
3. 調査地区近景
(中央の道が高御倉小路、南から)



1. I区1面全景(北から)



2. I区2 a面全景(北から)



3. I区2 b面全景(北から)
白丸は建物3柱穴



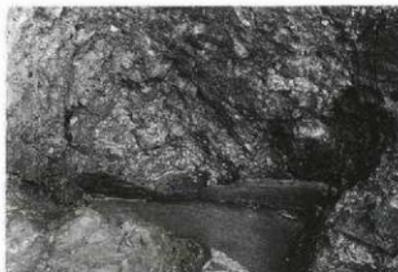
1. 1区3面全景(北から)



2. 1区1面土坑5(北から)



3. 1区1面建物1 P2内 瀬戸広口壺(南から)



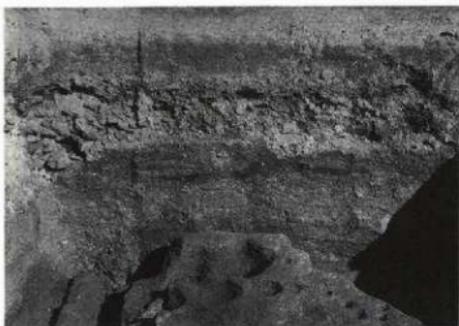
4. 1区3面井戸1・木杵(西から)



5. 1区3面柱穴列4 P3(北から)



1. I区北壁土层断面



2. I区东壁土层断面



3. I区南壁土层断面



1. II区2面全景(南から)



2. II区3面全景(南から)



3. II区4面(1)全景(南から)



1. II区4面(2)全景(西から)



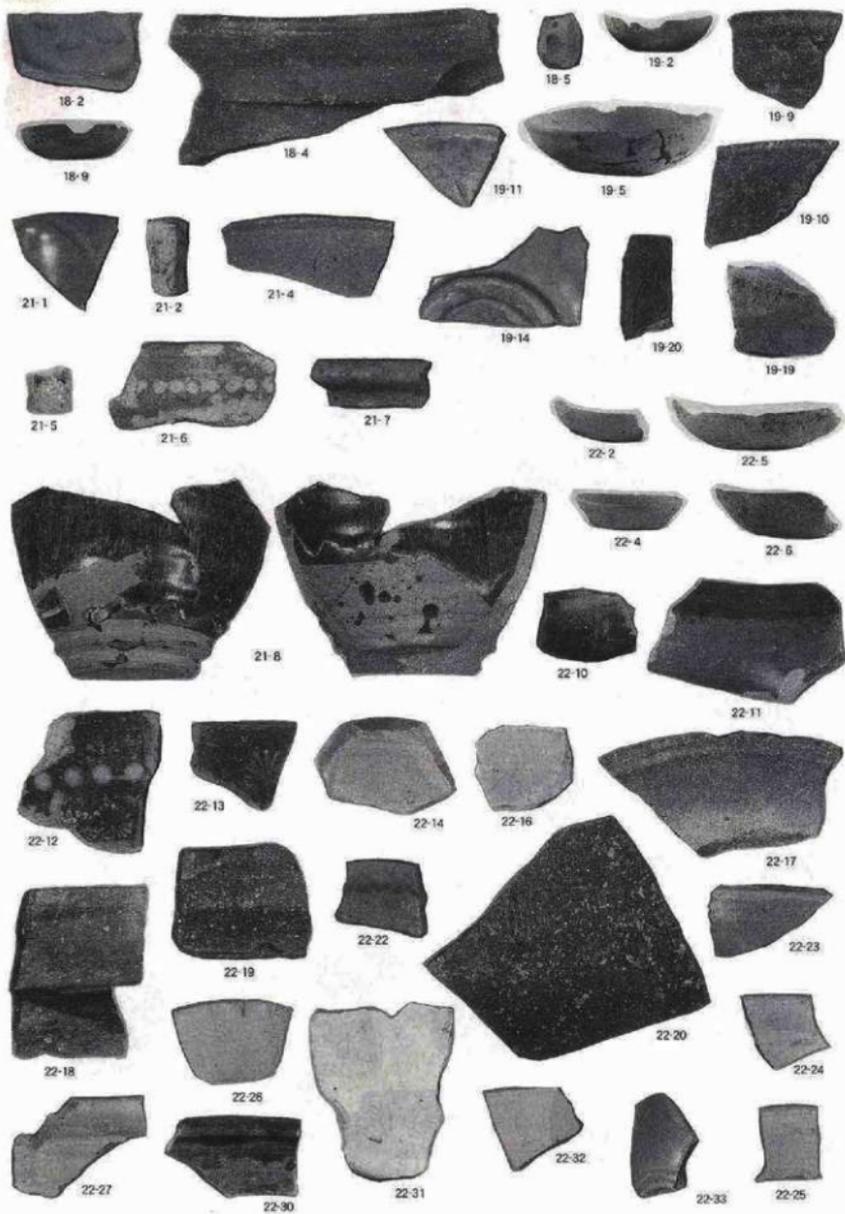
2. II区北壁土層断面

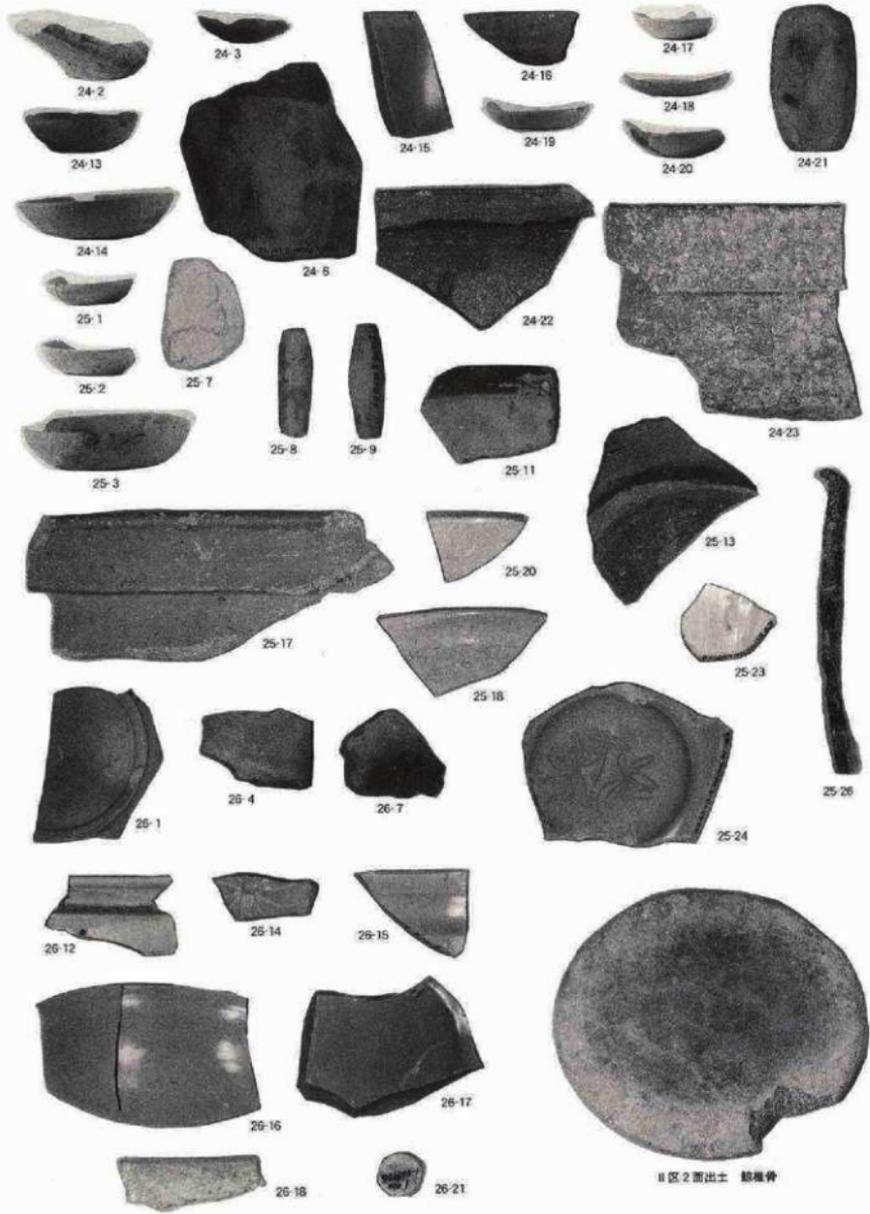


3. II区西壁土層断面









II区2番出土 磁器片

わかみやおお じしゅうへんい せきぐん
若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

御成町123番3

例 言

1. 本書は、個人専用住宅の新築に先だち行われた鎌倉市御成町123番3地点に所在する若宮大路周辺遺跡群(黒遺跡台帳№87)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成16年9月29日より同年10月26日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿は第1章と第2章は石元が執筆したものを福田が補った。第3章と第4章は福田が執筆し、編集は福田が行った。
4. 使用した写真は、遺構・遺物ともに福田が撮影した。
5. 発掘調査・整理作業の体制は以下の通りである。
発掘調査
主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)
調査員 伊丹まどか 石元道子 鈴木絵美
調査補助員 白石哲也(明治大学)
作業員 (社)鎌倉市シルバー人材センター
整理作業
主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)
調査員 石元道子 菊川 泉
6. 発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

本文目次

第1章 遺跡の立地と環境	158
第2章 調査の経過と層序	158
第3章 検出した遺構と遺物	161
第1節 第1面の遺構と遺物	161
第2節 第2面の遺構と遺物	161
第3節 第3面の遺構と遺物	161
第4章 まとめ	163

図目次

図1 遺跡位置図	156
図2 調査区の設定	157
図3 本調査地点と周辺の遺跡 その1	159
図4 本調査地点と周辺の遺跡 その2	160
図5 全測図と調査区壁土層図	162
図6 検出した遺構	163
図7 表採・1面まで・1面・遺構出土遺物	164
図8 2面まで・2面・遺構出土遺物	165
図9 3面遺構出土遺物	166
図10 3面遺構出土遺物	167
表 遺物観察表	168

図版目次

図版1 1面	170
図版2 2・3面	171
図版3 表採遺物	172
図版4 1面の遺物	173
図版5 2面と3面までの遺物	174
図版6 3面の遺物	175
図版7 3面遺構の遺物	176

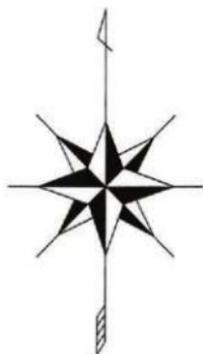
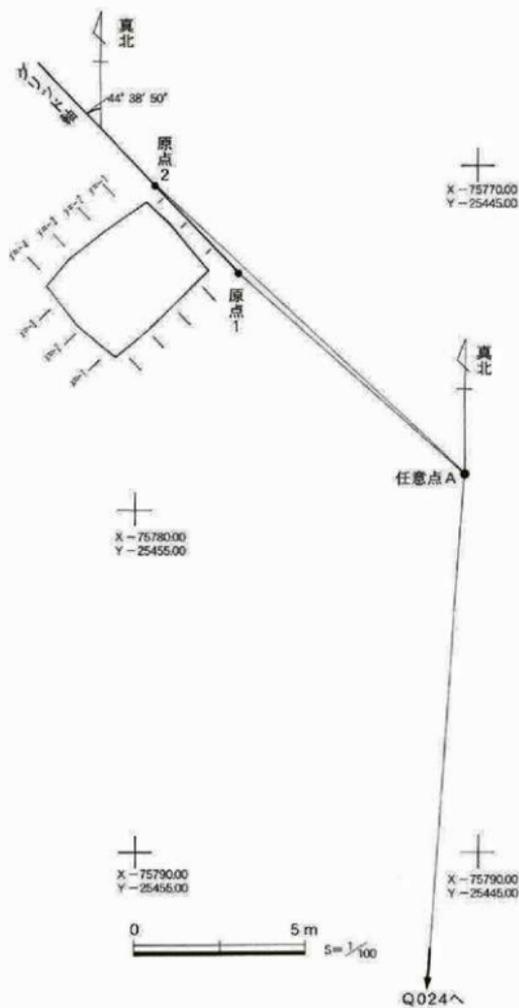
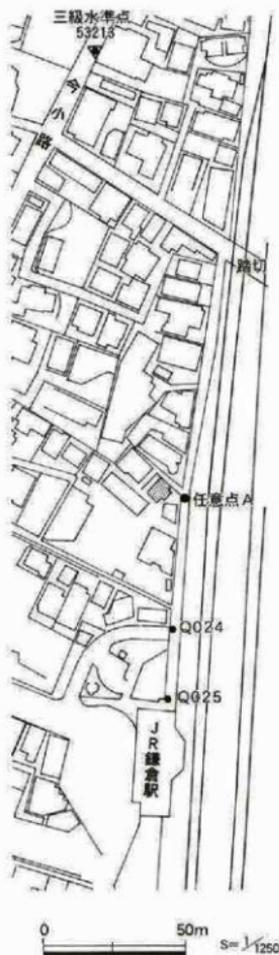


図1 遺跡位置図



Q024	X - 75823.615	Y - 25448.672
Q025	X - 75852.257	Y - 25449.057
任意点 A	X - 75779.076	Y - 25445.432
原点 1	X - 75773.178	Y - 25451.904
原点 2	X - 75770.634	Y - 25454.417

(日本測地系)

三級水準点	53213	標高	8.378m
原点 1		標高	7.435m
原点 2		標高	7.661m

図 2 調査区の設定

第1章 遺跡の立地と環境

鎌倉の中心部を南北に貫く若宮大路を中心に南北約1km、東西約0.6kmの範囲が若宮大路周辺遺跡群として登録されている。本調査地点はこの遺跡群のほぼ中央に位置するJR鎌倉駅の西、線路に沿う幅約3m程の市道に面している。周囲は海拔約7.50mの地表高である。(図1・2)

今小路から東に直線で約80m入った地点であり、今小路の一带は多くの武家屋敷が建ち並んでいた地域で、「甘縄辺」と呼び表される地域に含まれると考えられている。特に遺跡の西に当たる無量寺ヶ谷入口一带は、安達泰盛の邸宅があったと比定されている地域である。(秋山1999) まさに南北に走る今小路を挟み、西側の無量寺ヶ谷入口と向き合う東側に調査地点は位置する。

第2章 調査の経過と層序

個人住宅建築に伴い、平成16年9月27日に表土掘削。9月29日より本調査を開始し、同年10月26日まで行われた。調査面積は12㎡。近隣の調査(御成町123番5地点)の成果を参考に確認調査は行っていない。住宅の建築範囲に平行して基準の南北軸を設けた。

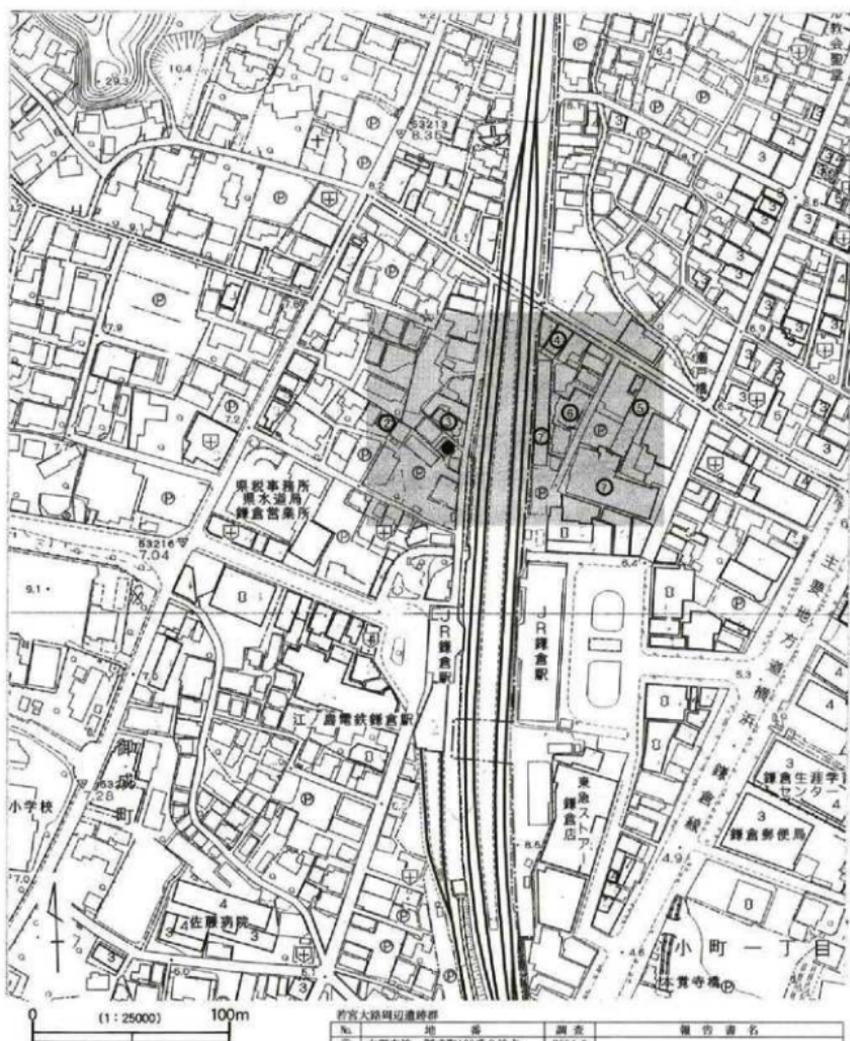
遺跡の位置は北緯 $35^{\circ} 19' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 33' 12''$ である。鎌倉市内に設けられた4級基準点(日本測地系)のQ024($X=-75823.615$ $Y=-25448.672$)・Q025($X=-75852.257$ $Y=-25449.057$)を用いて、原点1と原点2を求めた。グリットの基準は、原点1と原点2を結んだ南北方向をY軸、直角に交わる東西方向をX軸として原点1を $X \cdot Y=0$ とした。原点1と原点2間の距離は3.571mである。図中の方位はすべて真北を示し、グリット方眼の南北軸線は真北より西に $44^{\circ} 38' 55''$ 振れている。

鎌倉市三級水準点(No.53213)を用いて原点1と原点2の標高を求めた。以下、各数値を記す。

4級基準点Q024	$X=-75823.615$	$Y=-25448.672$	
4級基準点Q025	$X=-75852.257$	$Y=-25449.057$	
任意点A	$X=-75779.075$	$Y=-25445.432$	
原点1	$X=-75773.178$	$Y=-25451.904$	$L=7.435m$
原点2	$X=-75770.634$	$Y=-25454.417$	$L=7.661m$
三級水準点(No.53213)	標高	8.378m	

地表から地山面まで約1.9~2.0mの深さである。土層の堆積状況を観察すると1面から最下層の地山面まで3期にわたる面を検出確認した。重機で地表(海拔約7.50m)から1.5mを掘り下げた(海拔約6.00m)ところで、木片の散らばる面を検出し第1面(淡灰色粘質土層)とした。第2面(淡黄灰色粘質土層)は粘性が強く、面全体から礎板が検出された状況であった。第3面(灰褐色粘質土)は炭化物が多くみられる。第3面の包含層である暗灰色粘質土層より堅く締まっている。第3面の下層で、淡青灰色弱粘質土の遺物混入のない面を検出し中世地山(海拔約5.65m)とした。

雨による冠水、湧水に悩まされ10月19日からの大雨で調査区の南壁・西壁が崩壊し、JR鎌倉駅近くの住宅密集地でもあり協議の上、10月26日に周囲の崩落防止の措置を行った後、調査を終了した。



※メッシュ部分は図4の範囲

No.	地 番	調査	報告書名
①	本調査地 御成町123番3地点	2004.9	
②	御成町126番1地点	2003.1	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23
③	御成町123番5	1997.3	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15-1
④	小町一丁目120番1	1986.7	小町一丁目120番-1地点遺跡 風門社ビル建設に伴う発掘調査報告書
⑤	小町一丁目117番3地	2005.9	若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書 小町一丁目117-3地4葉
⑥	小町一丁目116番	1985.5	鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書2
⑦	一次調査 小町一丁目100番1地	1987.2	若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書 小町一丁目100番1地4葉
⑧	二次調査 小町一丁目116番2地	1988.1	若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書 小町一丁目116番2地4葉

図3 本調査地点と周辺の遺跡 その1

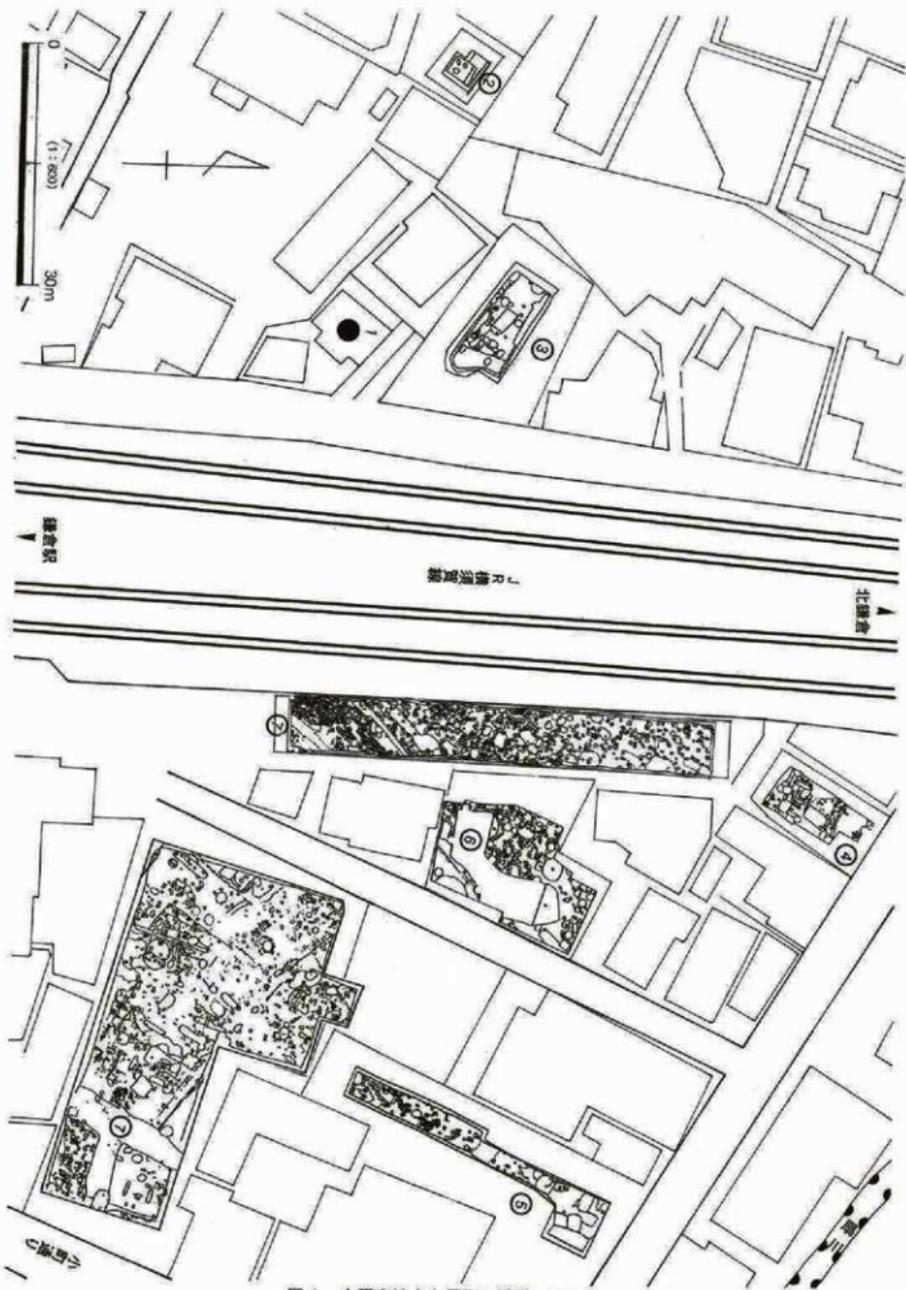


図4 本調査地点と周辺の遺跡 その2

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 第1面の遺構と遺物 (図5・7)

第1面は、地表下約150cmで確認した。構成土の淡灰色粘質土は、きめ細かく粘性が強い。柱穴1、土壌1、溝状遺構1を検出した。溝状遺構の軸方位はN-およそ60°-Wである。若宮大路の軸線はN-26°48'23"-Eなので、溝状遺構1と若宮大路では約86°の開きがある。遺構面上には貼りついた状態で礎板が複数確認されている建物は確認されていない。これらの礎板は掘り込みを持たないことから、床を支えていた床束の礎板の可能性が考えられる。

柱穴1の法量は南北径85cm、東西径65cm、深さ20cmである。土壌状に浅いが、中に礎板を持つことから柱穴とした。1面より新しい時期の遺構と考えられる。おそらく削平により浅くなったものと思われる。遺物は軸輻成形かわらけ2点と火鉢の小片が出土している。

西壁に沿って検出した土壌3の法量は東西160cm、深さ20cmで底面は平らである。遺物は軸輻成形かわらけ2点、常滑片口鉢2点(I・II類)と箸をはじめとする木製品が併って出土している。

溝状遺構1は、南壁に沿って東西方向に検出した浅い溝状の遺構である。法量は幅約85~140cm、深さ20cm程である。かわらけ2点、常滑3点(蓑・壺・片口鉢)が出土している。片口鉢は小片だがI類である。1面まで・1面出土の遺物は軸輻成形かわらけ、小片の常滑片口、青白磁合子などである。遺物の構成から見て1面は概ね14世紀代と捉えられる。

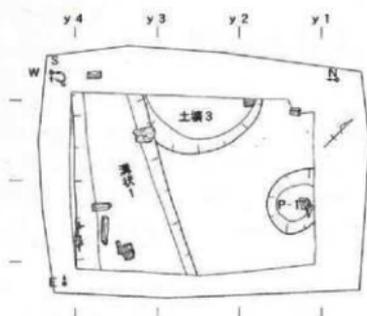
第2節 第2面の遺構と遺物 (図5・8)

第2面は第1面の約10cmで検出した。構成土は淡黄灰色粘質土で粘性が強い。土壌1と遺構面上に礎板が見られる。1面と同じく建物の床束を支える礎板か。調査区壁面で30cm大の伊豆石が数個検出されている。建物の礎石として使用されたものかもしれないが、対応するものが確認されていない。

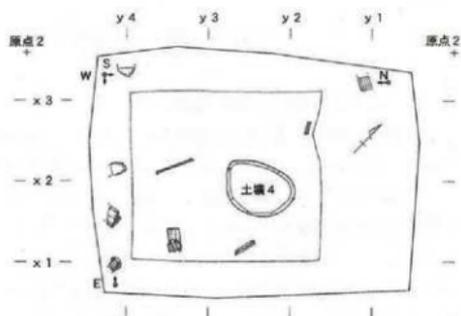
土壌4は調査区ほぼ中央で検出した2面唯一の遺構で、法量は南北70cm、東西80cm、深さ12cmである。少量の木製遺物が出土。包含層と面から小型の手握ねかわらけが2点出土している。いずれも13世紀中に位置づけられるものである。包含層出土遺物に常滑片口鉢がある。常滑編年I類、5~6a型式、13世紀中~後半。青磁劃花文碗口縁部片も併せて出土している。遺物の構成から見て2面は概ね13世紀中~後半と捉えられる。

第3節 第3面の遺構と遺物 (図5・8・9・10)

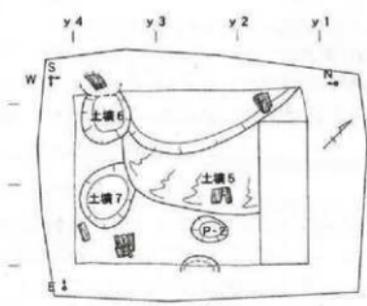
第3面は第2面の約30cmで検出した。構成土の灰褐色粘質土は炭化物を含んでいる。多くの木製品(箸・板草履)が出土している。柱穴2、礎板を持つ柱穴2、土壌3を検出確認した。柱穴2・3を結んだ軸線はN-68°-W。若宮大路の軸線と比べると西に約96°振れていることになる。柱穴2の法量は直径40cm、深さ30cm程でロクロ成形のかわらけが出土している。土壌5は調査区北壁際で検出されたもので、法量は東西径約2m、深さ40cm程である。出土したかわらけ11点中手握ねかわらけは4点である。小片ではあるが複弁の青磁蓮弁文碗、常滑I類の片口鉢、陽物の形代、透き漆の補修痕が見受けられる漆盆(黒漆塗りで表面に酢漿草の文様が3個組で6カ所に手描きで描かれている。)、箸、板草履の残欠等が出土している。土壌6の法量は直径約70cm、深さ30cmの土壌で土壌5の南に位置する。かわらけと小片ではあるが複弁の青磁蓮弁文碗が出土している。土壌7の法量は直径70~80cm、深さ約20cmの土壌で土壌5に接している。手握ね成形のかわらけ出土している。遺構出土の遺物から3面は概ね13世紀中頃と捉えられる。



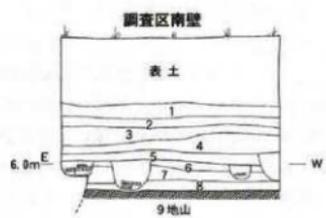
1面全測図



2面全測図



3面全測図



- 調査区 南壁・西壁 土層**
1. 灰褐色粘質土
田んぼの塚土か?
 2. 淡茶灰色砂質土
土丹粒, かわらけ片, 炭化物を含む。
 3. 淡茶灰色砂質土
土丹粒, かわらけ片, 炭化物を含む。2より締まりなし。
 4. 灰褐色粘質土
炭化物を少量含む。
 5. 淡灰色粘質土
細かい木片を多く含む。(1面構成土)
 6. 淡黄灰色粘質土
繊維により部分的に硬化している。(2面構成土)
 7. 暗灰色粘質土
炭化物を多く含む。(2面構成土)
 8. 灰褐色粘質土
炭化物を多く含む。7よりよく締まる。(2面構成土)
 9. 淡青灰色弱粘質土
砂っぽく 混入物なし。(中世地山)
 10. 暗褐色粘質土
有機質土。木片を多く含む。
 11. 暗褐色粘質土
土丹、土丹粒、木片、有機質土を多く含む。繊維が多い。
 12. 暗褐色粘質土
有機質土。砂質土を少量含む。繊維が少ない。
 13. 黒褐色粘質土
有機質土。砂質土を少量含む。繊維が少ない。
 14. 黒褐色粘質土
有機質土多い。土丹、木片、炭化物、砂質土少量。
 15. 黒褐色粘質土
有機質土。木片を多く堆積。炭化物を含む。
 16. 暗褐色粘質土
有機質土。土丹、木片少量。炭化物微量。
 17. 黒褐色粘質土
有機質土。炭化物微量。
 18. 暗褐色粘質土
有機質土。土丹少量。炭化物微量。

原点1 +

原点2 +

原点1 +

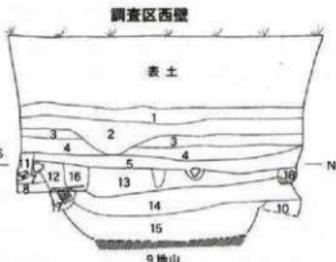


図5 全測図と調査区壁上層図

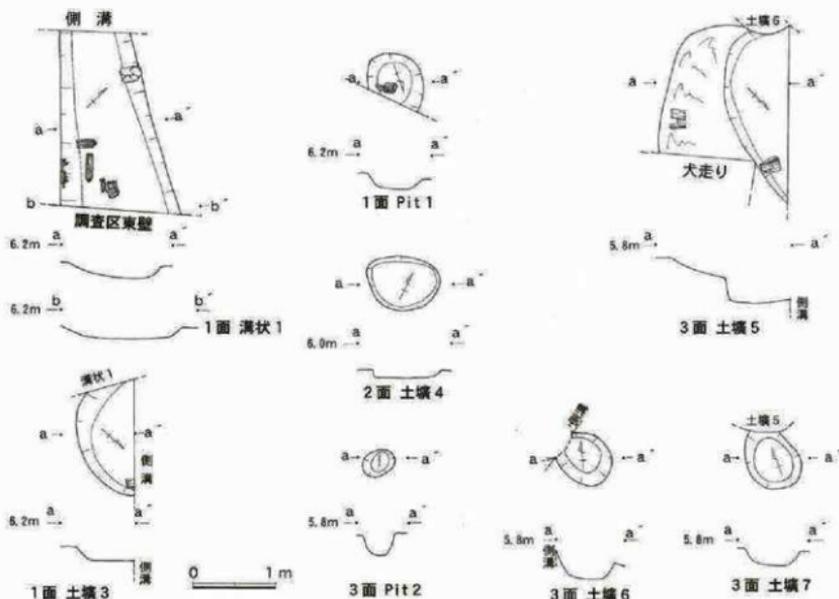


図6 検出した遺構

第4章 まとめ

本調査地点は西の今小路から東に直線で約80m入った地点である。最近の研究成果で今小路の一带は、「甘縄辺」と呼び表される地域に含まれると考えられている（秋山1999）。鎌倉のメインストリートでもある若宮大路、今小路に東西を挟まれた調査地点は、鎌倉～室町時代を通して都市の真っ直中と言っても過言でない位置を占めている。確認した溝状遺構や掘立柱柱穴の軸方位を見ると、メインである若宮大路や今小路と平行ないしは直角に近い数値が求められている。本調査地の北隣、御成町123番5地点の発掘調査の成果を見ても、第3面で検出されている方形竪穴建物や第4面の矢来か芝垣と見られる浅い溝状の遺構の軸線も本調査地点とほぼ同じ傾向を示している。また、中世遺構が最初に確認される時期も13世紀中頃以降と同じである。若宮大路の周辺では、大蔵幕府から宇津宮辻子幕府に移転した時期に合わされように軸方位を同じくした道や溝が新たに造られる（福田1998）。調査地点も中世の遺構は13世紀中頃を初めと考えられる。鎌倉中期において都市整備の中で形作られていったものと思われる。古代の遺物が若干出土しているが、明確な遺構は確認されていない。調査地点の南西約300mに今小路を挟み、奈良時代都衙跡が確認されている今小路西遺跡、さらに北西約400mに同じく源義朝館の伝承がある寿福寺があることから、調査地点を含む今小路周辺は古代より拓けていた地域と考えられる。建物等顕著な遺構の確認は出来ていないため、求められた遺構や軸方位は誤差が大きく厳密なものではないが、調査地点を含め周辺地域は、鎌倉中期以降の都市遺跡の様相を呈しているものと考えられる。調査面積が12㎡と小さく、武家屋敷なのか、庶民の居住地域なのかは明らかにすることは出来なかった。

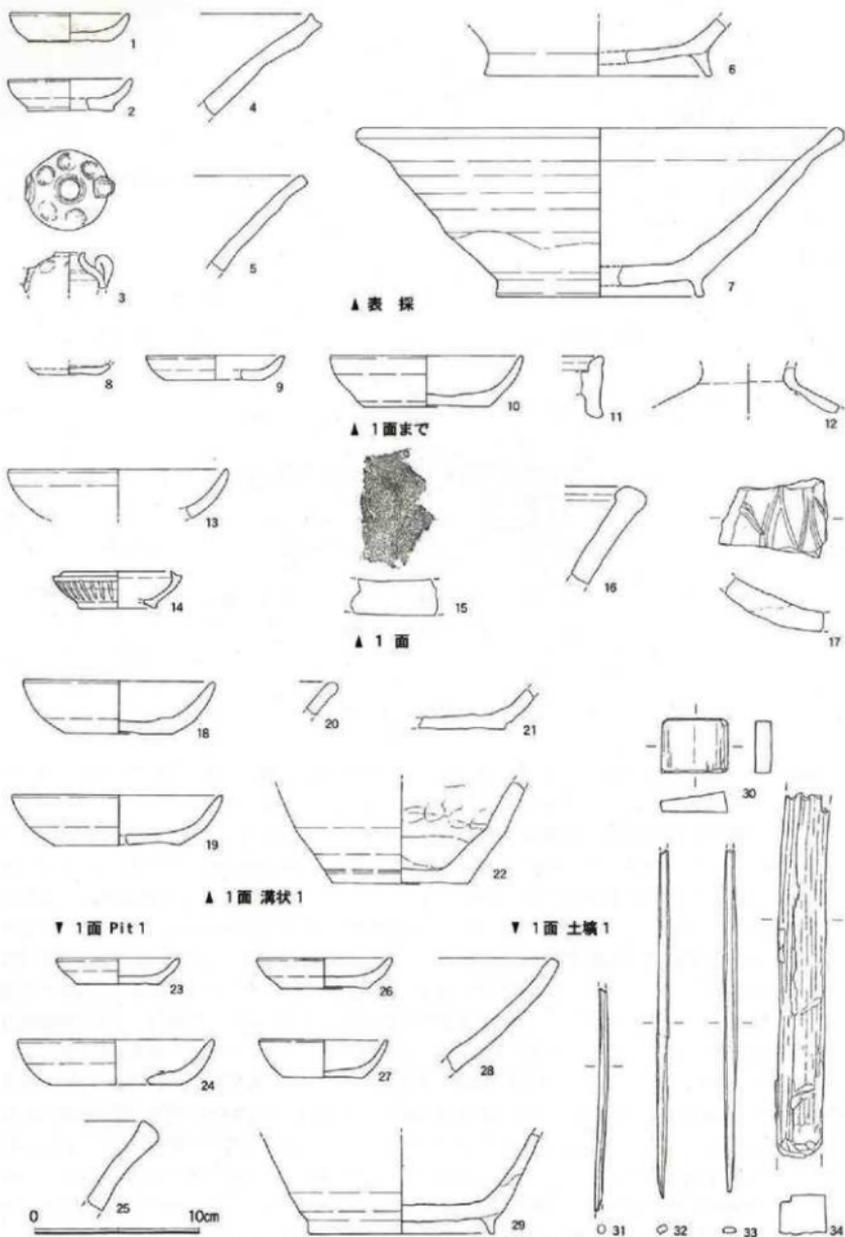


図7 表採・1面まで・1面・遺構出土遺物

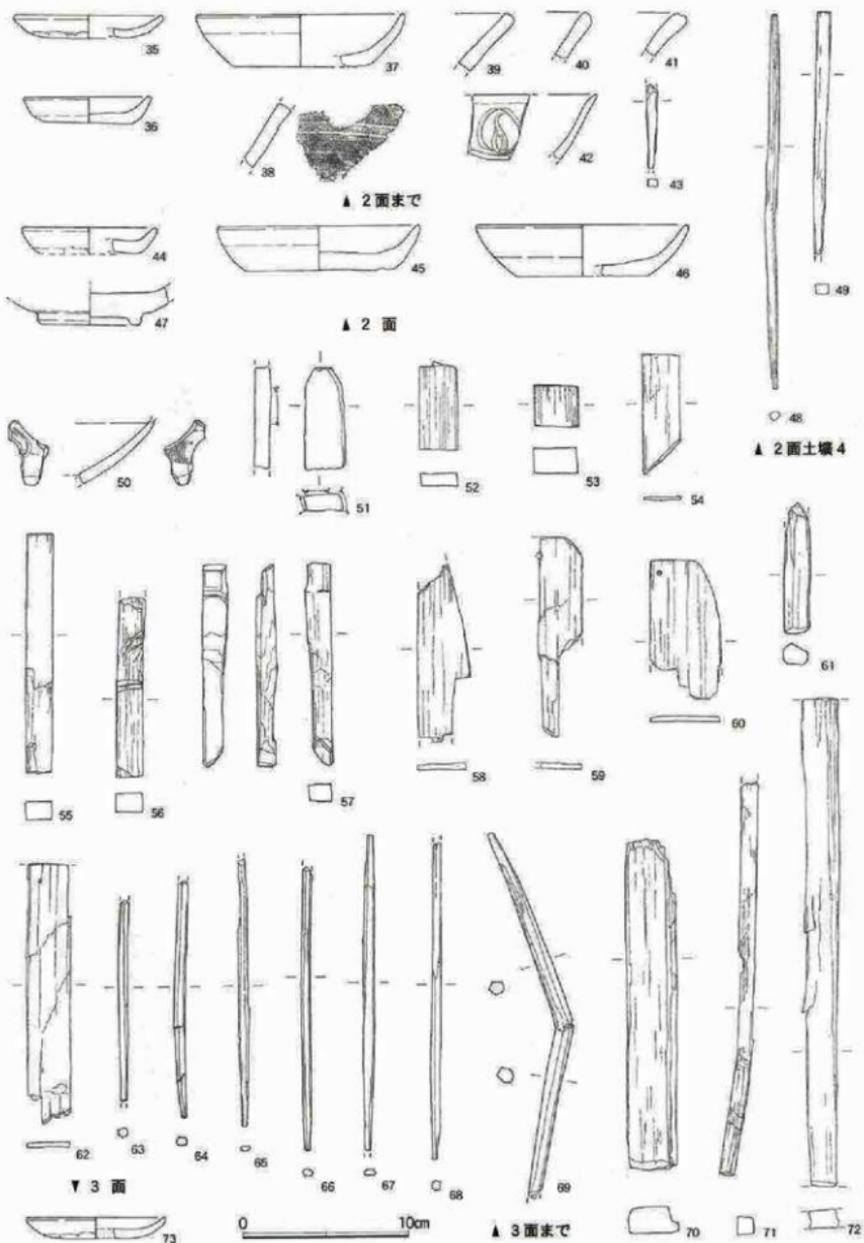


図8 2面まで・2面・遺構出土遺物

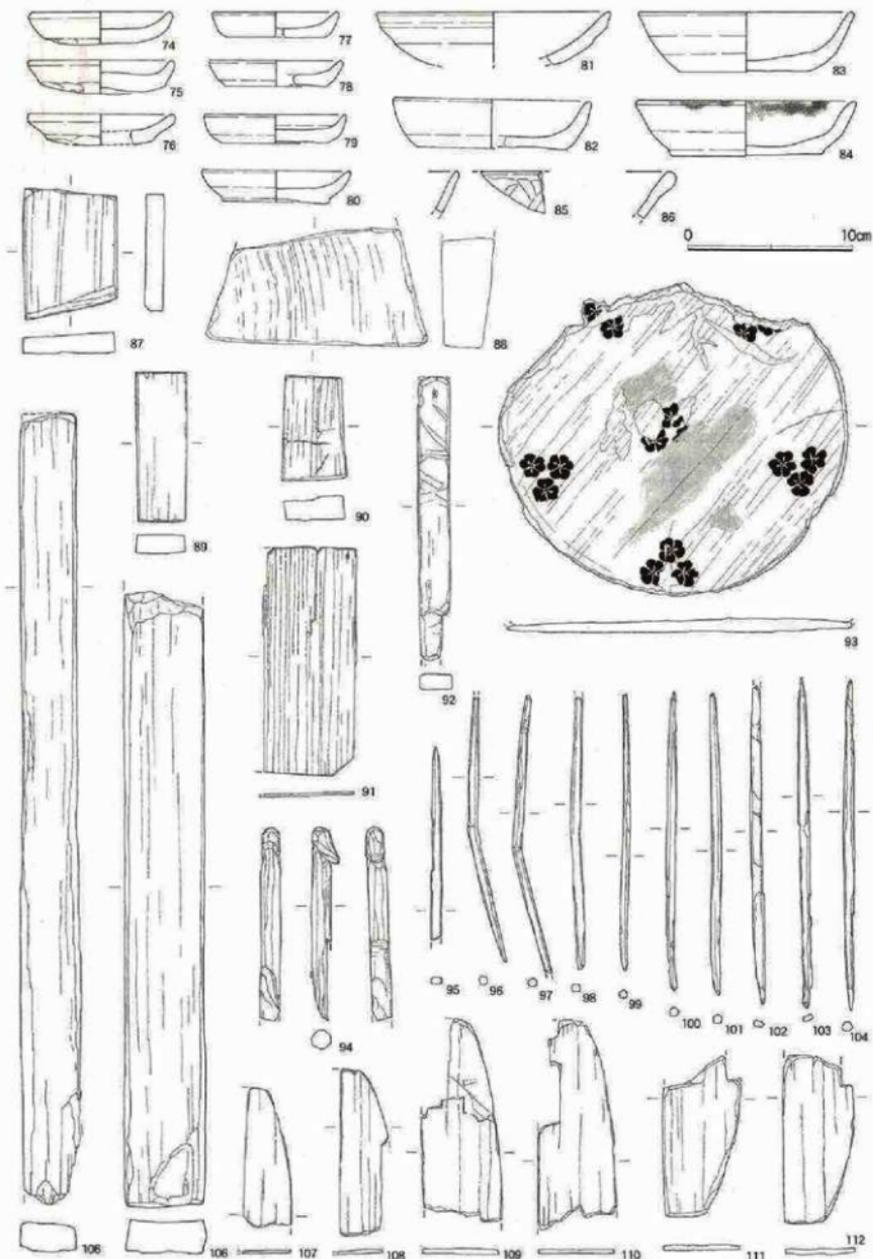


图9 3面遺構出土遺物

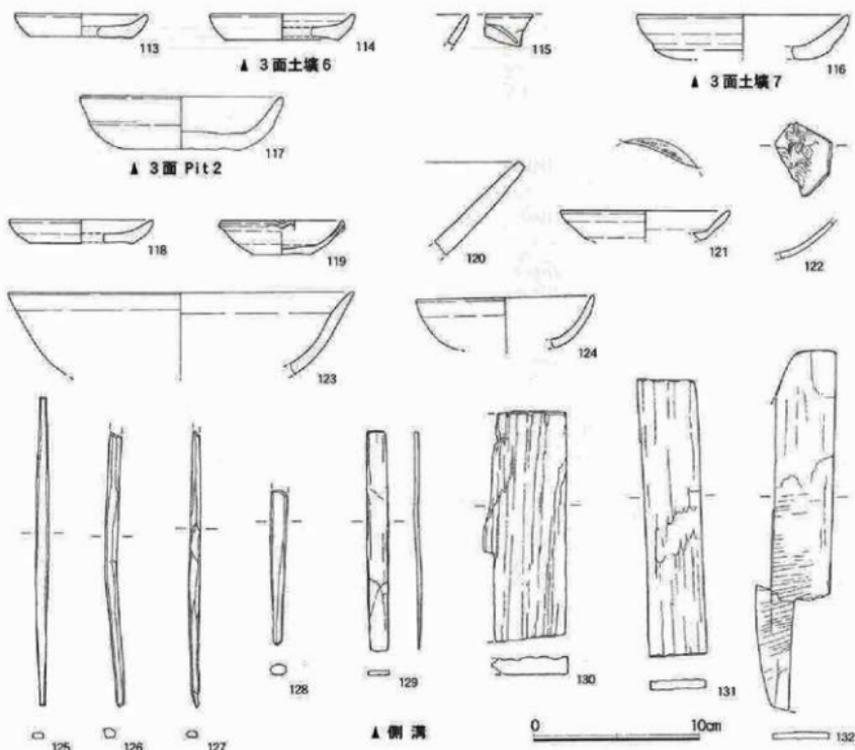


図10 3面遺構出土遺物

《参考文献》

- 秋山哲雄 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15-1』 『御成町123番5地点』 第1章第1節1999.3
 福田 誠 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』 『小町二丁目5番8地点』 1998.3
 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-2』 『御成町126番1地点』 2007.3
 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-2』 『御成町123番5地点』 1999.3
 『小町一丁目120番1地点遺跡群発掘調査報告書』 『風門社ビル建設に伴う発掘調査報告』 1989.8
 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』 『小町一丁目117番3他4家地点』 2008.3
 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』 『小町一丁目116番地点』 1985.3
 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』 『小町一丁目106番1・4他地点』

遺物観察表(1) (*)は復元値 単位はcm

層位・出土地点	番号	遺物名	法 量			特 徴 等
表 掘	図7-1	かわらけ	口径 7.2	底径 5.1	跡高1.7	輪縁成形
	-2	かわらけ	口径 7.5	底径 5.3	跡高2.0	輪縁成形
	-3	瀬戸 水筒	最大径 5.0			反軸ツケガケ。印花文。古瀬戸中期(14世紀前半)か
	-4	常滑 片口鉢				(口縁部小片) II類, 7型式
	-5	常滑 片口鉢				(口縁部小片) II類, 6~7型式か
	-6	常滑 片口鉢		底径(14.0)		I類
	-7	常滑 片口鉢	口径(19.0)	底径(12.6)	跡高10.4	I類 内面摩滅
1面まで	-8	かわらけ		底径 3.5		輪縁成形
	-9	かわらけ	口径 (8.3)		跡高 1.5	輪縁成形
	-10	かわらけ	口径(11.0)	底径(7.0)	跡高 3.2	輪縁成形
	-11	常滑 甕				(口縁部小片) 6~7型式か
	-12	常滑 甕口				(甕部小片)
1面	-13	かわらけ	口径(13.2)			輪縁成形
	-14	青白磁 合子	口径 (5.6)	底径 (6.6)	跡高 2.3	最大径 (8.0)
	-15	平瓦				凸面斜格子叩き
	-16	火鉢				(口縁部小片)
	-17	常滑 甕				(甕部小片) 縦刻あり
	1面 溝状1	-18	かわらけ	口径(11.4)	底径(8.0)	跡高 3.3
-19		かわらけ	口径(12.0)	底径(7.0)	跡高 3.1	
-20		常滑 片口鉢				(口縁部小片) I類
-21		常滑 甕				(底部小片)
-22		常滑 壺		底径(8.3)		
1面 Pit1	-23	かわらけ	口径(7.8)	底径 5.0	跡高 1.6	輪縁成形
	-24	かわらけ	口径(12.0)	底径(7.0)	跡高 2.8	輪縁成形
	-25	火鉢				(口縁部小片)
1面土壌3	-26	かわらけ	口径(8.2)	底径(5.4)	跡高 1.9	輪縁成形
	-27	かわらけ	口径(7.8)	底径(4.8)	跡高 2.4	輪縁成形
	-28	常滑 片口鉢				(口縁部小片) II類 6~7型式か
	-29	常滑 片口鉢		底径(11.3)		I類
	-30	木製品	長さ 3.3	幅 4.1	厚さ 1.3	
	-31	木製品 箸	残長 13.7	幅 0.6	厚さ 0.6	
	-32	木製品 箸	残長 21.5	幅 0.7	厚さ 0.5	
2面まで	-33	木製品 箸	残長 21.0	幅 0.8	厚さ 0.4	
	-34	木製品	残長 22.6	幅 2.9	厚さ 2.5	
	図8-35	かわらけ	口径 (8.8)		跡高(1.4)	手捏ね成形
	-36	かわらけ	口径 7.7	底径 5.6	跡高 1.7	輪縁成形
	-37	かわらけ	口径(12.5)	底径(8.2)	跡高 3.3	輪縁成形
	-38	須恵器 甕				(体部小片)
	-39	常滑 片口鉢				(口縁部小片) I類 5~6a型式か
	-40	常滑 片口鉢				(口縁部小片) I類 5~6a型式か
	-41	常滑 片口鉢				(口縁部小片) I類 5~6a型式か
	-42	青磁刺花文甕				(口縁部小片)
2面	-43	鉄製品(釘)	残長 5.2	幅 0.6	厚さ 0.5	
	-44	かわらけ	口径 (8.1)		跡高 1.7	手捏ね成形
	-45	かわらけ	口径(12.2)	底径(9.0)	跡高 2.7	輪縁成形
	-46	かわらけ	口径(12.8)	底径(8.0)	跡高 3.2	輪縁成形
	-47	青磁 甕		底径(8.0)		
2面土壌4	-48	木製品 箸	長さ 23.2	幅 0.8	厚さ 0.4	
	-49	木製品	残長 15.1	幅 0.7	厚さ 0.6	
3面まで	-50	青磁刺花文甕				(体部小片)
	-51	研磨陶片	長さ 6.3	幅 2.5	厚さ 1.1	常滑甕の体部片。断面と表面の一部を研磨したもの
	-52	木製品	長さ 5.5	幅 2.4	厚さ 0.8	
	-53	木製品	長さ 2.6	幅 2.7	厚さ 1.6	
	-54	木製品	長さ 7.5	幅 2.3	厚さ 2.0	
	-55	木製品	長さ 14.9	幅 1.9	厚さ 1.7	
	-56	木製品	長さ 11.1	幅 1.8	厚さ 1.2	釘穴あり
	-57	木製品	長さ 12.7	幅 1.5	厚さ 1.1	墨書・釘穴あり
	-58	木製品 草履芯	残長 11.1	残幅 3.2	厚さ 0.4	
	-59	木製品 草履芯	残長 12.4	残幅 2.2	厚さ 0.4	
	-60	木製品 草履芯	残長 8.6	幅 4.3	厚さ 0.3	
	-61	木製品	長さ 8.1	幅 1.5	厚さ 1.3	
	-62	木製品	残長 16.0	幅 2.8	厚さ 0.3	穿孔あり
	-63	木製品 箸	残長 12.5	幅 0.6	厚さ 0.5	
	-64	木製品 箸	残長 14.7	幅 0.8	厚さ 0.5	
	-65	木製品 箸	残長 16.5	幅 0.7	厚さ 0.3	
	-66	木製品 箸	残長 17.7	幅 0.7	厚さ 0.5	

遺物観察表(2) (*)は復元値 単位はcm

層位・出土地点	番号	遺物名	法		量		特徴等
3面まで	-67	木製品 箸	残長 19.6	幅 0.7	厚さ 0.4		
	-68	木製品 箸	残長 19.8	幅 0.5	厚さ 0.6		
	-69	木製品 棒状	残長 23.1	幅 1.1	厚さ 1.0		
	-70	木製品	残長 20.6	幅 3.0	厚さ 1.6		
	-71	木製品	残長 24.6	幅 1.0	厚さ 1.1		
	-72	木製品	長さ 30.3	残幅 2.1	厚さ 1.2		
	-73	かわらけ	口径(8.5)		器高(1.3)		手捏ね成形
3面 3面土壌5	図9 -74	かわらけ	口径(8.4)		器高 2.0		手捏ね成形
	-75	かわらけ	口径(8.7)		器高 2.1		手捏ね成形
	-76	かわらけ	口径(8.7)		器高(1.9)		手捏ね成形
	-77	かわらけ	口径(7.6)	底径(6.0)	器高 1.6		轆轤成形
	-78	かわらけ	口径(8.0)	底径(6.1)	器高 1.7		轆轤成形
	-79	かわらけ	口径(8.6)	底径(6.3)	器高 1.8		轆轤成形
	-80	かわらけ	口径(9.1)	底径(6.6)	器高 2.0		轆轤成形
	-81	かわらけ	口径(14.2)				手捏ね成形
	-82	かわらけ	口径(12.0)	底径(9.1)	器高 3.1		轆轤成形
	-83	かわらけ	口径 13.0	底径 8.1	器高 3.8		轆轤成形
	-84	かわらけ	口径 13.4	底径 9.3	器高 3.5		轆轤成形。口縁部に残付着
	-85	青磁 蓮蓬弁文陶					(口縁部小片)
	-86	常滑 片口鉢					(口縁部小片) I類
	-87	木製品	長さ 8.3	幅 5.8	厚さ 1.3		
	-88	木製品 下駄の歯	残長 7.4	幅 13.5	厚さ 3.2		
	-89	木製品	長さ 9.5	幅 3.1	厚さ 1.2		
	-90	木製品	長さ 8.7	幅 4.1	厚さ 1.5		
	-91	木製品 折敷	長さ 14.4	残幅 5.6	厚さ 0.2		
	-92	木製品	残長 18.0	幅 1.9	厚さ 1.0		
	-93	漆器 盆	口径 22位		厚さ 0.9		透漆の補修箇所有り カタバミ手描き
	-94	木製品 形代	残長 12.2	幅 1.2	厚さ 1.7		陶物
	-95	木製品 箸	残長 12.2	幅 0.7	厚さ 0.5		
	-96	木製品 箸	残長 16.2	幅 0.6	厚さ 0.5		
	-97	木製品 箸	残長 17.8	幅 0.5	厚さ 0.6		
	-98	木製品 箸	残長 17.3	幅 0.6	厚さ 0.5		
	-99	木製品 箸	長さ 17.6	幅 0.5	厚さ 0.5		
	-100	木製品 箸	長さ 19.0	幅 0.5	厚さ 0.6		
	-101	木製品 箸	長さ 19.2	幅 0.5	厚さ 0.5		
	-102	木製品 箸	残長 20.2	幅 0.6	厚さ 0.4		
	-103	木製品 箸	長さ 21.0	幅 0.6	厚さ 0.3		
	-104	木製品 箸	長さ 21.0	幅 0.7	厚さ 0.6		
	-105	木製品	残長 49.8	幅 3.4	厚さ 1.8		
	-106	木製品	残長 38.8	幅 4.9	厚さ 2.1		
	-107	木製品 草履芯	残長 8.9	残幅 3.0	厚さ 0.2		
	-108	木製品 草履芯	残長 10.6	残幅 2.9	厚さ 0.3		
-109	木製品 草履芯	残長 12.9	幅 4.8	厚さ 0.4			
-110	木製品 草履芯	残長 13.3	幅 4.7	厚さ 0.3			
-111	木製品 草履芯	残長 10.3	幅 4.7	厚さ 0.3			
-112	木製品 草履芯	残長 10.7	幅 4.3	厚さ 0.3			
3面 土壌6	図10-113	かわらけ	口径(8.0)	底径(6.4)	器高 1.4		轆轤成形
	-114	かわらけ	口径(8.7)	底径(7.0)	器高 1.1		轆轤成形
	-115	青磁 蓮蓬弁文陶					(口縁部小片)
3面 土壌7	-116	かわらけ	口径(12.8)		器高(2.7)		手捏ね成形
	-117	かわらけ	口径(12.2)	底径 7.0	器高 3.2		轆轤成形
3面 Pit2 例 溝	-118	かわらけ	口径(8.7)	底径(6.3)	器高 1.5		轆轤成形
	-119	瀬戸 入子	口径(7.4)	底径(6.3)	器高 2.1		口縁部に残付着
	-120	常滑 片口鉢					(口縁部小片) II類 6~7型式か
	-121	青磁 蓮蓬文陶	口径(10.3)				
	-122	白磁 皿					(体部小片) 型作り
	-123	土師 杯	口径(20.8)				
	-124	土師 杯	口径(10.8)				
	-125	木製品 箸	長さ 19.1	幅 0.7	厚さ 0.3		
	-126	木製品 箸	残長 17.1	幅 0.8	厚さ 0.7		
	-127	木製品 箸	残長 17.1	幅 0.7	厚さ 0.5		
	-128	木製品 棒状	残長 9.7	幅 1.0	厚さ 0.7		
	-129	木製品	長さ 13.6	幅 1.3	厚さ 0.3		
	-130	木製品	長さ 14.2	幅 5.1	厚さ 1.1		
-131	木製品	長さ 17.2	幅 3.4	厚さ 0.6			
-132	木製品 草履芯	残長 22.3	残幅 4.5	厚さ 0.5			

図版 1



▲ 1. 遺跡近景 (東側、JR鎌倉駅ホームから)



▲ 2. 西壁の状況



▲ 4. 1面全景 (西から)



▲ 3. 南壁の状況



▲ 5. 1面全景 (南から)

6. 1面溝状1 (西から) ▶
1面





▲ 1. 2面全景 (西から)



▲ 2. 2面全景 (南から)



▲ 3. 2面かわらけ出土状況



▲ 4. 3面全景 (西から)

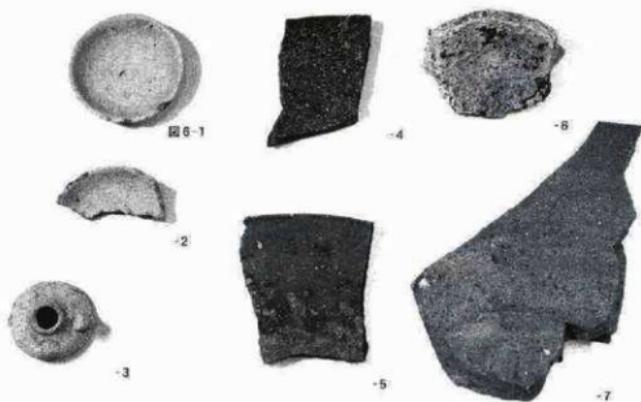


▲ 5. 3面全景 (南から)



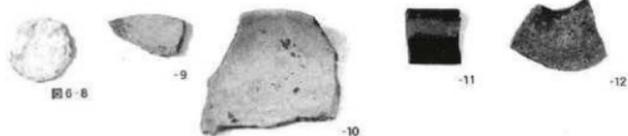
6. 3面全景 (北から) ▶

2・3面

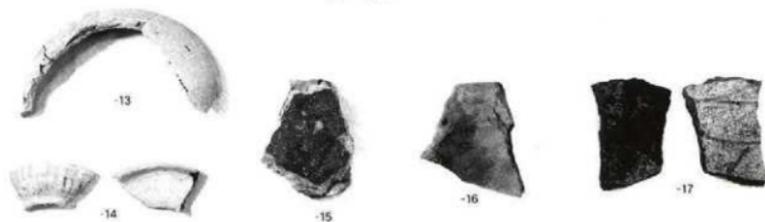


▲ 表 探

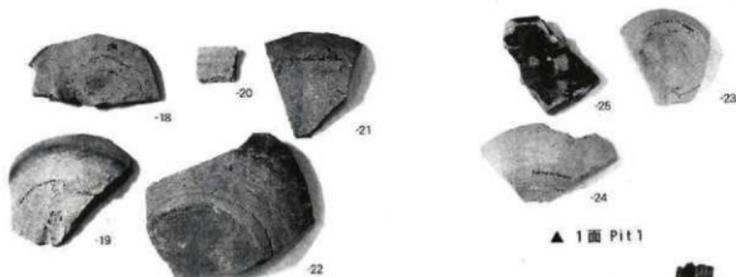
表探遺物



▲ 1面まで



▲ 1面



▲ 1面 Pit 1

▲ 1面溝状 1



▲ 1面土坑 3
1面の遺物



図7 35

▲ 2面まで



36



38



42



43



44



45



46



47

▲ 2面



48

49

▲ 2面土境 4



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62

63



64

65



66

67



68

69



70

71

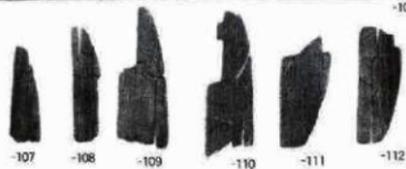
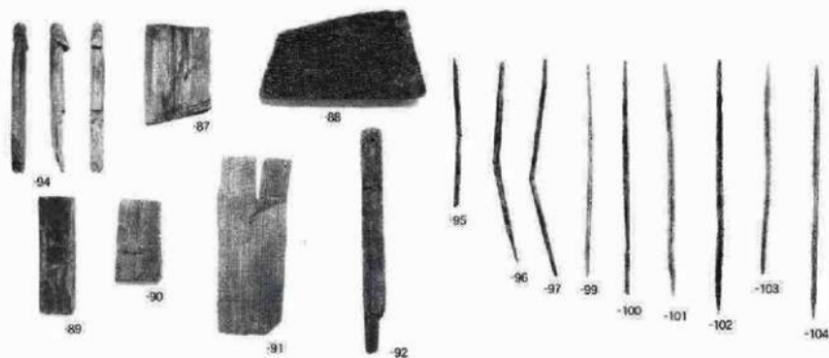
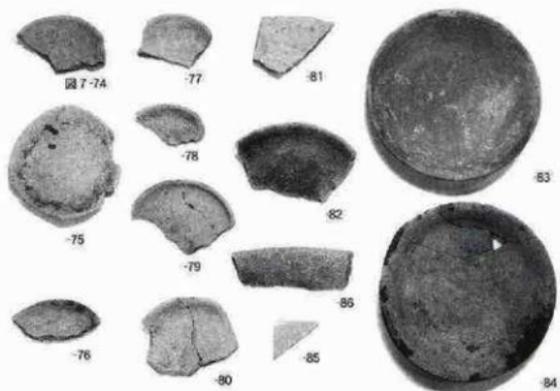


73

▲ 3面

▲ 3面まで

2面と3面までの遺物



▲ 3面土坑 5

3面の遺物



▲ 3面土坑 6



▲ 3面土坑 7



▲ 3面 Pit 2



図 9-118

-119



-123

-124



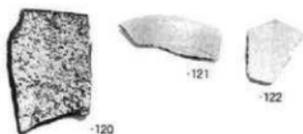
図 9-118

-119



-123

-124



-120

-121

-122



-121

-122



-125

-126

-127

-128



-129



-130



-131

▲ 側溝

3面遺構の遺物

おおくらばくふきたいせき
大倉幕府北遺跡 (No. 193)

西御門二丁目756番10地点

西御門二丁目756番6地点

例言

【調査区A】

1. 本書は、鎌倉市西御門二丁目756番10地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号は ON1 である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成16年6月17日～7月2日である。
3. 調査の体制は以下のとおりである。

調査の主体

鎌倉市教育委員会

調査担当

宮田真（日本考古学協会会員）

調査補助員

岩澤智和・倉片尚子

調査協力者

中須洋二・安達越郎・堀住役（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。

第1章 宮田真・第2章～第4章・編集 滝澤晶子

5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。

遺構図版 坂倉美恵子 遺構写真 滝澤晶子

遺物図版 宇賀神雅子・坂倉美恵子 遺物写真 滝澤晶子

【調査区B】

6. 本書は、鎌倉市西御門二丁目756番6地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号は ONA である。
7. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成16年10月7日から11月17日である。
8. 調査の体制は以下のとおりである。

調査の主体

鎌倉市教育委員会

調査担当

滝澤晶子（日本考古学協会会員）

調査補助員

安藤龍馬・倉方尚子・下江秀信

調査協力者

杉浦永章・藤枝正義・倉澤六郎・牛嶋道夫・宝珠山秀雄（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

9. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。

第1章 宮田真・第2章～第4章・編集 滝澤晶子

10. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。

遺構図版 坂倉美恵子 遺構写真 滝澤晶子

遺物図版 坂倉美恵子 遺物写真 滝澤晶子

【共通】

11. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/40・1/60（遺構図の水糸高は海拔高を示す）
遺物実測図 1/3・1/6
12. 実測図には次の記号が使用されている。
軸の限界線 ----- 調整の変化点 ----- 使用痕の範囲 <-----> 加工痕の範囲 <----->
攪乱の範囲 ----- 推定ライン ----- 調査限界ライン -----
13. 遺物寸法表：（ ）＝復元値・[]＝遺存値・単位は cm
14. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主に深く感謝の意を表す。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的背景	180
第2章 調査の概要	183
第3章 検出遺構と出土遺物	187
第1節 調査区A	188
第2節 調査区B	198
第4章 まとめ	219

図目次

図1 遺跡周辺図	181	図18 調査区B 2面遺構配置図	199
図2 遺跡位置図	183	図19 調査区B 溝1・土坑1	200
図3 調査区位置図・確認調査土層図	183	図20 調査区B 溝1・2面出土遺物	201
図4 グリッド配置図	185	図21 調査区B 3面遺構配置図	203
図5 調査区A 北壁土層図	185	図22 調査区B 溝状遺構1	204
図6 調査区B 北壁土層図	186	図23 調査区B 3面出土遺物	205
図7 調査区A 1面遺構配置図	187	図24 調査区B 4面遺構配置図	206
図8 調査区A 1面出土遺跡	188	図25 調査区B 土坑2	207
図9 調査区A 2面遺構配置図	189	図26 調査区B 4面出土遺物	208
図10 調査区A 2面出土遺物	189	図27 調査区B 5面遺構配置図	209
図11 調査区A 3面遺構配置図	190	図28 調査区B 土坑3・5・4	210
図12 調査区A 3面出土遺物(1)	192	図29 調査区B 土坑4, 5面出土遺物(1)	211
図13 調査区A 3面出土遺物(2)	193	図30 調査区B 5面出土遺物(2)	212
図14 調査区A 4面遺構配置図	194	図31 調査区B 5面出土遺物(3)	213
図15 調査区A 土坑2・4面、4面下出土遺物	195	図32 調査区B 6面遺構配置図	216
図16 調査区B 1面遺構配置図	197	図33 調査区B 6面出土遺物	218
図17 調査区B 1面出土遺物	198		

図版目次

図版1 調査区A 1面全景	220	調査区B I区4面全景	224
調査区A 1面全景	220	調査区B II区4面全景	224
調査区A 2面全景	220	図版6 調査区B I区5面全景	225
図版2 調査区A 3面 Pit 3	221	調査区B II区5面全景	225
調査区A 3面 Pit 7	221	調査区B I区トレンチ南壁	225
調査区A 3面 Pit 8	221	調査区B II区トレンチ	225
図版3 調査区A 3面全景	222	図版7 調査区B II区トレンチ	226
調査区A 4面全景	222	同上、南壁土層	226
調査区A北壁土層	222	調査区B南壁土層	226
図版4 調査区B I区1面全景	223	図版8 出土遺物(1)	227
調査区B II区1面全景	223	図版9 出土遺物(2)	228
調査区B I区2面全景	223	図版10 出土遺物(3)	229
調査区B II区2面全景	223	図版11 出土遺物(4)	230
図版5 調査区B I区3面全景	224	図版12 出土遺物(5)	231
調査区B II区3面全景	224		

第1章 遺跡の位置と歴史的背景

本調査地(図1-1)は神奈川県鎌倉市西御門二丁目756番10(調査区A)・西御門二丁目756番6(調査区B)に所在し、大蔵幕府北遺跡の範囲内に位置する。本調査地は鶴岡八幡宮を基点とすると境内地の東端部から北東に約500mの距離にあり、民家1軒と小路を隔てた南側には私立清泉女学院小学校がある。この清泉小学校の敷地は源頼朝の造営した大蔵幕府跡の遺跡指定範囲内に位置し、幕府全体の北東四半部分に推定される。調査地の字名「西御門」は幕府の門に由来する。

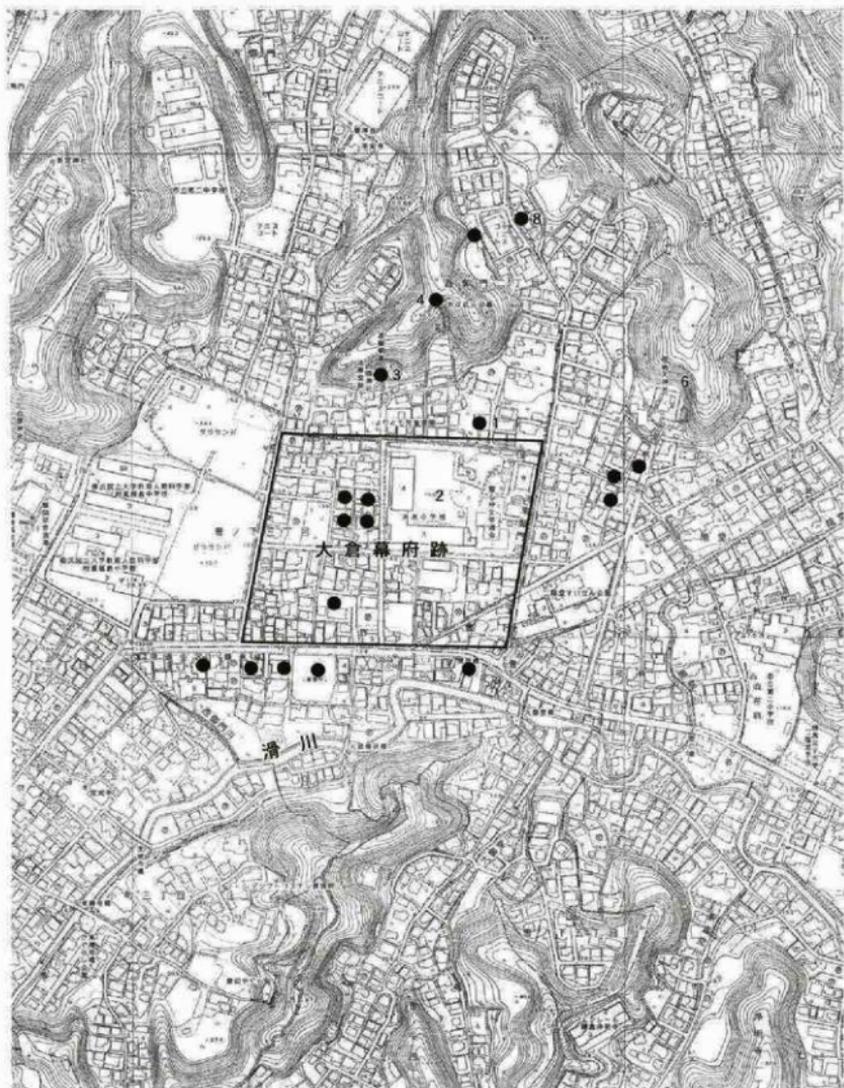
「大蔵幕府」(図1-2)は上述のとおり源頼朝が作った幕府であるが、当初は頼朝の父義朝の旧跡に邸を構えるつもりだったという。しかし彼地(現在の扇ガ谷)が手狭だったために急遽大蔵の地に変更したとのことである。義朝は臨済宗寿福寺のある谷に屋地を構えていたようである。治承四年(1180年)鎌倉に入った源頼朝はこの大蔵に御所の造営を始める。翌、養和元年六月(1181)新御所は完成し頼朝は移り住んだ。大蔵幕府は承久元年(1219)実朝が暗殺されるまでの39年間鎌倉の武家政治の舞台として機能した。

現在、大蔵幕府跡周辺には源頼朝墓(頼朝法華堂跡)、大江広元墓、北条義時法華堂跡、荏柄天神社等がある。頼朝墓(図1-3)は幕府跡地の中央部背後(北側)の山腹にあり、調査地からは北西約100mの距離に位置する。ここは頼朝が自仏堂を建立した地で、頼朝の死後は法華堂と呼ばれるようになった。現在見られる参道正面の石段脇の斜面地からは五輪塔文の軒丸瓦(鍔瓦)が出土しており、法華堂に屋根を葺かれていた物と推測される。宝治元年(1247)の宝治合戦に際してはこの法華堂で三浦一族が自害して亡んだ。近世の安永年間(1772~80)に、鶴岡荘藏院住持が(墓石とするために)石の層塔を大御堂から移したと伝えており、このころ既に堂宇は存在していないようだ。さらに遡る天文(1532~54)頃には、鶴岡相承院が法華堂を兼務するようになったことから、法華堂はかなり衰微していたようである。現在ある石塔は、近年無頼漢による破壊行為がありその後建て替えたものである。

大江広元墓(図1-4)は、頼朝墓の東側山腹の上方に位置しており、正面を安山岩の切り石で堂宇形にした横穴式(元はやぐらか)のものである。墓の前面(南側)下方の平場(図1-5)(北条義時法華堂跡の伝承地)では、平成17年4月18日~7月30日にかけて鎌倉市教育委員会によって発掘調査が実施された。調査の結果、この平場は谷を造成して作られたもので面積はおよそ600㎡を越える。造成時期は出土した瓦の形式編年から13世紀の第1四半期頃と考えられる。この平場からは、亀腹基壇の上に建つ方三間の礎石建ち瓦葺の堂宇建築と思われる建物が出発されており、義時の法華堂遺構と考えることも十分に可能であろう。伝承の信憑性の裏付として重要な発見と言えよう。今後の関連調査に期待したい。

荏柄天神社(図1-6)は調査地の東方約200mの距離にある。荏柄天神社は頼朝が大蔵幕府を造営した際に幕府の鬼門鎮守の社と定めため、以後、歴代将軍からの崇拝を受け続け故地を変えずに現在に至っている。

大蔵幕府跡及び周辺地域ではこれまでに多くの地点で発掘調査が実施されてきた。しかし幕府の敷地範囲比定地内においては、発掘調査は実施されているものの、これまで個人住宅建て替えに伴う小規模調査がほとんど全てで、なかなか建物構成等の幕府全体像把握に近づくことはできない。それでもこれまでの調査から、当該遺跡付近では、中世文化層の堆積する厚さは2mを越え中世生活面は十数枚に及ぶ地点があることが解った。幕府創建期の地面に達するには現在の地表から3m前後も掘り下げねばならないことになる。もしもいつの日か大規模な調査の実施が現実となるならば、膨大な成果を得ることは確実と思われる。しかしそれには莫大な費用と日数が必要となろう。



1. 本調査地点 2. 私立清泉小学校 3. 源頼朝墓(法華堂跡) 4. 大江広元墓 5. 北条義時法華堂跡
 6. 荏柄天神社 7. 滑川北岸地域調査地点群 8. 大倉幕府北遺跡(西御門二丁目796番1外2筆)

図1 遺跡周辺図

幕府の南側周辺部では比較的規模の大きい調査が実施されている。県道を挟んだ南側の滑川との中間地域（図1-7地点群）では、集合住宅建設に伴う調査が多く行われており、密度の濃い中世遺構群が検出されており、さらにその下層から弥生中期（宮ノ台期）の集落が数地点で発見されている。

幕府の北方地域では、本調査地の北約200mの距離にある図1-8地点で、平成13年7月2日～同年8月17日にかけて宅地造成に伴う発掘調査が実施され、13世紀後半～15世紀初頭ころにかけての遺構群が検出された。この場所は東御門川に沿って北上する谷戸の市道沿いで東側に山を背負っている。山の中腹から裾にかけては現況で確認できる限りにおいて数段の平場が中世期造成されている。調査区は谷底に当たる最下段の平場とすぐ上段の平場に及んでおり、段上平場は鎌倉石切石を積み重ねた石垣によって地覆されており、同じく鎌倉石によって石段も作られていた。また最下段には現在の道路に沿うように堀状の溝が数次期に亘って検出された。この溝には若宮大路側溝と同じ構造の木製護岸が施されており、このような谷戸奥には奇異な印象を請ける。またこの溝からは三鱗文をあしらった銅製の鋳が出土している。この谷に関する伝承は現在に伝わらないが、往時の様相を復元するにはいま一度再考する必要がある。

<参考文献>

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第1分冊）205～309頁 大蔵幕府跡雪ノ下三丁目701番14』平成17年3月 鎌倉市教育委員会

『大蔵幕府北遺跡発掘調査報告書 鎌倉市西御門二丁目796番1外2筆』2002年6月 有限会社（現株式）博通

『北条義時法華堂跡確認調査報告書』平成17年11月 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 昭和51年5月 東京堂出版

『鎌倉の地名由来事典』三浦勝男編 2005年9月 東京堂出版

第2章 調査の概要



図2 遺跡位置図

1. 調査の経緯と経過

調査は隣り合う2地点で連続して実施された。本報告書では北地点を「調査区A」、南地点を「調査区B」として報告する。(図2・3・4参照)

【調査区A】

調査は鎌倉市西御門二丁目756番10地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成16年5月17日・18日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下90cm前後から中世包含層が確認された。

それを受け、平成16

年6月17日～7月

2日にわたって本

調査が実施された。

調査対象面積は13.

50m²である。資料

整理の際の遺跡の

略記号はONIである。

なお、遺物は

遺物整理箱4箱出

土した。

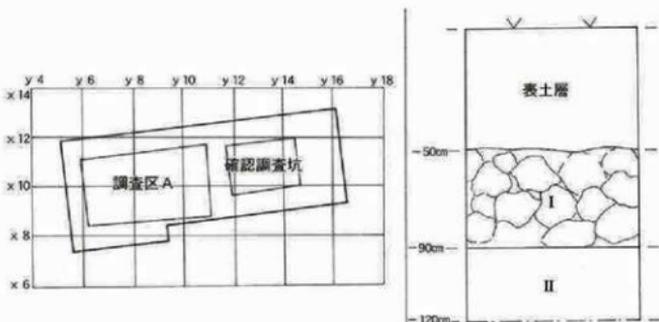


図3 調査区位置図・確認調査土層図

確認調査は現地表下120cmまで掘削して行われた。その結果、は以下の通り。

表土層：現地表下50cm。

I層：大型土丹塊による現代の埋立て。

II層：中世遺物包含層 灰青色粘土層：かわらけ片を多く含む。締り良好。

【調査区B】

調査は鎌倉市西御門二丁目756番6地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成16年5月17日・18日に鎌倉市教育委員会により隣接する土地で確認調査が実施され、その結果、現地表下90cm前後から中世包含層が確認された。それを受け、平成16年10月7日～11月17日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は35.00㎡である。調査は廃土の都合上東西2区画に分けて実施した。そのため、調査区中央付近に未調査の部分ができてしまった。資料整理の際の遺跡の略記号はONAである。なお、遺物は遺物整理箱9箱出土した。

調査経過

【調査区A】

平成16年6月16日 重機による表土掘削。

6月17日 人力による調査開始。第1面まで粗掘り。3級基準点移動。

6月18日 1面検出終了。全景撮影。2面まで粗掘り。調査区グリッド設定。

6月21日 2面検出作業。全景撮影。3面まで粗掘り。

6月23日 3面全景撮影。

6月24日 4面まで粗掘り。

6月29日 4面遺構検出作業。

6月30日 4面全景撮影。

6月2日 現地調査終了。

【調査区B】

平成16年10月6・7日 重機による表土掘削。

10月12・13日 人力による調査開始。台風22号の影響と湧水量が大量であったため水抜き作業

10月14日 引き続き水抜き。排水溝設置。人力による表土掘削。

10月15日 I区（西側）調査開始。1面検出作業。

10月18日 1面全景。2面まで掘り下げ。

10月20日 台風23号のため溜った水抜き作業。

10月21日 2面全景。3面まで掘り下げ。

10月22日 3面全景。4面まで掘り下げ。

10月27日 4面全景。5面まで掘り下げ。

10月29日 5面全景。北壁土層記録作業。

11月1日 5面下トレンチ調査地山まで。

11月2日 II区（東側）調査開始。重機による表土掘削。

11月4日 1面まで掘り下げ。

11月5日 1面全景。2面まで掘り下げ。溝1検出。

11月8日 2面全景。

11月9日 3面全景。

11月11日 4面全景。

- 11月15日 5面全景。
 11月16日 5面下トレンチ調査。
 11月17日 調査終了。
 撤収。

2. 調査区の位置とグリッド配置(図4)

調査区は確認調査で掘削した部分を除いて図2・3に示したように設定された。位置は北緯35度19分32秒、東経138度13分44秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。「調査区A」と「調査区B」共通のグリッドを設定している。国土座標〔旧日本測地系〕X-75140ライン・Y-24350ライン=〔世界測地系〕X-74786.665

ライン・Y-24631.940ラインと合成した。グリッドと国土座標の関係は以下の通りである。

A地点:グリッド(x4.713, y12.068) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75135.544, Y-24350.000) = 国土座標〔世界測地系〕(x-74782.209, y-24631.940)

B地点:グリッド(x-0.093, y12.363) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75140.363, Y-24350.000) = 国土座標〔世界測地系〕(x-74787.028, y-24631.940)

C地点:グリッド(x0.245, y11.875) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75140.000, Y-24350.457) = 国土座標〔世界測地系〕(x-74786.665, y-24632.397)

D地点:グリッド(x0.521, y16.437) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75140.000, Y-24345.885) = 国土座標〔世界測地系〕(x-74786.665, y-24627.825)

グリッドx軸は北から3度東に傾いている。正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層(図5・6)

【調査区A】(図5)

基本土層は調査区北壁で記録し、その測点は図12に示してある。GL-230cm(海拔11.8m)以下は崩落の危険のため未調査である。

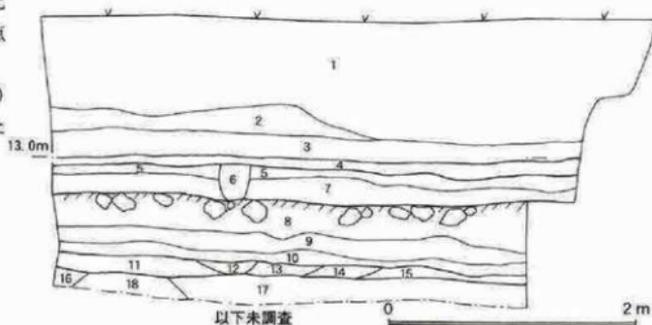


図5 調査区A 北壁土層図

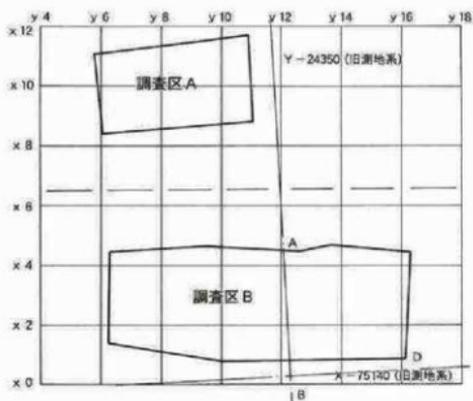


図4 グリッド配置図

番号	色調	土質	内容	粘性	縮り	備考
1	—	—	表土層	強い	良好	
2	灰褐色	粘質土	かわらけ片・0.1~3cm大の土丹(微量)	強い	強固	
3	灰褐色	粘質土	かわらけ片・0.1~1cm大の土丹(少)・炭化物	強い	良好	
4	—	土丹地業層	0.1~4cm大の土丹地業・かわらけ片(とても多い)・炭化物・灰褐色粘質土	あり	強い	1面
5	—	土丹地業層	0.1~10cm大の土丹地業・かわらけ片・炭化物・暗茶褐色粘質土	あり	よい	2面
6	暗茶褐色	粘質土	20cm大の鎌倉石・かわらけ片・炭化物	あり	よい	2面Pit覆土
7	暗茶褐色	粘質土	0.1~2cm大の土丹(少)・かわらけ片・炭化物	あり	よい	
8	—	土丹地業層	0.1~20cm大の土丹地業・かわらけ片・炭化物・木片・暗茶褐色粘質土	あり	よい	3面
9	灰褐色	粘質土	0.1~5cm大の土丹(やや多)・かわらけ片・炭化物	あり	よい	
10	灰褐色	粘質土	0.1~2cm大の土丹(多)・かわらけ片・炭化物・貝砂(少)	あり	やや弱い	
11	暗灰色	粘質土	0.1~2cm大の土丹(少)・貝殻細片(少)	あり	やや縮る	4面
12	黒色	粘土	かわらけ細片・貝殻細片(少)	あり	強固	
13	暗灰色	粘質土	1cm大の土丹(少)・かわらけ片・貝殻細片(少)	あり	やや縮る	
14	暗灰色	粘土	12層に似るが土丹がやや多い	—	—	
15	暗灰色	粘質土	0.1~3cm大の土丹(やや多)・かわらけ片・炭化物・木片	あり	やや縮る	4面
16	暗灰色	粘質土	11層に似るが土丹・貝殻細片がやや多い	—	—	
17	暗灰色	粘質土	0.1~2cm大の土丹(多)・かわらけ片・炭化物・木片	あり	良好	5面?
18	—	土丹層	5~20cm大の土丹層	—	—	

調査区A 北壁土層注記表

【調査区B】(図6)

基本土層は調査区北壁で記録し、その測点は図27に示してある。GL-210cm(海拔11.9m)以下は崩落の危険のため未調査である。

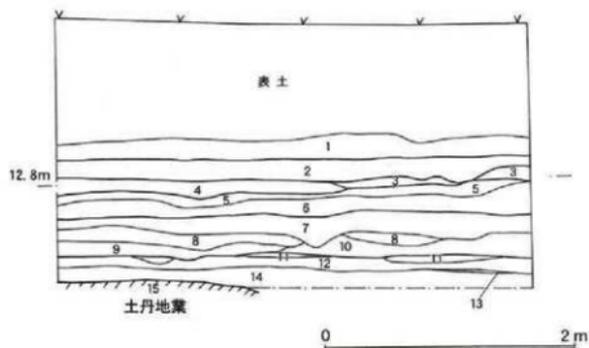


図6 調査区B 北壁土層図

番号	色調	土質	内容	粘性	締り	備考
1	灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・3cm大の土丹	あり	よい	
2	灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・3~5cm大の土丹	あり	よい	1面
3	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・3~5cm大の土丹	あり	弱い	2面
4	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・3~5cm大の土丹	あり	やや弱い	2面
5	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・1~3cm大の土丹(多)・15cm大の土丹	あり	よい	3面
6	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片(多)・炭化物(多)・1~3cm大の土丹(多)・15cm大の土丹	あり	やや弱い	
7	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・1~5cm大の土丹・上面に薄い地葉	あり	やや弱い	4面
8	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・1~5cm大の土丹・暗茶褐色粘質土ブロック(少)	あり	やや弱い	
9	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・1~5cm大の土丹・暗茶褐色粘質土ブロック(少)	あり	やや弱い	
10	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・1~5cm大の土丹・暗茶褐色粘質土ブロック(少)	あり	よい	
11	暗褐色	砂質土	貝砂(部)	やや弱い	やや弱い	5面
12	暗灰褐色	粘土	炭化物・1~10cm大の土丹・貝砂	あり	よい	5面
13	-	炭化物層	-	-	-	
14	暗灰色	粘質土	1~2cm大の土丹・貝砂(少)	あり	よい	
15	-	土丹地葉層	薄い土丹地葉	-	よい	6面

調査区B 北壁土層注記表

第3章 検出遺構と出土遺物

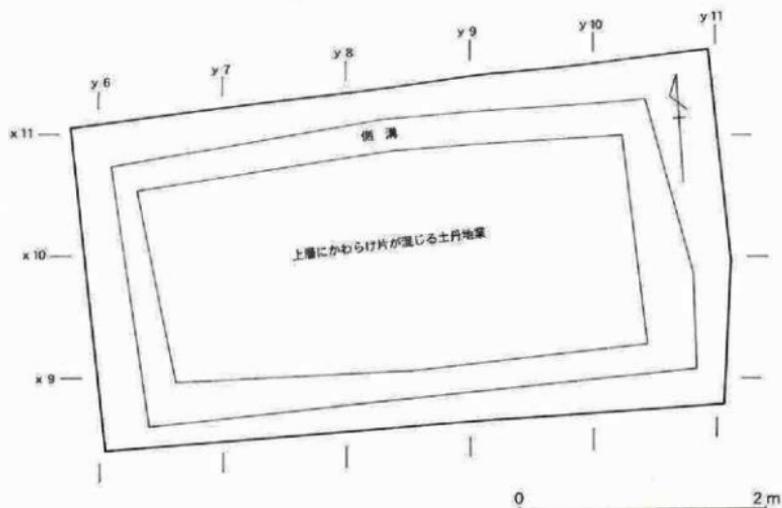


図7 調査区A 1面遺構配置図

第1節 調査区A

調査区Aからは合計4面の生活面が確認された。下層に調査が進むに従って、崩落の危険等を考慮して調査区が若干狭まった。また、さらに下層に面がある可能性があったが、現地表下200cmを超え、崩落の危険が増したため、地山まで検出することはできなかった。

第1面(図7)

第1面は現地表下115cm、海拔12.95m前後に検出された平坦で良好な面である。面上層はかわらけ片を混ぜて地業している。遺構は検出されなかった。

出土遺物(図8)

1面覆土出土遺物である。1は瀬戸の行平鍋。注ぎ口が一部残る。口径は復元で16.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、硬質。透明度・光沢ともに良い灰釉がやや厚くかけられている。2・3は常滑の甕の底部片。3はこね鉢に転用して内面は磨滅している。胎土は茶褐色～暗灰色を呈し、白色石粒を含み粗い。4は備前のすり鉢。胎土は灰色を、器表は赤茶褐色を呈す。5は研磨痕のある常滑片。この他に馬の歯が2個出土している。

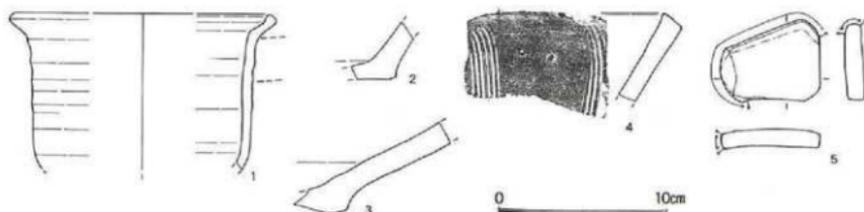


図8 調査区A 1面出土遺跡

第2面(図9)

第2面は1面下15cm前後、海拔12.8m付近に検出された。土丹地業面である。10cm前後に厚さで0.1～10cm大の土丹で地業している。調査区内では遺構は検出されなかったが、調査区北壁断面ではPitが1口確認されている。

出土遺物(図10)

図10は2面出土遺物。1～12は轆轤成形のかわらけ。1～6は大皿、7・8は中皿、9～12は小皿。6～8は薄手丸深タイプ。胎土は淡橙色(1～11)、肌色(12)を呈し、微砂を含み粉質。7・12は灯

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
10	1	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.8	3.8
10	2	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.0)	3.5
10	3	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.0)	3.7
10	4	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	(7.4)	3.6
10	5	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	(7.0)	3.0
10	6	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(15.0)	(9.0)	3.6
10	7	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	(7.6)	3.0
10	8	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(10.8)	(6.7)	3.0
10	9	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(6.6)	(4.8)	1.4
10	10	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.6)	1.6
10	11	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.6
10	12	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(4.4)	2.3
10	15	2面	—	上野産	中紙	[2.0]	3.4	1.0

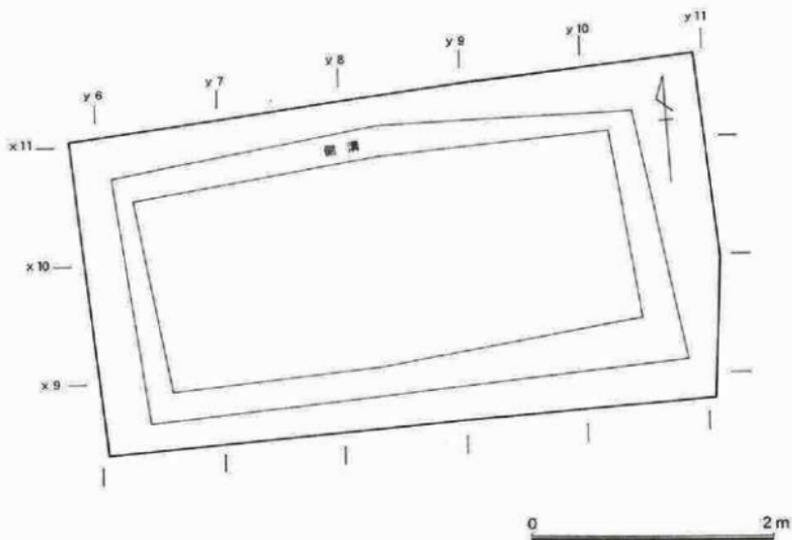


図9 調査区A 2面遺構配置図

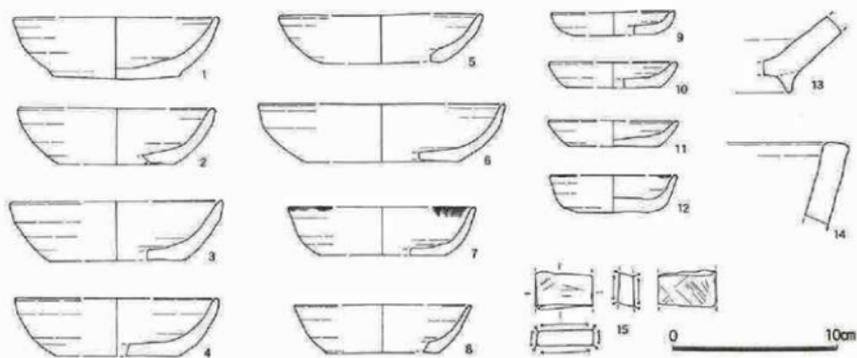


図10 調査区A 2面出土遺物

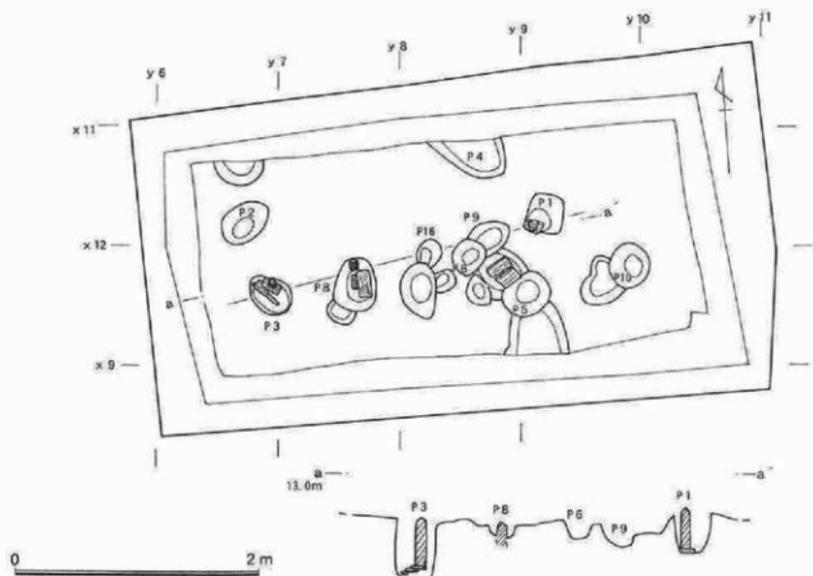


図11 調査区A 3面遺構配置図

明皿、13は山茶碗窯系こね鉢。内面は磨滅している。胎土は灰色を呈す。14は瓦質の手摺り。15は上野産の中砥。馬の歯が1個出土している。

第3面(図11)

第3面は2面下20cm前後、海拔12.6m付近に検出された。大型の土丹でしっかりと地業されている。Pit18口が検出され、内6口が同一軸線上に検出された。

柱穴列1(図11)

グリッド(x10, y6~9)付近、海拔12.6m前後に検出された。Pit3・8・16・9・1の5口のPitから成る東西方向の柱穴列である。内、Pit3・8・1には礎板および柱が遺存していた。Pit間の距離は芯々で西から70cm-60cm-50cm-40cmを測る。柱間にばらつきがあり、建物ではなく、塀や櫓などの施設であろう。Pit1は礎板の上に柱が遺存していた。Pit8は礎板2枚と柱が1本検出されたが、礎板と柱はずれて検出された。Pit3は3枚の礎板の上に柱が乗って検出された。東西軸線方向はW-12°-Sである。

出土遺物(図12・13)

図12-1~4は柱穴列1出土遺物である。1・2はPit3から出土。1は轆轤成形のかわらけの小皿。胎土は淡橙色を呈し、粉質。2は平瓦。表面には縄目がはっきりと残っている。3はPit8出土の白磁碗の底部片。釉調は灰味白色を呈し、光沢・透明度ともにやや劣る。素地は灰白色を呈し、緻密。4はPit9出土のかわらけの小皿。轆轤成形。胎土は肌色を呈し、粉質。

図12-5~43・図13は3面出土遺物である。図12-5~29は轆轤成形のかわらけ。5~15は大皿、16~18は中皿、19~29は小皿である。5~9・16~18は薄手丸深タイプ。胎土は、淡橙色(5・7・8・12・13・18・19・22・26・27)、橙色(6・10・11・20・21・23~25)、肌色(9・14~17・28・29)を呈し、

5・6・16～18は微砂を多く含み、ざらつき、その他は粉質である。19・19・20・22・26・27は灯明皿である。19は外底中央に穿孔しようとした加工痕がある。図12-30～37は船載品。30～33は青磁。30～32は蓮弁文碗、33は百合口碗である。30の内底見込みには蓮華文が押されている。釉調は30・31は青緑色、32・33は緑味青色を呈し、透明度はやや低く、31は光沢が良い。素地は灰白色を呈し、緻密。34～36は白磁の口兀皿。釉調は灰白色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は灰白色を呈し、緻密。37は青白磁の碗。釉調は水青色を呈し、透明度・光沢ともに良い。外底部は露胎。素地は灰白色を呈し、緻密。図12-38は山茶碗粟系こね鉢。底径は復元で12.0cmを測る。内面は磨滅している。重ね焼き痕が残る。胎土は暗灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。図12-39～43・図13-1・2は常滑である。39～43は甕。口径は復元で、39が44.0cm、40が19.0cmを測る。42・43は別個体の胴部片で、菊花文の叩き目が施されている。図13-1・2はこね鉢。口径は復元で31.0cmを測る。胎土は39～43が黒灰色、1・2は橙色を呈し、白色微粒をやや多く含み、硬質。器表は41・42は自然釉が白濁し、1・2は赤茶褐色を呈す。図13-3は亀山の甕の胴部片。外面は細かい格子目叩き、内面は篋削り調整されている。胎土は暗灰色と白色の粘土がマーブル状を呈している。図13-4は土製の香炉。復元で、口径は16.0cm、底径は13.2cm、器高は8.4cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂をやや多く含む。かわらけの土と同じである。図13-5は鳴滝産の仕上砥。図13-6・7は滑石製品。西彼作産。6は鍋。口径は復元で22.0cmを測る。外面は煤がびっしりと付着している。7は鍋転用品。用途は不明。図13-8～13は瓦。8は

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
12	1	3面	柱穴列1	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(5.4)	1.5
12	2	3面	柱穴列1	平瓦	網目	[15.0]	[7.8]	—
12	3	3面	柱穴列1	白磁	碗	—	(5.0)	—
12	4	3面	柱穴列1	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	(6.0)	1.5
12	5	3面	—	かわらけ	轆轤成形	13.8	8.2	3.7
12	6	3面	—	かわらけ	轆轤成形	13.4	8.0	3.2
12	7	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(7.8)	3.2
12	8	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.4)	3.3
12	9	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.4)	3.5
12	10	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(6.4)	3.2
12	11	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	(7.0)	3.3
12	12	3面	—	かわらけ	轆轤成形	12.2	7.9	3.3
12	13	3面	—	かわらけ	轆轤成形	12.1	7.8	2.9
12	14	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	3.2
12	15	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	(7.0)	3.2
12	16	3面	—	かわらけ	轆轤成形	11.5	6.6	3.4
12	17	3面	—	かわらけ	轆轤成形	12.0	7.5	2.9
12	18	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	6.0	3.1
12	19	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.2)	1.7
12	20	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.0)	1.5
12	21	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.0)	1.4
12	22	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.6)	1.5
12	23	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.3)	1.9
12	24	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.2)	1.5
12	25	3面	—	かわらけ	轆轤成形	7.2	5.2	1.6
12	26	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(4.8)	1.5
12	27	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.0)	1.5
12	28	3面	—	かわらけ	轆轤成形	7.6	4.7	1.6
12	29	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.8	1.6
12	30	3面	—	青磁	蓮弁文碗	—	(5.6)	—
12	37	3面	—	青白磁	碗	—	(6.0)	—
12	38	3面	—	山茶碗粟系	こね鉢	—	(12.0)	—
12	39	3面	—	常滑	甕	(44.0)	—	—
12	40	3面	—	常滑	甕	(19.0)	—	—

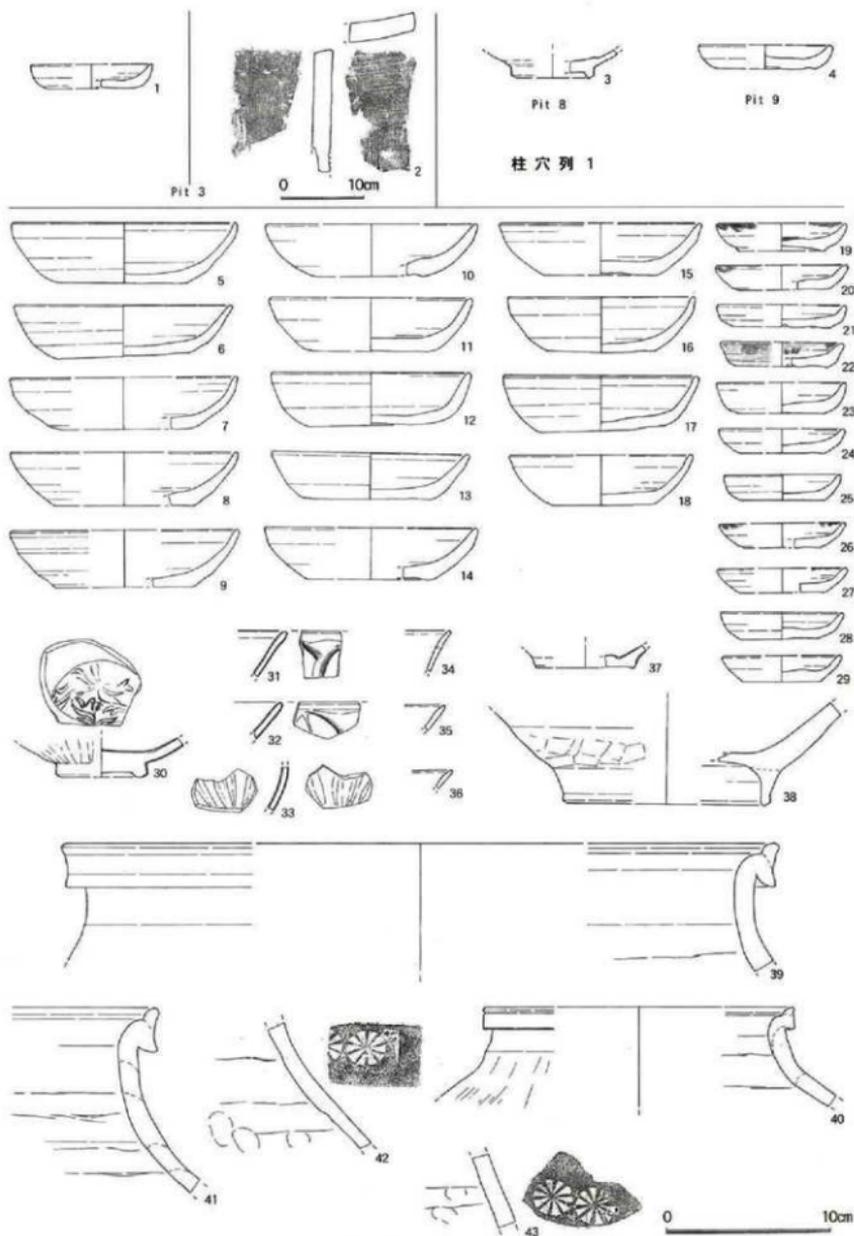


図12 調査区A 3面出土遺物 (1)

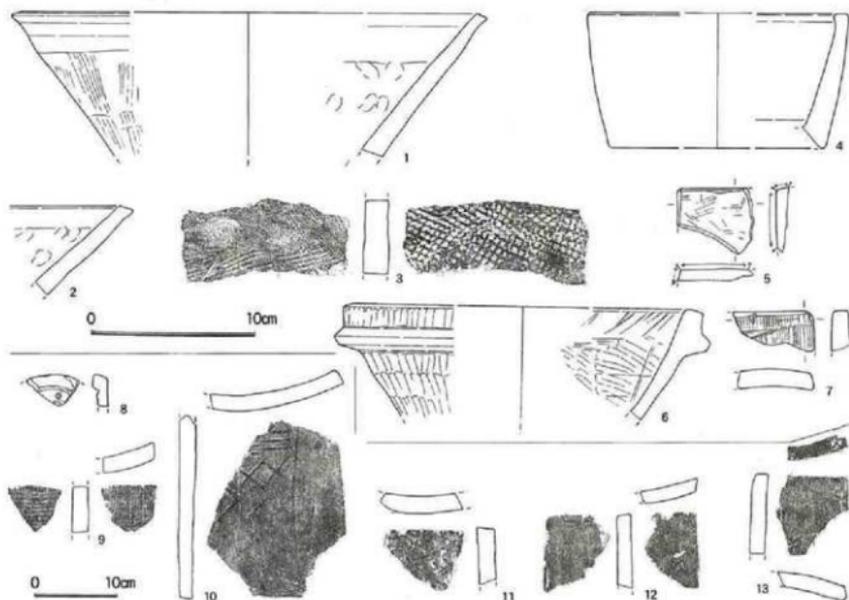


図13 調査区A 3面出土遺物 (2)

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
13	1	3面	—	常滑	こね鉢	(31.0)	—	—
13	3	3面	—	土製品	香炉	(16.0)	(13.2)	8.4
13	5	3面	—	鳴滝産	仕上砥	[3.0]	[4.2]	[0.7]
13	6	3面	—	西彼杵産滑石	鍋	(22.0)	—	—
13	7	3面	—	西彼杵産滑石	銅転用品	[2.4]	[4.9]	1.1
13	9	3面	—	平瓦	縄目	[5.5]	[6.2]	—
13	10	3面	—	平瓦	格子叩き	[22.0]	[16.3]	5.1
13	11	3面	—	平瓦	格子叩き	[7.0]	[8.5]	—
13	12	3面	—	平瓦	格子叩き	[9.2]	[7.0]	—
13	13	3面	—	平瓦	—	[9.8]	[8.5]	—

軒丸瓦。文様はおそらく巴連珠文。9～13は平瓦。凸面は9は縄目、10～12は格子叩き。13は側面にスタンプで印が付けられている。

第4面 (図14)

第4面は3面下50cm前後、海拔12.1m付近に検出された。土坑1基・Pit14口が検出された。Pitは礎板を伴うものがいくつかあったが、並びをつかむことはできなかった。また、Pit14と土坑2覆土から検出された礎板は芯々で2mの距離に位置し、礎板の向きも同じであることから、建物等の一部である可能性もあるが、詳細は不明である。

土坑2 (図14)

土坑2はグリッド(x11, y7)付近、海拔12.1m前後に検出された。南部は調査区外。平面形はお

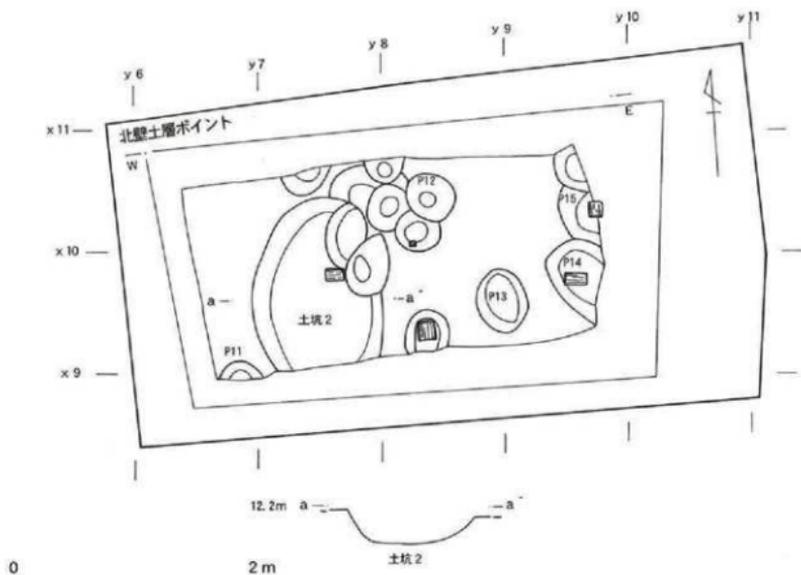


図14 調査区A 4面遺構配置図

そらく南北に長軸を持つ楕円形を呈し、東西幅は106cm前後を測る。深さは検出面から30cm前後である。北東部はP11や礎板と切り合っている。

出土遺物(図15-1~31)

図15-1~3は土坑2出土のかわらけである。1・2は手づくね。3は轆轤成形。1・2の胎土は淡橙色を呈し、粉質。1の器表には煤が付着している。3は口径が11.6cmと小振りで、中皿である。1・2とは年代観が合わない。小破片でもあり、上層の掘り残しの混入品である可能性が高い。この他にアカニシの貝殻が1個出土した。

図15-4~31は4面出土遺物である。4~16はかわらけ。4~10は手づくね。4~8は体部中央、指頭痕と指ナデの境に強い稜線を持ち、上位は外反して立ち上がる。9・10の稜線は然程くっきりとはせず、器壁は外に開かず上方に立ち上がる。胎土は4~7・10が肌色、8は橙色、9は淡橙色を呈し、粉質。4の器表には煤が付着している。11~16は轆轤成形。11は大皿で、器厚が厚い。12~16は小皿。12~14は寸法が大きめで、器壁中位で角度を変えて立ち上がる。内底面は波打つように強く撫でられている。15・16は器壁が直線的に立ち上がって、側面観は逆台形を呈す。胎土は11・15・16は淡橙色、12~14は肌色を呈し、15・16は微砂を多く含み、その他は粉質である。13は灯明皿。17~21は舶載品。17・18は青磁劃花文碗。19は青磁蓮弁文碗。軸調は17・19は青緑色を呈し、18は灰緑色を呈す。透明度・光沢ともに良い。素地は灰白色を呈し、緻密。20は青白磁の印花文碗。軸調は水青色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は白色を呈し、緻密。内面には雷門と草花文が施されている。21は磁州窯系の盤。白化粧土を掻き落とし、唐草文様を描き出している。素地は灰色を呈し、硬質。軸調は透明。外面は露胎で、肌荒れし暗褐色を呈す。22は常滑の甕の底部片。23~28は瓦。23~25は丸瓦。凸面には縄目がみられる。26~28は平瓦。凸面は26が縄目、27・28は格子叩き目。胎土は23~25が黒灰色、26は灰褐色、

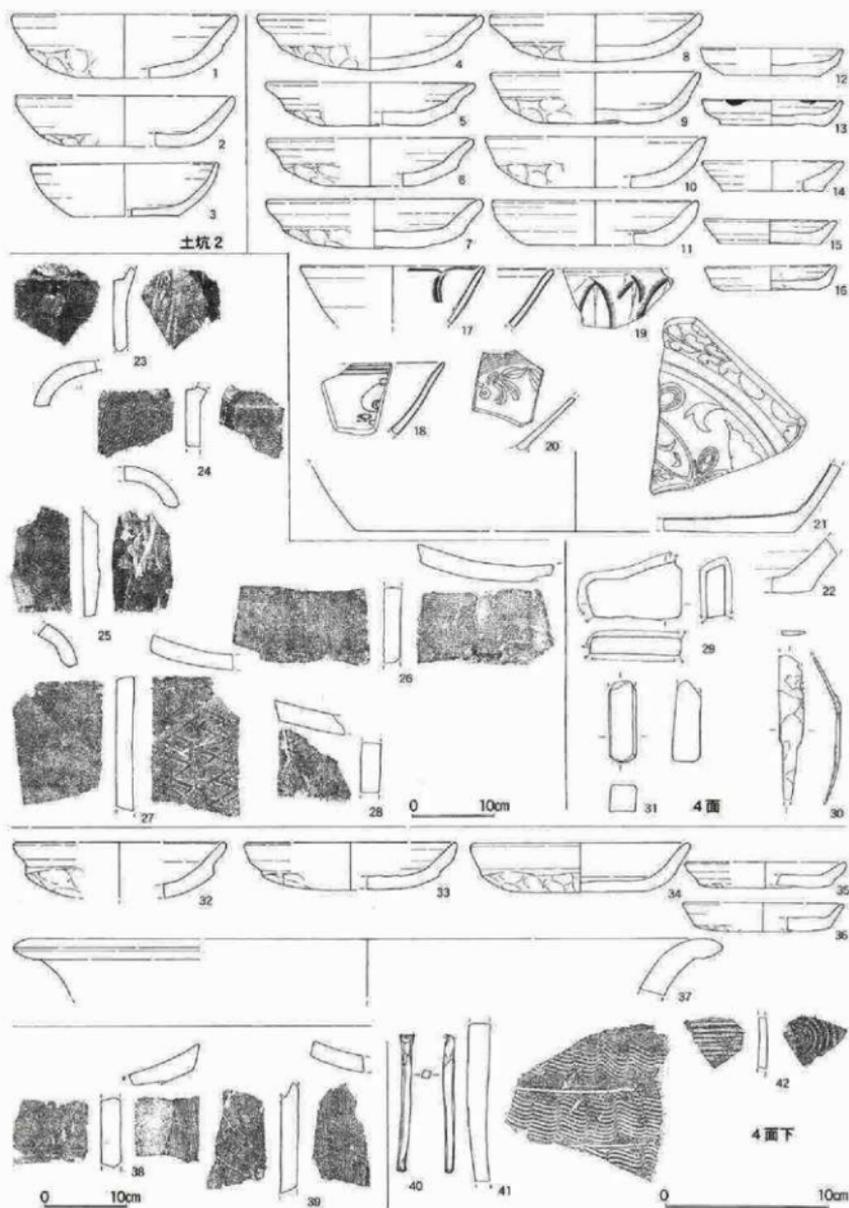


图15 调查区A 土坑2·4面·4面下出土遗物

27は灰白色と黒灰色の2層、28が灰白色を呈す。29は研磨痕のある常滑片。30は鉄製の刀子。31は木製品。用途は不明だが、表面に黒漆が塗られている。

今回の調査では4面下は地表から2m以上の掘削となり、崩落の危険があるため調査できなかった。しかし、4面調査時に排水溝等の設置に伴い4面下からの遺物が数点出土しているのので、ここに報告する。図15-32~42は4面下出土遺物である。32~36は手づくねのかわらけである。32・33は器壁中に強い稜線を持ち、そこから外反して立ち上がる。34は然程稜は強く出ない。35・36は底がほぼ平らである。37は渥美の甕の口縁部片。38・39は平瓦。凸面には縄目。40は鉄製釘。41・42は須惠。41は甕の胴部片。外面には櫛掻で波文が付けられている。胎土は黒灰色を呈し、比較のきめが細かく、緻密。42の

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
15	1	4面	土坑2	かわらけ	手づくね	(14.0)	—	4.0
15	2	4面	土坑2	かわらけ	手づくね	(13.0)	—	3.2
15	3	4面	土坑2	かわらけ	轆轤成形	(11.6)	(6.4)	3.3
15	4	4面	—	かわらけ	手づくね	(14.0)	—	3.5
15	5	4面	—	かわらけ	手づくね	(13.0)	—	2.7
15	6	4面	—	かわらけ	手づくね	(12.8)	—	3.0
15	7	4面	—	かわらけ	手づくね	(13.4)	—	3.1
15	8	4面	—	かわらけ	手づくね	(13.0)	—	3.0
15	9	4面	—	かわらけ	手づくね	(13.0)	—	3.2
15	10	4面	—	かわらけ	手づくね	(13.6)	—	3.2
15	11	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	(8.4)	2.8
15	12	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	(6.0)	1.7
15	13	4面	—	かわらけ	轆轤成形	8.8	6.4	1.6
15	14	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	(6.2)	1.9
15	15	4面	—	かわらけ	轆轤成形	8.2	6.1	1.6
15	16	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(6.0)	1.5
15	17	4面	—	青磁	刺花文碗	(11.4)	—	—
15	21	4面	—	磁州窯系	盃	—	(27.0)	—
15	23	4面	—	丸瓦	縄目	(10.0)	(7.6)	5.7
15	24	4面	—	丸瓦	縄目	(7.5)	(6.7)	—
15	25	4面	—	丸瓦	縄目	(13.1)	(4.8)	—
15	26	4面	—	平瓦	縄目	(9.3)	(16.5)	4.5
15	27	4面	—	平瓦	格子叩き	(16.8)	(10.1)	3.9
15	28	4面	—	平瓦	格子叩き	(6.4)	(8.3)	—
15	29	4面	—	常滑	研磨痕あり	3.5	5.9	1.1
15	30	4面	—	鉄製品	刀子	(9.1)	1.4	0.3
15	31	4面	—	木製品	用途不明	(5.1)	1.1	1.7
15	32	4面下	—	かわらけ	手づくね	(13.2)	—	—
15	33	4面下	—	かわらけ	手づくね	(13.2)	—	3.0
15	34	4面下	—	かわらけ	手づくね	13.6	—	3.1
15	35	4面下	—	かわらけ	手づくね	(10.0)	—	1.6
15	36	4面下	—	かわらけ	手づくね	(10.0)	—	1.8
15	37	4面下	—	渥美	甕	(43.6)	—	—
15	38	4面下	—	平瓦	縄目	(7.8)	(8.0)	—
15	39	4面下	—	平瓦	縄目	(12.2)	(6.3)	—
15	40	4面下	—	鉄製品	釘	8.6	0.5	0.5

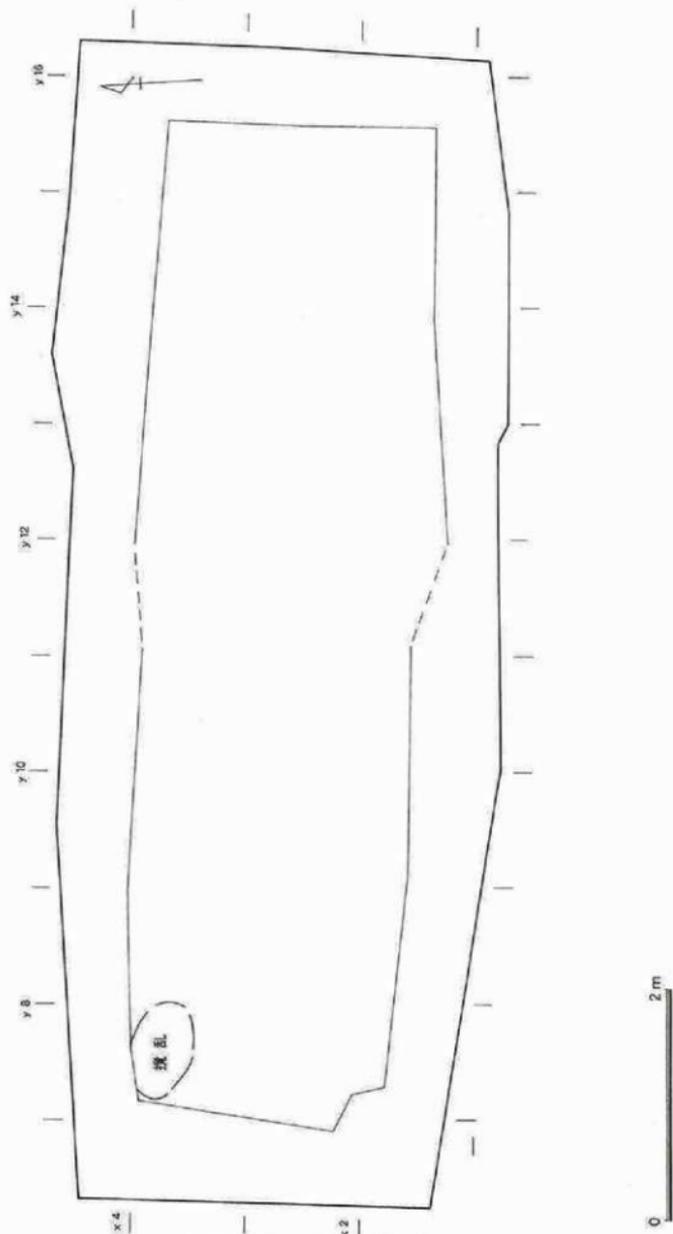


图16 调查区B-1面遺構配置図

内面には青海波文。胎土は灰色を呈し、比較的緻密。この他に、ハマグリ貝殻1個、動物の四肢骨1個が出土した。

第2節 調査区B

調査区Bからは合計6面の生活面が確認された。下層に調査が進むに従って、崩落の危険等を考慮して調査区が若干狭まった。また、さらに下層に面がある可能性があったが、現地表下210cmを超え、崩落の危険が増したため、5面以下地山まではトレンチを2ヶ所設定して調査を行った。

第1面（図16）

第1面は現地表下120cm、海拔13.0m前後に検出された平坦で良好な面である。面上層にはかわらけ片を混ぜて地業している。遺構は検出されなかった。

出土遺物（図17）

1面覆土出土遺物である。1・2は轆轤成形のかわらけ。復元で各々、口径は11.8cm・7.4cm、底径は6.0cm・6.0cm、器高は2.8cm・1.6cmを測る。胎土は橙色を呈し、粉質。3は山茶碗もしくは輪花型の入子。胎土は灰白色を呈し、比較的緻密。4～6は常滑。4は甕。口径は復元で39.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、硬質。器表は暗褐色を呈す。また、内面は爆ぜている。5はこね鉢。口径は復元で28.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、硬質。器表は赤茶褐色を呈し、外面の一部と内面の大部分が剥げて地が見えている。6は甕転用こね鉢である。底径は復元で16.6cmを測る。内底部付近が磨滅してい

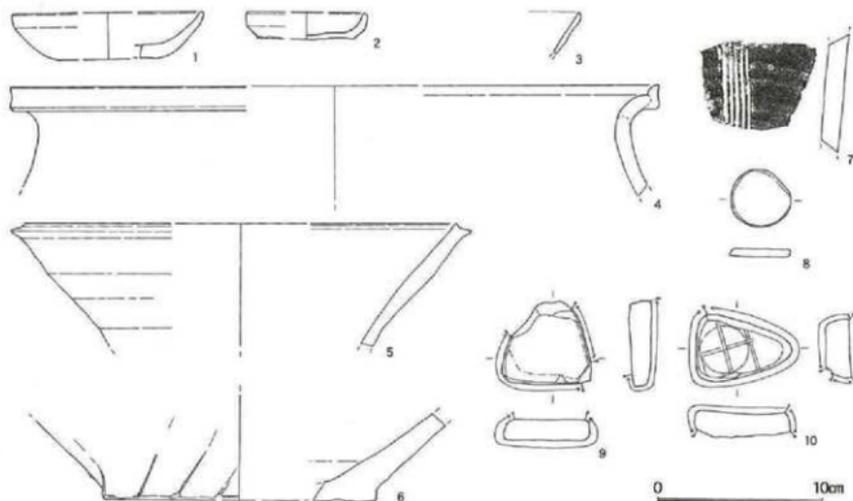


図17 調査区B 1面出土遺物

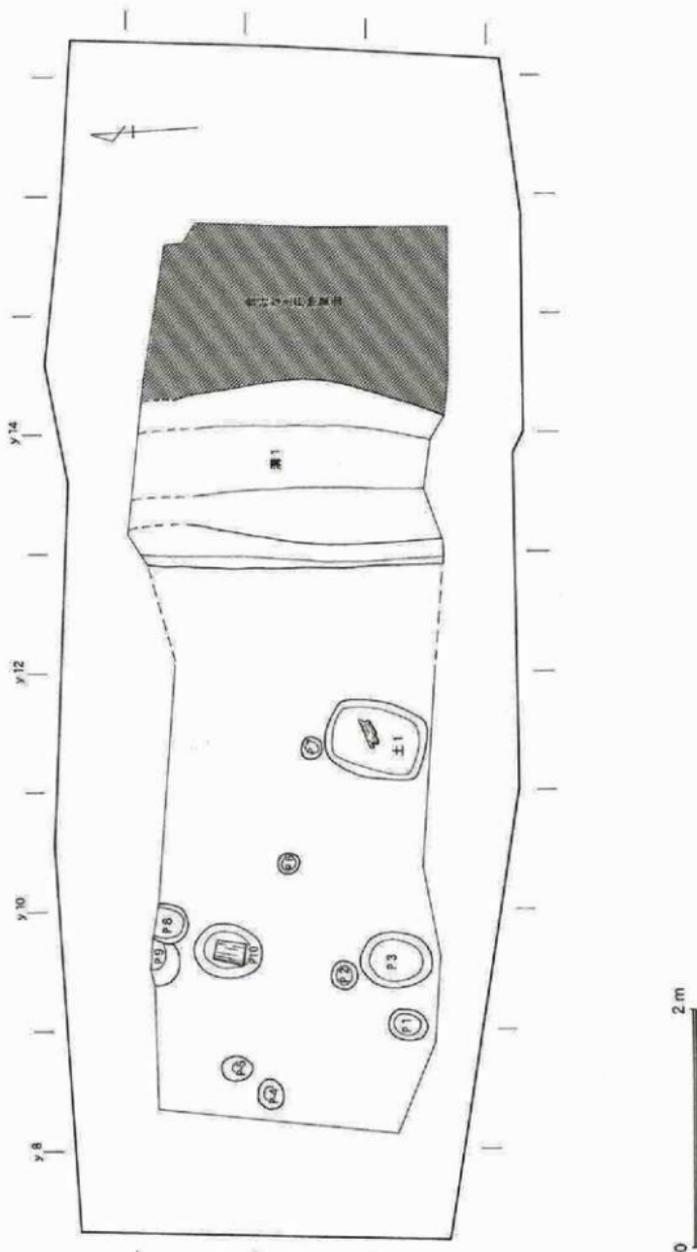


図18 調査区B 2面透視配置図

る。胎土は青灰色を呈し、硬質。6は偏前のすり鉢。胎土は暗紫色を呈し、白色粒を多く含む。器表は青灰色を呈す。8はかわらけ転用円板。9・10は研磨痕のある常滑片。10は叩き目がある部分。

第2面(図18)

第2面は1面下10~30cm前後、海拔12.9~12.7m付近に検出された。土地面業面である。南北方向の溝が検出され、その東岸は西岸より20cm程度高い。また、東部は良好な地業が施され、西部はやや大きめの土地面業が施されている。溝1条・土坑1基・Pi110口が検出されている。Pi11は3と10が似た形状であるが、2口のみ検出なので建物等の並びなのかは確定できない。いずれも平面形は南北に長軸を持つ楕円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。Pi110の底部には礎板が遺存していた。

溝1(図18・19)

溝1はグリッド(x4, y12)付近、海拔12.9m前後に検出された南北方向の溝である。上端幅は140cm、西岸はI区調査区の側溝で消失してしまった。深さは検出面から60cm前後を測り、断面形は逆台形を呈す。南北軸線方向はN-6°-Eである。覆土の土層注記は以下の通り。

- 1層: 暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・0.5~1.5cm大の土丹粒を含む。粘性あり。締り良い。
- 2層: 暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・土丹粒(いずれも少)。締りやや良い。
- 3層: 暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・土丹粒(いずれも多)・3cm大の土丹。
- 4層: 暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・土丹粒(いずれも多)。

土坑1(図18・19)

土坑1はグリッド(x3, y10)付近、海拔12.8m前後に検出された。平面形は隅丸方形を呈し、南北85cm、東西64cm、深さは検出面から16cm前後を測る。底部中央付近には板が遺存していた。

出土遺物(図20)

図20-1~8は溝1出土遺物。1・2は轆轤成形のかわらけの小皿。胎土は橙色を呈し、粉質。3は

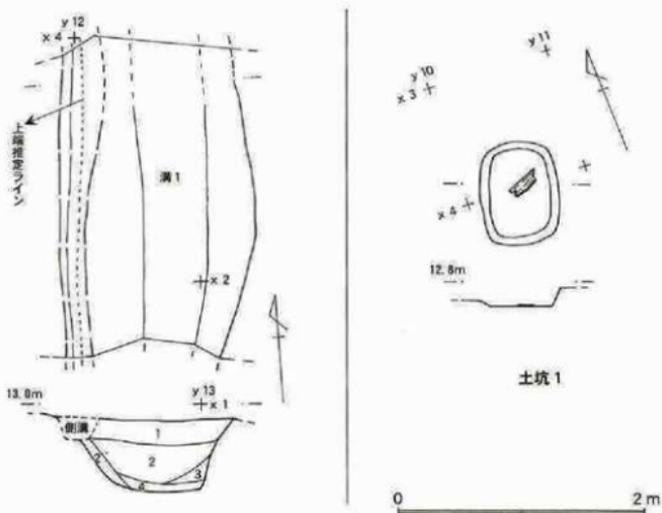


図19 調査区B 溝1・土坑1

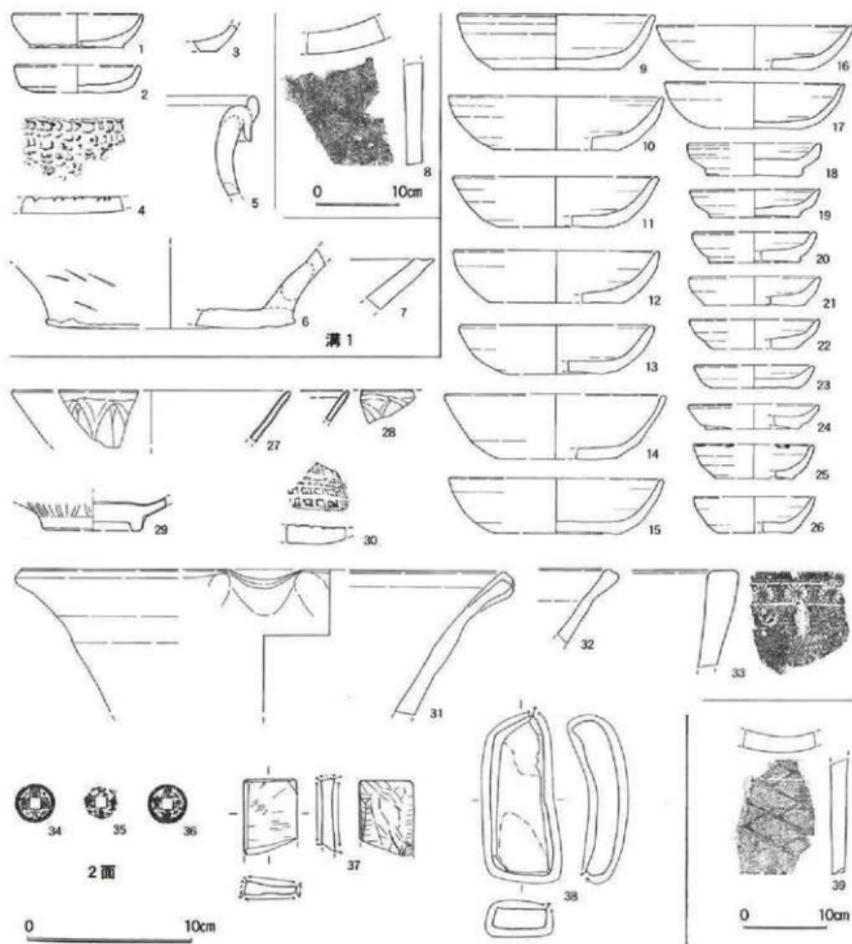


図20 調査区B 溝1、2面出土遺物

舶載品。黄釉の盤。遺存部で内面のみ施釉され、外面は露胎。釉調は黄茶褐色を呈し、鉄絵で文様があるが小破片のため詳細は不明。胎土は灰色を呈し、石粒を多く含む。4は瀬戸のおろし皿。内面には灰釉がかけられている。胎土は肌色を呈し、焼き締まる。5～7は常滑。5・6は甕。7はこね鉢。胎土は5・6は灰色、7は淡橙色を呈し、硬質。器表は茶褐色を呈し、5は自然釉がかかり、光沢がある。8は平瓦。凸面には格子叩き目。胎土は灰白色、表面は黒灰色を呈す。

図20～9～39は2面出土遺物である。9～26は轆轤成形のかわらけ。14～17・25・26は薄手丸深タイプの大中小皿。胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含みざらつく。18～20は底部を厚く切り残し、高台状になっている。また、器壁中位に強い稜を持ち、そこから上方に角度を変えて立ち上がる。薄手丸深タ

イブ以外の胎土は橙色～淡橙色を呈し、粉質である。9の器表には煤が付着している。25は灯明皿。27～29は青磁蓮弁文碗。釉調は27・29が黄灰色、28が緑青色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地はいずれも暗灰色を呈し緻密。30は瀬戸のおろし皿。灰胎がかかり、胎土は灰色を呈す。31・32は山茶碗窯系こね鉢。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み粗い。33は瓦質の手摺り。外面は黒色処理され、菊花文スタンプと振付連珠文が施されている。34～36は銭。開元通寶(621)・元豊通寶(1078)・慶元通寶(1195)である。35は周圍を削っている。37は鳴滝産の仕上砥。38は研磨痕のある常滑片。側面・表面ともに限なく使用している。39は平瓦。凸面には格子叩き。胎芯は黒灰色を呈し、表面に近い部分は白色を呈す。

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
20	1	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.8)	2.1
20	2	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.1)	1.7
20	6	2面	溝1	常滑	婁	—	(15.2)	—
20	8	2面	溝1	平瓦	格子叩き	(13.4)	—	—
20	9	2面	—	かわらけ	轆轤成形	12.0	7.5	3.4
20	10	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	3.3
20	11	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	(7.0)	3.1
20	12	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.3)	(8.2)	3.2
20	13	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(5.8)	3.0
20	14	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.5)	(7.3)	4.0
20	15	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.4)	3.4
20	16	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.0)	2.7
20	17	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	(5.8)	2.8
20	18	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.8)	2.0
20	19	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.7
20	20	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.5)	1.8
20	21	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(6.4)	(4.6)	1.8
20	22	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.0)	1.8
20	23	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(5.2)	1.4
20	24	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(9.9)	(7.6)	1.5
20	25	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(4.6)	2.1
20	26	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(4.6)	2.2
20	27	2面	—	青磁	蓮弁文碗	(17.0)	—	—
20	29	2面	—	青磁	蓮弁文碗	—	(6.0)	—
20	31	2面	—	山茶碗窯系	こね鉢	(30.4)	—	—
20	34	2面	—	銭	開元通寶	2.4	—	—
20	35	2面	—	銭	元豊通寶	1.9	—	—
20	36	2面	—	銭	慶元通寶	2.4	—	—
20	37	2面	—	鳴滝産	仕上砥	(4.7)	3.2	0.8
20	38	2面	—	常滑	研磨痕あり	9.8	3.8	1.7
20	39	2面	—	平瓦	格子叩き	(14.5)	—	—

第3面(図21)

第3面は2面下10～30cm前後、海拔12.6m付近に検出された。小土丹粒が多く混じる土で地業されている平坦な面である。溝状遺構1条・Pit31口が検出された。塵土の都合上グリッドy11～12間が未調査となってしまう。また、Ⅱ区西部は2面溝1に壊されている。

溝状遺構1(図22)

グリッド(x4, y7)付近、海拔12.6m前後に検出された。東西方向の溝状遺構である。溝とするには平面形が不整形で、深さも検出面から10cm前後と浅いため溝状遺構とした。検出し得た全長は190cm、最大幅は110cmを測る。調査区西外に続いている。底部からはPit3口と礎板1枚が検出されているが、溝状遺構1との関連は不明である。東西軸線方向はW-10°-Nである。

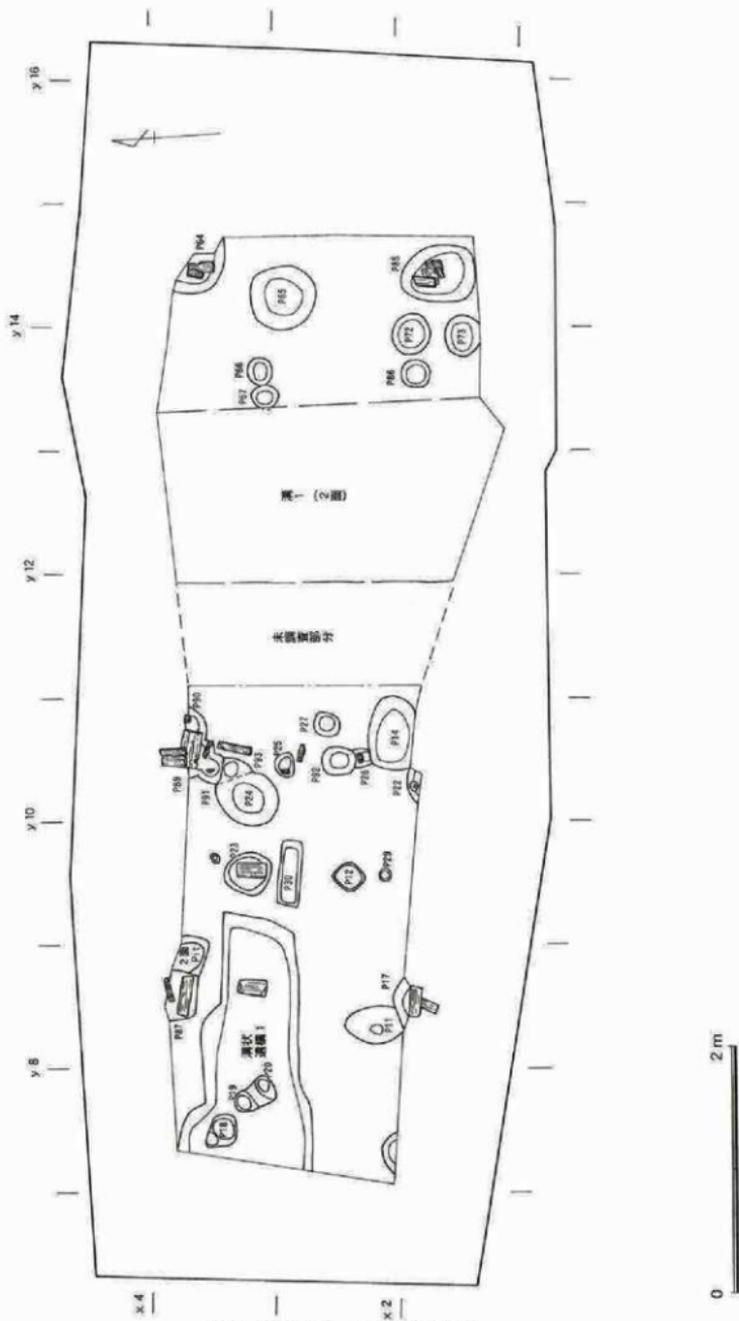


图21 调查区B 3面遺構配置图

3面検出Pit (図21)

3面からは合計31口のPitが検出された。調査面積的に平面的な展開を把握することはできなかったが、礎板が多数検出されており、建物や塀など建造物があったことは確かである。それぞれのPitの詳細は以下の通り。サイズの単位はcm。深さは検出面より計測。〔 〕は検出範囲での最大値。

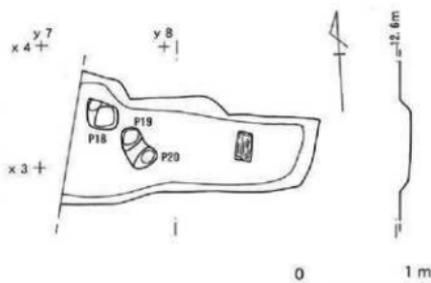


図22 調査区B 溝状遺構1

番号	平面形	検出レベル	寸法・南北	寸法・東西	深さ	備考
11	不整円形	12.6m	[44]	30	30	-
12	不整円形	12.6m	25	23	25	-
14	不整円形	12.6m	[36]	60	18	-
15	不明	12.6m	[13]	[33]	14	杭
17	不明	12.6m	[16]	[45]	21	礎板2枚
18	不整円形	12.5m	22	26	31	-
19	不整円形	12.5m	16	16	26	-
20	不整円形	12.5m	16	21	37	-
22	不明	12.6m	[10]	[25]	11	-
23	円形	12.6m	40	35	9	礎板1枚
24	円形	12.6m	50	43	11	-
25	不整円形	12.6m	16	20	20	礎板1枚
26	不整円形	12.6m	[15]	16	10	礎板1枚
27	円形	12.6m	20	20	19	-
30	隅丸長方形	12.6m	18	53	11	-
64	不明	12.6m	[40]	[46]	38	礎板2枚
65	円形	12.6m	52	52	14	-
66	円形	12.6m	20	22	12	-
67	円形	12.6m	20	20	18	-
72	円形	12.6m	30	34	12	-
73	円形	12.6m	30	34	12	-
85	不整円形	12.6m	60	47	20	礎板4枚と土丹
86	円形	12.6m	22	24	7	-
87	不整円形	12.6m	[27]	40	20	礎板2枚
89	不明	12.6m	[35]	40	20	礎板2枚
90	不明	12.6m	[18]	20	21	杭
91	円形	12.6m	[16]	24	14	礎板1枚
92	円形	12.6m	28	22	20	-
93	不整形	12.6m	20	20	16	-

出土遺物 (図23)

1~10は轆轤成形のかわらけ。1・2は大皿、3は中皿、4~10は小皿である。胎土は淡橙色(2~5・7・9・10)・肌色(1・6・8)を呈し、微砂を含み粉質。3・8・9は微砂が多い。11~15は船載品。11は青磁蓮弁文碗。釉調は青緑色を呈し、光沢は良い。微気泡多く失透する。素地は灰色を呈し緻密。12は白磁口兀碗。釉調は灰味白色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は白色を呈し緻密。13は天目茶碗。釉調は黒色を呈し、不透明。光沢は良い。茶褐色の禾目が口縁周辺に入る。素地は暗灰色を呈し、硬質で緻密。14は緑釉の盤。釉調は緑色を呈し不透明。素地は肌色を呈し、石粒を含み粗い。断面には漆接着痕が残る。15は褐釉の壺。釉調は黒褐色を呈し、ごく薄くかけられている。素地は青味暗灰色を

呈し、粘性があり、白色微石粒を含む。16は常滑磨口壺。胎土は黒灰色を呈し、比較的緻密。外器表は茶褐色を呈す。17・18は瓦質手埴り。18の器表は黒色処理されている。胎土は17は肌色、18は灰色を呈す。19・20は丸瓦。凸面は縄目。凹面は布目。19の表面は黒色処理されている。20の断面には穿孔の痕がみられ、再利用されたのか磨滅している。21は銭。文字は不明。22は伊予産の中砥。23は上野産の中砥である。24は北九州産の滑石の鍋。断面の一部に加工痕がある。

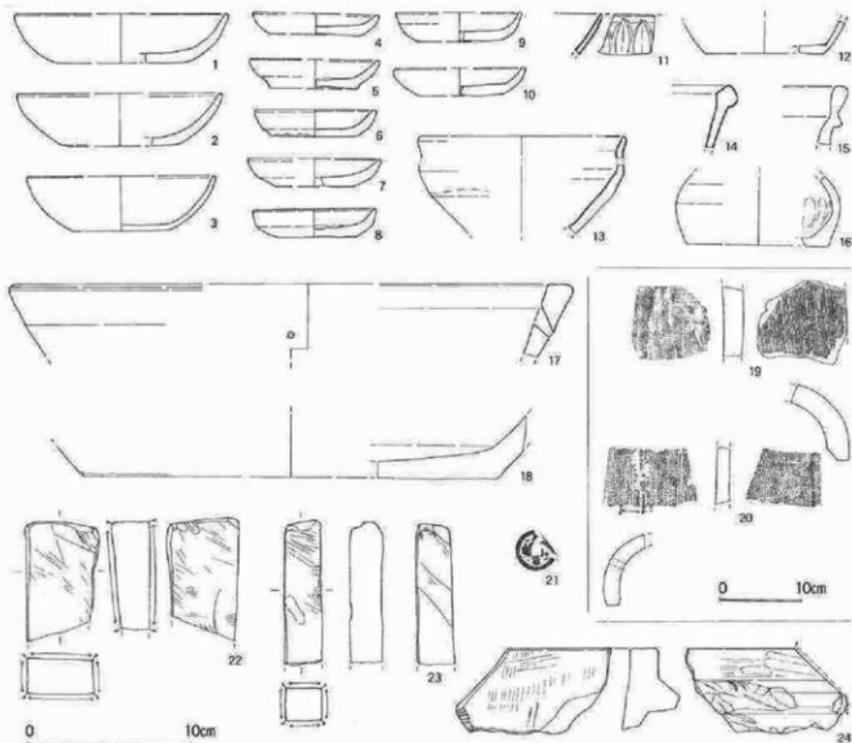


図23 調査区B 3面出土遺物

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
23	1	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.1)	3.0
23	2	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	(7.4)	3.3
23	3	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.7)	(6.1)	3.4
23	4	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.6)	1.3
23	5	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.8
23	6	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.4	1.7
23	7	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(4.8)	1.7
23	8	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	4.6	1.7
23	9	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.4)	1.8
23	10	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.1)	(5.1)	1.7
23	12	3面	-	白磁	口元皿	-	(7.2)	-
23	13	3面	-	黒釉	天目茶碗	(12.5)	-	-
23	16	3面	-	常滑	湯口壺	-	(8.6)	-
23	17	3面	-	瓦質	手焙り	(36.6)	-	-
23	18	3面	-	瓦質	手焙り	-	(25.1)	-
23	19	3面	-	丸瓦	縄目	(10.3)	(7.0)	-
23	20	3面	-	丸瓦	縄目	(7.3)	(5.0)	-
23	21	3面	-	銭	不明	2.4	-	-
23	22	3面	-	伊予産	中砥	(7.0)	4.3	2.3
23	23	3面	-	上野産	中砥	(8.7)	2.2	2.0
23	24	3面	-	北九州産	鍋転用品	5.0	8.3	3.3

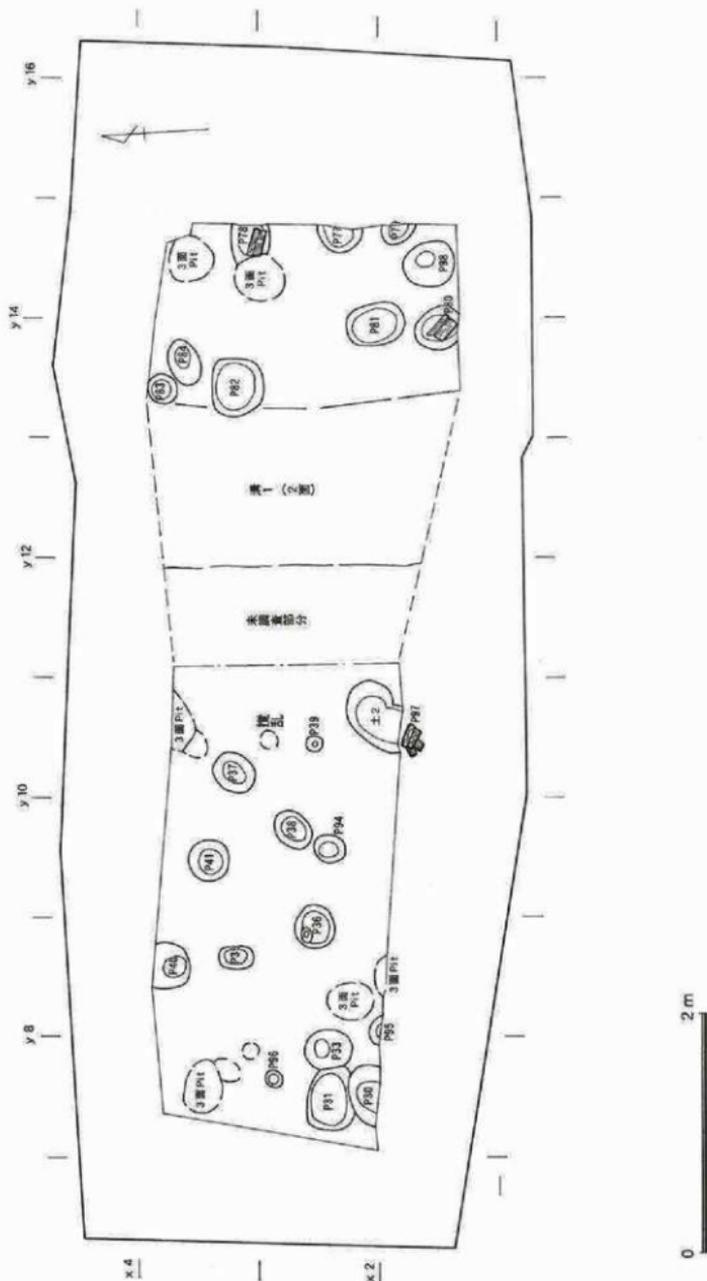


图24 調査区B 4面遺構配置図

第4面 (図24)

第4面は3面下10cm前後、海拔12.5m付近に検出された比較的良好な地業面である。土坑1基・Pit22口が検出された。廃土の都合上グリッドy11~12間が未調査となってしまう。また、Ⅱ区西部は2面溝1に壊されている。

土坑2 (図25)

土坑2はグリッド(x2, y10)付近、海拔12.4m前後に検出された。南部は調査区外。平面形は不整形を呈し、東西幅は58cm前後、深さは検出面から15cm前後を測る。

4面検出Pit(図24)

Pitは合計22口が検出された。礎板を伴うものがいくつかあったが、並びをつかむことはできなかった。また、浅いPitも含まれており、上層の掘り残しや柱穴でない可能性のある物もある。いずれにしても、調査面積的に平面的な展開を把握することはできなかったが、建物や塀など建造物があったことは確実である。それぞれのPitの詳細は以下の通り。サイズの単位はcm。深さは検出面より計測。〔 〕は検出範囲での最大値。

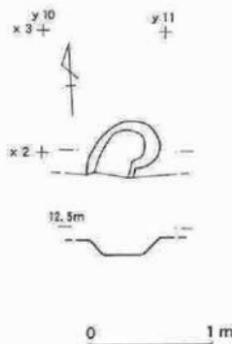


図25 調査区B 土坑2

番号	平面形	検出レベル	寸法・南北	寸法・東西	深さ	備考
30	(円形)	12.45	[26]	50	11	—
31	楕円形	12.45	38	50	11	—
33	円形	12.45	38	32	14	—
35	楕円形	12.45	28	20	17	—
36	円形	12.45	34	36	34	—
37	円形	12.45	35	35	9	—
38	楕円形	12.45	35	28	6	—
39	円形	12.45	12	12	5	—
40	(円形)	12.45	[30]	40	26	—
41	円形	12.45	32	34	35	—
77	(円形)	12.45	37	[20]	15	—
78	(円形)	12.45	32	[28]	22	礎板1枚
79	(楕円形)	12.45	28	[20]	5	—
80	(円形)	12.45	[37]	36	12	礎板1枚
81	楕円形	12.45	48	36	6	—
82	円形	12.45	44	49	37	—
83	円形	12.45	25	25	17	—
84	楕円形	12.45	24	40	29	—
94	円形	12.45	26	24	20	—
95	(円形)	12.45	[8]	[24]	—	—
96	円形	12.45	14	14	11	—
97	礎板のみ検出	12.16	—	—	—	礎板3枚
98	不整形円形	12.45	42	40	30	—

出土遺物 (図26)

図26-1~8は轆轤成形のかわらけ。1・2は大皿。3~8は小皿。胎土は肌色(1・4・5・7・8)・橙色(2・3・6)を呈し、粉質。3は再火を受け肌荒れしている。4・8は灯明皿。9~11は舶載品。9・10は青磁蓮弁文碗。釉調は9が黄灰色、10が緑青色を呈し、素地は緻密で、9が灰褐色、10が灰色を呈す。10は再火により肌荒れしている。11は白磁口元碗。12は瓦質手埴り。13・14は丸瓦。凸面は縄目、凹面は布目痕がはっきりと残る。器表は黒灰色を呈し、胎土は灰色を呈す。15・16は平瓦。凸面には縄目、凹面は布目痕。胎土は灰色を呈す。

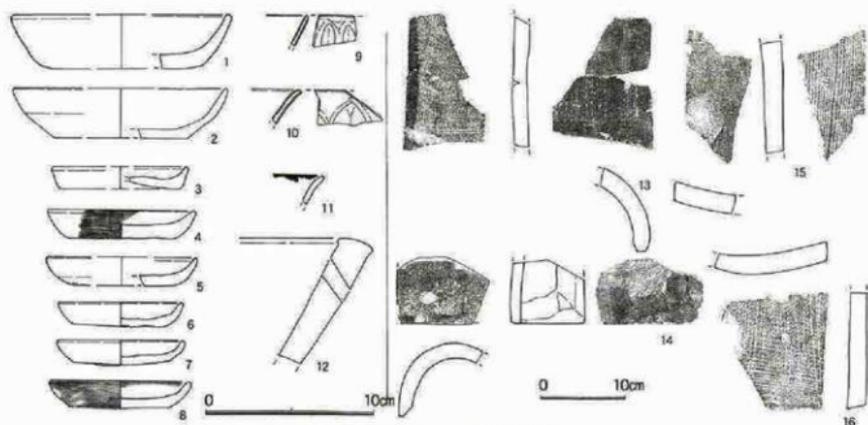


図26 調査区B 4面出土遺物

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
26	1	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.3)	(8.2)	3.2
26	2	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	(8.0)	3.0
26	3	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(7.2)	1.3
26	4	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.9	6.3	1.7
26	5	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.1)	(8.3)	1.7
26	6	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.5	1.4
26	7	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.7	1.5
26	8	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.5	6.0	1.7
26	13	4面	-	丸瓦	縄目	(16.0)	(5.2)	-
26	14	4面	-	丸瓦	縄目	(8.2)	(10.0)	9.8
26	15	4面	-	平瓦	縄目	(14.2)	(7.2)	-
26	16	4面	-	平瓦	縄目	(14.4)	(13.0)	4.0

第5面 (図27)

第5面は4面下40~50cm、海拔12.1~12.0m付近に検出された。薄く土丹地業されている。土坑3基・Pit25口が検出された。

土坑3・5 (図28)

土坑3・5はグリッド(x3, y10)付近、海拔12.0m前後に検出された。平面形は直径65cm前後の不整形円形を呈し、互いに切り合っている。深さは検出面から土坑3が19cm、土坑5が20cmを測る。

土坑4 (図28)

土坑4はグリッド(x2, y13)付近、海拔12.0m前後に検出された。北東部一部のみ検出されたため平面形は不明。深さは検出された範囲で35cmを測る。

5面検出Pit (図27)

5面からは25口のPitと礎板2ヶ所が検出された。Pitは礎板が遺存しているものもあったが、調査区の面積が狭いことからその配置をつかむことはできなかった。しかし、建物や塀などがあったことは確

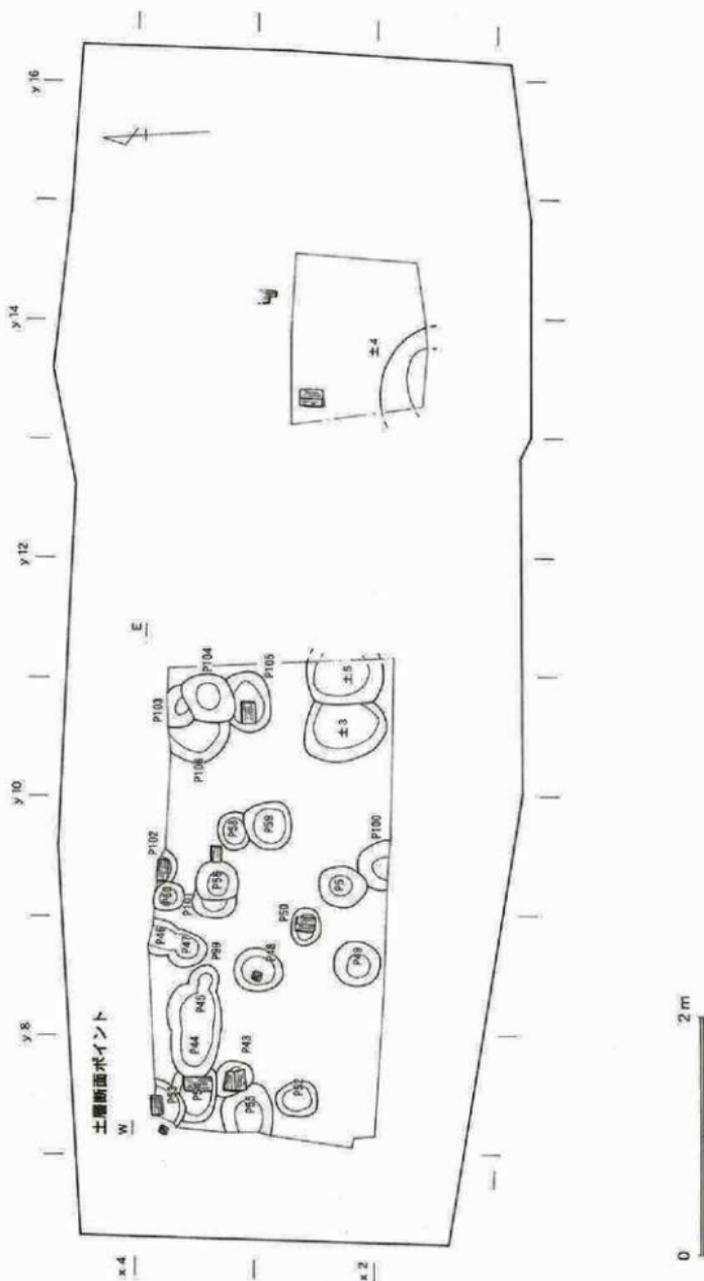


図27 調査区B 5面遺構配置図

実である。それぞれのPilの詳細は以下の通り。サイズの単位はcm。深さは検出面より計測。〔 〕は検出範囲での最大値。

出土遺物 (図29~31)

図29-1・2は土坑4出土のかわらけ。1は手づくねの大皿。胎土は橙色を呈す。2は轆轤成形の小皿。胎土は肌色を呈し、粉質。

図29-3~38・図30・31は5面出土遺物である。瓦が特に多く出土している。

図29-3~18はかわらけ。3~14は手づくね、15~18は轆轤成形である。胎土は肌色(3~8・12~15・17・18)、橙色(9~11・16)を呈し、3~16は粉質。17・18は微砂を多く含みざらつく。10・11

は焼成良好で硬く焼き締まり、胎土は黒灰色を呈す。7は灯明皿。19~23は舶載品。19・20は同家窯系の青磁皿。釉調は灰褐色を呈し、光沢。透明度ともに良い。素地は灰色を呈し緻密。21は青磁蓮弁文碗。釉調は青味緑色を呈し、光沢は悪い。素地は灰白色を呈す。22は折れ腰鉢。釉調は緑味青色を呈し、透明度・光沢ともに良い。粗く貫入がある。素地は灰色を呈し緻密。23は緑

釉の盤。釉は不透明で緑色を呈し、内面は銀化している。素地は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。図29-24は東遼系の山茶碗の口縁部片。胎土は青灰色を呈し、白色微粒を含み、硬質。図29-25・26は山茶碗窯系こね鉢。胎土は暗灰色を呈し、微粒粒を多く含み、硬質。図29-27・28は常滑の甕。胎土は暗灰色を呈し、白色微粒粒を含み、硬質。器表は27が茶褐色を呈し、28の外表面には白褐色の自然釉が厚くかかる。図29-29は手づくねの白かわらけ。胎土は白褐色を呈し、水皸され緻密。焼成は良好で、胎土が黒灰色に残るが、硬く焼きしまっている。図29-30~38・図30・図31は瓦。図29-30・31は複弁八葉蓮華文の軒丸瓦。永福寺1期(創建1192~1248)に同様である。図29-32~38・図30-1~7は丸瓦である。いずれも凸面は縄目、凹面は布目痕がはっきりと残っている。胎土は灰色を呈し、比較的精良。図29-32・33・35・図30-1~3・5・6は表面が黒灰色を呈す。図29-8~13・図21は平瓦。凸面は

番号	平面形	検出レベル	寸法・南北	寸法・東西	深さ	備考
43	(円形)	12.0	30	30	13	礎板2枚
44	(楕円形)	12.0	40	(38)	21	—
45	(楕円形)	12.0	44	(40)	21	—
46	(円形)	12.0	(20)	30	25	—
47	(円形)	12.0	(30)	30	20	—
48	円形	12.0	40	36	34	柱根あり
49	円形	12.0	40	38	25	—
50	円形	12.0	26	30	11	礎板1枚
51	円形	12.0	40	34	17	—
52	円形	12.0	35	30	27	—
53	(円形)	12.0	(27)	(36)	15	礎板1枚
54	(楕円形)	12.0	37	(40)	14	礎板1枚
55	(円形)	12.0	43	(40)	18	—
56	円形	12.0	36	33	20	—
58	円形	12.0	24	30	11	—
59	円形	12.0	40	40	33	—
60	円形	12.0	24	24	24	—
99	(円形)	12.0	26	(20)	14	—
100	(円形)	12.0	(26)	40	12	—
101	(円形)	12.0	37	(15)	12	—
102	(円形)	12.0	(16)	27	18	礎板1枚
103	(円形)	12.0	(20)	35	21	—
104	円形	12.0	(43)	40	21	—
105	楕円形	12.0	(31)	50	10	礎板1枚
106	不明	12.0	(50)	(36)	11	—

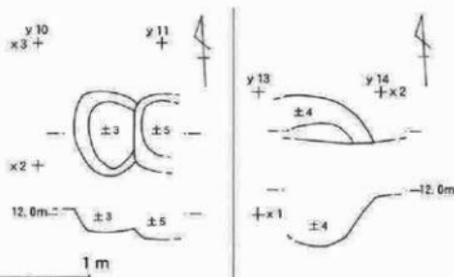


図28 調査区B 土坑3・5・4

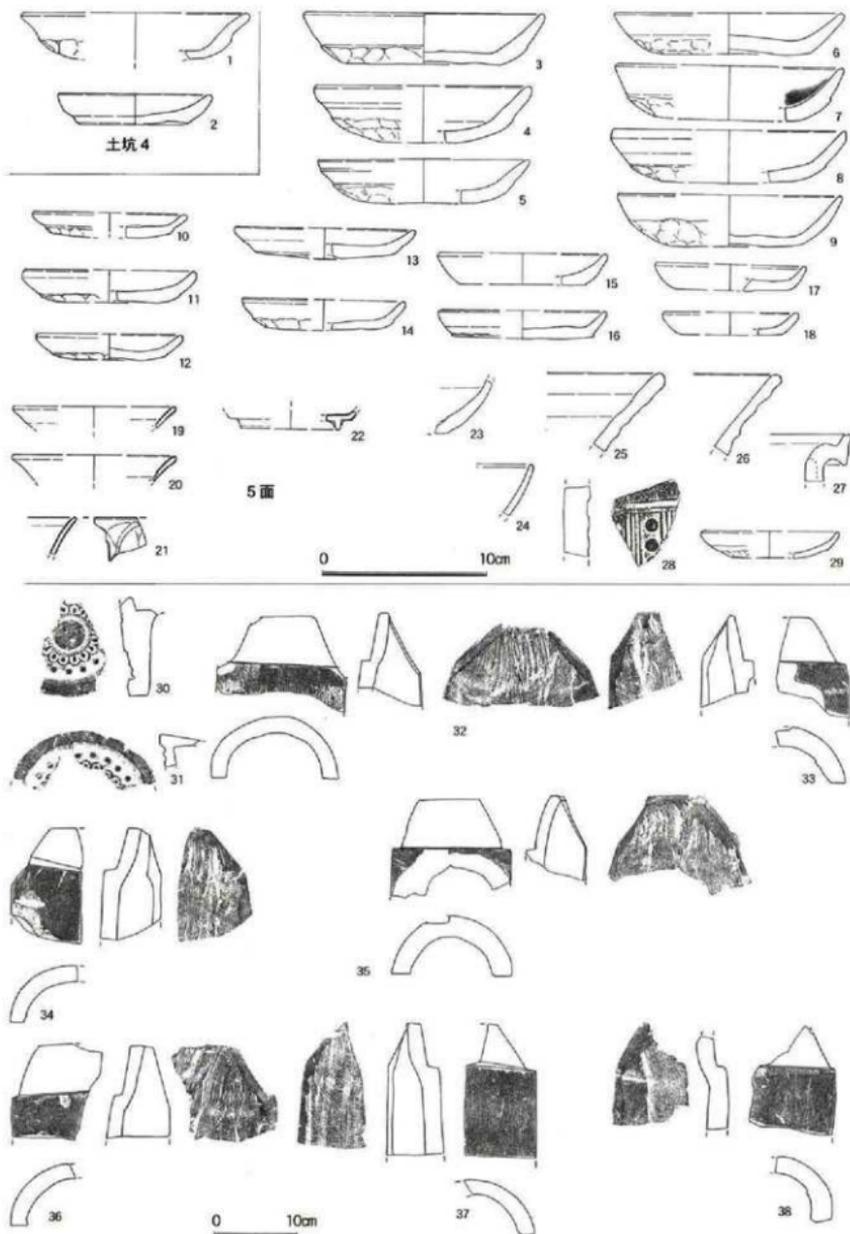


图29 调查区B 土坑4,5面出土遗物(1)

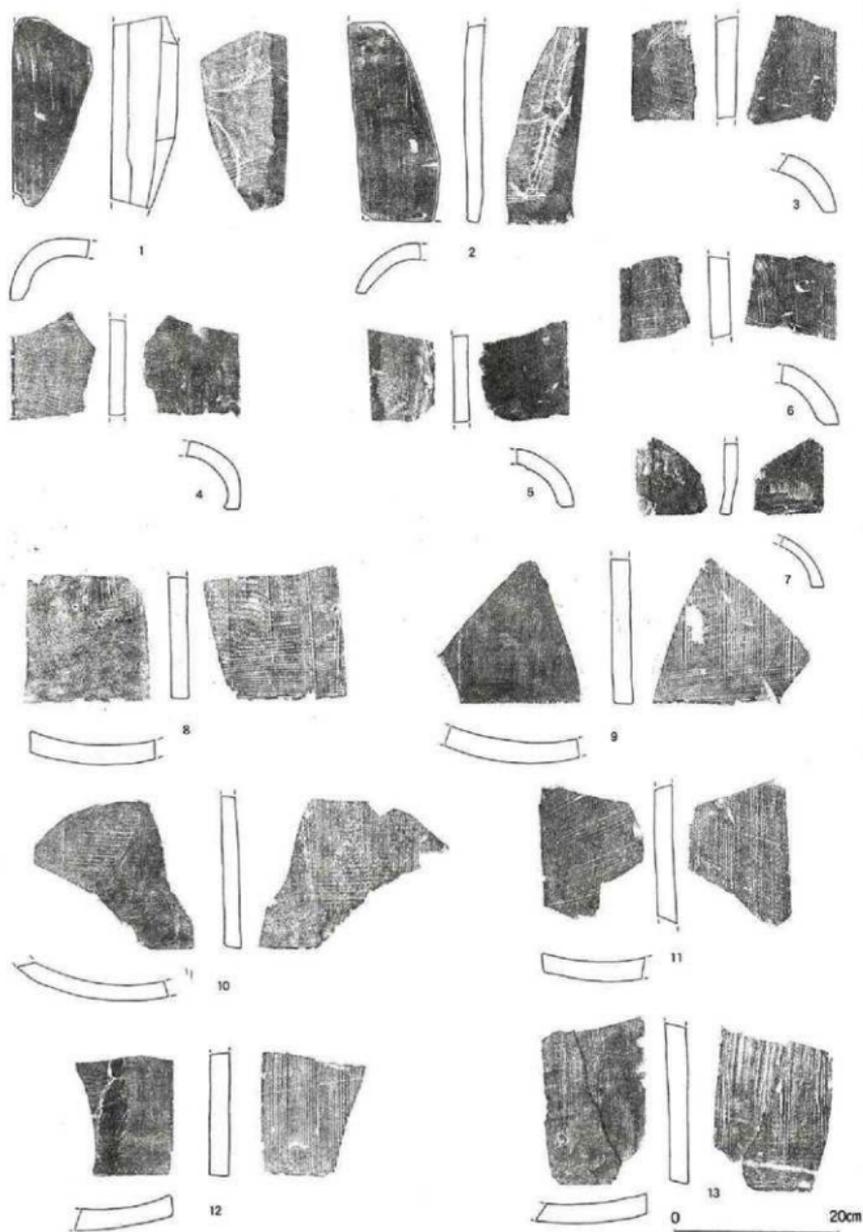


图30 调查区B 5面出土遺物 (2)

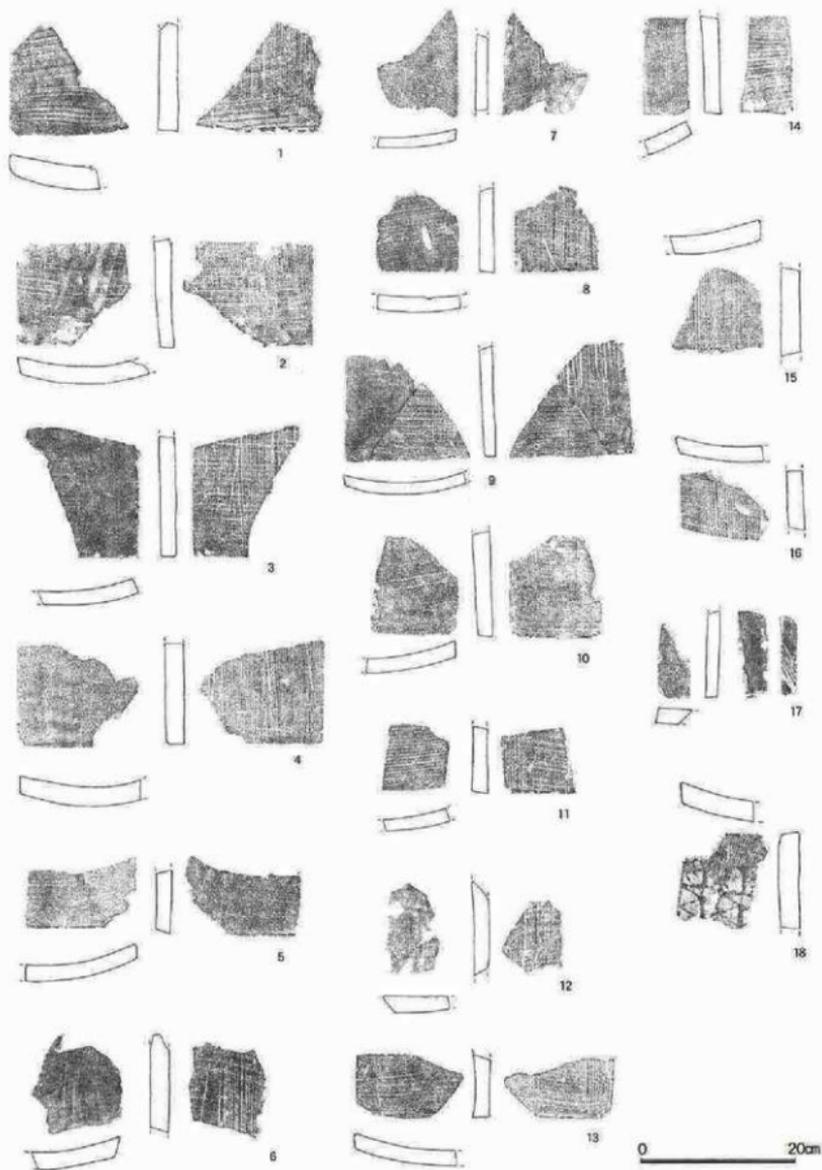


图31 調査区B 5面出土遺物 (3)

図21-18が格子叩き、その他は編目。凹面は布目痕が残るものもある。離れ砂が付着している。胎土は概ね灰色を呈し、比較的精良。図21-7・10・13・17は淡褐色を呈す。

図	番号	部位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
29	1	5面	土坑4	かわらけ	手づくね	(14.0)	—	—
29	2	5面	土坑4	かわらけ	轆轤成形	9.4	6.7	1.9
29	7	5面	—	かわらけ	手づくね	(14.0)	—	3.3
29	6	5面	—	かわらけ	手づくね	(14.0)	—	2.5
29	8	5面	—	かわらけ	手づくね	(14.4)	—	3.3
29	3	5面	—	かわらけ	手づくね	(14.7)	—	3.0
29	4	5面	—	かわらけ	手づくね	(13.2)	—	3.5
29	9	5面	—	かわらけ	手づくね	(13.7)	—	3.2
29	5	5面	—	かわらけ	手づくね	(13.0)	—	2.7
29	11	5面	—	かわらけ	手づくね	(10.5)	—	2.0
29	13	5面	—	かわらけ	手づくね	(11.1)	—	1.9
29	14	5面	—	かわらけ	手づくね	(10.0)	—	1.9
29	10	5面	—	かわらけ	手づくね	(9.5)	—	—
29	12	5面	—	かわらけ	手づくね	(9.0)	—	1.5
29	15	5面	—	かわらけ	轆轤成形	(10.3)	(7.7)	1.9
29	16	5面	—	かわらけ	轆轤成形	(10.3)	(8.7)	1.7
29	17	5面	—	かわらけ	轆轤成形	(9.3)	(7.0)	1.6
29	18	5面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	(6.5)	1.4
29	19	5面	—	青磁	同安窯系皿	(10.0)	—	—
29	20	5面	—	青磁	同安窯系皿	(10.0)	—	—
29	22	5面	—	青磁	折れ腰鉢	—	(6.0)	—
29	29	5面	—	白かわらけ	手づくね	(8.5)	—	1.6
29	30	5面	—	軒丸瓦	複弁八葉蓮華文	直径(14.0)	—	—
29	31	5面	—	軒丸瓦	複弁八葉蓮華文	直径(18.8)	—	—
29	34	5面	—	丸瓦	網目	[14.0]	[8.0]	7.0
29	36	5面	—	丸瓦	網目	[11.6]	[8.2]	7.4
29	32	5面	—	丸瓦	網目	[11.8]	15.4	7.4
29	35	5面	—	丸瓦	網目	[11.8]	14.6	7.2
29	37	5面	—	丸瓦	網目	[16.2]	[8.6]	6.8
29	33	5面	—	丸瓦	網目	[9.8]	[8.0]	—
29	38	5面	—	丸瓦	網目	[12.9]	[6.6]	—
30	1	5面	—	丸瓦	網目	[23.2]	[9.6]	7.6
30	2	5面	—	丸瓦	網目	[24.5]	[7.8]	6.0
30	3	5面	—	丸瓦	網目	[13.2]	[4.6]	—
30	4	5面	—	丸瓦	網目	[13.4]	[6.2]	8.2
30	5	5面	—	丸瓦	網目	[11.9]	[6.8]	—
30	6	5面	—	丸瓦	網目	[10.3]	[6.6]	—
30	7	5面	—	丸瓦	網目	[9.2]	[4.8]	—
30	8	5面	—	平瓦	網目	[16.2]	[14.0]	4.6
30	9	5面	—	平瓦	網目	[18.2]	[16.4]	—
30	10	5面	—	平瓦	網目	[18.8]	[18.0]	—
30	11	5面	—	平瓦	網目	[17.8]	[12.2]	—
30	12	5面	—	平瓦	網目	[15.3]	[12.0]	4.6
30	13	5面	—	平瓦	網目	[19.7]	[13.6]	3.6

図	番号	層位	造構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
31	1	5面	—	平瓦	縄目	(15.5)	(11.4)	—
31	2	5面	—	平瓦	縄目	(14.0)	(17.0)	3.6
31	3	5面	—	平瓦	縄目	(16.7)	(12.4)	3.6
31	4	5面	—	平瓦	縄目	(13.7)	(15.6)	4.0
31	5	5面	—	平瓦	縄目	(8.1)	(14.4)	5.0
31	6	5面	—	平瓦	縄目	(13.9)	(11.6)	4.2
31	7	5面	—	平瓦	縄目	(13.8)	(10.0)	2.1
31	8	5面	—	平瓦	縄目	(11.0)	(11.0)	—
31	9	5面	—	平瓦	縄目	(14.4)	(15.8)	3.9
31	10	5面	—	平瓦	縄目	(13.9)	(11.6)	4.4
31	11	5面	—	平瓦	縄目	(8.8)	(8.8)	—
31	12	5面	—	平瓦	縄目	(12.4)	(8.6)	—
31	13	5面	—	平瓦	縄目	(8.7)	(13.4)	4.2
31	14	5面	—	平瓦	縄目	(13.0)	(6.2)	—
31	15	5面	—	平瓦	縄目	(12.1)	(11.6)	4.4
31	16	5面	—	平瓦	縄目	(8.5)	(11.4)	3.4
31	17	5面	—	平瓦	縄目	(11.5)	(4.6)	—
31	18	5面	—	平瓦	格子叩き	(12.9)	(10.0)	4.6

第6面(図32)

第6面は5面下30cm、海拔11.9～11.7m付近に検出された。深度が5面時で2mを超え、危険を伴うため、トレンチを2ヶ所に設定して調査を行った。(トレンチ1・トレンチ2)

・トレンチ1

トレンチ1はグリッド(x3, y8)付近に南北80cm、東西160cmの範囲に設定された。5面下20cm、海拔11.9m付近に薄い土丹地葉が検出され、15cm下、海拔11.75m付近に地山が検出された。地葉面から緩やかに東に下り、平場になった地点に土坑が1基検出された。土層注記は以下の通りである。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り	備考
1	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1cm大の土丹(少)・所々に貝砂	あり	よい	
2	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(やや多)・2～3cm大の土丹(やや多)・所々に貝砂	—	やや弱い	
3	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1cm大の土丹(少)・所々に貝砂(1cm大)	—	やや弱い	
4	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(やや多)・2～3cm大の土丹(少)・所々に貝砂	—	やや弱い	
5	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1cm大の土丹・所々に貝砂(1cm大) いずれも少	—	やや弱い	土坑6
6	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1cm大の土丹・所々に貝砂(1cm大) いずれも少	—	弱い	土坑6
7	暗褐色	粘質土	混入物少ない	—	強い	地山

・トレンチ2

トレンチ2はグリッド(x2, y13)付近に南北60cm、東西130cmの範囲に設定された。5面下30cm、海拔11.7m付近に地山が検出された。トレンチ内西部2/3は大きく掘り込まれ、井戸等の大型遺構の可能性もあるが、調査範囲内では詳細を確認することはできなかった。土層注記の詳細は以下の通りである。

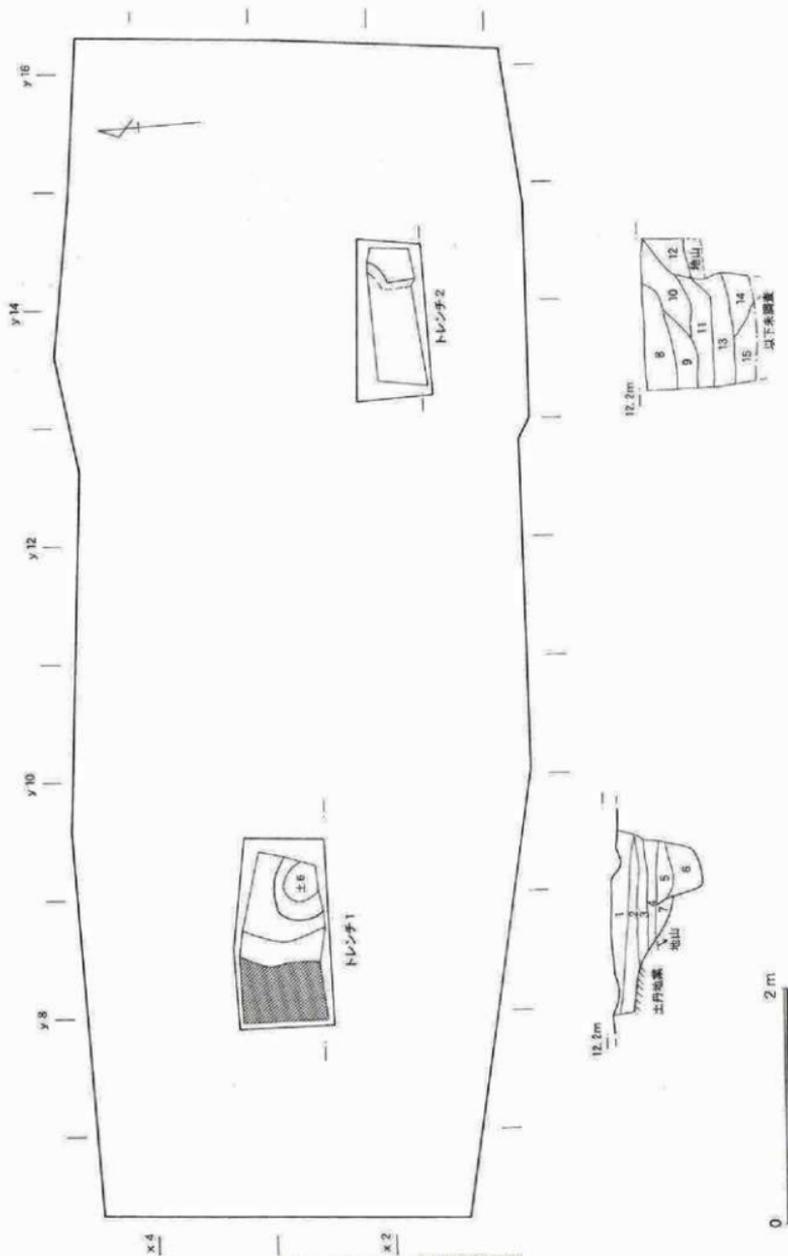


図32 調査区B 6面遺構配置図

番号	色調	土質	内 容	粘 性	縮 り
8	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1~2cmの土丹・木片(少)	あり	弱い
9	暗褐色	粘質土	かわらけ片・木片・炭化物(多)・貝砂(少)	あり	弱い
10	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1cmの土丹・貝砂	あり	やや弱い
11	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1~5cmの土丹・貝砂・木片(多)	あり	やや弱い
12	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1~5cmの土丹	あり	やや弱い
13	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・常滑片・炭化物・1~10cmの土丹・貝砂	あり	やや弱い
14	暗灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・1~10cmの土丹・貝砂(いずれも少)	あり	やや弱い
15	暗褐色	有機物堆積層	-	あり	やや弱い

出土遺物(図33)

1~13はかわらけ。1~9は手づくね。10~13は轆轤成形。手づくねの大皿は指頭稜との境に然程稜が出ず、丸味がある。手づくねの小皿は底部が平たく、器壁は外向きに立ち上がる。胎土は橙色(5)、淡橙色(1・3・6・12・13)、肌色(2・4・7~11)を呈し、比較的きめ細かい粉質。14は山茶碗。胎土は灰色を呈し石粒を含み粗い。口縁断面は厚くなり、三角形を呈す。15・16は常滑。15は小型の甕。内側には煤が付着している。胎土は暗灰色を呈し、石粒を多く含む粗い。器表は暗茶褐色を呈す。16は甕転用こね鉢。内側は磨滅して滑らか。胎土は橙褐色を呈し、微石粒を多く含む粗い。17は瀝美の甕の胴部片。この他に3片出土している。胎土は青味灰色を呈し、比較的きめ細かく、硬質。器表には自然釉がかかる。18・19は瓦。18は丸瓦。凸面は縄目が消されている。凹面は布目痕がはっきりと残る。胎土は灰色を呈し、軟質。19は平瓦。凸面は縄目引き後削られている。凹面には離れ砂と削りの痕跡がある。胎土は灰色を呈し、軟質。20・21は漆器の椀。20は黒漆地に朱漆で笹か?の草文が外面に描かれている。21は黒漆塗りの椀。内面の漆はよれて縮れている。22~24は木製品。22は折敷の破片。23は板草履の芯。藁疔痕が強く残っている。25は木の節を球状にカットしたもの。用途は不明。

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
33	1	6面	-	かわらけ	手づくね	(18.2)	-	3.7
33	2	6面	-	かわらけ	手づくね	(15.2)	-	3.1
33	3	6面	-	かわらけ	手づくね	(13.9)	-	3.0
33	4	6面	-	かわらけ	手づくね	(15.7)	-	3.1
33	5	6面	-	かわらけ	手づくね	(14.0)	-	3.5
33	6	6面	-	かわらけ	手づくね	(13.4)	-	3.1
33	7	6面	-	かわらけ	手づくね	10.0	-	2.1
33	8	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.7)	-	2.0
33	9	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.7)	-	1.5
33	10	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.9)	(6.2)	1.8
33	11	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.1	6.5	1.8
33	12	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.6)	(6.8)	1.4
33	13	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.8	7.4	1.6
33	15	6面	-	常滑	甕	(20.0)	-	-
33	16	6面	-	常滑	甕転用こね鉢	-	(16.1)	-
33	18	6面	-	丸瓦	縄目	(10.4)	(8.2)	7.0
33	19	6面	-	平瓦	縄目	(12.6)	(6.8)	-
33	20	6面	-	漆器	椀	(15.4)	(9.8)	5.4
33	21	6面	-	漆器	椀	-	7.0	-
33	22	6面	-	木製品	折敷	(13.7)	(2.3)	0.2
33	23	6面	-	木製品	板草履の芯	24.3	9.9	0.3
33	24	6面	-	木製品	球状製品	6.1	7.7	6.1

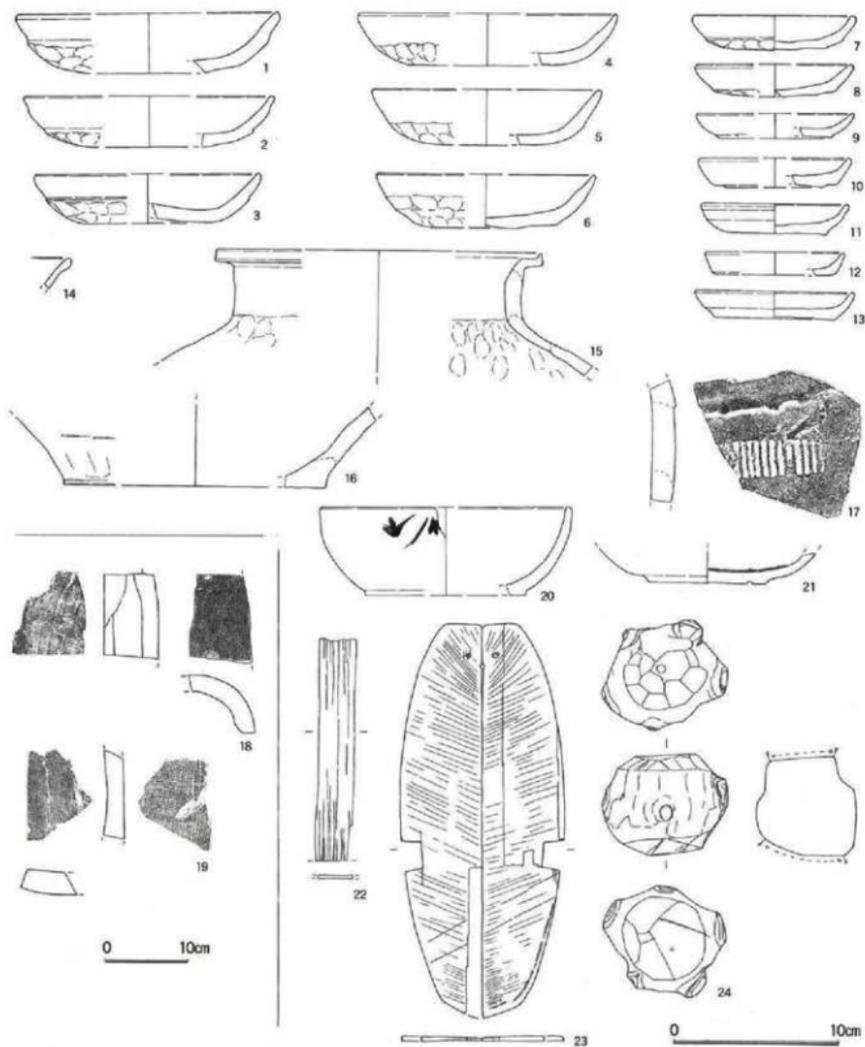


图33 调查区B 6面出土遗物

第4章 まとめ

今回の調査は調査区Aと調査区Bで実施された。それぞれの検出面の対応関係は次の通りである。①調査区A 1面＝調査区B 1面（海拔13.0m前後）、②調査区A 2面＝調査区B 2面（海拔12.8m前後）、③調査区A 3面＝調査区B 3面（海拔12.6m前後）、⑤調査区A 4面＝調査区B 5面（海拔12.1m前後）で、調査区Aでは検出されなかった面（④調査区B 4面・⑥6面）があり、両調査区で通算6面の生活面が検出された。①面・②面は14世紀中頃、③面は13世紀末～14世紀初頭、④面は13世紀後半～末葉、⑤面は13世紀前半、⑥面は地山である。

今回の調査地点はその南側は大倉幕府跡といわれる一帯があり、さらに北側には源頼朝の墓、大江広元の墓、北条義時法華堂跡、荏柄天神等、幕府主要施設が点在している。（第1章参照）しかし、この周辺では大倉幕府周辺という重要地であるにもかかわらず、現在の土地利用が一戸建ての個人住宅地と学校施設であることなどから、近年やや発掘調査事例が増加してきているものの、意外と発掘調査が実施されておらず、他の調査が実施された地点も今回の調査同様小規模なものである。そのため、この場所の点的特徴と言えるのか、全体の傾向と言えるのかは不明であるが、今回の隣接する2地点の調査では調査区A 3面－4面間＝調査区B 4面－5面間に（層厚は40～50cm）13世紀中頃の50年前後の空白期間がある。手づくねかわらけが主体となる面の次の面で検出するかわらけ軸轆成形の薄手丸深タイプとなっている。この特徴が広がりを見せるのならば、何らかの歴史的事実とリンクする可能性もあり、今後の調査に注目したい。

また、出土遺物では調査区A 4面から出土した磁州窯系の盤は希少品で、鎌倉市内での出土例はほとんどない。調査区Bからは瓦が特に5面覆土に多く出土している。平瓦は縄目叩きのある物が主で、軒丸瓦には永福寺創建期に使用された複弁八葉蓮華文の軒丸瓦が2点出土している。

いずれにしても、調査面積が小さいことから、大雑把な見解となってしまうが、鎌倉時代初期に瓦を使用した建物があり、その後、50年前後の期間をおいて、13世紀末に掘立柱建物などが作られ、14世紀中頃まで繰り返し地業を行い土地利用していた様相が明らかとなった。

図版 1



◀ 調査区A
1面全景 (南より)

調査区A ▶
1面全景 (東より)



◀ 調査区A
2面全景 (南より)

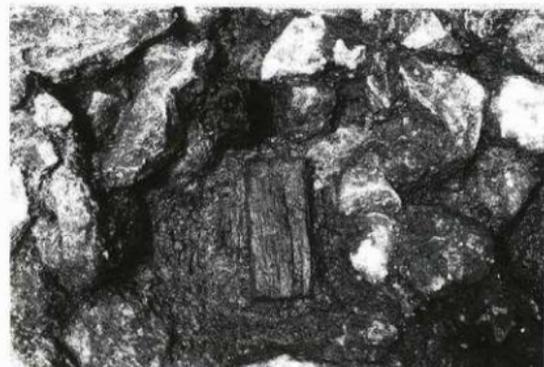




◀ 調査区A
3面 Pit3



調査区A ▶
3面 Pit7



◀ 調査区A
3面 Pit8

図版 3



◀ 調査区A
3面全景 (南より)

調査区A ▶
4面全景 (南より)



◀ 調査区A
北壁土層



▲ 調査区B I区1面全景 (西より)



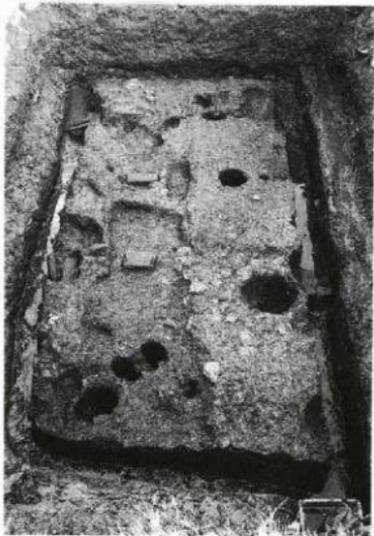
▲ 調査区B II区1面全景 (西より)



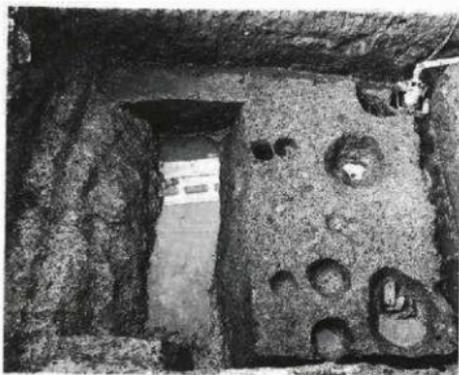
▲ 調査区B I区2面全景 (西より)



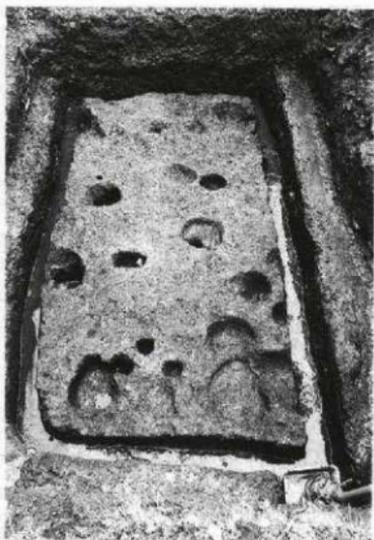
▲ 調査区B II区2面全景 (南より)



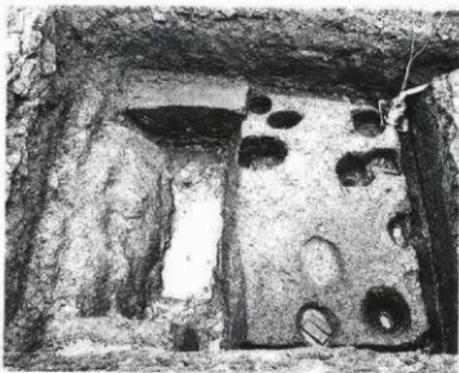
▲ 調査区BⅠ区3面全景 (西より)



▲ 調査区BⅡ区3面全景 (南より)



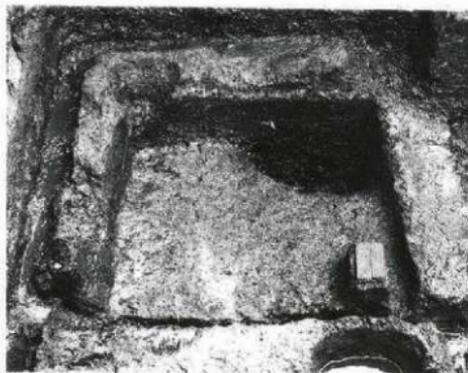
▲ 調査区BⅠ区4面全景 (西より)



▲ 調査区BⅡ区4面全景 (南より)



▲ 調査区BⅠ区5面全景（西より）



▲ 調査区BⅡ区5面全景（北より）



▲ 調査区BⅠ区トレンチ南壁

▼ 調査区BⅡ区トレンチ（東より）

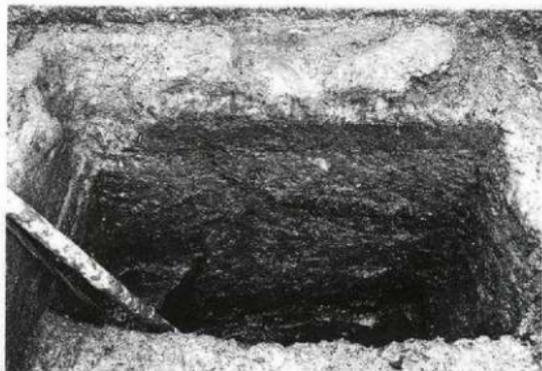


図版 7

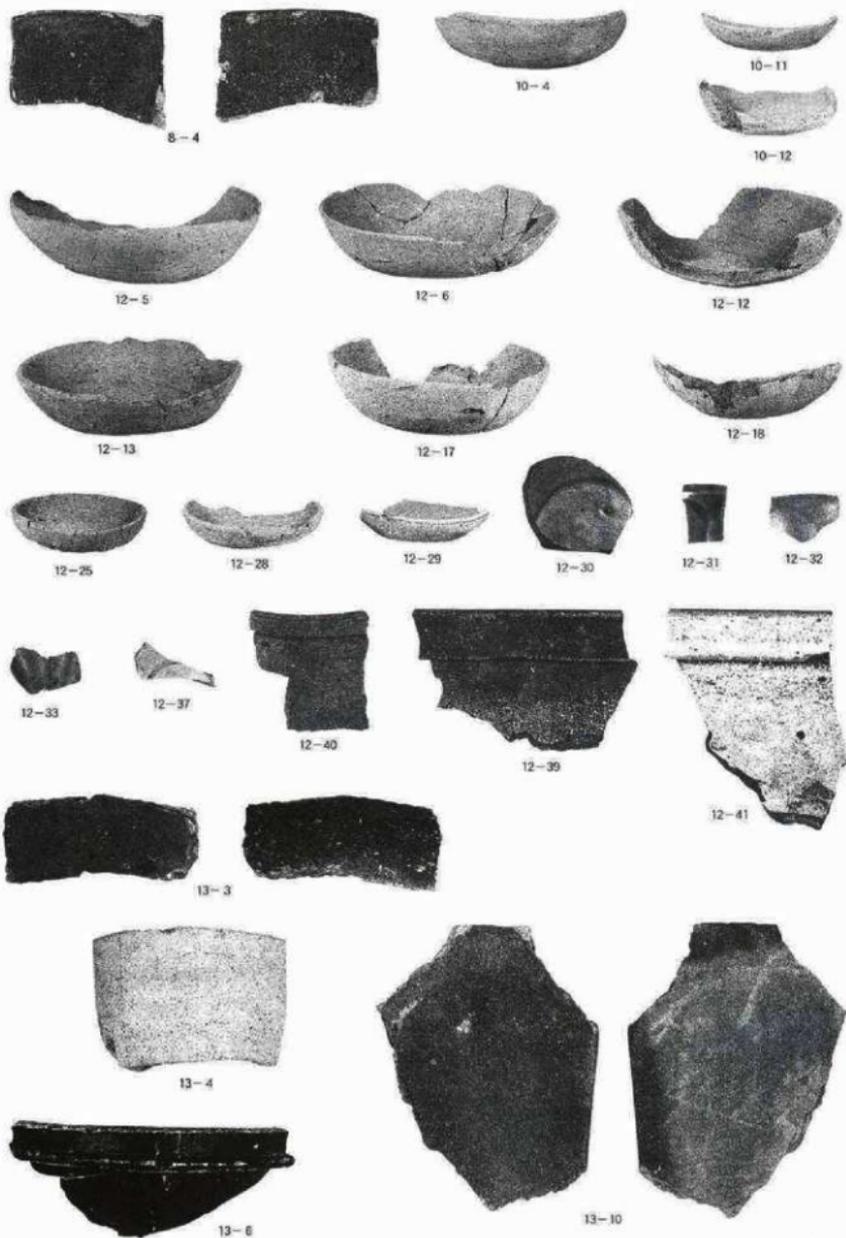


◀ 調査区B
II区トレンチ (北より)

▶ 同上
南壁土層



◀ 調査区B
南壁土層



出土遺物 (1)

图版 9



15-7



15-13



15-15



15-17



15-18



15-21



15-19



15-20



15-26



15-27



15-34



15-34



17-5



15-41



17-10



2面



1面



1面



20-11



20-3



5面



20-4



20-5



20-7



20-8

出土遺物 (2)



20-9



20-15



20-17



20-18



20-19



20-27



20-28



20-29



20-30



20-33



20-37



23-6



23-16



23-11



23-12



23-13



23-14



23-15



23-16



23-17



23-22



23-23



23-24



26-4



26-8



26-9



26-10



26-11



26-12



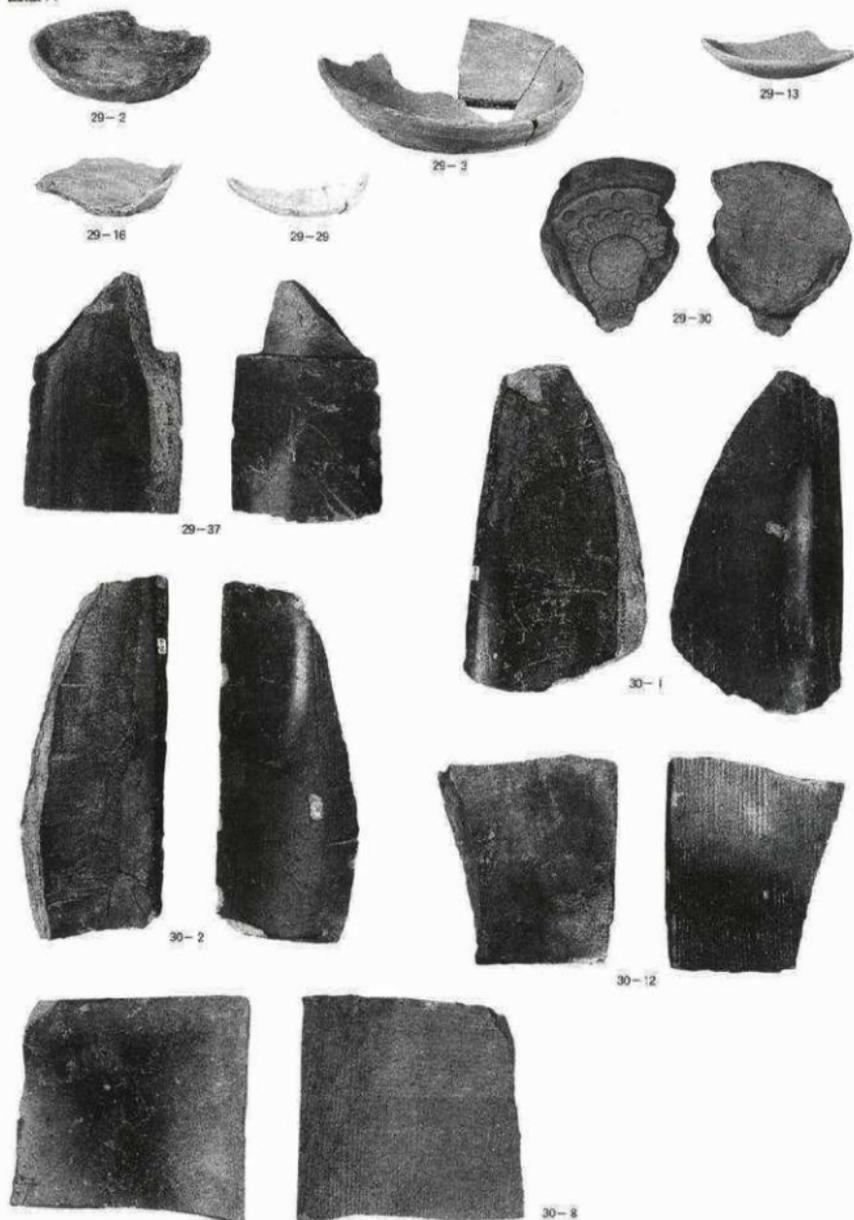
26-14



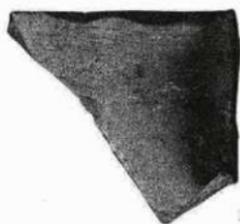
26-16

出土遺物 (3)

图版11



出土遺物 (4)



31-1



31-2



31-4



31-18



33-5



33-6



33-7



33-11



33-13



33-15

出土遺物 (5)

さすけが やつ い せき
佐助ヶ谷遺跡 (No. 203)

佐助一丁目450番5外

佐助一丁目450番29外

例 言

【調査区A】

1. 本書は、鎌倉市佐助一丁目450番5外地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号はSM0である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成18年6月29日～7月30日である。
3. 調査の体制は以下のとおりである。
調査の主体
鎌倉市教育委員会
調査担当
滝澤晶子（日本考古学協会会員）
調査補助員
安達澄代・安藤龍馬・倉片尚子
調査協力者
大戸迫猛・沼上三代治・藤枝正義・宝珠山秀雄・中路正明（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。
第1章 宮田眞・第2章～第4章 編集 滝澤晶子
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。
遺構図版 坂倉美恵子 遺構写真 滝澤晶子
遺物図版 宇賀神雅子・坂倉美恵子 遺物写真 滝澤晶子

【調査区B】

6. 本書は、鎌倉市佐助一丁目450番29外地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号はSNIである。
7. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成16年7月9日～8月6日である。
8. 調査の体制は以下のとおりである。
調査の主体
鎌倉市教育委員会
調査担当
滝澤晶子（日本考古学協会会員）
調査補助員
安達澄代・安藤龍馬・倉片尚子
調査協力者
大戸迫猛・沼上三代治・藤枝正義・宝珠山秀雄・中路正明（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
9. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。
第1章 宮田眞・第2章～第4章 編集 滝澤晶子
10. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。
遺構図版 坂倉美恵子 遺構写真 滝澤晶子
遺物図版 宇賀神雅子・坂倉美恵子 遺物写真 滝澤晶子

【共通】

11. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/40・1/60（遺構図の水糸高は海拔高を示す）
遺物実測図 1/3・1/8
12. 実測図には次の記号が使用されている。
箱の限界線 ----- 調整の変化点 ----- 使用痕の範囲 ←-----→ 加工痕の範囲 ←-----→
攪乱の範囲 ----- 推定ライン ----- 調査限界ライン -----
13. 遺物寸法表：() = 復元値・[] = 遺存値・単位は cm
14. 発掘調査に際して御理解・御協力をいただいた建築主に深く感謝の意を表す。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的背景	236
第2章 調査の概要	239
第3章 検出遺構と出土遺物	244
第1節 調査区A	244
第2節 調査区B	253
第4章 まとめ	265

図目次

図1 遺跡周辺図	237	図14 調査区B 1面遺構配置図	253
図2 遺跡位置図	239	図15 調査区B 土坑1, Pit 1	254
図3 確認調査土層図	240	図16 調査区B 2面遺構配置図	255
図4 グリッド配置図	241	図17 調査区B 3面遺構配置図	257
図5 調査区A 基本土層図	242	図18 調査区B 土坑2・3・4・7	258
図6 調査区B 南壁土層図	242	図19 調査区B 4a面遺構配置図	259
図7 調査区A 1面遺構配置図	244	図20 調査区B 4面遺構配置図	259
図8 調査区A 2面遺構配置図	246	図21 調査区B 土坑5・6・8	260
図9 調査区A 3a面遺構配置図	248	図22 調査区B 岩盤面	261
図10 調査区A 3面遺構配置図	249	図23 調査区B 土坑1, 1面出土遺物	262
図11 調査区A 柱穴列1・土坑1	250	図24 調査区B 2面, 土坑2・3・4, 3面出土遺物	263
図12 調査区A 擾乱, 1面, 2面, 3a面出土遺物	251	図25 調査区B 土坑8, 4面, 岩盤まで出土遺物	264
図13 調査区A 3面出土遺物	252		

図版目次

図版1 調査区A I区1面全景	266	図版4 調査区B III区3面全景	269
調査区A II区1面全景	266	調査区B IV区3面全景	269
調査区A I区2面全景	266	調査区B III区4a面炭化物検出状況	269
図版2 調査区A II区2面全景	267	図版5 調査区B IV区4面全景	270
調査区A I区3面全景	267	調査区B III区4面全景	270
調査区A II区3面全景	267	調査区B IV区岩盤面	270
図版3 調査区B III区1面全景	268	調査区B III区岩盤面	270
調査区B IV区1面全景	268	図版6 出土遺物 (1)	271
調査区B III区2面全景	268	図版7 出土遺物 (2)	272
		図版8 出土遺物 (3)	273

第1章 遺跡の位置と歴史的背景

本調査地は神奈川県鎌倉市佐助一丁目450番5外(調査区A)・佐助一丁目450番29外(調査区B)に所在する。JR横須賀線鎌倉駅を基点にすると、直線で西方約600メートルの距離にあり、地勢的に見ると佐助ヶ谷の入り口に当たる。調査地の背後(西側)山腹には鎌倉市立御成中学校がある。

佐助ヶ谷は、鎌倉の中心市街地を形成する平野部のやや西よりを深く北上する大きな谷で、調査地付近で南方に開口する。佐助ヶ谷の中心には佐助川が流れる。現在佐助ヶ谷には佐助稲荷神社、銭洗宇賀福神社が在り、谷戸の突き当たりの山頂には葛原岡神社が在る。銭洗宇賀福神社は通称銭洗い弁天と呼ばれ、境内の巖谷から湧き出す泉で洗ったお金を使うと増えて帰ってくるとの伝えがあり、巳の日はもちろん日曜祭日にも大勢の参拝客で大変な賑わいとなっている。葛原岡神社は、明治22年に鎌倉幕府討滅の一端を担った日野俊基を祭神として創建された神社である。

佐助ヶ谷の谷戸名称にはいくつかの由来がある。一つは上述の佐助稲荷神社の社伝に因るもので、「頼朝の夢に神堂が翁の姿で現れて、佐殿源頼朝に平氏討伐の旗揚げをすすめ頼朝を助けたので、佐助」というと云うもので、もう一つの説は、上総・千葉・常陸の三介の屋敷がこの谷戸内に在って、三介谷と呼ばれていたのが転訛して佐助ヶ谷となったという。しかし何れも正否の程は確かではない。

佐助ヶ谷は中世には「佐介」と言ったようである。これは『吾妻鏡』の北条時房(1175～1240)に関する記事に初見する。北条時房は北条時政の子、義時・政子の弟で「佐介氏」を名乗り、大仏殿と呼ばれている。その子北条時盛(1197～1277)は佐介に屋敷を持ち、北条朝直は佐介に悟真寺を創建したとされる。ちなみに朝直は大仏氏の祖である。鎌倉幕府滅亡後は、上杉憲基が谷戸内に邸を構えたようであるが、応永23年(1416)の上杉禅宗(氏蓮)の乱により焼き払われている。その後は鎌倉が衰退し都市としての機能を消失するに則し佐助も同様の途を辿ったようである。

佐助ヶ谷には上記した悟真寺のほかにも蓮花寺、国清寺があったというが寺の正確な位置等は不明。悟真寺は浄土宗。その創建については不明瞭な点が多いが、仁治元年(1240)以後に北条朝直が然阿良忠を招いて住持としたと伝う。蓮花寺は宗旨未詳。悟真寺と同じか?材木座光明寺の前身と伝える。国清寺は禅宗。康安年間(1361)畠山国清の創建であるが、応安元年(1368)上杉憲顕が亡父の菩提のために中興。応永二十三年(1416)の上杉禅宗の乱の際、禅宗の放火によって焼失、その後の経緯については不明。その他にも佐助ヶ谷の内には薬師堂、宝蓮寺、佐介谷禅房、七観音、天狗堂、北斗堂、法性寺、松谷寺、佐介松谷文庫、安達泰盛の松谷別荘などがあったと伝える。

本調査地付近の佐助ヶ谷では過去に複数地点で発掘調査が実施されており、往時の佐助ヶ谷の一端を窺い知る成果を得ている。

本調査地の南東約70mの距離に位置する図1-2・3地点では、平成8年5月20日～同年8月5日にかけて2軒の個人住宅新築に伴う発掘調査がほぼ同時に実施された。調査から13世紀中葉頃から15世紀初頭にかけての中世の生活面が5次期確認され、各期の礎石建物や溝、井戸、土坑等生活に密接に関係する遺構群が検出され、それに伴い多くの遺物の出土を見た。またトレンチによって下層に古代の遺跡の存在も確認されている。同じく調査地に近接する図1-4地点では、建築の関係から2面より古い層の調査はできなかったが、2面=14世紀前半頃、1面=14世紀末～15世紀前半頃の生活面が検出され、2面からは常滑の据置や礎石が見つかった。また最近(平成20年6月～9月)実施された図1-6地点では、現地表からおよそ2.5mの深さで15世紀代の雑壇状をした大規模な土丹造成が検出された。さらにその1m下層(2面)から13世紀後半頃に作られた木製護岸による溝が見つかり、一部で蓋をし

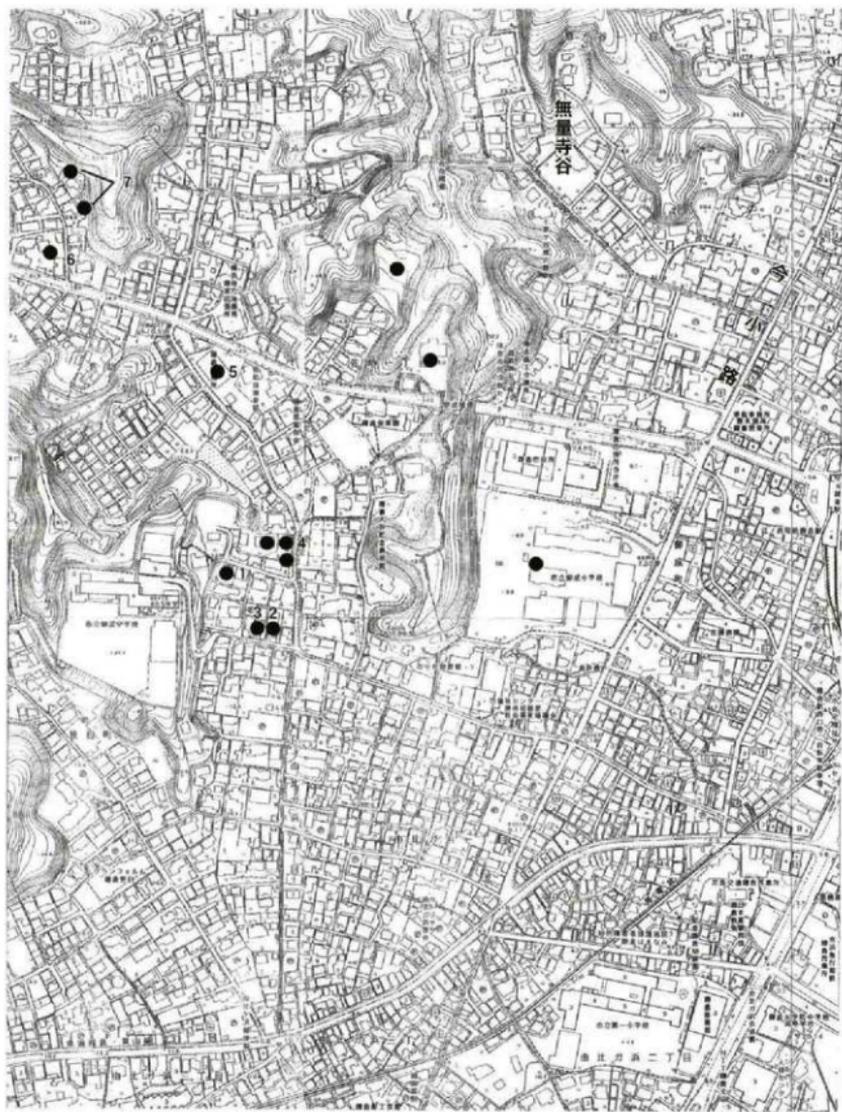


圖 1 遺跡周辺図

て暗渠を呈していた様相も確認された。またさらにこの溝に先行する断面菜研形をした溝が数条検出された。遺構の様相から寺院跡の一部と考えて良さそうである。また6地点の背後(北側)の谷の山裾(図1-7地点)にはやぐら群が展開しており、13世紀後半から14世紀前半代の壺類が蔵骨器として出土している。ちなみにこの地点には松谷寺跡の伝承が伝わる。さらに6地点の南東約200mの距離にある図1-5地点では、13世紀後半～15世紀にかけて7面8期に亘る生活面が検出された。中でも3期～5期面で検出された板囲い住居(建物)あるいは板壁掘立柱建物柱建物と呼ばれる建物は、今までの建物の概念-礎石建物・掘立柱建物柱建物・方形竪穴建築址から一線を画するものと言える。また大量の漆器碗皿を含む膨大な量・種類の木製品が出土しており、折敷の表裏両面を利用した建築の板図(指図)等も見つかっている。詳細は報告書に委ねるとして、調査者は寺院の中の工務所的な場であろうと推定している。

その他にも佐助ヶ谷内では、個人住宅に関わる小規模な調査は数多く実施されているが、今回は本調査地に比較的近い距離にある調査事例を一瞥するに止めることとする。

<参考文献>

- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第2分冊1～177頁) 佐助ヶ谷遺跡(佐助一丁目450番24地点、25・27地点)』平成10年3月 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第1分冊199～220頁) 佐助ヶ谷遺跡(佐助一丁目476番1地点)』平成14年3月 鎌倉市教育委員会
- 『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』1993年6月 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 『鎌倉虎寺事典』貫達人・川副武胤著 昭和55年12月 有隣堂
- 『鎌倉の地名由来事典』三浦勝男編 2005年9月 東京堂出版

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

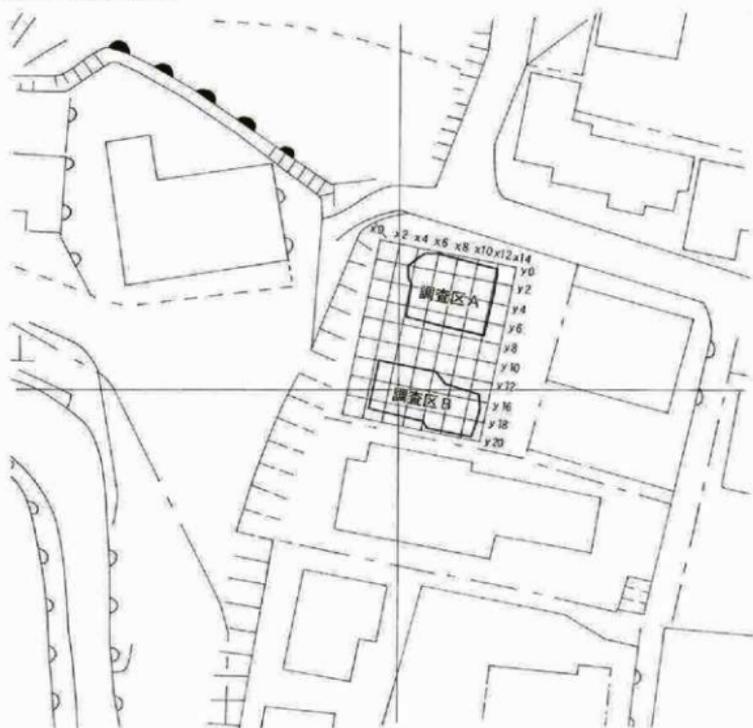


図2 遺跡位置図

調査は隣り合う2地点でほぼ並行して実施された。本報告書では北地点を「調査区A」、南地点を「調査区B」として報告する。(図2・4参照)

【調査区A】

調査区Aは鎌倉市佐助一丁目450番5外地点における個人住宅に伴う調査として実施した。平成16年5月11日・12日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下170cm前後から中世遺跡が確認された。それを受け、平成16年6月29日から7月30日にわたって本調査を実施した。調査対象面積は52.00㎡である。資料整理の際の遺跡の略記号はSM0である。なお、調査は廃土の都合上、東西に2分割して実施し、西部をⅠ区、東部をⅡ区とし、Ⅰ区調査終了後、Ⅱ区調査を実施した。遺物は遺物整理箱3箱出土した。

【調査区B】

調査区Bは鎌倉市佐助一丁目450番29外地点における個人住宅に伴う調査として実施した。

平成16年5月11日・12日に鎌倉市教育委員会により確認調査が隣接する敷地内で実施され、その結果、現地表下170cm前後から中世遺跡が確認された。それを受け、平成16年7月9日から8月6日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は47.30㎡である。資料整理の際の遺跡の略記号はSNIである。なお、調査は廃土の都合上、東西に2分割して実施し、西部をⅢ区、東部をⅣ区とし、Ⅲ区調査終了後、Ⅳ区調査を実施した。遺物は遺物整理箱4箱出土した。

確認調査は調査区A内、現地表下210cmまで掘削して行われた。その結果、は以下の通り。

- ・表土層：現地表下130cm。
- ・Ⅰ層：旧表土層（造成以前）黒褐色土層連歯・植木鉢・土管・瀬戸物・ビニール等ごみを多く含む。
- ・Ⅱ層：20～30cm大の大型土丹塊による地業層。薄手タイプのかわらけ（14世紀前半大）片を含む。
- ・Ⅲ層：暗褐色粘質土層：小型の土丹辺を含む。Ⅱ層同様薄手タイプのかわらけ片を包含。

調査経過

【調査区A】

- 平成16年6月28日 Ⅰ区調査開始。重機による表土掘削。
- 6月29日 人力による調査開始。第1面まで粗掘り。
- 6月30日 作業員3名参加。
- 7月2日 1面検出終了。全景撮影。
- 7月5日 2面まで粗掘り。遺構検出作業。
- 7月6日 2面全景。
- 7月7日 3面（岩盤面）まで掘り下げ。
- 7月8日 3面全景。Ⅰ区調査終了。
- 7月12日 Ⅱ区調査開始。重機による表土掘削。
- 7月15日 1面まで掘り下げ。測風原点移動。
- 7月20日 1面全景。
- 7月21日 2面まで掘り下げ。
- 7月23日 2面全景。
- 7月27日 3面まで掘り下げ。3a面検出。
- 7月28日 3面全景。
- 7月29日 台風10号。
- 8月2日 現地調査終了。

【調査区B】

- 平成16年7月8日 Ⅲ区調査開始。重機による表土掘削。
- 7月9日 人力による調査開始。第1面まで粗掘り。
- 7月14日 1面検出終了。全景撮影。
- 7月15日 2面まで粗掘り。遺構検出作業。
- 7月16日 2面全景。

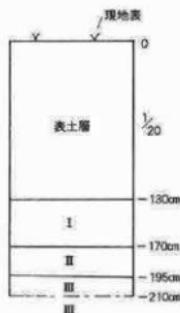


図3 確認調査土層図

- 7月20日 3面調査。土坑2～4検出。
- 7月21日 3面全景。4面まで粗掘り。
- 7月22日 4面全景。
- 7月23日 トレンチで4面下(岩盤)確認。全景。
- 7月27日 III区埋め戻し。IV区調査開始。重機による表土掘削。
- 7月30日 1面まで粗掘り。
- 8月2日 1面全景。2面まで掘り下げ。2面全景。
- 8月3日 3面まで掘り下げ。3面全景。
- 8月4日 4面まで粗掘り。
- 8月5日 4面全景。4面下(岩盤)確認トレンチ調査。
- 8月6日 現地調査終了。

2. 調査区の位置とグリッド配置

調査区は建物建設予定範囲に対し、周辺に配慮しつつ図2に示したように設定された。位置は北緯35度19分05秒、東経139度32分35秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。図4に示したように、調査区Aと調査区B共通のグリッドを設定している。グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。

A地点：グリッド(x4.093, y10.936) = 国土座標[旧日本測地系](X-75957.264, Y-26088.000) = 国土座標[世界測地系](X-75600.540, Y-26381.411)

B地点：グリッド(x5.491, y17.836) = 国土座標[旧日本測地系](X-75964.306, Y-26088.000) = 国土座標[世界測地系](X-75607.583, Y-26381.411)

C地点：グリッド(x1.790, y15.215) = 国土座標[旧日本測地系](X-75961.000, Y-26091.097) = 国土座標[世界測地系](X-75604.277, Y-26384.508)

D地点：グリッド(x8.308, y13.898) = 国土座標[旧日本測地系](X-75961.000, Y-26084.450) = 国土座標[世界測地系](X-75604.277, Y-26377.861)

グリッドy軸は北から11度30分東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドyマイナス方向を北と呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層(図5・6)

【調査区A】(図5)



図4 グリッド配置図

現地表は海拔13.6m前後のほぼ平坦面。表土層は厚く、現地表から1.9mの厚さがあった。1面は海拔11.7m前後、その下20cm、海拔11.5m前後に2面、調査区東部2面下20cmに3面、2面及び3面下に海拔11.4~11.0cm前後に第3面が検出された。第3面は西部が海拔11.4m前後で、岩盤削平面である。この岩盤面にすり合わせるようにやや傾斜して、大土丹で埋め立てた面が海拔11.15~11.0m前後に検出された。各層位の土層注記は第3章(図10)で詳細に報告する。

【調査区B】(図6)

基本土層は調査区南壁2ヶ所で記録し、その測点は図22に示してある。

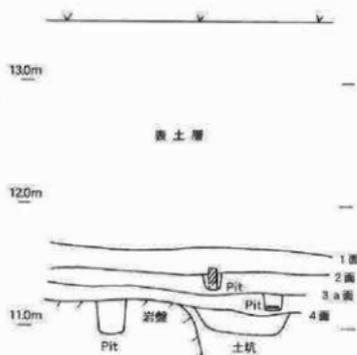


図5 調査区A 基本土層図

表 土 層

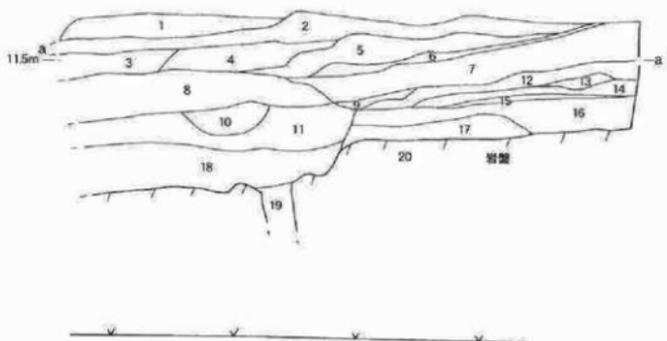


表 土 層

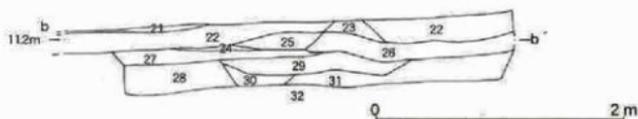


図6 調査区B 南壁土層図

調査区B 南壁土層注記表

番号	色 調	土 質	内 容	粘 性	締 り	備 考
1	茶褐色	粘質土	大土丹多	—	とてもよい	
2	茶褐色	粘質土	炭化物・小土丹粒・かわらけ細片	なし	とてもよい	1面
3	茶褐色	粘質土	1～5cm大の土丹やや多・炭化物少	なし	とてもよい	
4	暗茶褐色	土丹層	0.5cm大の土丹多・かわらけ片・5cm大の土丹少	—	とてもよい	
5	暗茶褐色	粘質土	1～3cm大の土丹多・炭化物やや多・かわらけ片やや多	—	とてもよい	
6	—	炭化物層	かわらけ片	—	—	
7	茶褐色	粘質土	0.5cm・1～3cm・5～10cm大の土丹(小さい方が多)・かわらけ片・炭化物	—	よい	
8	暗茶褐色	粘土	3cm大の土丹多・10cm大の土丹・炭化物(大)少	—	とてもよい	
9	—	炭化物層	—	—	—	
10	暗褐色	粘質土	3～5cm大の土丹多・かわらけ・炭化物	ややあり	よい	
11	暗褐色	粘質土	1～10cm大の土丹多・炭化物・かわらけ・褐鉄	—	とてもよい	
12	茶褐色	粘質土	1cm大の土丹とても多	—	とてもよい	2面
13	暗茶褐色	粘質土	炭化物を帯状に含む	—	—	
14	—	土丹地業層	良好な地業	—	とてもよい	3面
15	—	炭化物層	—	—	—	
16	—	土丹地業層	非常に良好な地業	—	とてもよい	4面
17	灰褐色	粘質土	1～5cm大の土丹・かわらけ・炭化物	とても強い	ややわるい	
18	灰褐色	粘土	17層に似る	17層よりさらに強い	わるい	
19	—	土丹埋立層	大小の土丹が詰まった層岩盤の亀裂に土丹塊が入り込んだ様	—	—	
20	—	岩盤	—	—	—	
21	明茶褐色	粘質土	1cm大の土丹やや多・3cm大の土丹少・かわらけ細片少・炭化物少	あり	とてもよい	
22	明茶褐色	粘質土	1～3cm大の土丹多・かわらけ片・炭化物少	あり	とてもよい	2面
23	灰味茶褐色	粘質土	0.5cm以下の土丹・炭化物	あり	よい	
24	明茶褐色	粘質土	帯状に小土丹・炭化物	あり	よい	
25	灰味茶褐色	粘質土	23層に1～3cm大の土丹を足す	強い	ふつう	
26	灰味茶褐色	粘質土	0.1～0.5cm大の土丹粒やや多・5cm大の土丹少・炭化物少	強い	よい	
27	灰味茶褐色	粘質土	短い帯状に0.1～0.5cm大の土丹粒と砂・かわらけ片・炭化物少	あり	とてもよい	3面
28	灰味茶褐色	粘質土	5cm大の土丹少・かわらけ片少	とても強い	ふつう	
29	灰味茶褐色	粘質土	3cm大の土丹・炭化物少・0.1cm大の小土丹粒	とても強い	よい	やや茶色が強い
30	灰味茶褐色	粘質土	5cm大の土丹やや多	とても強い	ややわるい	
31	灰味茶褐色	粘質土	1～3cm大の土丹多・炭化物・かわらけ片	あり	ふつう	
32	青味黒灰色	粘質土	1～3～5cm大の土丹とても多・かわらけ細片・炭化物・木片	あり	よい	4面

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節【調査区A】

今回の調査からは合計4面の生活面が確認された。ただし、3a面は調査区東部のみに確認された岩盤直上の地業面である。また、廃土の都合上、調査区を東西に二分割して調査を行ったため、下層に調査が進むに従って、崩落の危険等を考慮して調査区が若干狭まったのに伴い、調査区中央部が未調査となってしまうている。

第1面(図7)

第1面は現地表下190cm、海拔11.7m前後に検出された平坦な面である。遺構は検出されず、グリッド(x11, y2)付近の攪乱底部付近、海拔11.75mに鎌倉石の切り石が1個検出している。

出土遺物(図12-1~15)

図12-1は攪乱出土の瀬戸のおろし皿である。胎土は灰白褐色を呈し、器表には灰釉がかかる。口縁上端から外面は剝離している。

図12-2~15は1面覆土出土遺物である。2~9は軸輪成形のかわらけ。2は中皿で、3~9は小皿

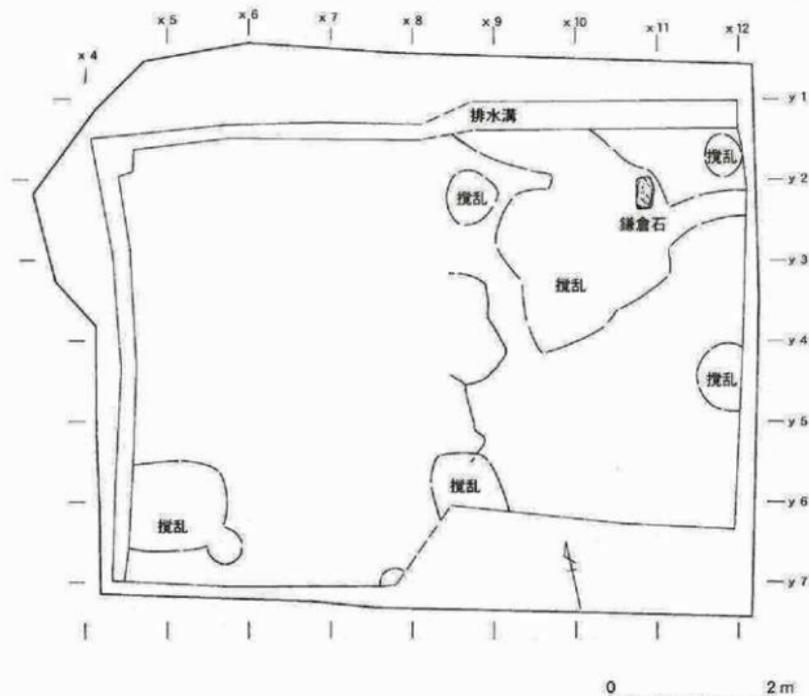


図7 調査区A 1面遺構配置図

である。2・4・5は薄手丸深タイプ。胎土は橙色～淡橙色を呈し、砂を若干多く含むが、粉質。2・4・6は灯明皿として使用している。10は瀬戸のおろし皿の底部片。胎土は灰褐色を呈し、器表には灰軸がかかる。11は山茶碗窯系こね鉢の底部片。胎土は灰白色を呈し、白色石を含むが、比較的均一な胎土で、硬質。内面は磨滅して滑らか。12は常滑のこね鉢。注ぎ口部分の破片。胎土は黒灰色を呈し、白色石を多く含み、粗い。器表は赤茶褐色を呈し、内面には薄く降灰する。13・14は瓦質の手焙り。13は底部片。胎土は灰色、器表は黒灰色を呈し、砂を多く含む。14は脚部。胎土は赤みのある白褐色を呈し、外面は磨かれ光沢がある。15は研磨痕のある常滑片。

図	番号	層位	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
12	2	1面	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	(5.8)	3.3
12	3	1面	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.4	1.9
12	4	1面	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.4)	2.0
12	5	1面	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.4	2.0
12	6	1面	かわらけ	轆轤成形	8.5	5.8	1.8
12	7	1面	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.5
12	8	1面	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.6)	1.6
12	9	1面	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.4)	1.7
12	15	1面	常滑片	研磨痕あり	2.8	4.6	2.8

第2面(図8)

第2面は1面下20cm前後、海拔11.5m付近に検出された面である。Pit 8口が検出された。また、調査区北西隅には海拔11.55m前後に岩盤が確認されている。

Pit 1

グリッド(x7, y5)付近、海拔11.56m前後に検出された。平面形は直径52cmを測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後と浅い。

Pit 2

グリッド(x7, y3)付近、海拔11.56m前後に検出された。平面形は直径32cmを測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後と浅い。

Pit 3

グリッド(x7, y2)付近、海拔11.56m前後に検出された。平面形は直径24cmを測る円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。

Pit 4

グリッド(x5, y3)付近、海拔11.54m前後に検出された。平面形は直径40cmを測る円形を呈し、深さは検出面から5cm前後を測るごく浅い掘り込みである。Pit というよりは窪みとしたほうがよいであろう。

Pit 5

グリッド(x9, y2)付近、海拔11.45m前後に検出された。平面形は直径20cmを測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。柱根が遺存している。

Pit 6

グリッド(x9, y2)付近、海拔11.45m前後に検出された。平面形は直径35cmを測る不整形円形を呈し、深さは検出面から5cm前後と浅い。

Pit 7

グリッド(x10, y3)付近、海拔11.4m前後に検出された。平面形は直径24cmを測る円形を呈し、深さは検出面から40cm前後を測る。

Pit 8

グリッド(x7, y4)付近、海拔11.45m前後に検出された。平面形は直径24cmを測る円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。柱根が遺存している。

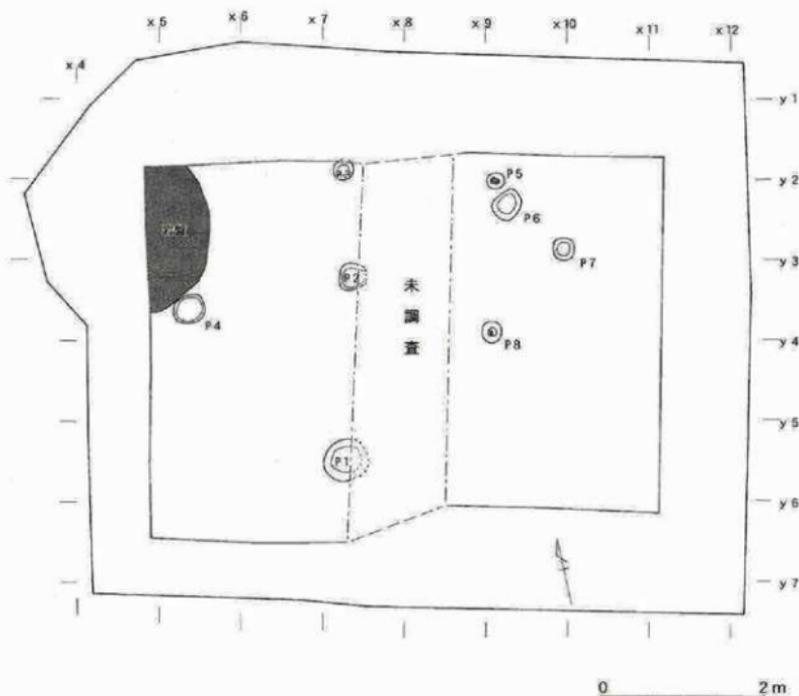


図8 調査区A 2面遺構配置図

以上、第2面からは計8口のPitが検出されたが、建物等の柱並びはつかめなかった。また、中には掘り込みが10cm以下のものも多く、柱穴で無いもの含まれている可能性もある。

出土遺物 (図12-16~40)

図12-16~40は2面出土遺物。ただし、19はPit 3出土遺物である。16~23は轆轤成形のかわらけ。16は大皿、17・18は中皿、19~23は小皿である。16~18・23は薄手丸深タイプ。18・19・23は灯明皿。胎土は橙色あるいは淡橙色を呈し、微砂を含み粉質。ただし、22は微砂が多く含まれ、ざらつく。24~27は船載品。24は青磁蓮弁文碗。素地は灰味白色を呈し、緻密。釉調は青緑色を呈し、微気泡多く失透している。光沢はない。25は青白磁梅瓶の胴部片。素地は灰味白色を呈し、緻密。釉調は水青色を呈し、再火を受け肌荒れ著しい。26は天目茶碗。素地は黒灰色を呈し、白色微粒を含み、硬く焼きしまっている。釉調は不透明な黒色で、表面には細かく不目目が密に入っている。27は緑釉の盤。少量の破片しか検出されなかったため不確かだが、口径は復元で32cmを測る。内底面には暗文が施されているようだが、破片の量が少ないため、詳細は不明。素地は橙色を呈し、白褐色粘土粒を大小含む。28~30は瀬戸。28は壺の肩部片。沈線が一条めぐる。胎土は灰白色を呈す。外面には灰釉がやや厚くかかる。29は折れ鉢。素地は灰白色を呈し、器表には灰釉がかかる。外面は剥離し、内面は肌荒れしている。30はおろし皿。胎土は灰白色を呈し、器表には灰釉が薄くかかる。31・21は山茶碗窯系こね鉢。胎土は31が黒灰褐色、32が灰色を呈す。32の器表には自然釉がやや厚くかかる。33~38は常滑。33

～35は甕。36はこね鉢。37・38は甕転用こね鉢である。概ね第6b形式～第7形式。ただし35は上層からの混入品であろう。胎土は、33は赤橙色、34・35は橙色（胎芯は黒灰色）、36・37は黒灰色、38は茶褐色を呈し、白色石粒をやや多く含み粗い。器表は概ね赤茶褐色を呈し、甕の外面には自然釉がかかる。33の自然釉は白濁している。39は瓦質の手焙り。胎土は黒灰色を呈し砂を多く含む。40は中砥。やや赤味のある黄褐色の凝灰岩。

図	番号	層位	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
12	16	2面	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.8)	3.7
12	17	2面	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	6.5	2.8
12	18	2面	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	(6.6)	2.9
12	19	2面	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	5.5	2.3
12	20	2面	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.1)	1.8
12	21	2面	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.6	1.9
12	22	2面	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.2)	1.5
12	23	2面	かわらけ	轆轤成形	(7.0)	(4.7)	2.1
12	27	2面	鉢	盤	(32.0)	(25.2)	6.3
12	34	2面	常滑	甕	(24.0)	-	-
12	40	2面	石製品	中砥	6.9	[3.1]	1.7

第3a面(図9)

第3a面は2面下20cm前後、海拔11.3m付近に検出された。調査区東部のみに検出された土丹地業面で、第3面の貼り増し面であろう。西部はすでに岩盤面が同一レベルで検出されている。Pitが7口検出された。

Pit 9

グリッド(x10, y2)付近、海拔11.26m前後に検出された。平面形は直径20cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から25cm前後を測る。

Pit 10

グリッド(x11, y3)付近、海拔11.24m前後に検出された。平面形は直径20cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。

Pit 11

グリッド(x11, y3)付近、海拔11.24m前後に検出された。東部は調査区外。平面形は直径25cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。

Pit 12

グリッド(x8, y4)付近、海拔11.3m前後に検出された。平面形は直径30cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から15cm前後を測る。

Pit 13

グリッド(x11, y4)付近、海拔11.24m前後に検出された。平面形は直径20cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から15cm前後を測る。

Pit 14

グリッド(x9, y4)付近、海拔11.24m前後に検出された。平面形は直径25cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。底部には木製礎板が遺存している。

Pit 15

グリッド(x11, y5)付近、海拔11.24m前後に検出された。平面形は直径35cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。底部には木製礎板が遺存している。

3a面検出のPitはPit14とPit15に礎板が遺存しており、芯々で210cmの距離に位置しているものの、それ以上の展開がつかめず、建物等の詳細は不明である。

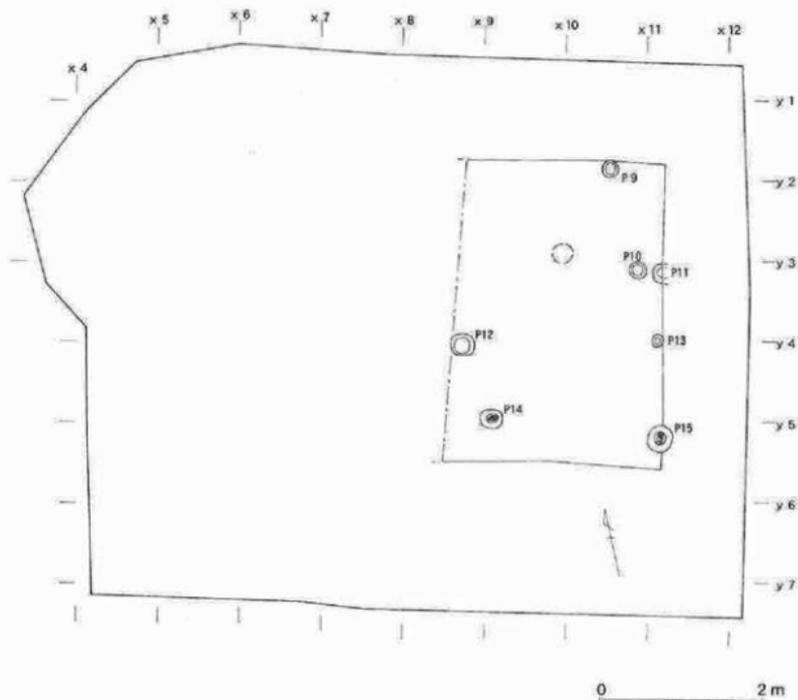


図9 調査区A 3a面遺構配置図

3a面出土遺物 (図12-41・42)

図12-41・42は3a面出土遺物である。41は常滑のこね鉢。器表は磨滅している。胎土は灰白色を呈し、器表は暗赤茶褐色を呈す。小粒の白色石をやや多く含む。42は研磨痕のある常滑片。断面3面がかなり磨滅している。

図	番号	層位	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
12	42	3a面	常滑片	研磨痕あり	5.7	6.6	1.3

第3面 (図10)

第3面は東部3a面下15~20cm、西部2面下10cm前後、海拔11.0~11.4m付近に検出された岩盤および土丹埋め立て面である。第3面は西から東に向かって下り、調査区内で40cm前後の高低差がある。また、調査区中央付近、x7~9間の幅約1mの範囲は廃土の都合上未調査となってしまうが、それ以西が岩盤面であるのに対し、それ以东は北西隅に岩盤があり、その他は20cm以上の大土丹により埋立てられている。Pit 5口・土坑1基が検出された。

柱穴列1 (図11)

グリッド(x5, y2)付近、海拔11.5~11.4m前後に検出された。3口のPitから成る南北方向の柱穴列である。おそらく、調査区外に広がる。岩盤面を削り抜いている。柱穴間の距離は芯々で200cmを

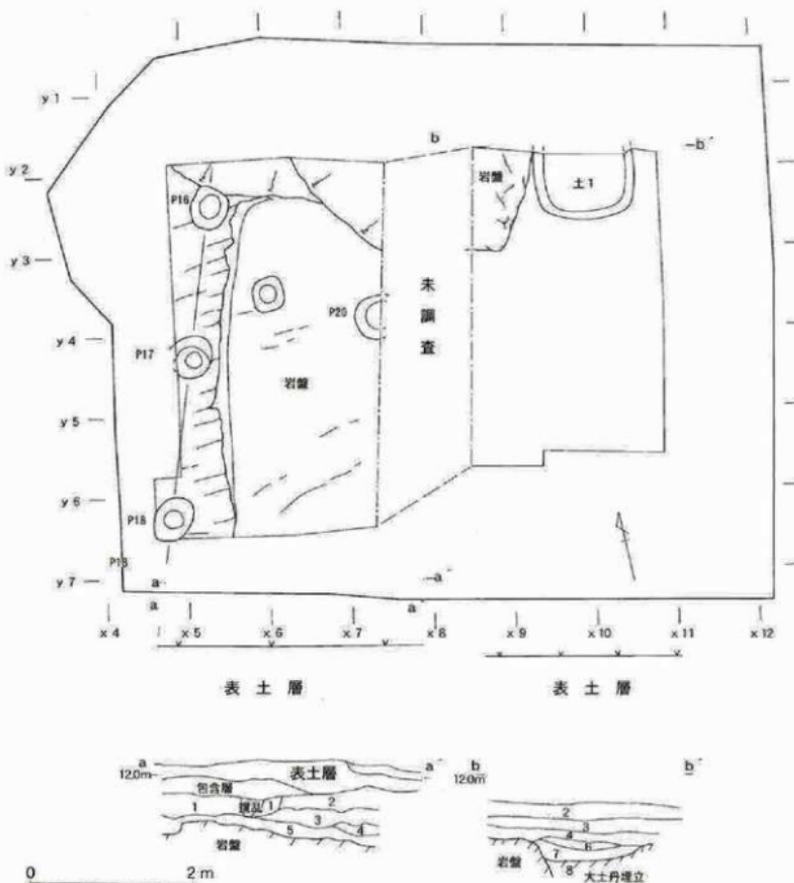


図10 調査区A 3面遺構配置図

測る。柱穴はいずれも最大直径50cm程度を測る不整形円形を呈し、深さは検出面からPit 17・18は40cm、Pit 16は30cmを測る。南北軸線方向はN-20°-Eである。また、柱穴列1の東側は一段15~20cm前後低くなっている。

Pit 19

グリッド(x6, y3)付近、海拔11.3m前後に検出された。岩盤を削り抜いている。平面形は最大径40cm前後を測る不整形丸方形を呈し、深さは検出面から28cm前後を測る。

Pit 20

グリッド(x7, y3)付近、海拔11.3m前後に検出された。岩盤を削り抜いている。平面形は東部は未調査であるが、おそらく直径55cmを測る円形を呈し、深さは検出面から15cm前後を測る。Pit 19とPit 20の関連は不明。

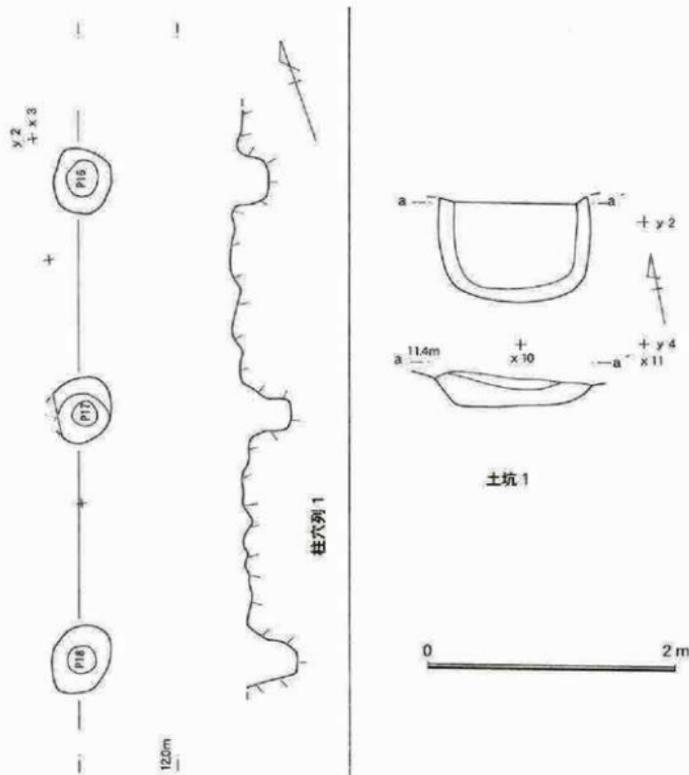


図11 調査区A 柱穴列1、土坑1

土坑1 (図11)

グリッド (x9, y2) 付近、海拔11.2m前後に検出された。北部は調査区外。東西幅124cm、深さは検出面から30cm前後を測る。覆土は以下の通り。

1層：暗茶褐色粘質土層 褐鉄・0.5cm大の土丹多い。5.0cm大の土丹少量。炭化物少量。粘性やや強い。縮まり普通。

2層：黒灰色粘質土層 0.5~1.0cm大の土丹多い。5.0~10.0cm大の土丹少量。炭化物少量。粘性強い。縮り悪い。

土層 (図10) 注記

1層：暗灰色粘質土層 かわらけ片・炭化物・土丹1~10cm大が多い。粘性あり。縮り良い。

2層：灰味茶褐色粘質土層 0.5~5.0cm大の土丹とても多い。炭化物。粘性あり。縮り良い。

3層：暗茶褐色粘質土層 0.1~1.0cm・3.0cm大の土丹とても多い。炭化物やや多い。粘性あり。縮り良い。

4層：暗灰色粘質土層 上層は良好な土丹地業。下層は粘土多い。1.0~5.0cm大の土丹。炭化物。粘性あり。縮り良い。

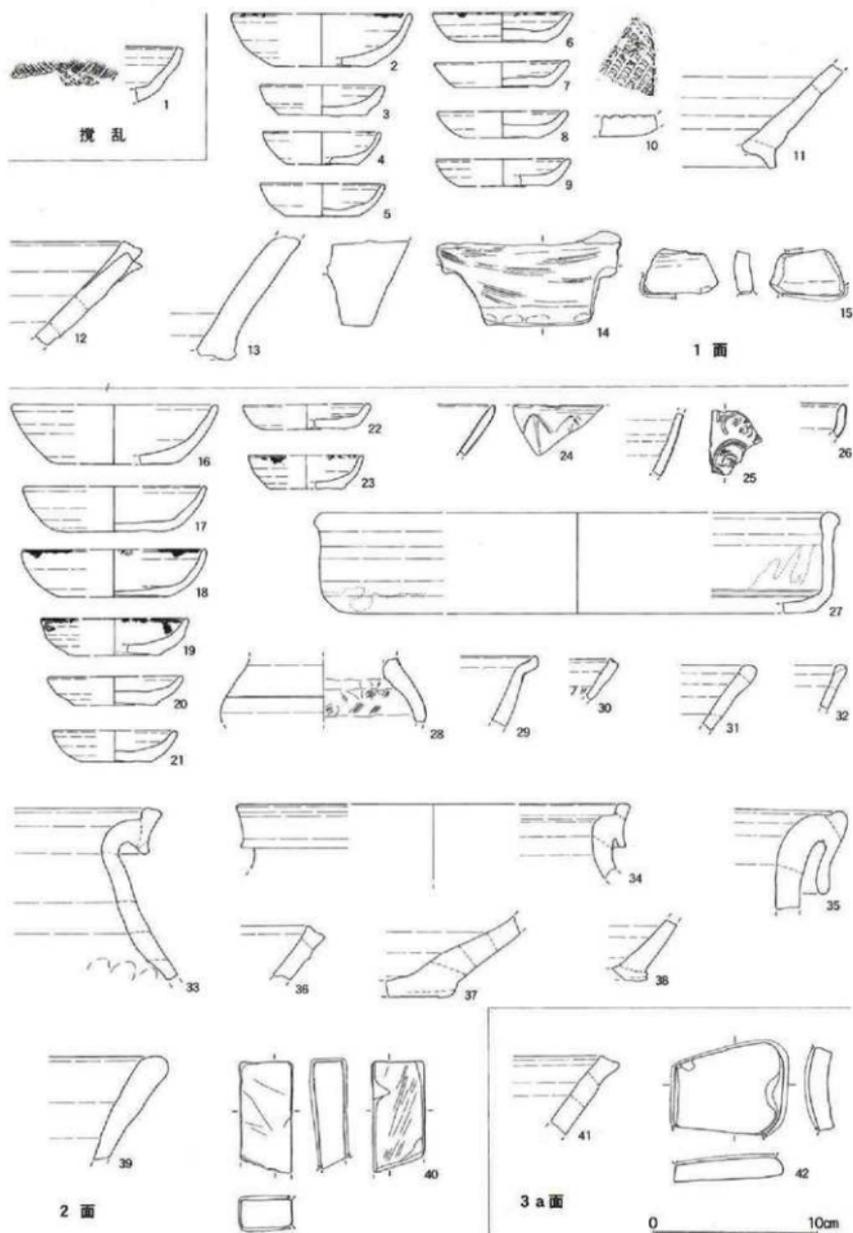


图12 調查区A 攪乱、1面、2面、3 a面出土遺物

5層：暗褐色粘質土層 かわらけ片・炭化物を少量。0.5～15.0cm大の土丹。粘性あり。締りや悪い。

6層・7層：土坑1覆土

8層：20cm以上の土丹による埋め立て層。

3面出土遺物（図13）

1～13は轆轤成形のかわらけ。1～6は大皿。1～3は口径に対して底径が大きく、器壁は直線的で、側面観は逆台形を呈す。4～6は器壁が丸味を持って立ち上がる。胎土は粉質で、1から3・5は微砂を多く含みざらつく。1・6は肌色系、2・3は淡橙色系、4は灰褐色系、5は再火を受け変色し、一部黒色になり、橙色系を呈す。7～12は小皿。胎土は微砂を含み粉質で、7・9は橙色系、その他は肌色を呈す。12は極端に器高が低く、内高も浅い。13は穿孔かわらけ。底部中央に直径1.3cmの穴があげられている。14は白磁口元皿。釉調は灰白色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は灰色を呈す。15・16は常滑の裏転用こね鉢。おそらく同一個体。胎土は黒灰色を呈し、白色石粒を含み硬質。器表は赤橙色を呈す。内面はかなり磨滅している。17は瓦質の手培り。胎土は灰白色を呈し、微砂を多く含み粗い。

図	番号	層位	製品名（産地等）	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
13	1	3面	かわらけ	轆轤成形	12.5	9.4	3.2
13	2	3面	かわらけ	轆轤成形	12.2	7.8	3.4
13	3	3面	かわらけ	轆轤成形	12.2	8.8	2.9
13	4	3面	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	8.0	3.1
13	5	3面	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	7.5	2.9
13	6	3面	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	7.6	2.8
13	7	3面	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.6	1.9
13	8	3面	かわらけ	轆轤成形	8.4	5.8	1.8
13	9	3面	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	1.6
13	10	3面	かわらけ	轆轤成形	(8.1)	6.1	1.8
13	11	3面	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.6
13	12	3面	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.4	1.6
13	17	3面	穿孔かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.8)	3.5

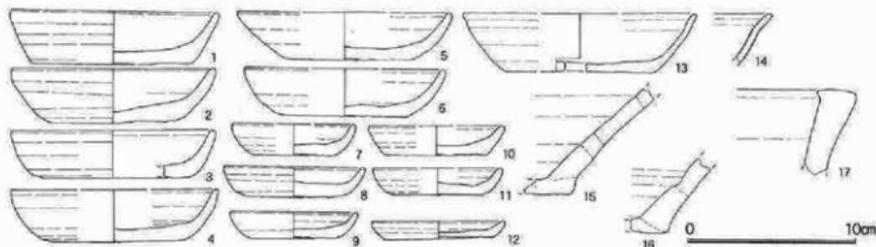


図13 調査区A 3面出土遺物

第2節【調査区B】

調査区Bからは合計5面の生活面が確認された。ただし、4a面は調査区西部にのみ検出された。また、廃土の都合上、調査区を東西に二分割して調査を行ったため、下層に調査が進むに従って、崩落の危険等を考慮して調査区が若干狭まったのに伴い、調査区中央部が未調査となっている。

第1面 (図14)

第1面は現地表下150cm、海拔11.5m前後に検出された平坦な面である。調査区東側南部には土丹地帯が施されている。土坑1基、Pit3口が検出され、グリッド(x4, y16)付近調査区際には炭化物がまとまって検出された。

土坑1 (図15)

土坑1はグリッド(x6, y14)付近、海拔11.5m前後に検出された。平面形は直径125cmを測るやや不整形の円形を呈し、深さは検出面から34cm前後を測る。

Pit 1・3・4 (図15)

1面からは3口のPitが検出された。これらのPitは位置に規則性がなく、お互いの関連は不明である。Pit1の中央には竹が検出された。

出土遺物 (図23)

図23-1・2は土坑1出土遺物である。1は輪轆成形のかわらけ。胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含む。2は瀬戸のおろし皿。灰釉が雑にかけられ、胎土は灰白色を呈す。また、牛の歯が1個出土している。図23-3~24は1面覆土出土遺物である。3~13は輪轆成形のかわらけ。3は大皿、4は中皿、5~13は小皿である。4・7~12は薄手丸深タイプ。概ね胎土は橙色~淡橙色を呈し、砂を若干多く含むが粉質。3・5・11は微砂が少ない。9は灯明皿として使用している。13は穿孔かわらけ。底部

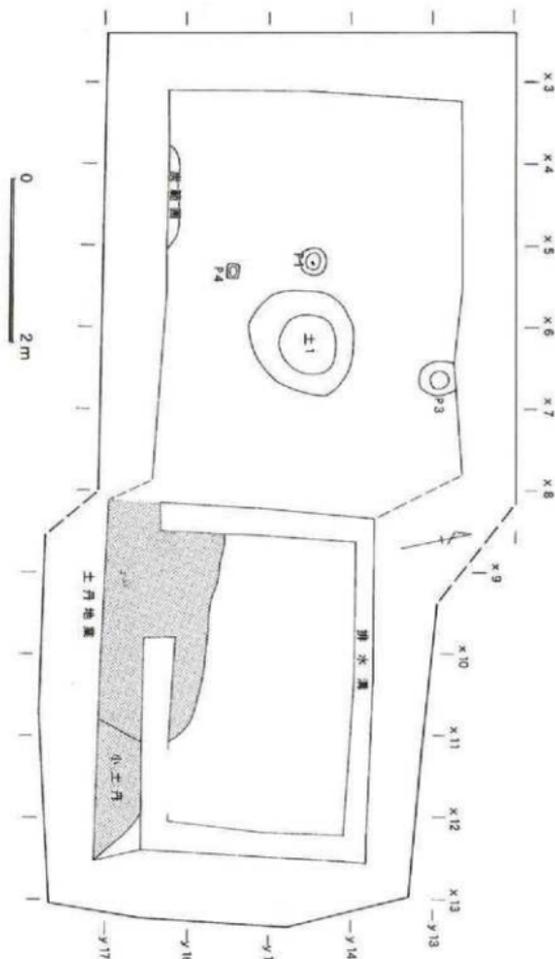


図14 調査区B 1面遺構配置図

に10ヶ所穴があけられている。用途は不明。14は瀬戸のおろし皿の底部片。胎土は白褐色を呈し、器表には灰釉がかかる。15～19は常滑。15・16は甕の底部片、17～19はこね鉢の口縁部片である。胎土は15が橙褐色、その他は黒灰色を呈し、白色石を多く含み、粗い。器表はいずれも赤茶褐色を呈し、器表は薄く降灰する。20は魚住のこね鉢。口縁端は下部が膨らみ、三角形を呈す。胎土は灰色を呈し、白色微粒を多く含む。口縁外面は黒灰色を呈し、若干光沢がある。21は瓦質の手焙り。胎土は橙色を呈し、器表は黒色処理されている。また外面には巴文のスタンプが押されている。22・23は硯。いずれも赤紫色を呈す粘板岩である。24は砥石。伊予産の中砥。牛の歯が1個出土している。

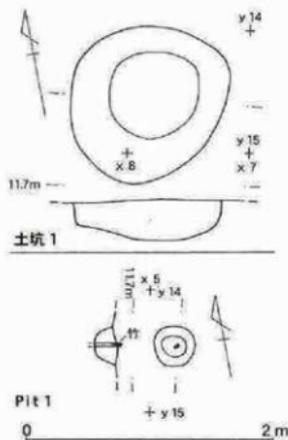


図15 調査区B 土坑1、Pit 1

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
23	1	1面	土坑1	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.4)	3.1
23	3	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.4
23	4	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(10.6)	6.3	3.2
23	5	1面	—	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.2	1.5
23	6	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.0	1.8
23	7	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(4.8)	2.0
23	8	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.6	1.9
23	9	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.8	2.1
23	10	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.3	2.0
23	11	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.5	2.3
23	12	1面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.0)	4.2	2.1
23	13	1面	—	穿孔かわらけ	轆轤成形	(7.2)	4.4	1.7
23	15	1面	—	常滑	甕	—	(13.0)	—
23	17	1面	—	常滑	鉢	(28.0)	—	—
23	20	1面	—	魚住	こね鉢	(29.6)	—	—
23	22	1面	—	石製品	硯	[11.9]	[6.9]	2.3
23	23	1面	—	石製品	硯	[4.7]	3.1	1.2
23	24	1面	—	伊予産	中砥	[16.0]	6.5	[3.7]

第2面(図16)

第2面は1面下20cm前後、海拔11.3m付近に検出された土丹地業面である。Pit 1口が検出された。

Pit 5

グリッド(x4, y13)付近、海拔11.36m前後に検出された。平面形は直径20cmを測る円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。

出土遺物(図24-1~24)

図24-1~24は2面出土遺物。1~11は轆轤成形のかわらけ。1~4は大皿、5は中皿、6~11は

小皿である。5・6は薄手丸深タイプ。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み粉質。12は青磁蓮弁文碗。素地は灰色を呈し、緻密。釉調は黄灰色を呈し、微気泡やや多く器表は擦過傷のため光沢はない。13～15は瀬戸。13・14は入れ子。胎土は灰白色を呈し、口縁内側を中心に自然釉がかかる。15はおろし皿。胎土は灰白色を呈し、器表には灰釉が薄くかかる。16～21は常滑。16・17は甕。18～20はこね鉢。21は甕転用こね鉢である。胎土は概ね黒灰色を呈し、白色石粒をやや多く含み粗い。器表は16は黒灰色、その他は赤茶褐色を呈し、甕の外表面には自然釉がかかる。こね鉢の内面は磨滅している。22は平瓦。凸面は格子叩き。側面にはO印がスタンプされている。一部擦られている。23は瓦質の手焙り。胎土は黒灰色を呈し砂を多く含む。外面には菊花文のスタンプが押されている。24は滑石鍋の転用品。用途は不明。

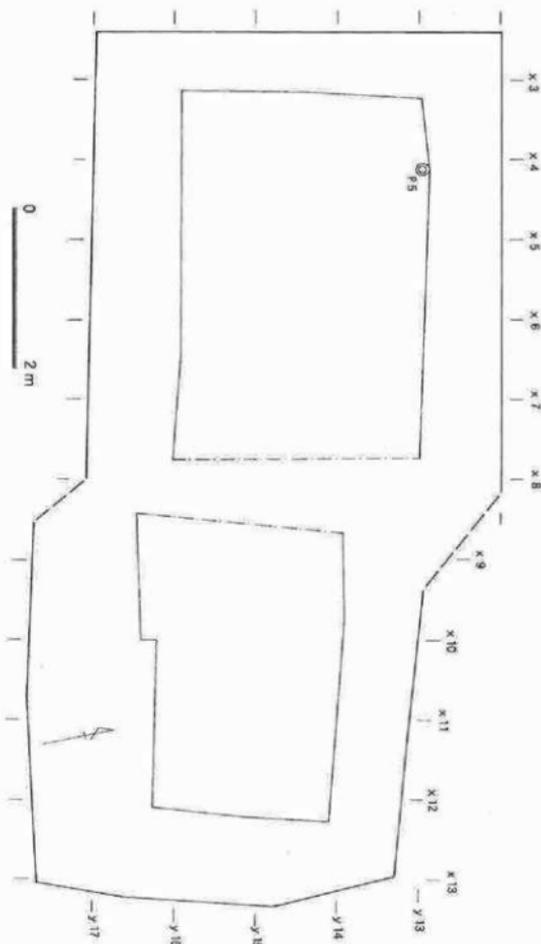


図16 調査区B 2面遺構配置図

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
24	1	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(9.0)	3.4
24	2	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.8)	7.4	3.3
24	3	2面	—	かわらけ	轆轤成形	12.9	8.4	3.6
24	4	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	5.5	2.3
24	5	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	(5.1)	1.8
24	6	2面	—	かわらけ	轆轤成形	7.3	4.6	1.9
24	7	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.2)	1.5
24	8	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(4.7)	2.1
24	9	2面	—	かわらけ	轆轤成形	8.2	—	—
24	10	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	—	—
24	11	2面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.0)	—	—
24	13	2面	—	瀬戸	入れ子	7.6	3.5	2.8
24	14	2面	—	瀬戸	入れ子	(8.0)	—	—
24	20	2面	—	常滑	こね鉢	(35.2)	—	—
24	22	2面	—	瓦	研磨痕あり	7.7	5.0	2.3
24	23	2面	—	瓦質	手埴り	(29.6)	—	—
24	24	2面	—	滑石製品	鍋転用加工品	[3.6]	4.7	0.9

第3面(図17)

3面は2面下20cm前後、海拔11.1m付近に検出された。良好に締まった土丹地業面である。西部はグリッドx5~6ライン付近で15cm程度の段差が付き高くなっている。土坑4基・Pit 2口が検出された。

土坑2(図18)

グリッド(x5, y13)付近、海拔11.1m前後に検出された。北部は調査区外。平面形はおそらく直径73cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から40cm前後を測る。

土坑3(図18)

グリッド(x6, y13)付近、海拔11.1m前後に検出された。北部および東部は調査区外。平面形はおそらく円形を呈し、深さは検出面から30cm前後を測る。

土坑4(図10)

グリッド(x8, y14)付近、海拔11.1m前後に検出された。東部は調査区外。平面形はおそらく直径134cm前後を測る不整円形を呈し、深さは検出面から128cm前後を測る。

土坑7(図18)

グリッド(x11, y14)付近、海拔11.1m前後に検出された。平面形は直径84cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から15cm前後を測る。

Pit 2

グリッド(x6, y13)付近、海拔11.05m前後に検出された。平面形は直径36cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。

Pit 6

グリッド(x3, y14)付近、海拔11.3m前後に検出された。平面形は直径25cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。底部には木製礎板が遺存している。

出土遺物(図24-25~43)

図24-25は土坑2出土の轆轤成形かわらけの小皿。胎土は橙色を呈し、粉質。図24-26~28は土坑3出土の轆轤成形のかわらけ。26・27は大皿で灯明皿として使用されている。28は小皿。胎土は橙色~淡橙色を呈し、粉質。28は強く火を受けている。

図24-29・30は土坑4出土の轆轤成形のかわらけの大皿である。胎土は淡橙色を呈す。

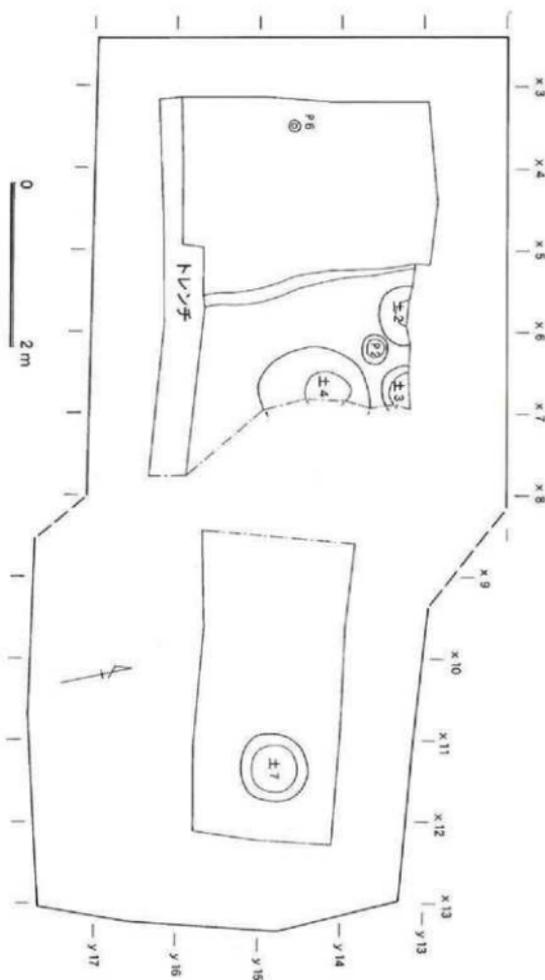


図17 調査区B 3面遺構配置図

図24-31~43は3面出土遺物である。31~34は輪轆成形のかわらけ。31は中皿、32~34は小皿。31~33はいわゆる薄手丸深タイプである。31・32は灯明皿である。31・32が橙色、33・34が淡橙色を呈す。35は瀬戸の華瓶の胴部片。胎土は灰白色を呈し、灰釉がかけてられている。36~41は常滑。36~38は甕。39・40はこね鉢。41は甕転用こね鉢である。器表には自然釉がかかる。42は平瓦。43は伊予産中砥である。

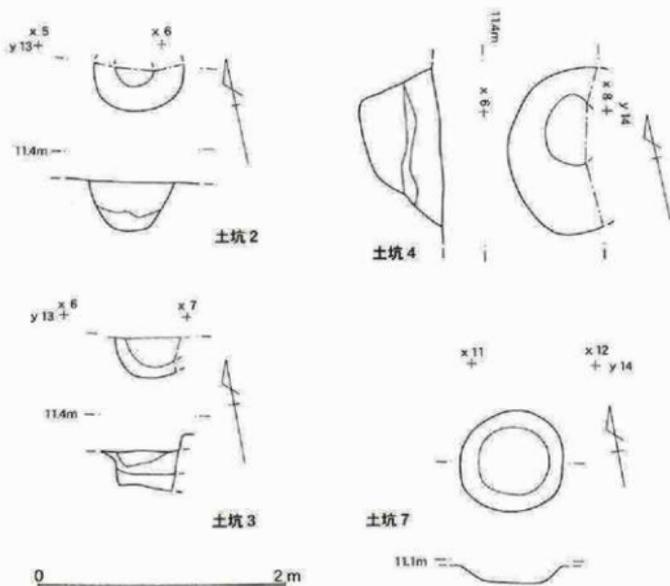


図18 調査区B 土坑2・3・4・7

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
24	25	3面	土坑2	かわらけ	轆轤成形	7.0	5.1	1.9
24	26	3面	土坑3	かわらけ	轆轤成形	12.7	6.8	3.8
24	27	3面	土坑3	かわらけ	轆轤成形	12.5	7.9	3.7
24	28	3面	土坑3	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.5	1.8
24	29	3面	土坑4	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.6	3.5
24	30	3面	土坑4	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.2	3.4
24	31	3面	—	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	5.8	2.8
24	32	3面	—	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.8	3.1
24	33	3面	—	かわらけ	轆轤成形	7.6	4.9	1.5
24	34	3面	—	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.8	1.5
24	39	3面	—	常滑	こね鉢	(30.0)	(14.2)	10.2
24	41	3面	—	常滑	変形用こね鉢	—	(15.2)	—
24	43	3面	—	伊予産	中紙	[8.4]	3.5	2.1

第4a面 (図19)

第4a面はグリッド (X4~5, y13~16) 付近、3面下10cm前後、
 海拔11.0mに検出された。炭化物が広がりを見せている。Pit2口が
 検出された。Pitは並ばない。4面から3面間のある時期の地業であ
 るが、調査区内では西部の限られた部分でしか検出されなかった。

第4面 (図20)

第4面は3面下20~30cm前後、海拔10.8~10.9m付近に検出され



図19 調査区B 4a面遺構配置図

た。西部(網掛部分)は岩盤である。土坑3基・Pit1口が検出された。調査区中央付近は調査区を2分割して調査した都合上未調査となってしまった。

土坑5 (図21)

土坑5はグリッド (x7, y15) 付近、海拔10.8m前後に検出された。平面形は直径70cmを測る円形を呈し、西部は土坑6に切られている。深さは検出面から32cmを測る。

土坑6 (図21)

土坑6はグリッド (x7, y15) 付近、海拔10.8m前後に検出された。平面形は南北が長軸となる楕円形を呈す。長軸52cm、短軸33cm、深さは検出面から30cmを測る。土坑5を切っている。

土坑8 (図21)

土坑8はグリッド (x8, y14) 付近、海拔10.8m前後に検出された。その大半は調査区外。底面は

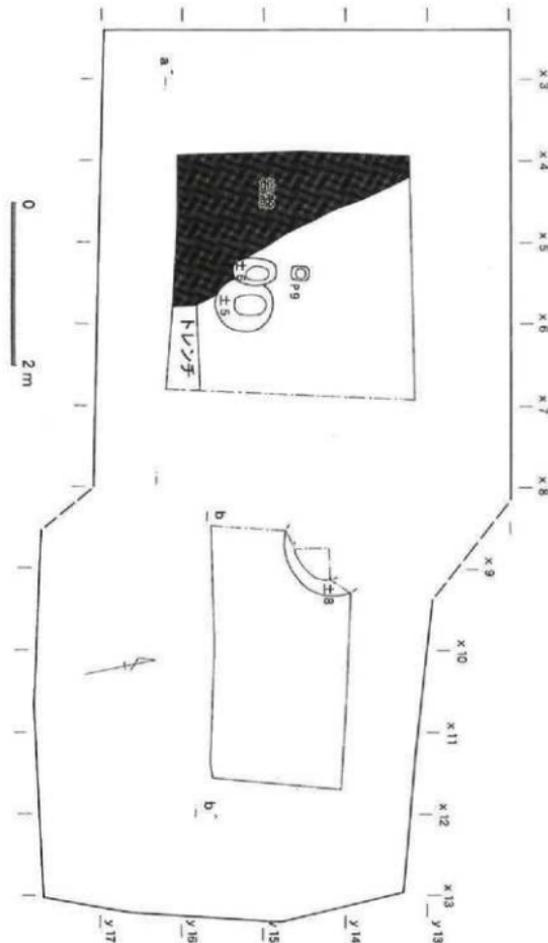


図20 調査区B 4面遺構配置図

岩盤である。検出された上端から推測するに平面形はおそらく円形を呈し、深さは検出面から48cm前後を測る。

Pit 9 (図20)

Pit 9はグリッド(x5, y14)付近、海拔10.8m前後に検出された。平面形は隅丸方形を呈し、深さは検出面から25cm前後を測る。

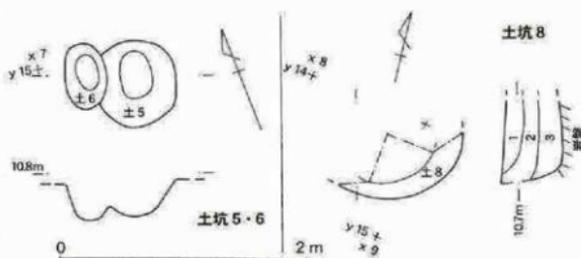


図21 調査区B 土坑5・6・8

出土遺物 (図25-1~32)

図25-1~4は土坑8出土遺物である。1~3は轆轤成形のかわらけ。1は大皿、2・3は小皿である。1の内面には煤が付着している。また、内底面には強く轆轤痕が残るが、指ナデで消されている。胎土は概ね淡褐色を呈す。4は常滑の甕の口縁部片。器表には自然釉がかかる。

図25-5~32は4面出土遺物である。5~17は轆轤成形のかわらけ。5~11は大皿。12~17は小皿。8・9は灯明皿。胎土は淡褐色もしくは褐色を呈し、粉質。18~20は青磁である。18は劃花文碗。釉調は緑青色を呈し、光沢良い。19・20は蓮弁文碗。19は蓮弁の幅が狭いタイプで、釉調は灰味緑色を呈し光沢は良いが、微気泡多く透明度は低い。21は瀬戸の碗の底部。高台は付かない。灰釉がかけられ、外底面には重ね焼き痕が見られる。ごく少量の粘土を6列に張り付けている。22~25は山茶碗窯系こね鉢。26は常滑の甕の口縁部片。27は湿美の甕の胴部片。28は銅製品。小破片のため用途は不明。29~32は木製の箸。このほかに果核が1点出土している。

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
25	1	4面	土坑8	かわらけ	轆轤成形	12.8	7.8	3.7
25	2	4面	土坑8	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.3	1.8
25	3	4面	土坑8	かわらけ	轆轤成形	7.2	5.3	1.6
25	5	4面	—	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.7	3.5
25	6	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	7.7	3.7
25	7	4面	—	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.0	3.5
25	8	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	(8.1)	3.2
25	9	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	(8.8)	3.6
25	10	4面	—	かわらけ	轆轤成形	11.9	7.3	3.1
25	11	4面	—	かわらけ	轆轤成形	12.3	8.5	3.1
25	12	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	(6.0)	1.7
25	13	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.9)	(5.6)	1.6
25	14	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.4)	1.7
25	15	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.2	1.6
25	16	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	4.8	1.6
25	17	4面	—	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.4	1.8
25	18	4面	—	青磁	劃花文碗	(12.8)	—	—
25	19	4面	—	青磁	蓮弁文碗	(17.4)	—	—
25	21	4面	—	瀬戸	おろし皿	—	(4.6)	—
25	22	4面	—	山茶碗窯系	こね鉢	(27.6)	—	—
25	23	4面	—	山茶碗窯系	こね鉢	(26.6)	—	—
25	28	4面	—	銅製品	不明	2.1	3.7	0.3~0.05
25	29	4面	—	木製品	箸	21.0	0.6	0.5
25	30	4面	—	木製品	箸	20.8	0.7	0.8
25	31	4面	—	木製品	箸	19.8	0.7	0.5
25	32	4面	—	木製品	箸	17.9	0.6	0.5

岩盤 (図22)

調査区2ヶ所にトレンチを入れ、下層を確認した。トレンチ1はすでに4面で検出されていた岩盤の落ちのラインから30cm前後低い位置(海拔10.5m前後)にトレンチ内で東にやや下っている岩盤が検出された。さらに、すでに検出されていた岩盤との境に幅50cm前後を測る溝が検出された。単なる岩盤の亀裂である可能性もあるが、山裾沿いによく見られる排水溝であるかもしれない。深さは崩落の危険があったため不明である。トレンチ2からは4面下50cm、海拔10.3m付近に岩盤が検出された。また、柱穴の底部が検出され、礎板が遺存していた。覆土は1層：青味黒灰色粘質土層・1~3cm・5cm大の土丹をととも多く含み、炭化物・かわらけ細片・木片が含まれる。粘性があり、締りは良い。2層：暗灰色粘質土層・2~10cm大の土丹を多く含み、かわらけ片・炭化物が含まれる。粘性があり、締りは良い。トレンチ1と2はおよそ1m離れた位置にあるが、トレンチ1の東端の海拔は10.4m、トレンチ2の東端は海拔10.2m前後を測り、調査区内で岩盤はx4~x6ライン付近で30cm程度の段差が付いた後は緩やかに東に下っている様相が見て取れた。

出土遺物 (図25-33~35)

図25-33~35は4面下岩盤まで出土遺物である。33は輪轆成形のかわらけの小皿。34は山茶碗窯系こね鉢の底部片。内面は磨滅して滑らかである。35は常滑のこね鉢。内面は磨滅して滑らかである。

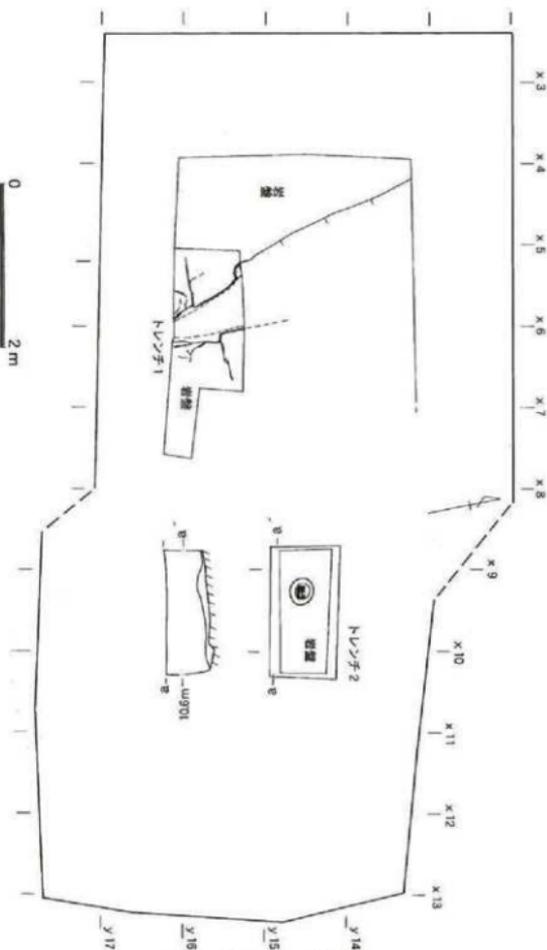
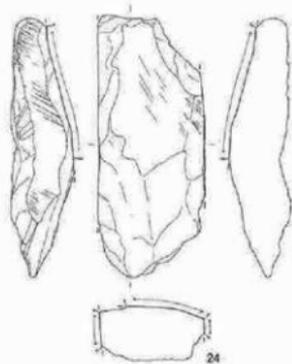
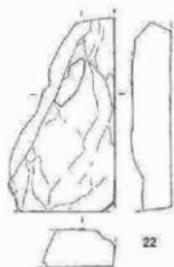
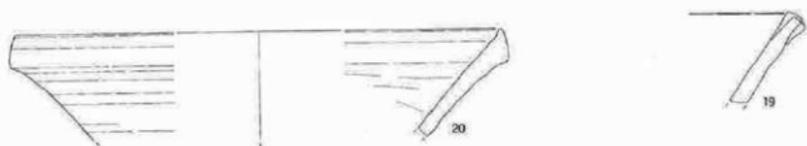
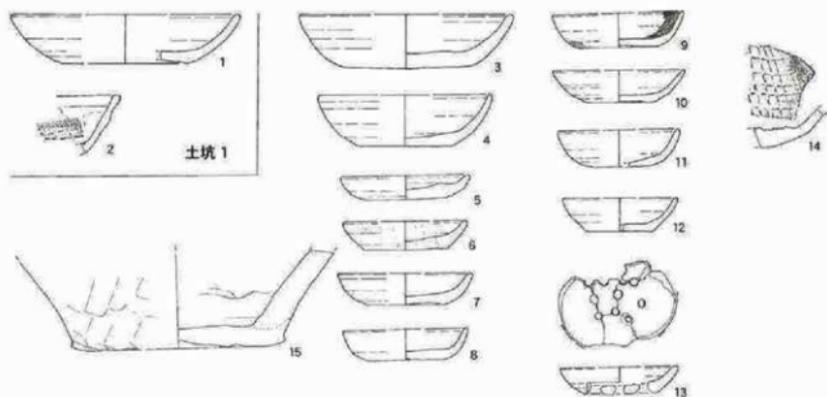


図22 調査区B 岩盤面

図	番号	層位	遺構	製品名(産地等)	器種・種別・文様等	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ
25	33	岩盤まで	-	かわらけ	輪轆成形	8.2	5.7	1.5
25	34	岩盤まで	-	常滑	こね鉢	(24.0)	-	-



1 面

0 10cm

图23 调查区B 土坑1、1面出土遗物

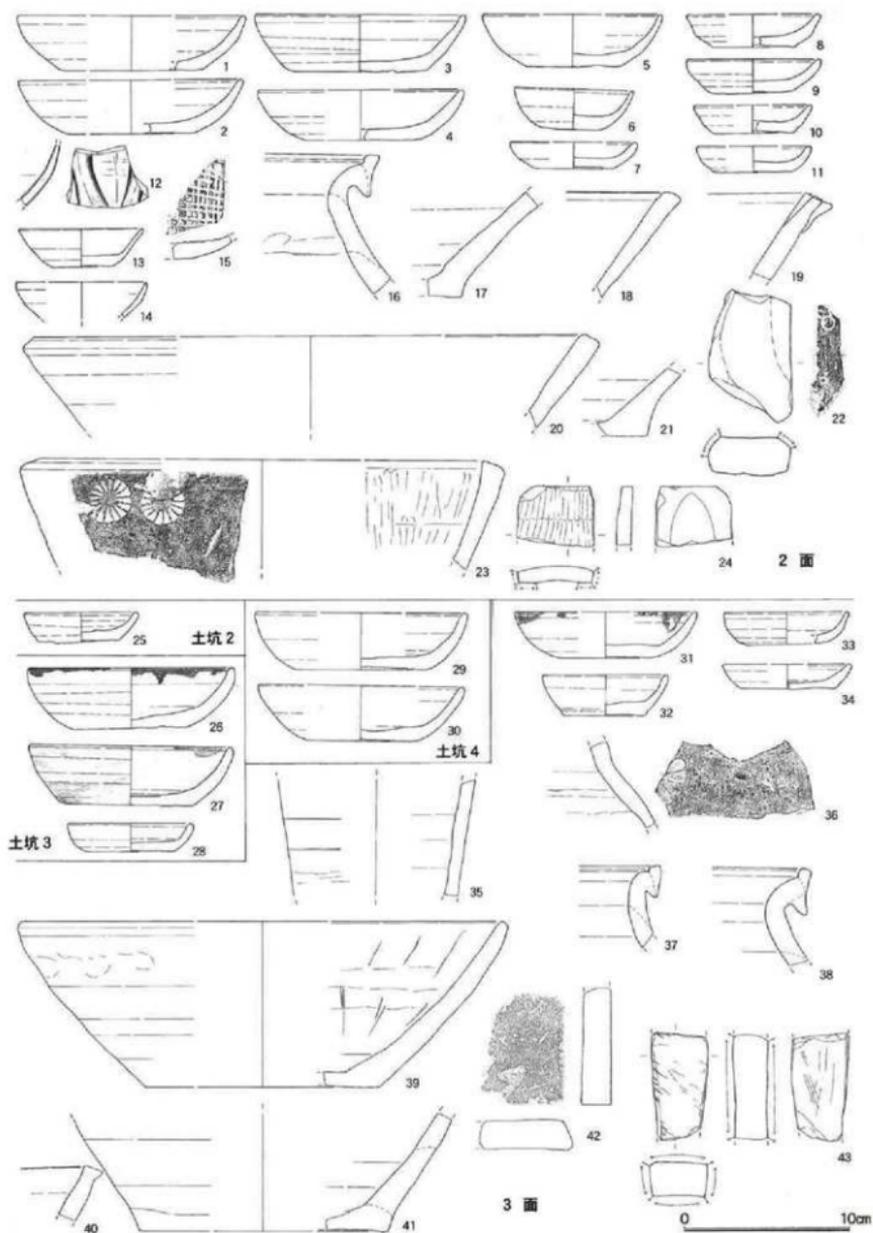


图24 调查区B 2面、土坑2·3·4、3面出土遗物

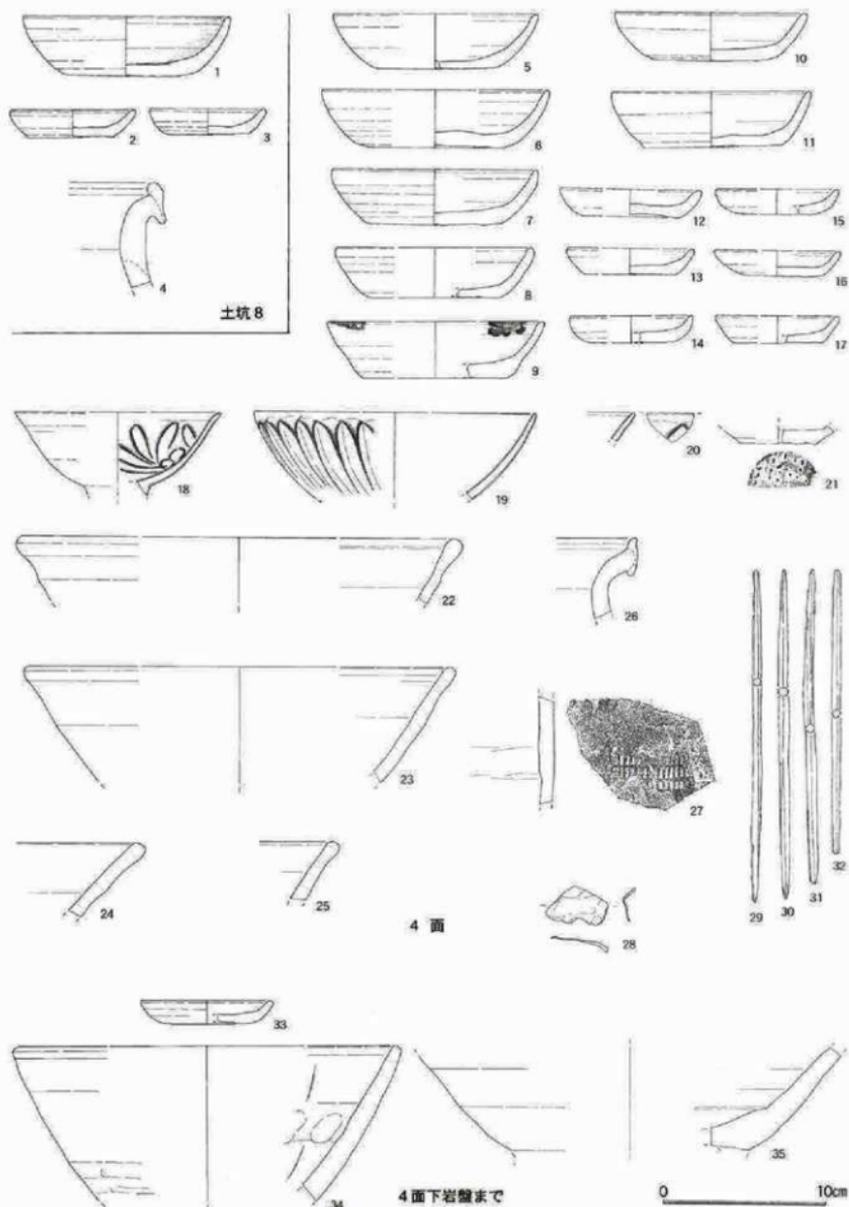


図25 調査区B 土坑 8、4 面、岩盤まで出土遺物

第4章 まとめ

調査区Aでは合計4面が検出された。第1面は14世紀第2四半期頃、第2面は14世紀前半、第3a面及び第3面（岩盤及び埋立）は13世紀末から14世紀初頃にあたる。

調査区Bでは合計6面が検出された。第1面・第2面は14世紀第2四半期頃、第3面は14世紀前半、第4面・第4a面・岩盤面は13世紀末から14世紀初頃にあたる。

上記のように、調査区AとBでは検出された面数に差があるものの、13世紀末（岩盤面）から14世紀中頃までの遺跡が発見された。各々の面数の差については貼り増し等の土地利用に左右されるもので、出土遺物から検討するに上記のようにほぼ共通したものに集約できる。検出レベルについては20～40cm前後調査区Aの方が高い。これは谷戸の尾根中腹に位置する当調査区の地形的に見て当然のことと言えよう。今回の調査地点はその東方300mに大規模武家屋敷が発見された今小路西遺跡（御成小学校内）があり、その背後の低い尾根を越えた場所に位置している。また、南東方70mの地点（佐助ヶ谷遺跡（佐助一丁目450番24地点・佐助一丁目450番25、27地点）では掘立柱建物を中心とした遺構群が発見されている。また、第1章で述べられている通り、佐助ヶ谷からは伝承とともに、多数の遺跡が発見されている。（詳細は第1章参照）周辺にこれらの遺跡の存在する当調査地点であるが、それらの遺跡群の背後の山の中腹に位置しているためか、今回の調査からは周辺の遺跡に比べてまとまった形のある遺構は発見されなかった。しかし13世紀末～14世紀初頃に山裾が造成され、平場を作り、拡張していった都市開発の様相がよく見て取れた。13世紀末～14世紀中頃にかけての生活面が検出されたことは御成小学校内の武家屋敷や佐助ヶ谷を中心としたこの一帯の当時の様相の解明の一端となるであろう。

＜参考文献＞

- 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』1990. 1. 31今小路西遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会発行
『鎌倉市緊急調査報告書14 第2分冊 佐助ヶ谷遺跡（佐助1丁目450番24地点・佐助1丁目450番25、27地点）』平成10年3月 鎌倉市教育委員会

図版 1



◀ 調査区A
I区1面全景 (北より)

調査区A ▶
II区1面全景 (西より)



◀ 調査区A
I区2面全景 (北より)





◀ 調査区A
II区2面全景（西より）

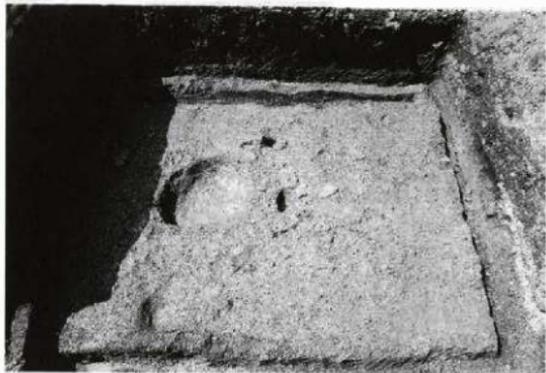
調査区A ▶
I区3面全景（東より）



◀ 調査区A
II区3面全景（南より）



図版 3



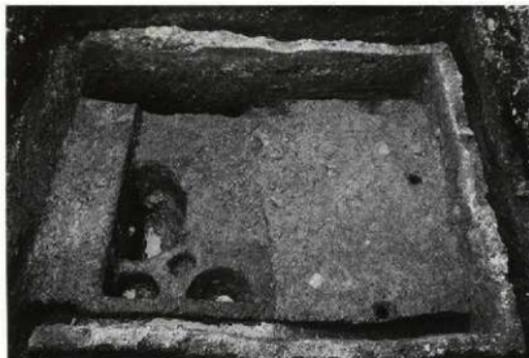
◀ 調査区B
Ⅲ区1面全景 (北より)

調査区B ▶
Ⅳ区1面全景 (西より)

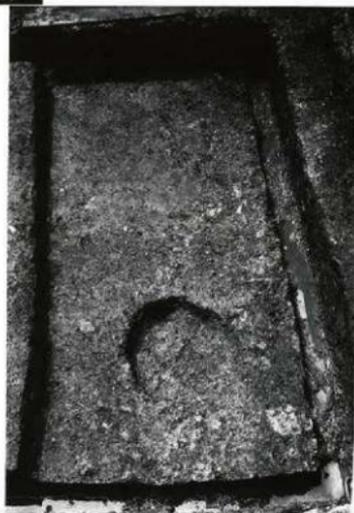


◀ 調査区B
Ⅲ区2面全景 (北より)

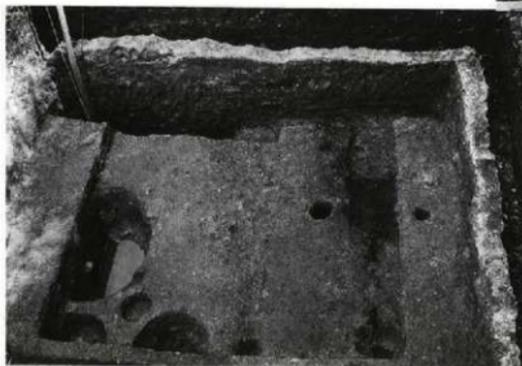




◀ 調査区 B
III区 3面全景 (北より)



調査区 B ▶
IV区 3面全景 (東より)



◀ 調査区 B
III区 4a面
炭化物検出状況 (北より)



▲ 調査区 B IV 区 4 面全景 (東より)



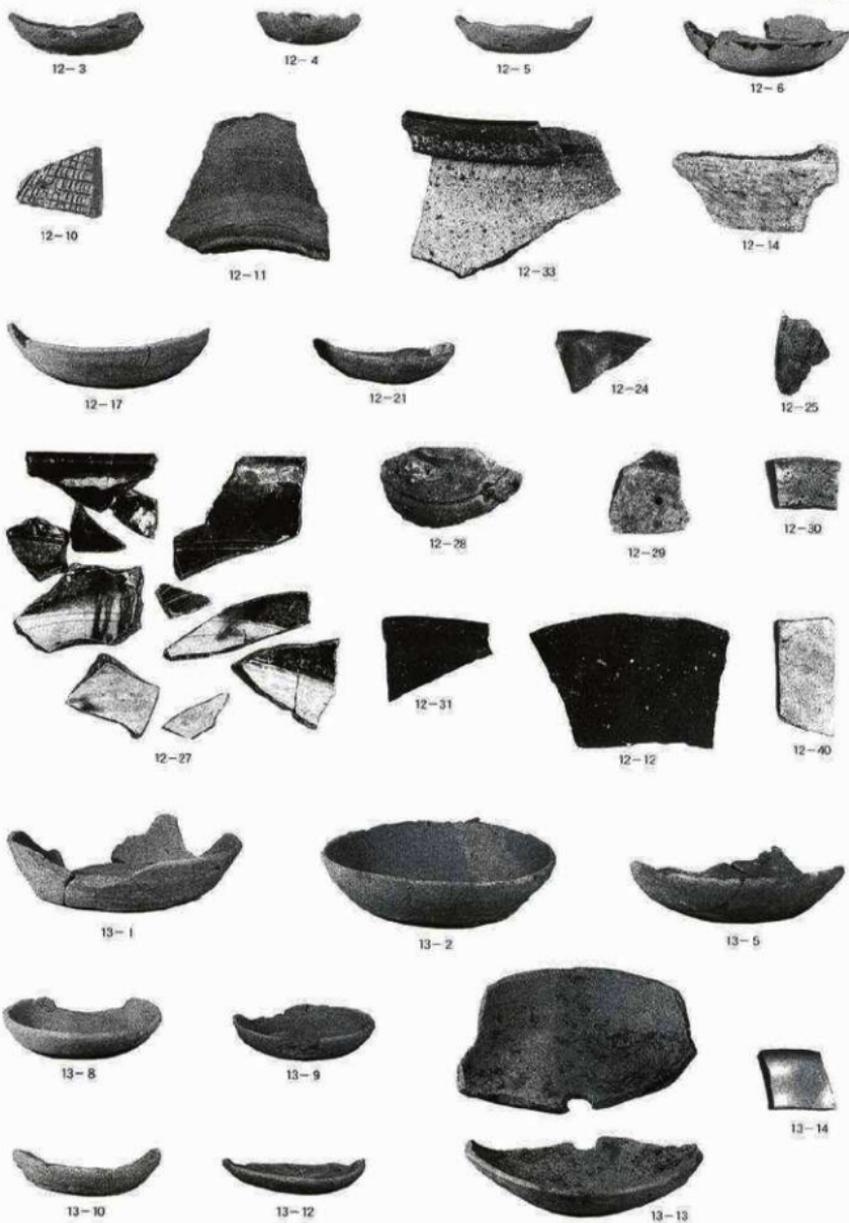
▲ 調査区 B III 区 4 面全景 (北より)



▲ 調査区 B IV 区 岩盤面

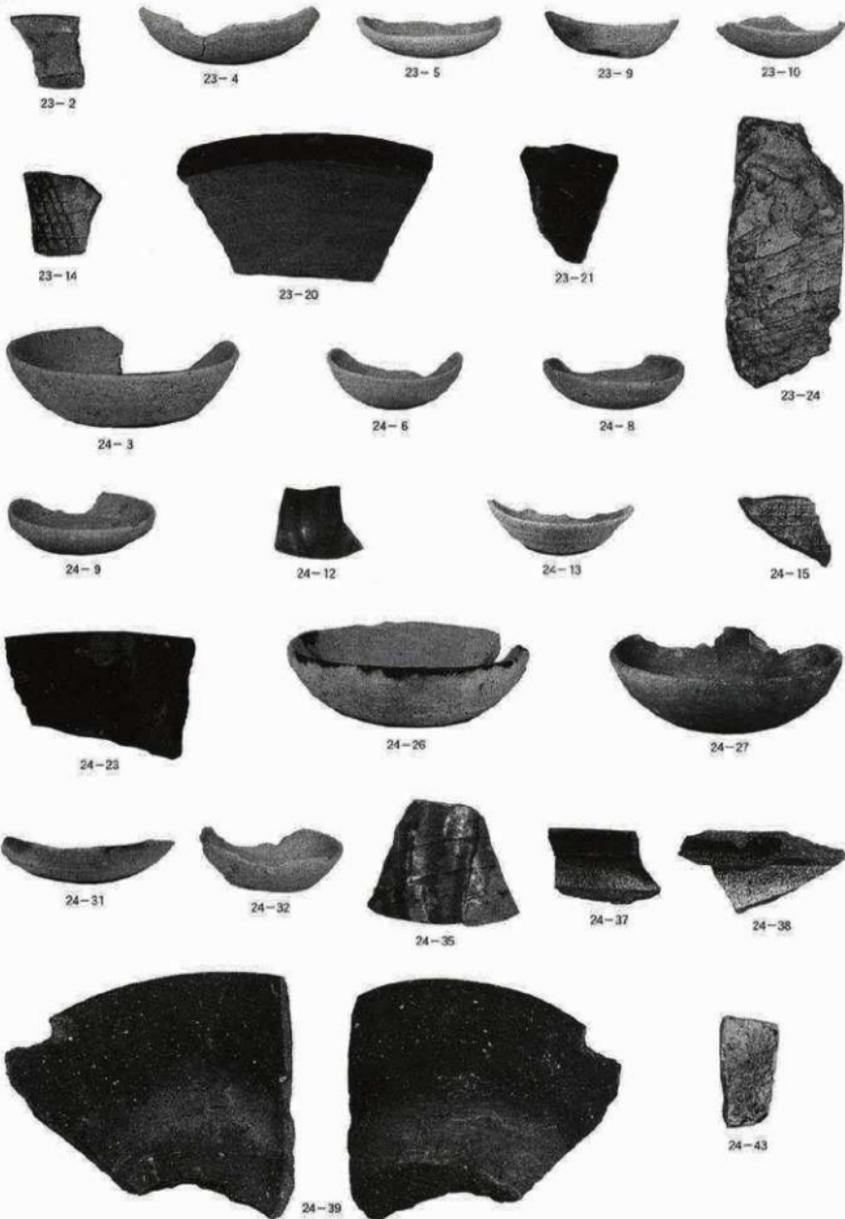


▲ 調査区 B III 区 岩盤面



出土遺物 (1)

图版 7



出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまぐらしまいぞうぶんかざいぎんきゆうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成20年度調査報告							
巻次	25 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	原 廣志/馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子/馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子/ 福田 誠・石元道子/宮田 眞・滝澤晶子							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
わかみやまじしやうへいさいまぐら 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 48番10外	14204	242	35° 31′ 79″	139° 55′ 54″	20030821 ～ 20031023	81.66	自己用店舗 併用住宅 (杭基礎構造)
べんがやにせき 弁ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 643番5	14204	249	35° 30′ 23″	139° 55′ 76″	20031021 ～ 20031117	25.80	個人専用住宅 (杭基礎構造)
べんがやにせき 弁ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 643番4	14204	249	35° 30′ 24″	139° 55′ 74″	20031021 ～ 20031117	25.00	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやまじしやうへいさいまぐら 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 御成町 123番3	14204	242	35° 31′ 66″	139° 55′ 33″	20040929 ～ 20041026	12.00	個人専用住宅 (杭基礎構造)
おくらぼくふきたにせき 大倉幕府北遺跡	神奈川県鎌倉市 西御門二丁目 756番10	14204	193	35° 32′ 23″	139° 56′ 54″	20040617 ～ 20040702	13.50	個人専用住宅 (杭基礎構造)
おくらぼくふきたにせき 大倉幕府北遺跡	神奈川県鎌倉市 西御門二丁目 756番6	14204	193	35° 31′ 50″	139° 54′ 64″	20041007 ～ 20041117	35.00	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)
さすけがやにせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 450番5外	14204	203	35° 31′ 50″	139° 54′ 64″	20040629 ～ 20040730	52.00	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)
さすけがやにせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 450番29外	14204	203	35° 31′ 50″	139° 54′ 64″	20040709 ～ 20040806	47.30	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路周辺遺跡群 わかみやだいろしほへんしきせきぐん	都市	鎌倉時代	土壇、柱穴、溝跡、井戸等	舶載陶磁器、国産陶器 かわらけ、金属製品、漆器、木製品、石製品等	緑釉陶枕が出土
弁ヶ谷遺跡 べんがやせき	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壇、柱穴、溝跡、掘立柱建物跡等	舶載陶磁器、国産陶器 かわらけ、金属製品、漆器、木製品、石製品等	
弁ヶ谷遺跡 べんがやせき	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壇、柱穴、溝跡、掘立柱建物跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、漆器桶、金属製品等	
若宮大路周辺遺跡群 わかみやだいろしほへんしきせきぐん	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壇、柱穴、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、漆器桶、金属製品等	
大倉幕府北遺跡 おくらまくらふくせき	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壇、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、瓦、金属製品等	
大倉幕府北遺跡 おくらまくらふくせき	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壇、溝跡等	かわらけ、銭、石製品、舶載陶磁器、国産陶器、瓦、金属製品等	
佐助ヶ谷遺跡 さすけがやせき	城館	鎌倉時代 ～ 室町時代	井戸、土壇、柱穴、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、漆器桶、金属製品等	
佐助ヶ谷遺跡 さすけがやせき	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	井戸、土壇、柱穴、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、漆器桶、金属製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25

平成20年度発掘調査報告

(第 1 分冊)

発行日 平成21年3月31日

編 集 鎌倉市教育委員会
発 行

印 刷 有限会社石橋印刷